

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第94集

山 の 神 遺 跡

平成7年度 県警浜松官舎建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

山の神遺跡正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、恐れ入りますが訂正下さいます
ようお願いいたします。

頁・行	誤	正
P 3 下から6行目	4層土は	4層土(第5図)は
P 3 下から2行目	6a層土を除き	第5図では
P 19 上から5行目	S D 2 0 2 <u>—</u>	S D 2 0 2 は
P 22 下から19行目	S D 3 0 2	S D 2 0 2
P 24 引用文献	加藤理文1997	加藤理文1996
P 34 上から4行目	都田川流域産	都田川流域・天竜川平野北部産
P 34 下から21行目	4個一組	5個一組
P 35 上から23行目	都田川流域	都田川流域や天竜川平野北部域
P 87 表21-4	器高(15.9)	器高 15.9
P 88 表30-88	器高(16.3)	器高 16.3
P 90 表33-5	器高(21.2)	器高 21.2
P 92 表45-105	器高(27.2)	器高 27.2
P 95 表53-22	器高(11.5)	器高 11.5
P 98 表62-183	器高(9.9)	器高 9.9
P 101 下から6行目	元屋敷古	元屋敷式古
P 103 上から12行目	元屋敷式古	元屋敷式新
P 104 キヤフショウ	夷洲図	集成図
P 108 下から20行目	宮武野縣	宮竹野縣

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第94集

山の神遺跡

平成7年度 県警浜松官舎建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

山の神遺跡は、浜松アリーナの建設時に浜松市教育委員会により発掘調査され、弥生時代から中世に至る非常に大きな集落跡であることが報告されている。今回は、その集落の北西部の縁辺部を調査し、弥生時代後期の環濠、古墳時代の印河道や奈良時代の溝などが確認された。南側に位置するアリーナの調査例なども勘案すると、集落域は南北で200m以上に及び、この地域の拠点的な集落の一つであったものと理解される。

周辺の弥生時代の遺跡には、銅鐸が出土した木船遺跡、水田跡が発見された宮竹野際遺跡、環濠集落の松東遺跡などがある。当遺跡でも環濠集落が存在し、方形周溝墓も確認されている。防御的な性格の強い環濠は当時の政治的状況を反映している可能性は高いのであろうし、水田は経済的な側面を如実に示してくれるであろう。また、銅鐸や方形周溝墓は宗教的問題を多く含んでいるのであろう。政治、経済、宗教といった重要な問題を解明していくためには、周辺の遺跡の状況を踏まえた上で、総合的な検討が必要となるであろう。今回の調査では、奈良時代の祭祀に関連した遺物も発見された。宮竹野際遺跡には多くの掘立柱建物跡があり、官衙的様相が認められるとされ、木船遺跡からは、古代の瓦が採集されており、寺跡の存在も指摘されている。政治的に非常に重要な地域であったことが断片的ではあるが理解される。この地域の調査が今後進めば、古代以降の人々の生活についても生き生きと語られる日がくるであろう。

今回の調査では、自然災害に関連した遺構も注目される。中世までは水田として土地利用されていた所が、洪水により砂に埋もれ、それらを復旧した痕跡も認められる。時期的には不明な点もあるようであるが、江戸時代以降のものとされている。近くには大竜川があり、肥沃な沖積平野が形成され、その恩恵を受けていた時期もあり、また、洪水により大きな被害を被った時もあったのであろう。静岡県のように水害の多い地域では、低地部の遺跡は長期的な視点に立てば、水との闘いの日々でもあったのであろう。

最後になったが、調査の実施及び本書の刊行にあたっては、静岡県警察本部をはじめとする関係各位の深い御理解と御協力があったことに敬意を表したい。調査において適切な指導助言にあたられた静岡県教育委員会と浜松市教育委員会に深謝するとともに、御多忙のなか、現地指導はもとより、特論にも玉稿を寄せていただいた静岡大学名誉教授 加藤芳朗氏には深く感謝申し上げる。また、現地及び整理作業などで事業に参加された多くの方々に心より御礼申し上げる。

平成9年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤忠

例　　言

- 1 本書は、静岡県浜松市和田町に所在する山の神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県警浜松官舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県警察本部の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財研究所が実施した。
- 3 調査期間は、平成7年6月から11月まで現地発掘調査を行い、引き続き同年12月から平成8年5月まで整理作業を行った。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成7年度

所長：斎藤 忠 副所長：池谷和三 常務理事：三村田昌昭 調査研究部長：小崎章男

調査研究部第三課長：渡瀬 治 調査研究員：柴山 瞳

平成8年度

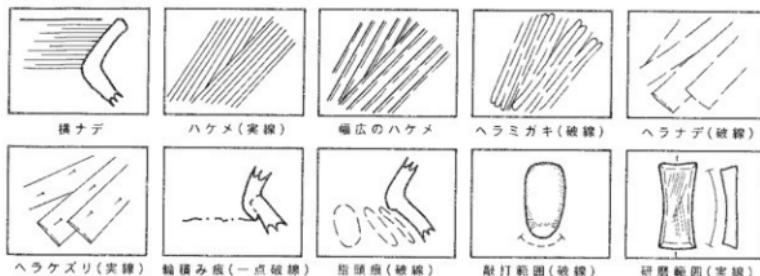
所長：斎藤 忠 副所長：池谷和三 常務理事：三村田昌昭 調査研究部長：石垣英夫

調査研究部第三課長：渡瀬 治 調査研究員：柴山 瞳

- 5 本書の執筆は柴山 瞳が、遺物写真撮影は椿草堂の植木真紀子さん（一部、当研究所技術職員 杉山すず代）が撮影した。
- 6 遺跡周辺の古環境の復原については、加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）に御教示いただき、御所見を特論として掲載した。
- 7 自然科学的分析を（株）古環境研究所に委託し、その結果報告を掲載した。
- 8 遺構および遺物出土状況図の作成にあたっては、写真測量による図化を（株）フジヤマに一部委託した。
- 9 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 10 発掘調査資料は、全て財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 11 発掘調査にあたっては、浜松市教育委員会から御協力を賜り、石材鑑定に際しては、静岡大学名誉教授伊藤通玄氏に御教示いただいた。そのほか、多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。
林弘之 原田幹 鈴木徹 竹内直文 立花実 伊丹徹 久野正博 中谷正和 貴元洋 鈴木敏則
松井一明 柴田稔 西川修一 村上吉正 柏木善治 池山治 栗原雅也 村上誠 加納俊介
高崎直成 安藤寛 木計許 青木司 柳井章宏 佐藤浩 吉田博行 和田聰 小川淳一 白木守
杉本良 高橋和 森原明廣 尾崎光伸 速藤喜和 向坂鋼二 佐藤由起男 川江秀孝 太田好治
安間拓巳 松本完 清水尚 宮内友行 長島栄一 国見徹 服部郁 （敬称略、順不同）

凡　例

1 遺物の実測図は次のように統一し、土器実測の際推定実測したものは、中心線を一点破線にした。



2 造構の略号はSDが溝状造構、SFは土坑、SPは小穴、SXは性格不明造構を示す。

3 造構番号は3桁となっているが、調査の順番を示したものであり、遺物の保管に混乱が起きないように調査時の造構番号をそのまま使用した。

4 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』14版 1994(株)日本色研事業によった。

挿表目次

表1 遺跡地名表	5
表2 SD301出土土器観察表 (1)	87
表3 SD301出土土器観察表 (2)	88
表4 SD301出土土器観察表 (3)	89
表5 SD202出土土器観察表 (1)	90
表6 SD202出土土器観察表 (2)	91
表7 SD202出土土器観察表 (3)	92
表8 SD202出土土器観察表 (4)	93
表9 SD202出土土器観察表 (5)	94
表10 SD201出土土器観察表 (1)	95
表11 SD201出土土器観察表 (2)	96
表12 SD201出土土器観察表 (3)	97
表13 SD201出土土器観察表 (4)	98
表14 SD303出土土器観察表	99
表15 各造構出土遺物観察表	100

目 次

第Ⅰ章 調査概要	
第1節 調査方法	1
第2節 調査経過	2
第Ⅱ章 立地と環境	
第1節 地理的・歴史的環境	3
第2節 上層について	3
第Ⅲ章 発見された遺構	
第1節 第1調査面の遺構と遺物の出土状況	10
第2節 第2調査面の遺構と遺物の出土状況	11
第3節 第3調査面の遺構と遺物の出土状況	16
第4節 第4調査面の遺構と遺物の出土状況	22
第Ⅳ章 発見された遺物	
第1節 弥生時代の遺物	33
第2節 古墳時代の遺物	35
第3節 奈良時代の遺物	37
第4節 平安時代以降の遺物	38
第Ⅴ章 まとめ	
第1節 山の神遺跡の環濠とその編年的位置付け	101
第2節 遠江地方における弥生時代後期から古墳時代前期の環濠の廃絶について	102
特論1 山の神遺跡の土層観察所見 静岡大学名誉教授 加藤芳朗	108
特論2 山の神遺跡の自然科学分析 (株)古環境研究所	115

挿図目次

第1図 遺跡分布図	4
第2図 グリッド配置図	5
第3図 山の神遺跡周辺地図と発掘調査の区域	6
第4図 山の神遺跡遺構配置図	7
第5図 調査区南壁土層図	8
第6図 調査区西壁土層図	9
第7図 盛土下地形測量図（上）、第1調査面全体図（下）	12
第8図 第1調査面北区平・断面図	13
第9図 第1調査面南区平面図	14
第10図 南区盛土下近現代遺構平面図（右中）、第1調査面平・断面図（上、右下）、調査区西側第2調査面平面図（左下）	15
第11図 北区第3調査面平・断面図	20
第12図 南区第3調査面平・断面図	21
第13図 南区中央第4調査面平・断面図	25
第14図 SD301遺物出土状況図	26
第15図 SD202遺物出土状況図	27
第16図 SD202上・下層遺物出土状況図	28
第17図 SD201最上層・上層遺物出土状況図	29
第18図 SD201中・下層遺物出土状況図	30
第19図 SD201・202・301遺物出土状況図	31
第20図 SD303遺物出土状況図	32
第21図 SD301出土土器実測図（1）	39
第22図 SD301出土土器実測図（2）	40
第23図 SD301出土土器実測図（3）	41
第24図 SD301出土土器実測図（4）	42
第25図 SD301出土土器実測図（5）	43
第26図 SD301出土土器実測図（6）	44
第27図 SD301出土土器実測図（7）	45
第28図 SD301出土土器実測図（8）	46
第29図 SD301出土土器実測図（9）	47
第30図 SD301出土土器実測図（10）	48
第31図 SD301出土土器実測図（11）	49
第32図 SD301出土土器実測図（12）	50
第33図 SD202出土土器実測図（1）	51
第34図 SD202出土土器実測図（2）	52
第35図 SD202出土土器実測図（3）	53
第36図 SD202出土土器実測図（4）	54
第37図 SD202出土土器実測図（5）	55
第38図 SD202出土土器実測図（6）	56
第39図 SD202出土土器実測図（7）	57
第40図 SD202出土土器実測図（8）	58
第41図 SD202出土土器実測図（9）	59
第42図 SD202出土土器実測図（10）	60
第43図 SD202出土土器実測図（11）	61
第44図 SD202出土土器実測図（12）	62
第45図 SD202出土土器実測図（13）	63
第46図 SD202出土土器実測図（14）	64
第47図 SD202出土土器実測図（15）	65
第48図 SD202出土土器実測図（16）	66
第49図 SD202出土土器実測図（17）	67
第50図 SD202出土土器実測図（18）	68
第51図 SD201出土土器実測図（1）	69
第52図 SD201出土土器実測図（2）	70
第53図 SD201出土土器実測図（3）	71
第54図 SD201出土土器実測図（4）	72
第55図 SD201出土土器実測図（5）	73
第56図 SD201出土土器実測図（6）	74
第57図 SD201出土土器実測図（7）	75
第58図 SD201出土土器実測図（8）	76
第59図 SD201出土土器実測図（9）	77
第60図 SD201出土土器実測図（10）	78
第61図 SD201出土土器実測図（11）	79
第62図 SD201出土土器実測図（12）	80
第63図 SD303出土土器実測図（1）	81
第64図 SD303出土土器実測図（2）	82
第65図 SD303出土土器実測図（3）	83
第66図 各遺構、包含層出土土器実測図	84
第67図 SD301出土石器実測図	85
第68図 SD201（左下）・202（上）出土石器類、土製品、SD303・304出土木製品、包含層出土鉄製品実測図	86
第69図 SD301出土土器集成図	104
第70図 SD202出土土器集成図	105
第71図 SD301・202出土外来系土器集成図	106
第72図 SD201出土土器集成図	107

図版目次

- カラー図版 1 1、 SD301遺物出土状況（南より）
2、 SD201・202遺物出土状況（北より）
- 2 1、 SD301出土上器
2、 SD202出土上器
3 1、 SD201出土上器
- 図 版 1 1、 第1調査面全面（北西より）
2、 第1調査面小畔（北東より）
3、 第1調査面北側（東より）
4、 第1調査面9区掘削痕（南東より）
5、 第1調査面11区掘削痕（東より）
- 図 版 2 1、 SD101完掘状況（北より）
2、 SD101土器出土状況（西より）
3、 第2調査面北区駐畔（南西より）
4、 第2調査面11・12区噴砂？（北より）
5、 第3調査面南区全景（西より）
- 図 版 3 1、 第2調査面南区東側（北より）
2、 第2調査面南区中央部（北より）
3、 第3・4調査面南区全景（西より）
4、 第4調査面南区東側（西より）
5、 第4調査面南区中央部（北より）
- 図 版 4 1、 SD201・202遺物出土状況（北より）
2、 SD201・202遺物出土状況（南より）
- 図 版 5 1、 SD201最上層遺物出土状況（北より）
2、 SD201南側最上層遺物出土状況（西より）
3、 SD201南側最上層遺物出土状況（北東より）
4、 SD201北側最上層遺物出土状況（東より）
5、 SD201南側上層遺物出土状況（北西より）
6、 SD201北側上層遺物出土状況（北西より）
7、 SD201土層（北より）
- 図 版 6 1、 SD201・202完掘状況（北より）
2、 SD202南壁遺物出土状況（北より）
3、 SD202北半部下層遺物出土状況（北より）
4、 SD202北半部下層遺物出土状況（東より）
5、 SD202土層（北より）

- 図 版 7 1、 SD301遺物出土状況（北より）
2、 SD301下面完掘状況（北より）
- 図 版 8 1、 SX201（SD301最上層）遺物出土状況（北より）
2、 SD301南側遺物出土状況（北西より）
3、 SD301遺物出土状況（北より）
4、 SD301上面完掘状況（北より）
5、 第3調査面北区全景（南東より）
- 図 版 9 1、 SD303南側遺物出土状況（東より）
2、 SD303遺物出土状況（南西より）
3、 第3調査面北区全景（南西より）
4、 北区西壁上層（東より）
- 図 版 10 SD301出土土器（1）1~5・7・10
- 図 版 11 SD301出土土器（2）11・14・17・20・23・24・26・28
- 図 版 12 SD301出土土器（3）29~31・34・35・37・40・42・46
- 図 版 13 SD301出土土器（4）57~60・62・64~66・69
- 図 版 14 SD301出土土器（5）70~72・86・88・90・91・93・96
- 図 版 15 SD301出土土器（6）94・99・100・103・112・113・116・117
- 図 版 16 SD202出土土器（1）2・4~6・12・16・18・19
- 図 版 17 SD202出土土器（2）22・23・27・34・44・49・50・52・59
- 図 版 18 SD202出土土器（3）72・73・75・80~82・85・86
- 図 版 19 SD202出土土器（4）87・90・92・93・95・99・101・102
- 図 版 20 SD202出土土器（5）103・105~108・113・115
- 図 版 21 SD202出土土器（6）129・132・137・143・145・148・21（土製品）
- 図 版 22 SD201出土土器（1）1・4・8・9・12・13
- 図 版 23 SD201出土土器（2）14~17・19・21~23
- 図 版 24 SD201出土土器（3）24・26~30・42・43
- 図 版 25 SD201出土土器（4）33・37・38・41・46・47・113・114・116
- 図 版 26 SD201出土土器（5）117~119・121・122・124・128
- 図 版 27 SD201出土土器（6）129・131~136・138・140・176
- 図 版 28 SD201出土土器（7）177・179・183・186・189~193、SD301 137・173
- 図 版 29 SD303出土土器（1）1~4・9・10・12・19・20・28~30
- 図 版 30 SD303出土土器（2）、その他 31・32・39~41・43・45、SD303・304・203
- 図 版 31 SD303出土土器、SD201（125~127）・SD202（114）出土土器
- 図 版 32 SD301出土石器 1~13
- 図 版 33 SD202（14~20）・SD201（22~27）出土石器類

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査方法

調査範囲はやや西に傾いたL字状となっていたため、任意の座標を設定して測量や遺物の取り上げに用いた。第2図のように、東から西へAからDとし、南から北へ1から4としてグリッド杭を設置し、それらによってできた4区画を14区に分割した。また、2ラインのやや南側で南北に2分割し、大きく北区と南区とした。

調査は警察官舎の基礎工事が及ぶ範囲が対象となり、その他の駐車場などは遺構面に影響を与えないとのことで調査対象外とされた。調査前に存在した「まるよ乳業」の基礎解体工事の際にも立会い調査を実施したが、建物基礎は浅く、遺構面には及んでいなかった。

調査対象は、試掘調査結果などから当初弥生時代と中世の2面とされ、上層は南側半分とされた。表面積で、1,110m²、延べ1,370m²を予定していたが、調査の進展に伴い、調査対象面が4面に増え、最終的には、延べ面積は2,550m²となった。

調査は、40~80cmの盛土と1層土（第5・6図）を重機により除去し、1層土下で発見された畑と水田を下層の上地利用との関連を調査するに上層遺構（第10図右中）として略測し、その下部の砂に覆われた溝状遺構群を第1調査面（第7~9図）とした。第2調査面以降は分層発掘ではなく、平面的な調査を行ったため、かなり時間軸のある遺構群が確認されている。第2調査面の7~14区は中世以降の侵食作用が著しく、その後の土壤堆積量も多く、水田として土地利用されている（第10図左下）。第3調査面は重機と人力により中間層を除去し、7~14区はベースの粗砂層で遺構確認を行い、旧河道や多数の溝状遺構が確認された。1~3区では弥生時代後期から古墳時代前期の溝（SD201・202）が、4~6区では、古墳時代と推測される小区画水田が発見された（第11・12図）。第4調査面では、南区中央部の第3調査面の水田跡を人力により掘り下げ、弥生時代後期のSD301などが発見された（第13図）。

第2節 調査経過

山の神遺跡は、浜松アリーナの建設工事に先立ち、1987年7月から1988年8月まで浜松市文化協会により約17,000m²と広範囲に及ぶ発掘調査が行われている。この遺跡は弥生時代後期から古墳時代中期と平安時代後期から中世に大規模な集落が形成されており、共に環濠を備えている。

今回の調査地点はアリーナから北へ約80mと近接していたため、事前に遺跡の存在が予測された。そのため、浜松市教育委員会により確認調査が実施され、山の神遺跡が当地点まで連続していることが判明し、協議の結果、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が1995年6月より本調査を実施することになった。

本格的な発掘調査に先立って、6月は主に準備作業を行った。まず、現地にプレハブを2棟を設営し、上旬から中旬にかけては、必要な資材や備品の搬入などを中心に行なった。

6月16日から26日にかけては、作業員を新規に雇用するための面接と選考を行った。27日からはバックホーなどの重機による表土の除去及び築場の掘削、排水の搬出を実施し、人力により集水井の設置及び排水溝の掘削などを行った。

7月の初頭は、梅雨のため現地作業は一時中断した。その雨の影響により、砂が集水井内に流れ込み埋没してしまったため、復旧作業を行いながら表土を除去した。梅雨明け後は好天に恵まれ、作業は順調に進んだ。7月7日には表土の除去作業が完了し、継続して、バックホーによる中間層除去を7月10日から18日まで行った。

7月10日からは新規の作業員を雇用し、発掘作業にあたっての説明会を開催した後に現地作業に参加させた。その際には、ベルトコンベヤーを導入し、作業の効率化を図った。

7月中旬からは、バックホーによる中間層除去が終了した地点から、人力による中間層除去と遺構の確認と掘削を行った。

7月24日には、測量のための基準点測量を行い、28日には調査区内にグリッド杭を打設した。

8月の前半は、第1調査面（砂に被覆された灰色粘土上面）での遺構の確認作業とその掘削を主に行つた。後半は、南側部分について、第3調査面（緑灰色粘土上面）までの中間層を人力により除去し、遺構の確認作業と東端部で発見されたSD201・202の掘削を行った。

8月1日から17日までは、調査区周囲の排水溝を掘削しながら、第1調査面で発見された水田跡と粘土・シルト探掘溝の掘削を行った。

8月18日には、高所作業車を用いて第1調査面の写真撮影を行い、22日にはラジコンヘリによる写真測量を実施した。

22日以降は、排水溝を深掘りしながら中間層を除去し、第2・3調査面での遺構の確認作業を行った。東端部の1~4区で、北東から南西方向にはしる平行した溝を2条（SD201・202）発見した。

8月中旬で、第1調査面の調査が終了し、9月は第2・3調査面の調査を主に行った。

堆積層が薄く、遺物の比較的多く出土する南区は、人力により第3調査面までの中間層の除去を行い、北区は9月4日から6日まで重機により中間層を除去した。

9月27日から29日は、南区の第2・3調査面の写真撮影と測量を行い、28日にはSD201・202の写真測量を実施した。

9月8日には、地形や地質について加藤評議委員の現地指導を仰いだ。

10月の主な調査内容は、中旬までが東端部で確認されている溝（SD201・202）の掘削と遺物の取り上げ、中旬以降は第3調査面の中間層除去後、第4調査面の調査を行った。

第4調査面では、南区の中央部に弥生時代後期初頭の土器や石器が大量に廃棄された環濠（SD 301）が発見され、北区の北西隅部からは、奈良時代の遺物が多く出土した溝（SD303）が発見された。

先月より継続して調査しているSD201・202を12日まで調査し、5日から16日まで、人力により排水溝を深掘りしながら、南区第3調査面の中間層除去を行った。

南区第4調査面の中央部で、南北方向に走る溝（SD 301・302）が平行して2条発見された。共に、土層や出土遺物から弥生時代後期のものと考えられ、SD 301の上層からは、後期初頭の土器や敲石などの石器が大量に出土した。

北区は、南区の作業の合間に、残っていた第2調査面の調査を実施した。そこでは、中世の水田跡が確認され、北東から南西方向に伸びた畦畔が見つかっている。第2調査面の調査終了後、23日以降、バックホーによる中間層除去を行い、第3調査面を調査した。

その他、近隣の住民からの要請があり、10月2日に調査区周辺と道路際の草刈り作業を行った。

9日には、午前中は浜松市立可美小学校6年生39名が現地を見学し、午後は向坂評議員の現地指導を受けた。

11月の前半は、北区の第3調査面の調査と調査区周辺の上層の記録作業を中心に行い、後半は、多量に出土した土器の洗浄・注記作業と撤収の準備を行った。

11月10日には、重機による埋め戻しを行い、17日に現地を委託者へ引き渡した。その後は、撤収準備と多量に出土した土器の洗浄・注記作業を中心に行つた。備品や資材の引越は、川合遺跡の現地事務所ができるのを待つて、28日に行い、30日には事務所を撤去した。

第Ⅱ章 立地と環境

第1節 地理的・歴史的環境

当遺跡は現天竜川下流の右岸約3kmの自然堤防上に立地している。JR天竜川駅の西約1km、東名浜松インターの南西約4kmの地点に位置している。

遺跡の南側には旧国道1号線がはしましてはいるが、昭和の初期まで、その幹線沿いに集落が点在している程度であり、ほとんどが農地であったが、現在は浜松市の中心街に近いこともあり、宅地と工場が林立している。北側の国道152号線沿いは、和田の自動車街としても県内では有名である。

山の神遺跡の本格的な調査は、浜松アーナの建設工事に先立つもので、弥生時代後期～中世の大規模な集落跡が発見されており、弥生時代後期には環濠集落が形成されている。今回の調査でも、多量の土器が廃棄された環濠が見つかっている。北方には、奈良時代の遺物や多数の掘立柱建物跡が確認され、官衙的様相が認められるとされる宮竹野際遺跡が隣接して存在する。今回の調査でも、奈良時代の祭祀に関連する遺物が出土しており、密接な関係があるものと理解される。

山の神遺跡周辺には、弥生時代から中世にかけての非常に重要な遺跡が存在しており、とくに、弥生時代後期から古墳時代前期と奈良時代の集落群は、かなり密集しており、何らかの政治的な繋がりの深い地域であったと考えられるが、基本的には、農耕を主体とする集落が多く、経済的な側面では、扇状地の末端部という地の利を生かした水稻栽培を行っていたものと思われる。しかし、奈良時代から平安時代末期の400年の間に、平野の西端から東端まで移動したとされる天竜川の影響も大きく、天竜川から派生した網状流路を巧みに利用した農業経営を行っていたものと想像されるが、ときには、第1調査面で見られたように、水田が厚く洪水により運ばれた砂により埋没してしまうような自然災害にも見舞われたようである。

第2節 土層について

第5・6図に調査区の西壁と南壁の上層図を掲載している。大きくは、工場建設時の盛土と1～6層に分層した。6層より下は、約1mほどで、湧水の激しい砂礫層にあたる。

1層上はシルトで、酸化還元が著しく、水田や畑として利用されていたようである。概ね近現代に相当する。

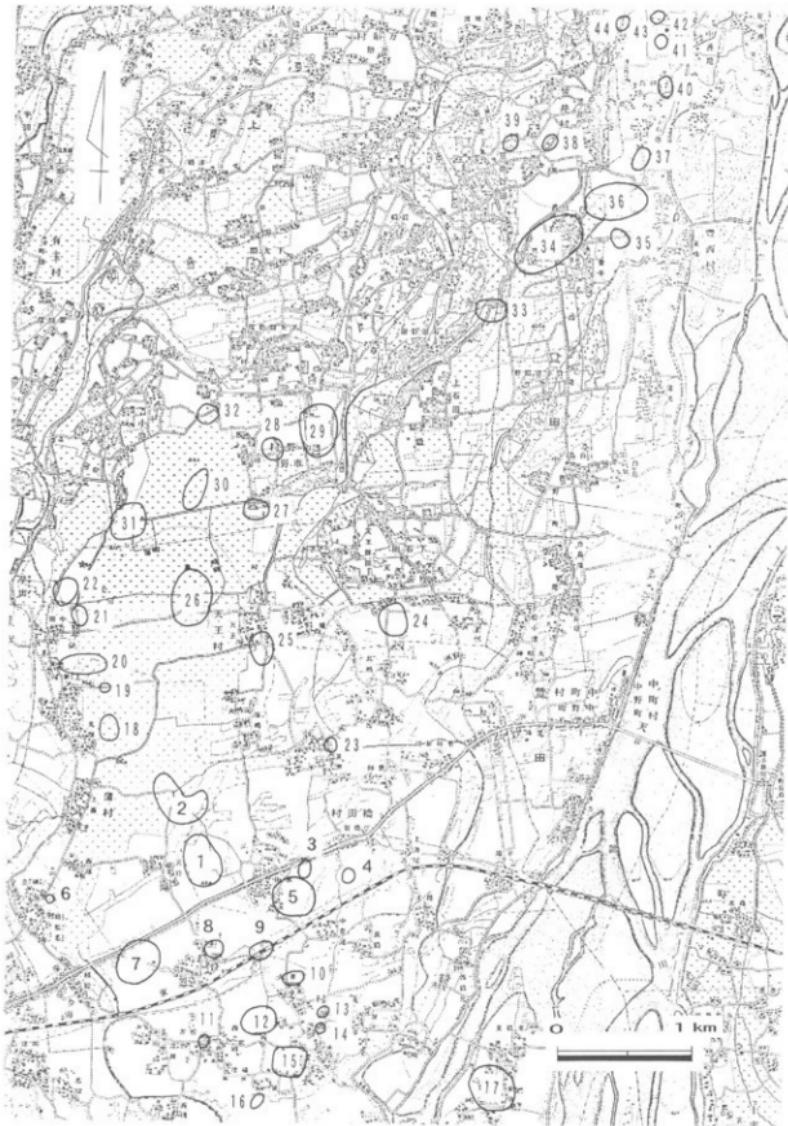
2層上は砂質が強く、西側はと厚く堆積している。搅拌を受けていない下層土にはラミナが発達しており、基本的には洪水により運ばれた土壤と考えられる。

3層上はシルトもしくは粘土で、縦根が多く、中近世に耕作された水田であろう（東半部を除く）。

4層上は中世以降の侵食を受けた西半部に堆積した土壤である。山茶碗などが出土している。

5層土は造構覆土を除くと、縮まりのある粘土で、弥生時代後期から古墳時代中期の上器片を多量に含む。第5図の5b層には小畦畔の高まりがあり、縦根も多く水田であろう。5a層は大畦畔状の高まりが南側断面で確認されているが、調査区内で、注意深く調査を行ったが、平面的には発見されなかった。

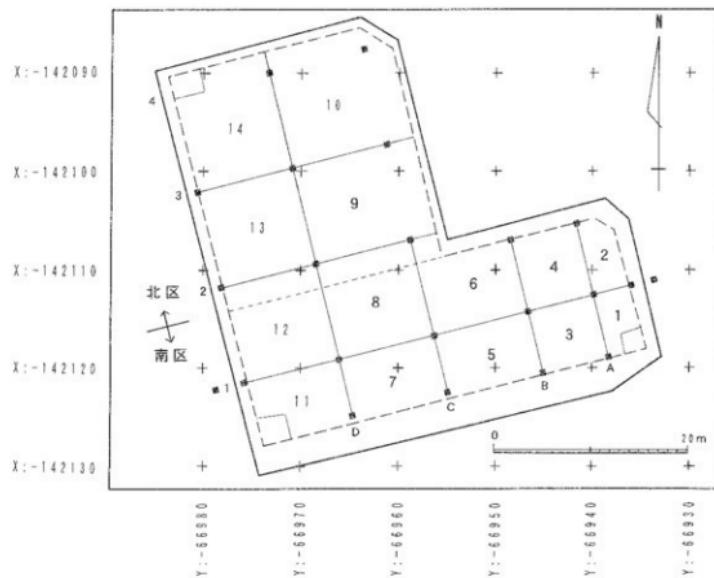
6層土は、6a層上を除き、弥生時代後期以前と考えられ、6b・c層は微高地を形成しており、6d層土は粗砂で、この遺跡のベース面となっている。



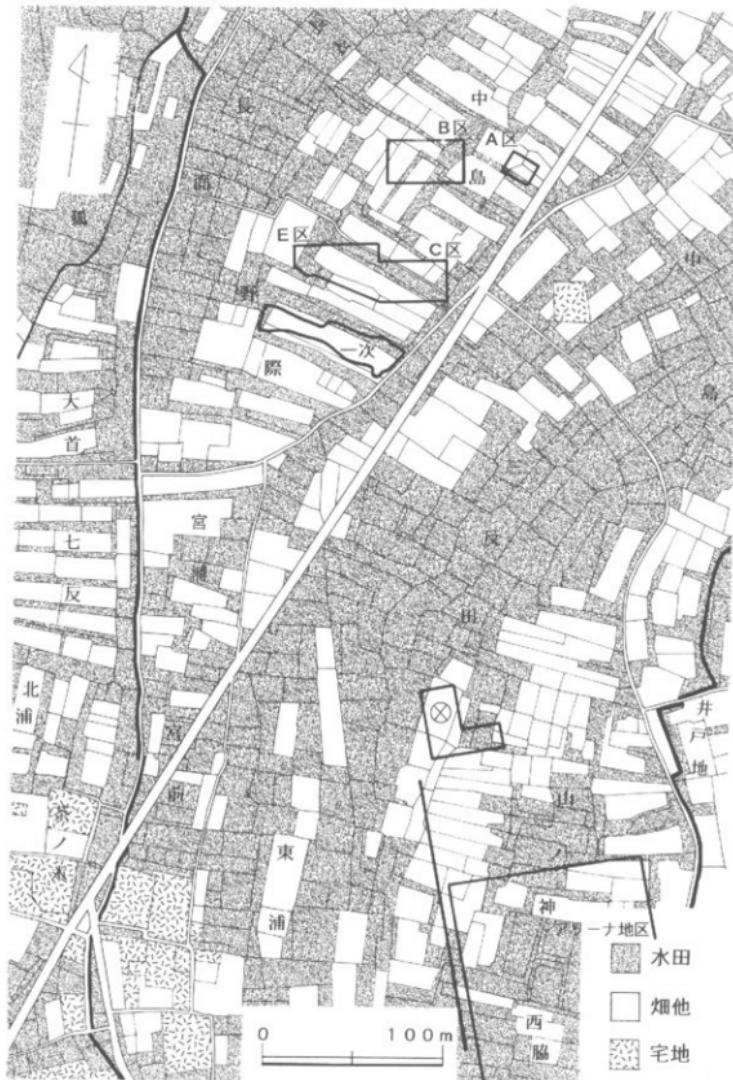
第1図 遺跡分布図

1 : 山の神遺跡	16 : 村前遺跡	31 : 輪輪遺跡
2 : 宮竹野跡遺跡	17 : 庄屋遺跡	32 : 西船前遺跡
3 : 越前遺跡	18 : 五反田遺跡	33 : 堤遺跡
4 : 松東遺跡	19 : 丸塚遺跡	34 : 恒武遺跡
5 : 木船遺跡	20 : 上新屋遺跡	35 : 茶ノ木田遺跡
6 : 将監名遺跡	21 : 中田東遺跡	36 : 社口遺跡
7 : 榛木遺跡	22 : 中田北遺跡	37 : 隅離舍遺跡
8 : 村東II遺跡	23 : 笹ヶ瀬遺跡	38 : 笠井西浦遺跡
9 : 村東I遺跡	24 : 下石川村前遺跡	39 : 笠井広野遺跡
10 : 丸野遺跡	25 : 天王中野遺跡	40 : 服部神社境内遺跡
11 : 村内遺跡	26 : 天王遺跡	41 : 八幡南遺跡
12 : 飯田遺跡	27 : 山の光遺跡	42 : 蟻子森古墳
13 : 鮎遺跡	28 : 別所東遺跡	43 : 八幡西遺跡
14 : 開戸遺跡	29 : 市野遺跡	44 : 鮎国遺跡
15 : 山ノ内遺跡	30 : 田見合遺跡	

表1 遺跡地名表（番号は第1図に対応）

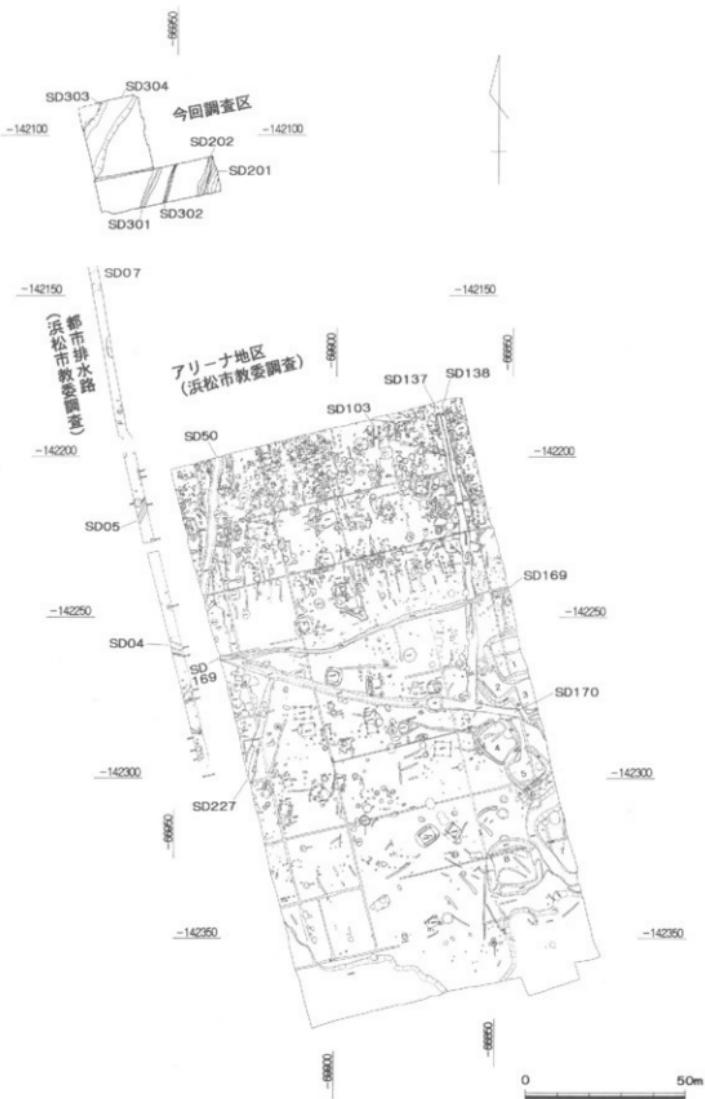


第2図 グリッド配置図

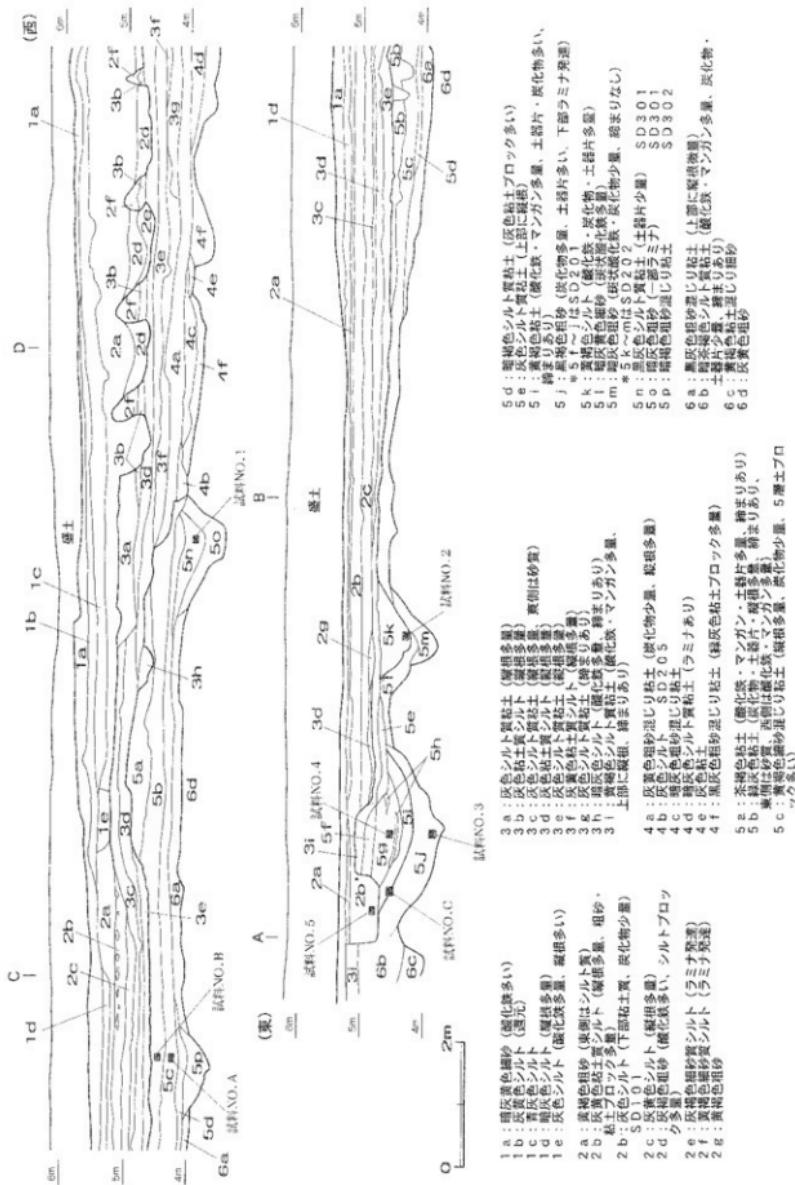


第3図 山の神遺跡周辺地籍図と発掘調査の区域（○は今回の調査区）

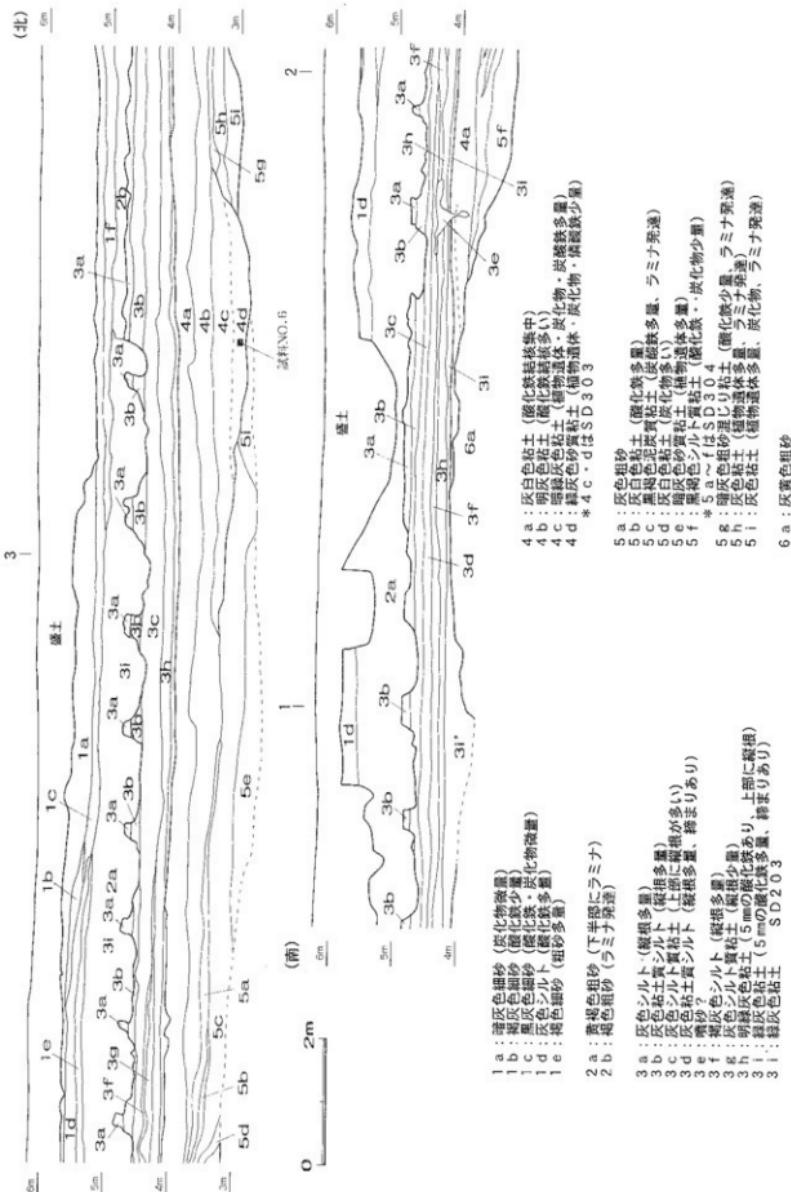
太田好治 1994 「宮竹野際遺跡」2 浜松市教育委員会に加筆転載



第4図 山の神遺跡遺構配置図（佐野由起男 1989 『山の神遺跡』浜松市教育委員会より加筆転載）



第5図 調査区南縁土層図



第Ⅲ章 発見された遺構

第1節 第1調査面の遺構と遺物の出土状況

盛土下約1mの地点は、とくに西側に顕著であるが、洪水により運ばれた粗砂（2層土）が厚く堆積している。この粗砂により被覆された3層上面を、第1調査面として調査した（第7図下）。3層上面の標高は西側で4.8mで、粗砂は掘削部を除いて20~70cm堆積している。南東部では、粗砂が徐々に薄くなり、SD102をほぼ境界として单一層としては確認できなくなる。SD102周辺には、溝状遺構群の空白域が存在しており、この部分に大畦畔がつくられていた可能性は高い。南壁にはその痕跡が残っており、後の耕作で削平されたものと考えられ、大畦畔により洪水をある程度塞き止めたものと思われる。SD102の西側に平行して、上層では大畦畔の痕跡が確認されている（第10図右中）。下層の調査では大畦畔の痕跡は検出することができなかったが、SD102に平行する方向で、何度も大畦畔が構築されているようである。また、第5図の土層図に示したように、2a（粗砂）層は東側はシルト質で、2b層には水田耕作などによる攪拌のための粗砂が斑状に認められる。2b層の攪拌により旧地表面の標高は不明瞭ではあるが、2b層下面としても5mとなり、西側より高く、洪水の被害にあったけれども、砂の堆積量が少なく、比較的容易に水田が復旧できたものと考えられる。南東隅部にSD101が存在し、その東側は標高5.2mと一段と高くなり、粘土質のかなり緻密のある土壤となり、集落は東側に形成されていたものと容易に推測できる。

第1調査面で発見された遺構は、水田小畦畔とそれに沿うように整然と掘削された溝状遺構群、南区東端部と中央部のSD101・102、その他杭列のみである（第8~10図）。

小畦畔は南北方向（1D杭から3C杭方向）とそれに直交する東西方向の2条があり、1D杭周辺には4ヶ所の水口も存在する。小畦畔の幅は20~55cmで、高さは5~13cm（平均的には10cm）であり、小畦畔間は南北で17.3mと大区画を形成し、東西はSD102までの間隔では9mと比較的短いが、西側は22.5m以上とかなり長くなるものと考えられる。

SD102内には粗砂が多く認められ、洪水の影響によるものと考えられる。幅は105cmで深さは14cmである。遺物は出土していない。

東端部のSD101内の上層にも粗砂がブロック状に多く含まれているが（第10図左上）、埋土の状態はは他地点とは異質であり、洪水前にかなり埋没していたものと思われる。埋土は上層ほど粒径が粗くなる自然堆積状であり、SD101は微高地の縁辺部に掘削された水田の給排水用の溝と考えている。幅は130cm、深さは65cmで、最下層より上部器片が出土しているが（第66図-11）、SD201からの混入品である。

これらの小畦畔や溝に沿うように整然と長方形の溝状遺構が掘削されている。東側は洪水砂の堆積量が少ないが、小畦畔は完全に埋没しているため、掘削の目安とはならないはずであるが、南西壁には2度以上の洪水の痕跡が残っていることから（第5図）、最初の砂の堆積の少ない時に掘削された溝と考えられる。溝状遺構群は、幅が70~120cm（平均的には1m）で、深さは14~40cm（平均的には20cm）で、長さは様々であるが、最大21.4m、中規模6.5m、最小3.2mのものがある。溝間の南北の間隔は4~70cm（平均的には20~30cm）と狭く、部分的に歩行帯を残している。溝の底面は凹凸が著しく、側壁面はオーバーハングしている。南西の11区周辺には明瞭な掘削痕が残り、三本歯の跡が検出された。刃幅は3.2cm、刃間幅は3.2cmである（第10図右下）。

埋土は等質的で、おそらく、一条の溝を掘削し、他の水田の復旧のための粘土やシルトを搬出した

後、次に掘削する部分の上の砂を溝内に埋め戻した結果と考えたい。そして、順次計画的に掘削することにより、整然とした溝状となったものと思われる。

こうした状況は、宮竹野際遺跡でも認められ（注1）、かなり広域で粘土やシルトの採掘がなされたものと予想される。採掘された大量の土塊は、おそらく被害の少ない水田へと供給客上され、保水性の良い土壤への改良や畦畔の補強などに利用されたものと考えたい。県内では、静岡市の宮下遺跡（山田1985）・川合遺跡（山田1990）などに類例があり、長尾川の氾濫による砂礫を「埋め殺す」ための上坑（注2）や溝状遺構が多数発見されている。静清平野では、溝状より上坑状のものが多いようであるが、これは砂礫の堆積量により、掘削方法が選択されたものと考えられる。こうした工法は川合遺跡の八反田地区では、江戸時代前半にはすでに行われていたと考えられている（山田・伊林1993）。他県にも同様の例が多くあると考えられるが、砂礫だけでなく、火山灰の除去に際しても同様の例が群馬県にある。

当遺跡の第1調査面からは、山茶碗などの陶磁器がわずかではあるが出土しているが、遺構の時期を決定するまでにはいたっていない。下層の3層内からは、中世の遺物が多く発見されており、1・2層の島畑の状況が、明治期の地籍図（第3図）と合致する点から、第1調査面は近世以降と考えて良いであろう。江戸時代には、度重なる洪水の被害が文献に記されており、砂に埋没した水田は、砂の集積地となり、高燥化し、より多くの島畑が形成されていったものと思われる。また、水田土壤の採掘と砂の埋め戻しに際しては、より深く掘削することが効率的とも考えられるが、より良い水田土壤の確保と後の耕作地への転換（水田もしくは畑）を容易にするため、一定の深度が保たれている。非常に計画的な復旧作業をしており、これは洪水との長い闘いの間に身に付けた農民達の知恵の結晶であろう。

第2節 第2調査面の遺構と遺物の出土状況

第2調査面（第10図左下）の調査は、第1調査面下からベースとなる粗砂層（6層）までの間に存在する水田跡の調査を行ったが、時代としては、山茶碗などが西側より出土していたため、中世と考えて平面調査を実施した。その後、加藤芳朗先生による現地指導を受け、西半分は中世以降の侵食により、それ以前の土壤が流出していることが判明した。

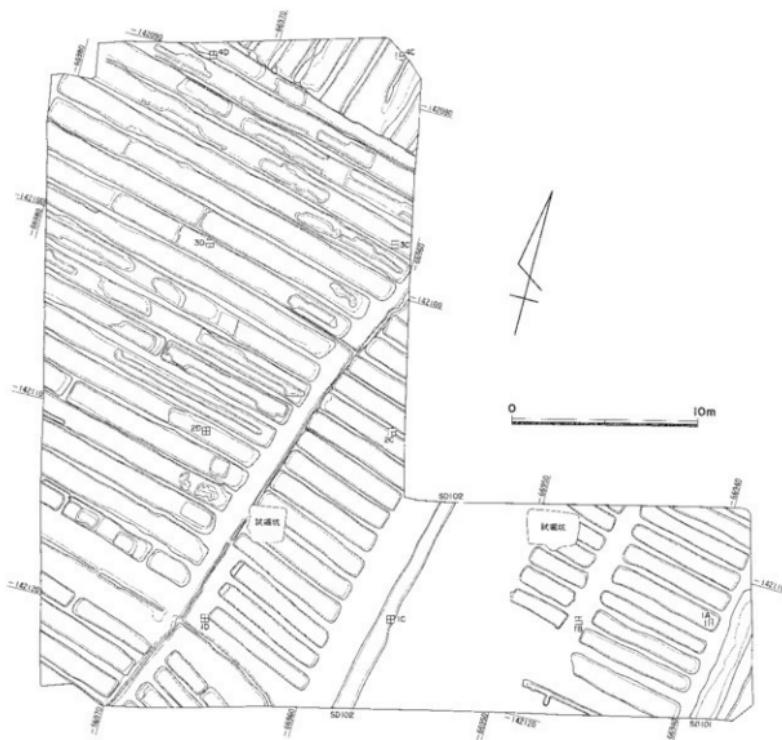
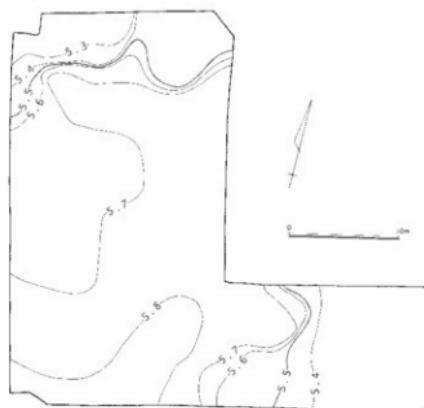
よって、西側と東側では、同程度の標高による平面調査であっても、時代は千年程の聞きが生じる場合が予想された。そのため、第2調査面の調査は7~14区に限定した。

第2調査面の3層土（第6図）は灰色シルトもしくは粘土と均質的で、西壁面の土層では3b層に被覆された3g層の畦畔が一部確認できたのみであった。そのため、中間層は入力によりスライスしながら掘削し、畦畔の確認できた面で平面精査を実施した。第2調査面の標高は4.3m前後で、シルト質から粘土質への土壤の変化する層を調査対象とした。

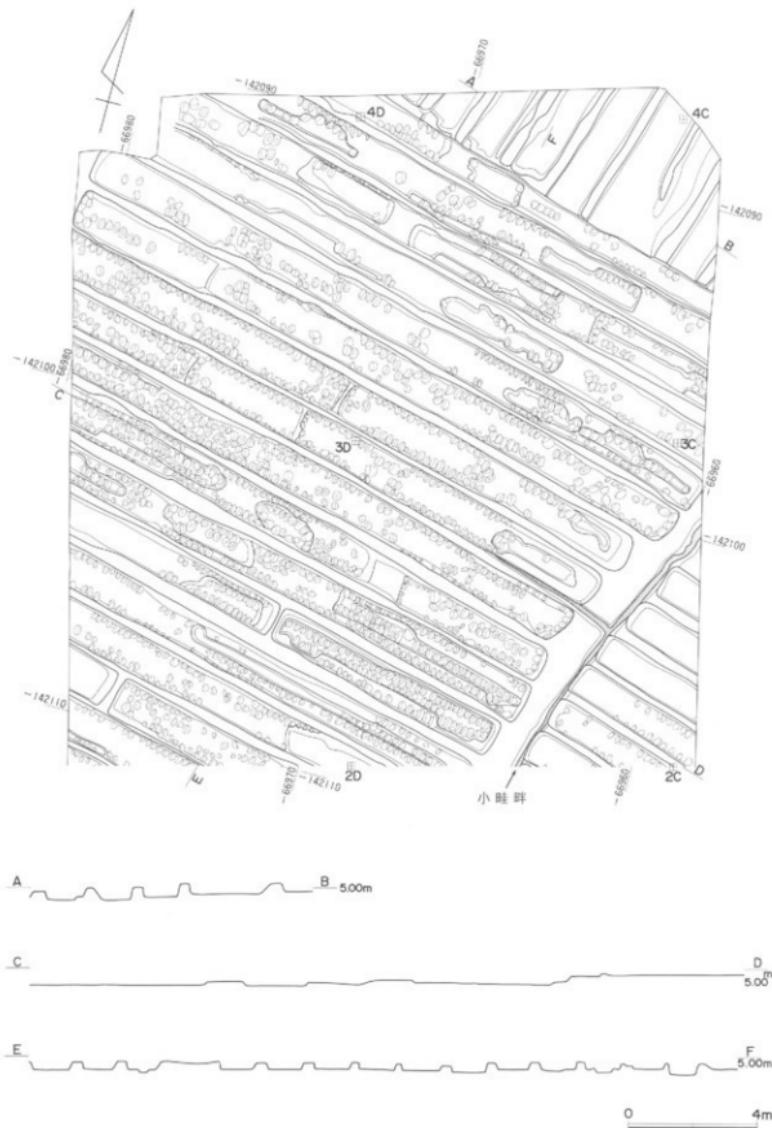
およそではあるが、3g層と3b層の上面が第2調査面に相当する。13区では一部砂に被覆された中・小畦畔がT字状に発見された。残存状態の良い所で、幅70cm、高さ9cmである。10区でも同一方向の中畦畔の痕跡が検出されたが、13区の畦畔との連続性がなく、上層畦畔が下層に転写された所謂擬似畦畔B（斎野1988）と考えられる。

水田の形態は、灌漑水による酸化鉄や酸化マンガンの集積が鉄床層に集積しており、地下水位も1m以上下部にあると考えられることから乾田であったと考えられる。詳細については、加藤先生が分析されているので、特論を参照されたい。

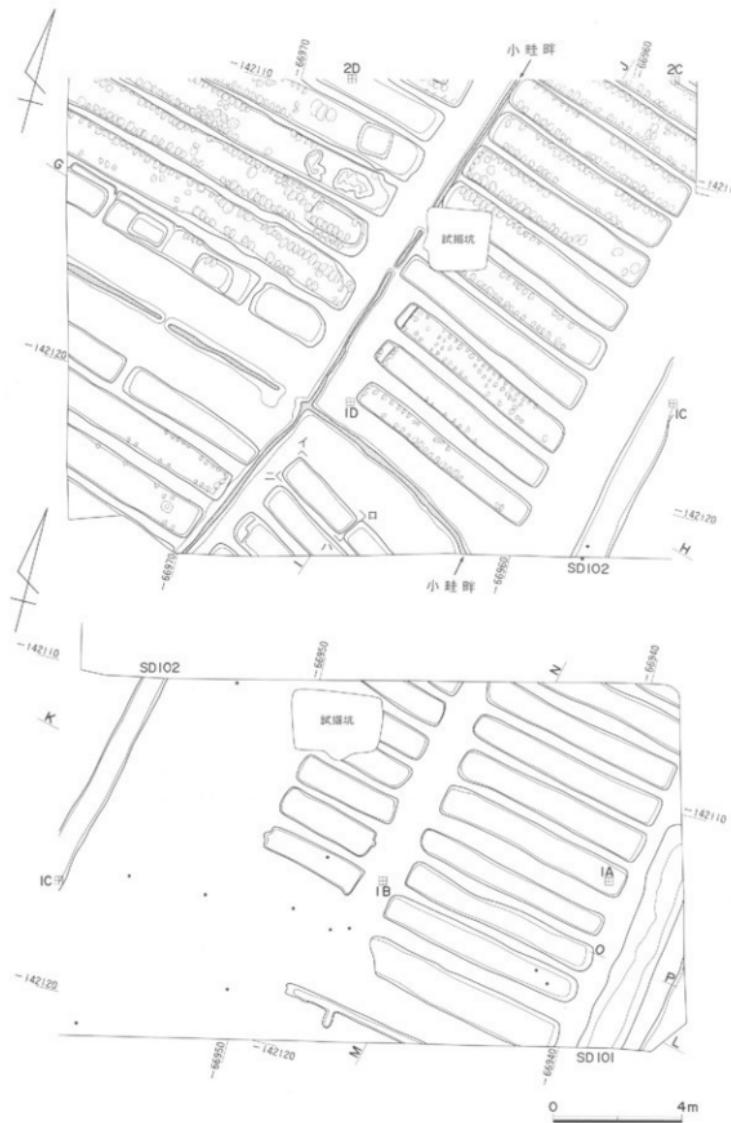
その他、11・12区からは脈状の砂の高まりが南西から北東方向にかけて検出された。断面観察を行ったが、ベースの6層土のわずかな高まりとしか確認できていない。下面のSD204の西肩部にもあたり、



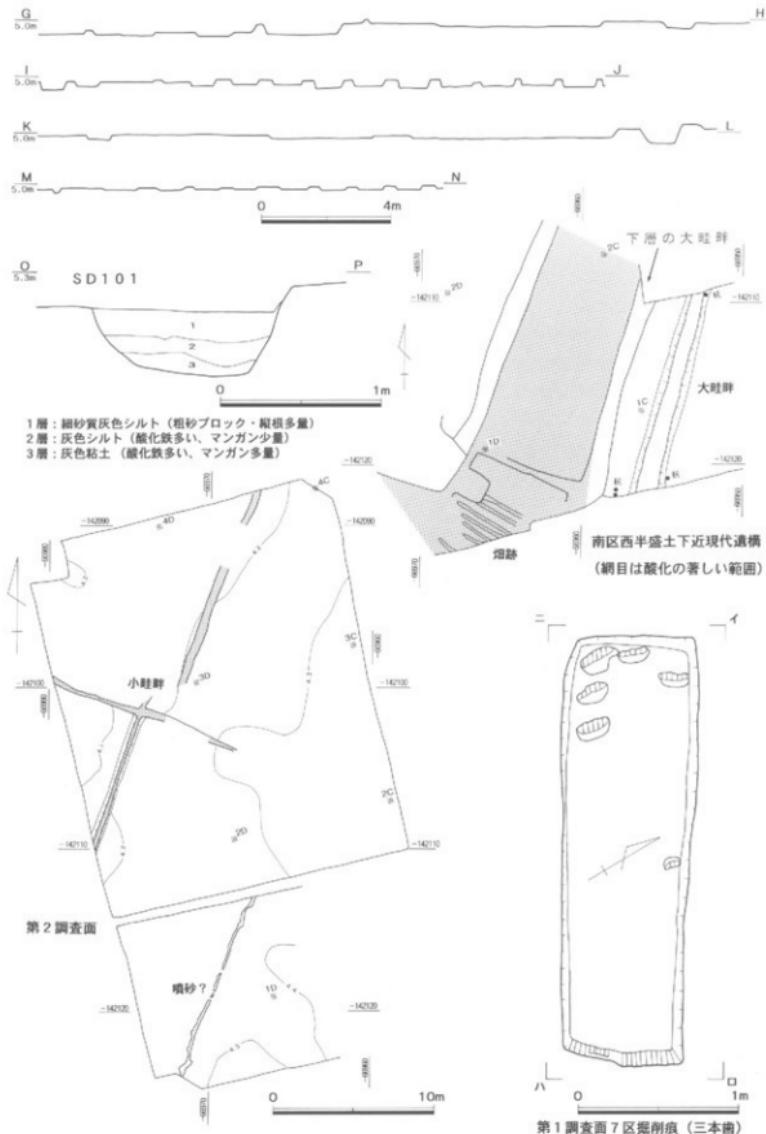
第7図 盛土下地形測量図（上）、第1調査面全体図（下）



第8図 第1調査面北区平・断面図



第9図 第1調査面南区平面図 (・印は杭)



第10図 南区盛土下近現代遺構平面図（右中）、第1調査面平・断面図（上、右下）、
調査区西侧第2調査面平面図（左下）

確実に砂脈とは認定できていない。確実な砂脈は、西壁の中央やや南側で確認された（第6図）。位置的には旧河道（SD304）の肩部にあたり、下部には、粗砂が厚く堆積していることから液状化現象の起これ易い条件を備えている。しかし、丁寧な平面精査にもかかわらず、面的に砂脈が検出されなかつた点は疑問が残る。東遠江地域では、遺跡内に無数の砂脈が発見される場合が多くあるのに対して、西遠江地域では、多くて数条確認される程度である。これは、古天竜川により形成された砂礫層が地表面下数mの地点に厚く堆積し、緩衝剤の役割を果たし、その表層の土質も砂質が強いため、液状化が起こっても垂直方向に噴出することが少なく、スポンジのように吸収してしまうのではないかとも思われる。今回のものは、比較的粘土質であり、旧河道の肩部で、土壤の断裂し易い地点であったことにより偶然検出できたものと考えられる。埴砂は第2調査面の上面を覆っており、畦畔の肩部に残っていたシルト（3層）は地震によりもたらされたものと理解できる。東海地方の比較的規模の大きい地震（震度6以上）で、南北朝時代から江戸時代初期までに起こったものは、1361・1498・1605年（寒川1997）などが文献史料で確認できるが、当遺跡では、時期を限定できるまでの資料に乏しいため、1498年の可能性を指摘するにとどめたい。1498年は浜名湖が決壊して海と通じたとされる年で、元鳥遺跡でもこの年の地震痕が確認されている（加藤1997）。

第3節 第3調査面の遺構と遺物の出土状況

水田跡 第3調査面（第11・12図）からも、南区の中央部で水田跡が発見されている。水田跡はSD202とSD205の間に存在し、畦畔の上面で標高4.7m前後で、鋤床上面で4.6m前後である。水田跡の検出は5層上面で行い、固く締まった粘土層の高まりを畦畔とし、区画された内部を掘削しながら精査した。耕作土と鋤床土との識別が難しい状況にあったため、全てについて田水面を調査したものではなく、多くは識別し難い鋤床層まで掘り下げて記録した。とくに北西部の6区は不明瞭で、田面をかなり深くまで掘り下げる結果となってしまった。検出された畦畔は、層位的には、同一層に近い状況で検出されているが、5層もかなり複雑を受けしており、上層の堆積層の薄さなども加味すると、擬似畦畔も含まれているものと考えられる。1B杭周辺では、痕跡（破線）も含めると極小範囲の水田となるが、おそらく擬似畦畔であろう。7区のSD207は、隣接する畦畔を盛土する際のものと考えられ、比較的規模の大きい畦畔が東へ連続する。

4区の畦畔は東西に併行し、やや低い南北小畦畔によって中を区画し、長方形区画となっている。専水的役割が考えられる。なお、この畦畔はSD202（弥生時代後期）より新しい。

プラント・オパール分析の結果は、弥生時代後期前半のSD301を被覆し、弥生時代後期後半のSD202に切られる土層では（試料No.A、第5図）、プラント・オパール密度は700個/gで、その直上の弥生時代後期～古墳時代前期に相当すると考えられる試料No.Bは1800個/gであった。両試料共にプラント・オパール密度は低く、水田跡の可能性は否定されている（自然科学分析結果報告参照）。しかし、試料No.Bの土層（5b層）には、畦畔状の高まりも存在し、縦根の状態が直上の3e層より太く（注3）、本物の畦畔の可能性は高い。環濠埋没後の空地を水田として利用することは当然考えられ、遙くとも古墳時代前期には、生産域となっていたと考えている。よって、検出された水田跡は古墳時代前期から中期にかけてのものである可能性を指摘しておきたい。

溝状遺構 第3調査面からは、不整形のものを含めて9条の溝状遺構が発見されている。

SD206・207を除いて、その他は全て南北方向で、方位N-15°~30°-Eの間にまとまり、南東から北西にかけて傾斜する地形に沿って構が形成されたものと理解される。

出土遺物などから時期の確定できた例は少ないため、層位的に上位のものから記述する。

SD203～205は、北東から南西に向かって底面の標高が低くなり、比高差は20～40cmほどあり、203と204は南西端部で急激に深くなる。SD203と205は幅も南西に向かって広くなる。SD204は底面中央部に高まりがあり、2条の溝が平行しているような状態で、南東肩部は緩傾斜となり、上端部は不明瞭であった。SD203と205も東側側面の傾斜が共に緩い。以上のようにSD203～205は共通点が多く、位置的にも近接していることから、同じ成因によるものと考えている。

SD206の大半は調査区外に延びるため不明な部分が多いが、北西部へは延びていないことと、埋土がSD204と等質的で、SD204が南西部で急に深くなっている点を考えると、SD206は、SD204と一緒にものと考えて良いと思われる。土層の堆積状況では、第5図の5層（古墳時代中期以前）をSD204～206の埋土が切っており、第5図の4d層では、5層土がブロック状に含まれ、4d層では砂のラミナが形成されている。以上のことを考え合わせるとSD203～206は侵食作用により形成されたものと理解できる。出土遺物は（第66図）、SD203下層からは奈良時代の坏身が、中層からはほぼ完形の13世紀の山茶碗が出土している。SD204からは土師器片や12世紀と13世紀の山茶碗が出土し、SD205からは、奈良時代の坏身片が出上している。SD206上層からは13世紀の所謂山皿などが出土した。

各溝状遺構からの出土遺物はわずかであり、時期を決めるまでには至らないが、中～上層にかけては、山茶碗の出土が比較的目立つ。奈良時代の土器も存在するが、SD203の理上に連続する土層が、奈良時代のSD303を被覆している点からすると、それらは侵食により流れ（落ち）込んだ可能性が高い。とりあえず、中世期の活発な侵食の痕跡と考えている。

SD303は調査区北西部に位置し、奈良時代の土器が細片の状態で多量に出土した。北西コーナーに集水槽を設置したため、西側の肩部は不明であるが、西壁の土層から推定すると幅は約4.9mで、深さは65cmである。埋土は還元状態にある粘土で、植物遺体や炭化物が多く認められた。SD303は、SD304（旧河道）の埋没過程において形成されたものと考えられ、蓮の繁茂した流れの緩やかな小川のような状態ではなかったかと考えられる。出土遺物（第63～65・68図）には、多量の土器と木製品が1点あたり、土器は東側にとくに多く、上層から下層にかけて割とまんべんなく出土した。小型の手捏ね土器の中には完形で出土したものもあるが、大型の土器は全て網片の状態であった（第20図）。それらには、使用による磨滅痕がほとんどなく、かなりの土器が接合でき、また、甕には煤の付着がほとんどない。これらの土器は手捏ね土器やミニチュア品の存在から、祭祀に用いられたものと容易に推測され、堅い須恵器も破片で出土していることから、故意に破碎し、廃棄している。これらの土器は溝の南肩部に集中しており、北方に位置する宮竹野跡（太田1994）より、南方の山の神遺跡（佐藤1989）との関連性があるものと考えられる。

出土土器の器種組成（注4）は、須恵器が坏身3、坏蓋1、高坏1、長頸壺胴部片1、壺胴部片2で、土師器が甕2、甕（ミニチュア含む）5 1/2、台付甕2 1/2、高坏1、坏甕2 3/4、ミニチュアの甕3、手捏ね14である。須恵器が約2割、土師器が約8割である。

出土した土器群から判断すると、8世紀中葉には溝が埋没したものと考えられる。

SD304は周辺の地形などから判断すると、北東から南西へと流れた旧河道で、SD303より古い。当初の設計では、旧河道の調査は予定になく（予算計上されていない）、また、湧水により調査が難行したため、完掘するまでにはいたらなかった。図面上の西側部分は中層までの状況を図化したものであり、実際の西肩部は調査区外に位置する。確認のため深掘りした地点では、標高約2m程で粘土層から湧水の激しい砂礫層となり、SD304の深さは2m以上となる。幅は西肩部が不明であるが14m以上となる。埋土は植物遺体を多量に含む粘土が主体で、ラミナが発達し、上層は炭酸鉄と思われるクリーム色（空気中で酸化し、すぐに変色）を呈していた。出土遺物は14区上層より、端部を穿孔された木製品が1点（第68図）と13区と10区の東側肩部下層で発見された微量の弥生時代後期中葉の土器（第66図）である。

加工木はほとんどなく、ほとんどが自然木で、なかには直径30cm程の丸太が東西を向いて埋没しているような状況もあった。

出土した土器の量に乏しいため、あくまでも推定ではあるが、弥生時代後期になり河道の埋没が始まり河幅を狭め、古墳時代には、流れの緩やかな湿地状の河道となり徐々にではあるが河底が埋まり、浅くなり、奈良時代には小川のような状態（SD303）となり、平安時代には埋没してしまうものと考えられる。

5・7区に位置するSD207は、西に向かう程広くなり、西端部はSD205に切られている。最大幅は1.4m、深さは10cmで、畦畔への盛土の際に掘削されたものと考えられる。

南区東端のSD201・202は部分的な調査であったため不明な点も多いが、両者は時期差はあるが、近接して平行しており、大量の土器が廃棄されている点など共通点も多く、ここでは環濠と考えて記述を進める。

SD201は幅3m、深さ1.1mで、東肩部にテラス状の段がある。断面形態はU字状を呈するが、底面は水流による凹凸があり、粗砂がラミナを形成している。下層土は砂質で、中層より上は粘土質となり固く締まっている。埋土はレンズ状に堆積しているが、第5図の5i層と5j層は異質であり、上層の平面プランが直線的に一定幅で確認されていることからすると再掘削されていると考えられる。最上層からは、完形に近い状態の土器が多く出土しており、とくに南側では小型壺が集中する地点があり、何らかの祭祀に用いられたものが廃棄されたものと考えられる。最上層の土器の取り上げ後、その下部を約20cm程掘り下げたところ、破片の状態のものが比較的多いが、土器が一面に出土した（第17・19図）。出土状態は最上層の土器とはやや異なるが、埋土の状況からは長期にわたる時間差は考えられない。下層からも土器は出土しているが、量的に減少し、網片が多くなる傾向にあった。この傾向は5i層から5j層への変移に呼応している。

第18図には中・下層遺物出土状況図を掲載したが、上層の5i層出土遺物も含まれているため、ここで上（5g-i）層と下（5j）層に分けて出土遺物を以下にまとめる。

SD201上層出土土器実測図番号（第51～62図）

- 1、2、4、7～12、15～17、25～40、42～45、47、63、64、72、81、85、87、88、96、97、104～106、
110、117～120、122～124、128～148、150、159、162、178、183～190、196、198

SD201上層出土と考えられる土器実測図番号

- 3、18、49、53、60、67、68、73、79、98、101、102、113、126、127、149、157、158、161、165、
171、173、174、180、182

SD201下層出土土器実測図番号

- 5、6、13、14、19、21～24、41、46、52、66、70、76、89、93、94、100、109、112、114～116、121、
125、151、154～156、164、166、167、169、175～177、179、193～195

SD201下層出土と考えられる土器実測図番号

- 48、50、54、56、59、61、65、75、80、82、99、152、160、163、170、172、192、197

これらの土器の中には、明らかな混入品が認められるが、多くの土器は、両層で時期的なまとまりがあり、上層は古墳時代前期末の土器が、下層では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が比較的多い。

SD201出土土器の器種組成（注5）は、壺類49（40%）、甕45 1/2（37%）、高円26 1/2（22%）・蓋1（1%）となり、壺類の比率が高いが、これは小型壺（壺形ではない）が通常より多いためである。壺類の内訳（注6）は、中・大型壺30 1/2（62%）、小型壺11 1/2（23%）、長頸壺（瓢壺含む）5（10%）、鉢2（4%）であり、小型壺を除くと壺類は34%で、甕が41%となり、甕が非常に高い比率を示す。甕の内

訳（注7）は「く」口縁29 1/4 (64%)、「S」口縁12 1/4 (27%)、平底2 (4%)、大型2 (4%)であり、「く」字状口縁壺が高率となる。これは、外來のS字壺の減少傾向を示すものとも考えられる。しかし、最上層から出土した壺の多くはS字壺であったことから、祭祀にはS字壺がまだ多用されていたものと理解したい。ちなみに、個数としては計測できなかったが、器台の破片も1点出土している。

SD201の西に平行するSD202、幅1.2~2.6m、深さ50cmで、南側に徐々にひろがり、中央部や南部にはテラスがある。埋土は砂質で上層はシルト質、断面形態はU字状となる。最下層からはあまり遺物は出土していないが、中・上層では、炭化物と共に土器片が折り重なって出土した。出土地点は、南端部、北半部上・下層、中央南部にある程度まとめることは可能である（第15・16・19図）。各地点出土土器を以下にまとめると、次の点は注意が必要である。北側は水田耕作により上層部が一部攢拌されているため、出土状態に不安な点が残る。また、上・下層としているものは、便宜的な出土上レベルの高低によるものであり、下から上まで連続してまんべんなく出土している。土層断面では、土器片がレンズ状に堆積しており、溝の埋没過程で、漸次上器が廃棄されたものと考えられる（カッコ数字は各地点間で接合関係にあるもの）。

SD202南端部出土土器実測図番号（第33~50図）

- 7、(9)、17、19、27、29、32、(33)、34、36、49、50、53、62、64、67、69、73、75、81、82、87~(89)、91、95、98、100~103、106、107、111、115~117、122、(125)、129、130、135、136、138、145、157、162、164、166、168、175、178、182、184、186、201

SD202北半部下層出土土器実測図番号

- 2、10、11、13、(14)、(15)、16、(18)、(31)、39、42、(44)、(45)、47、48、(52)、55、(56)、57、59、(60)、(61)、71、77、83、(84)、(85)、86、94、(99)、112、(113)、118、121、126、131、132、140、142、146、147、154、155、159、(188)、189、194、200、205、206、(209)

SD202北半部上層出土土器実測図番号

- 1、3~5、6、8、12、(14)、(15)、(18)、21~23、25、26、28、30、(31)、35、41、43 (44)、(45)、46、51、(52)、54、(56)、58、(60)、(61)、63、65、66、68、70、72、74、76、79、(84)、(85)、(89)、90、92、93、96、97、(99)、104、108、(113)、114、119、120、123~(125)、127、128、134、137、139、141、143、144、148、150、152、153、163、165、169、173、(174)、179、180、185、(188)、190、192、202、208

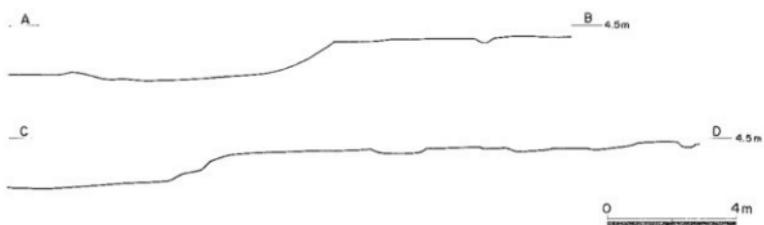
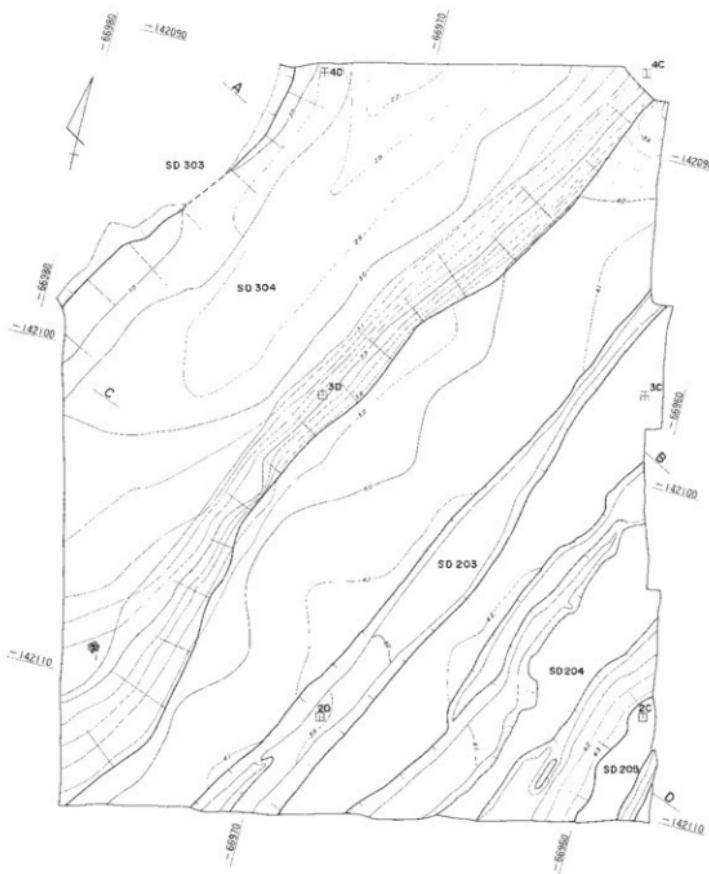
SD202中央南部出土土器実測図番号

- (9)、(33)、40、105、110、113、133、149、172、(174)、203、(209)

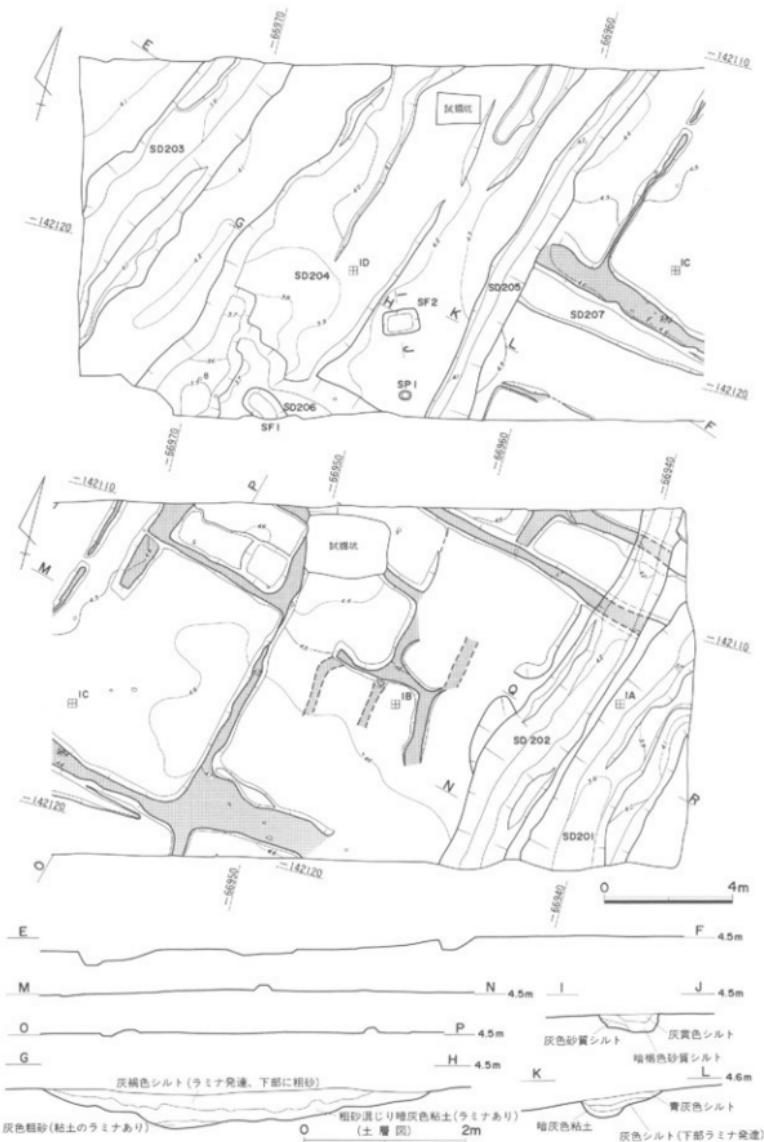
南端部出土例の中には、肩部の張りが弱い壺や、弥生時代後期前半の伊場式土器の影響を残した坏部の浅い高坏が出土していることからやや古相を呈しているが、全体の形状が把握できるような土器からは、各地点の明瞭な時期差を識別するにはいたらなかった。また、各地点での伊場式土器の混入状況から、二次的な廃棄も想定されるため、これらの土器群は一括資料とはならないが、弥生時代後期後半の欠山式の中段階に属するものが多いたと思われる。

器種組成比（注5・6）は、壺類91 1/2 (46%)、台付壺58 (29%)、高坏49 (25%) である。壺類が高率となっているが、計測上鉢や底径が5cm以下の小型壺を含んだ数値である。壺類の内訳は確実な鉢1 1/2 (2%)、小型壺15 (16%)、特大の壺2 (2%)、中・大型壺73 (80%) である。

確実に壺の可能性の大きい中・大型壺類の比率は、全体の37%を占めており、破損率の高い壺よりも多く廃棄されている。西遠江地域の欠山式段階の器種組成比率は、椿野遺跡を例にすると環濠と考えられる溝では、壺類：壺：高坏が47%：25%：23%であり（鈴木敏1996）、土坑出土例では、37%：35%：25%で、方形周溝墓出土例では57%：21%：22%（小型壺が全体の10%）である（柴田1993）。



第11図 北区第3調査面平・断面図



第12図 南区第3調査面平・断面図

三河地域では、高井遺跡の環濠上層出土例で28% : 30% : 40%（鈴木敏1996）、欠山遺跡ではおよそ1:1:1とされている（鈴木徹1994）。組成比の確率を高めるためには、環濠などに大量に廃棄された土器群を数値化する場合が多い。この場合、量的な保障は得られても、時間幅がその分大きくなり、破損率の高い転用ができない土器の比率は高くなる。また、日常生活以外の様々な目的で使われた土器群が混在する結果となってしまう。そうしたことを勘案しても、西遠江地域の壺類の多さは注目され、日常生活以外の行為に使用された土器が比較的多く廃棄されている可能性もある。

時期的には下るが、古墳時代前期の東遠江地域の器種組成は、古段階の川田・藤藏湖遺跡SF401では小型鉢を除く壺類49(31%) : 壺75(48%) : 高杯32(21%)となる（飯塚1996）。中段階では、三沢西原遺跡で29% : 32% : 39%（鈴木敏1985）となる。東遠江地域も弥生時代後期には壺類の多用地域であり、西遠江でも古墳時代の壺類の減少傾向があてはまるするとすると、組成比が弥生時代と古墳時代の画期を示す1つの手掛りとなり得るものと考えられる。

土坑と小穴

溝状遺構以外には、土坑が2基、小穴が1基、調査区南西部の7・11番より発見された。SF1は平面形が橢円形で、長さは不明であるが、幅は84cm、深さ43cmでSD206より新しい。SF2は平面形が長方形で長さ110cm、幅75cm、深さ23cmである。SP1は平面形が35cm×26cmの橢円形で、深さは8cmである。これらの遺構からは遺物は出土しなかった。

第4節 第4調査面の遺構と遺物の出土状況

南区中央部のSD202とSD205の間の水田跡の下から、溝状遺構が2条と小穴が2基発見された（第13図）。調査は遺構の最終確認面となる6d層（土層は第5回参照）まで掘削し、プラン確認を行った。平行する2条の溝状遺構は、SD302が6a層の直上の5d層に被覆され、SD301の最上層の5n層が6a層より新しく堆積していることから、埋没するのはSD302のほうが早かったと考えられる。SD301は、SD302と同様に大量の土器が廃棄されており、環濠となるであろう。埋土は上・下層に分かれ、上層はシルト質粘土で、土器が多く出土した。下層土はベースの6d層に類似していたため、上層部で完掘したものと考え平面図を作成したが、断面観察の結果、下層に統一することが判明し、2つの平面図を掲載している。SD201ほど顕著ではないが、上・下層は異質であり、再掘削されているかもしれない。幅は1.4~2.6mで南側が狭く、深さは90cmで、断面形態はV字状である。第14・19回に土器の出土状況図を掲載したが、その出土レベルのまとまりから、南・中央・北の各地点と最下層出土例の4群に分離が可能である。その出土レベルは北から南に向かって徐々に高くなってゆく傾向が看取され、とくに南地点の上器群は上層にまとまっており、中層以下からはほとんど出土していない。これらの土器群を以下にまとめて記す（カッコ数字は各地点間で接合関係にあるもの）。

SD301最下層出土土器実測図番号（第21~32回）

36、116

SD301北出土土器実測図番号

12、(17)、23、(26)、35、40、46、(52)、60、75、76、80、87、98、104、105、107~109、125、139

SD301中央出土土器実測図番号

3、5、6、7、10、13、15、16、(17)~19、25、(26)、29、(30)、(31)、(35)、38、(39)、51、(52)、54、(58)、(59)、63、66、67、72、73、79、83、88、90、101、103、113、115、119、121、128、129、140、142、144~146

SD301南出土土器実測図番号

1、2、4、9、11、14、22、28、(30)、(31)、32、33、(39)、41、42、50、53、55、56、(58)、(59)、61、62、65、68~71、78、81、82、85、86、89、91、92、93、94、96、97、99、106、110~112、117、127、134、135、143

北と中央、中央と南の土器間で接合関係にある土器が何点か存在する。これは、溝の埋没がほぼ同レベルで進行したものと仮定すると、当然北の上器が古く、南の上器が新しいことが予想されるが、それらの土器群がかなり限定された期間に廃棄されたか、搅乱を受けている可能性がある。残存状態の良好な土器量が多くないため、各地点間の比較には難点も多いが、北からは胴下部に明瞭な稜をもつ古相の台付壺(60)が、南からは後出の欠出式の受口壺(1)や台部の内弯した台付壺(85)が出土し、高坏は中央のものより坏部がやや深く、脚裾部の屈曲度がやや大きいものが認められる。よって北から南へ順に廃棄されたものと推測される。しかし、各地点間の土器群には、時間差を示す形態差より共通点のほうが多く、内弯指向の上器も含めて、一時期と捉えることも可能かと思われる。時期は弥生時代後期中葉(伊場式新段階)の土器群で、環濠はこの時期にはほとんど埋まって機能しなくなっていたものと考えられる。

出土上器の器種組成比(注5・6)は、壺類83(43%)、壺59(30%)、高坏53(27%)である。SD202と同様に壺類の比率がかなり高い。壺類の内訳は、中・大型壺78(94%)、小型壺3(4%)、鉢2(2%)で小型壺や鉢を除いても高率である。壺はほとんどが台付壺であるが、2点平底のものがある(57・59)。高坏には、脚部の小さい小型品が5点(高坏内で9%)存在する。他遺跡のこの時期の壺類：壺：高坏：鉢の組成比は、伊場遺跡で40%：25%：32%：3%，櫛子遺跡8次調査で40%：24%：29%：7%(鈴木敏1991)で、椿野遺跡の環濠(SD412)で34%：43%：23%(小型壺は全体の8%、鉢はほとんど出土していない)であった(柴田1993)。櫛子遺跡では、遺構別に器種組成比が示されている(鈴木敏1991)ので、ここで参考とする。組成比は壺類：壺：高坏で、SD01(環濠)では64(42%)：39(26%)：49(32%)、SK06は16(36%)：11(24%)：18(40%)で、SK07は50(46%)：24(22%)：34(31%)で、SE02は27(55%)：10(20%)：12(24%)である。

壺類が短期的に廃棄された上器の中でも高率であり、SD301出土土器の器種組成比は西辽江地域の一般的な例に近い数値となっている。

SD302は、幅60~106cm、深さ28cmである。地形的には、東西からの傾斜面の最深部に位置しており、人工的に掘削されたものというより、侵食により形成されたものと理解される。遺物は出土していない。

その他、東側で小穴も発見されている。SP2・3は、環濠に伴う施設の有無を確認する際に検出したものであるが、シミ状にほんやりと見えたもので、確実性に乏しい。

注

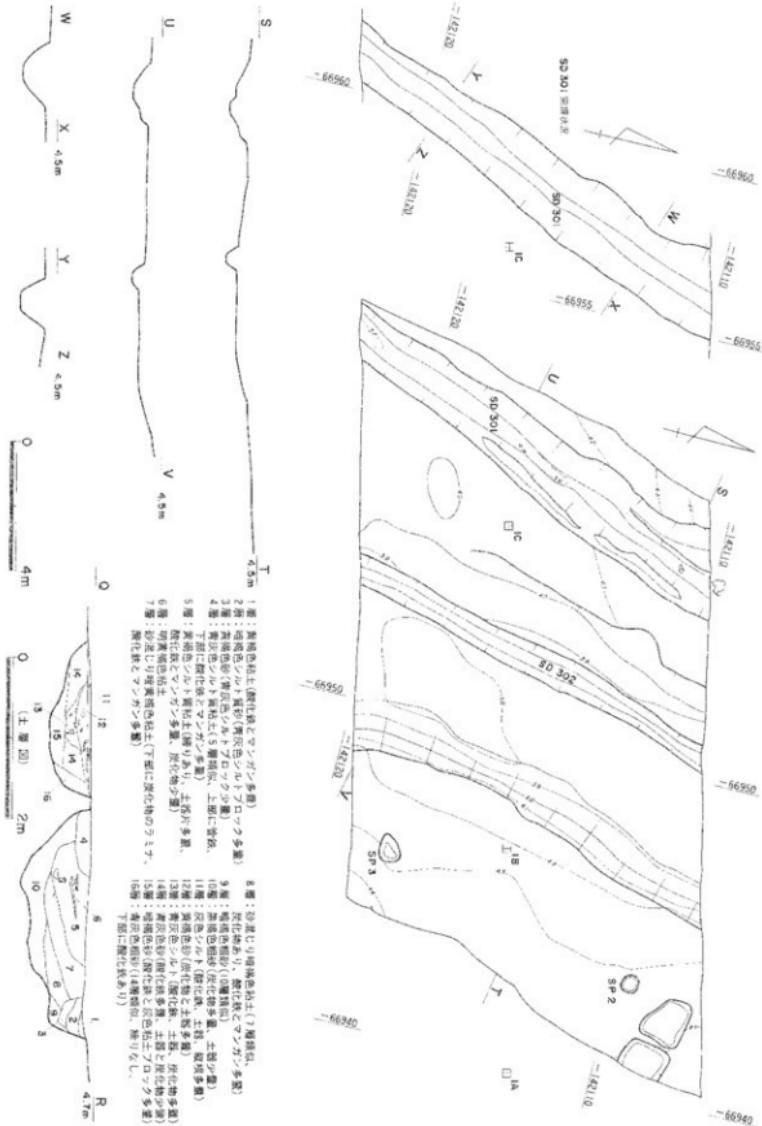
1. 鈴木一有氏の御教示による。
2. 山田成洋氏の御教示による。
3. 加藤芳朗先生の御教示による。
4. 壺類、壺類、手捏ねは、口縁部片が一周したものを1点とし、壺類はミニチュア品を含めた。台付壺や高坏は接合部で、壺類は底部での計測を基本とした。
5. 個数の計測には、各器種の特徴的部位を用い、その部分の破片は残存率で計り、合計が100%となつたものを1点としてカウントした。台付壺は体部と台部の接合部で、平底壺は底部で計測した。壺類も底部で計測しているため、鉢などを含んだ数量となってしまった。高坏は坏部と脚部の接合部で計

測した。

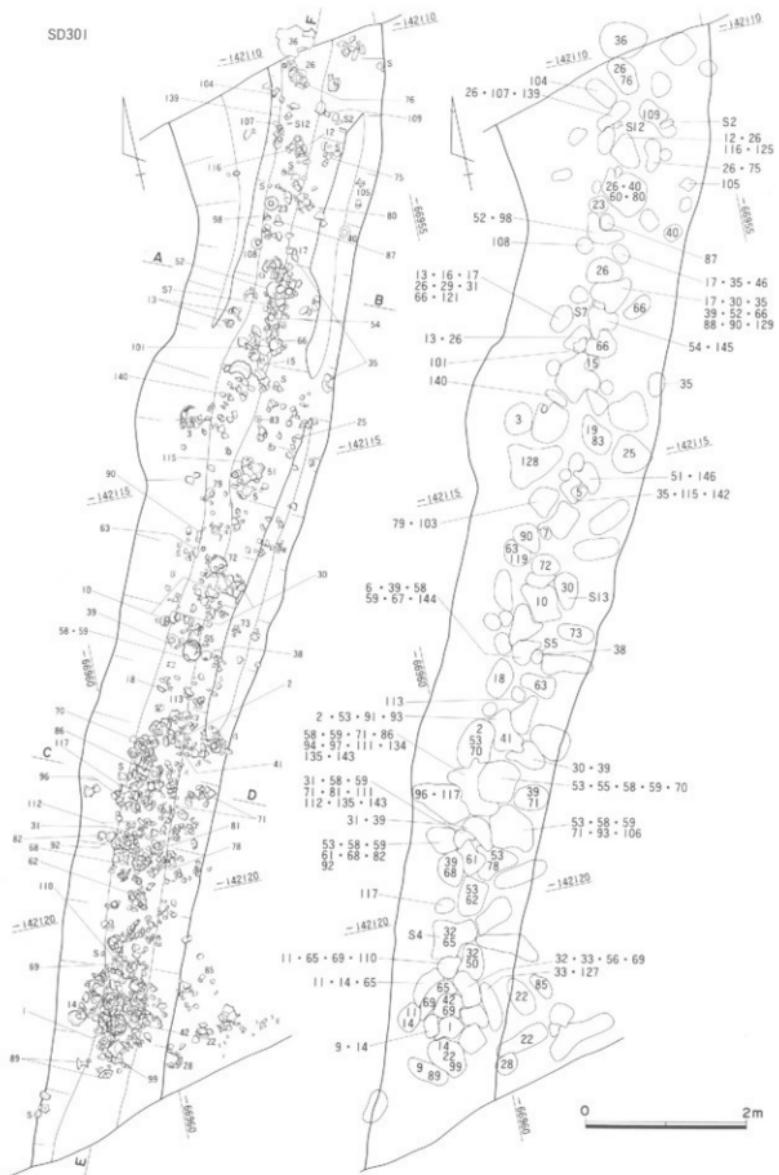
- 6、壺類の計測は底部の残存率で行ったため、平底壺と鉢も含む結果となったが、平底壺はできる限り識別し、鉢は口縁部破片が少ないことから、量的にはそれほど多くないものと考えている。小型壺は底径が5cm以下になるようなミニチュア品や手捏ね土器を計測した。
- 7、台付壺の計測は、体部と台部の接合部で行っており、S字壺の台部の識別は、黒衣母の含有量、ハケメの状態、薄さや断面H状の形態などによっている。大型品については、口径の非常に大きい口縁部をカウントしたが、量は少ない。

引用文献

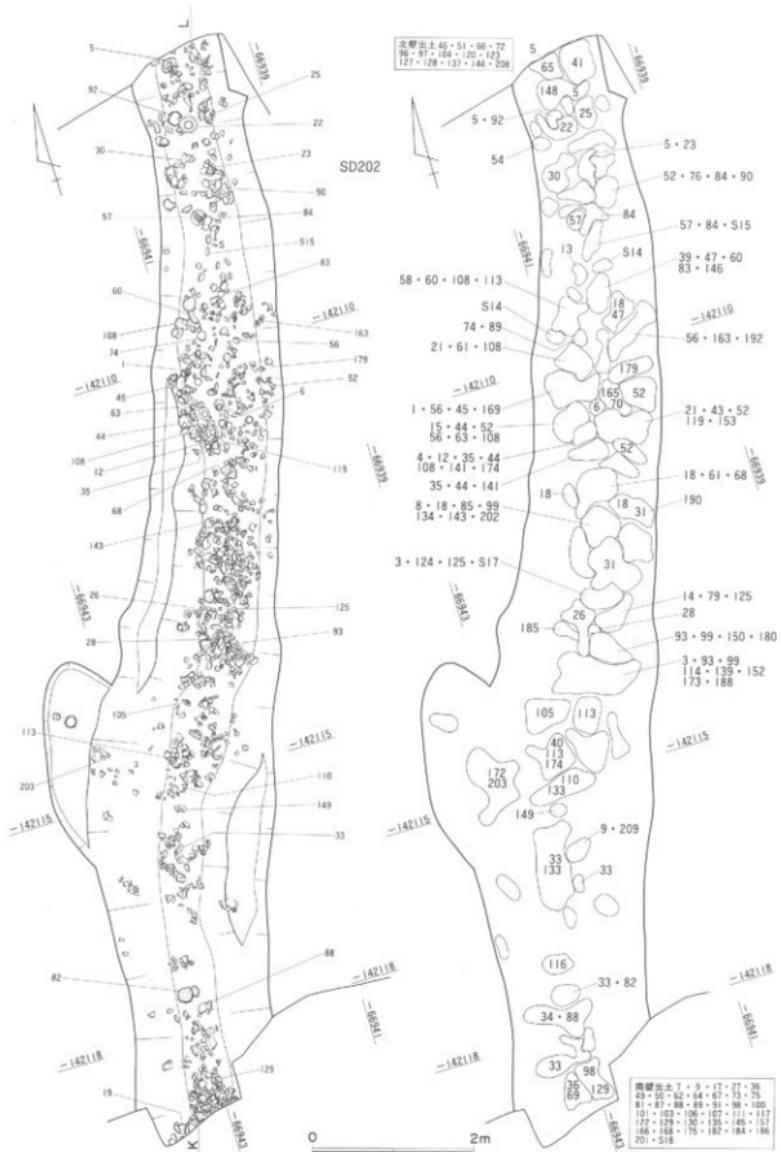
- 山田成洋 1985『宮下遺跡』(遺構編) (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則 1985『三沢西原遺跡』菊川町教育委員会
瀬野裕彦 1988「東北地方における稻作農耕の開始と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会、静岡県考古学会
佐藤山起男1989『山の神遺跡』浜松市教育委員会
山田成洋 1990『川合遺跡』(遺構編) (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則 1991『梶子遺跡Ⅷ』(財) 浜松市文化協会
山田成洋・伊林修一 1993『川合遺跡・八反田地区』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
柴田睦 1993『椿野遺跡』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木徹 1994『穴山遺跡』小坂井町教育委員会
太田好治 1994『宮竹野際遺跡』2 (財) 浜松市文化協会
鈴木敏則 1996『高井遺跡』豊橋市教育委員会
飯塚晴夫 1996『川田・藤藏洞遺跡』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所第82集
寒川旭 1997『揺れる大地 日本列島の地震史』同朋舎出版
加藤理文 1997『沖積平野に営まれた戦国集落』『静岡の原像をさぐる』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所



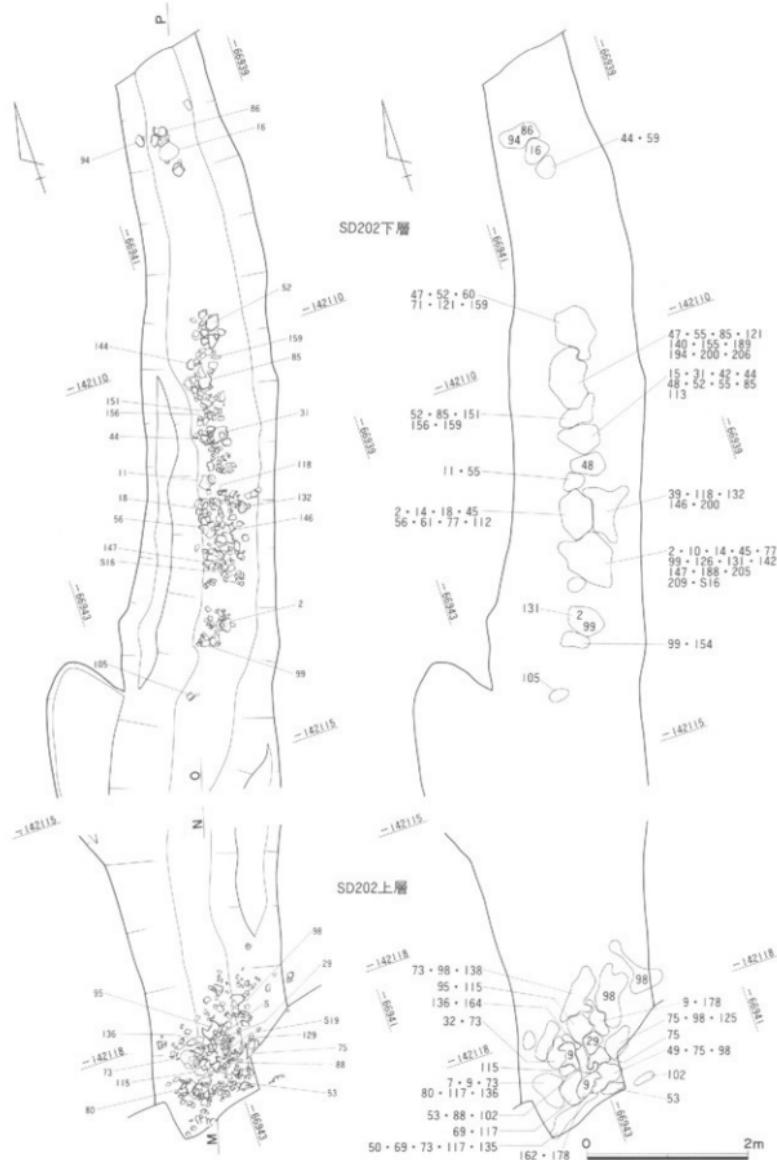
第13図 南区中央第4調査面平・断面図



第14図 SD301遺物出土状況図



第15図 SD202遺物出土状況図

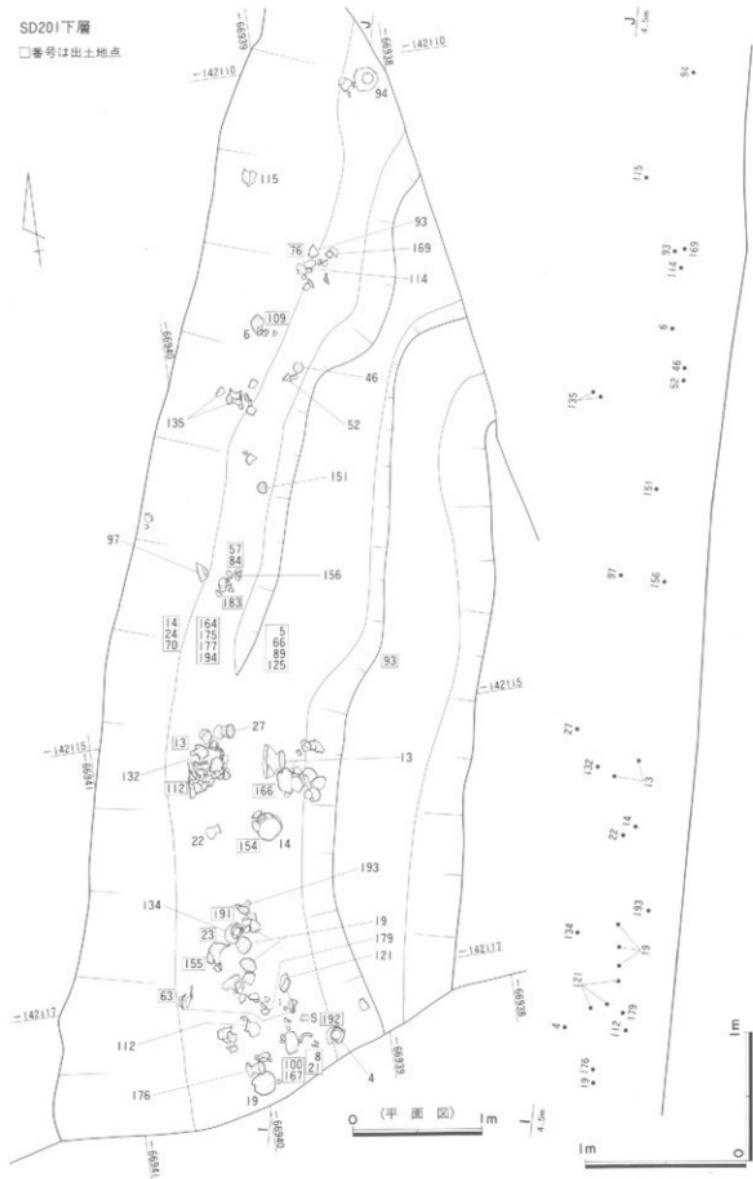


第16図 SD202上・下層遺物出土状況図

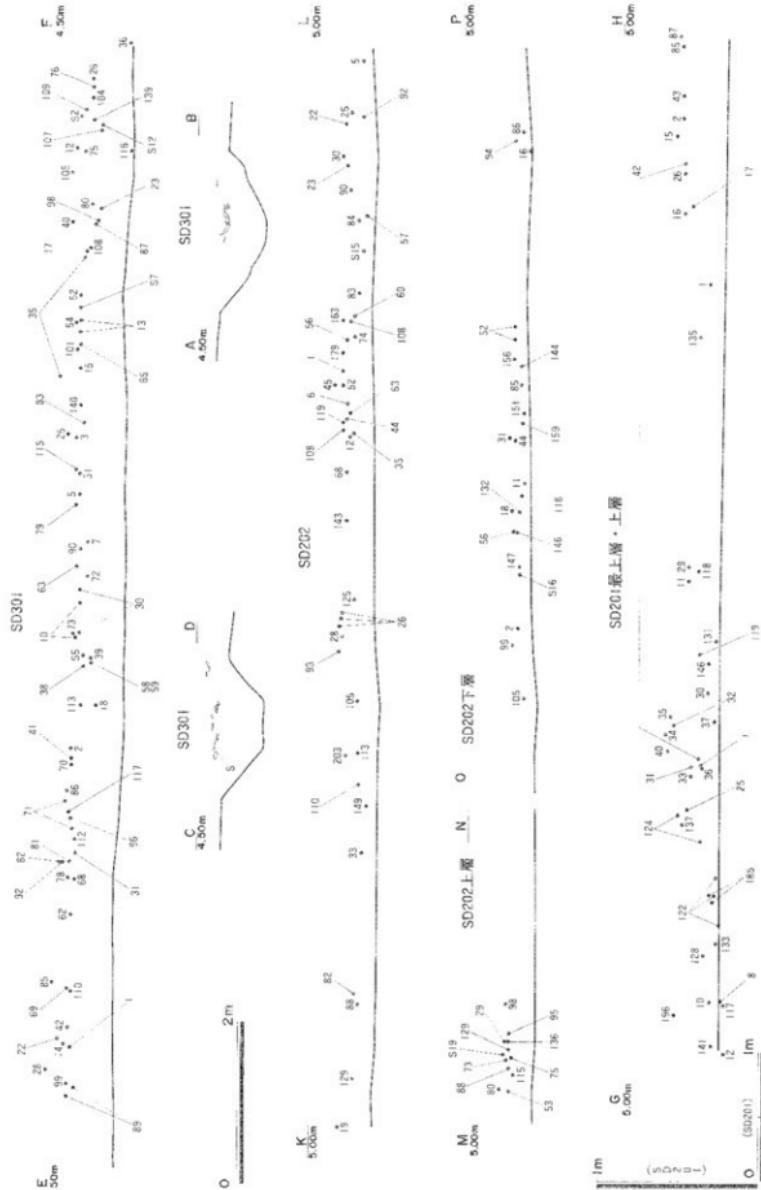


第17図 SD201最上層・上層遺物出土状況図

SD201下層
□番号は出土地点



第18図 SD201中・下層遺物出土状況図



第19図 SD201・202・301遺物出土状況図



第20図 SD303遺物出土状況図

第Ⅳ章 発見された遺物

第1節 弥生時代の遺物

土器の他には、土製紡錘車（第68図21）と石器がある。石器は敲石がほとんどで、一部砥石がある。後期前半のSD301に比較的多く、後半のSD202では量が減少し、形態のバラエティーも乏しくなっている。

当遺跡で最も古い土器は第32図137と第61図173の条痕土器で、137は口唇部をキザみ、条痕はかなり粗く縦羽状を意識しているようであり、水神平式であろうか。第32図136は長床式の深鉢である。その他の弥生土器はほとんどが後期の所産であり、水田耕作土内からも多く出土したが、ほとんどはSD301とSD202に帰属するものである。よって、ここではSD301とSD202出土土器について記す。その出土状況や器種組成は第3章で述べていることから、主な遺物の特徴をまとめてみたいと思う。

SD301出土土器（第21～32図） 壺には受口状口縁、単純口縁、折り返し口縁がある。1～3は受口壺で、1は口縁部が大きく開き、頸部に突帯を巡らせていている。磨滅が著しいため文様の有無は不明。2・3は口縁部が直立し、胴部は球形に近く、無文である。6～19は単純口縁壺で、6～11は口縁部が直線的に開き、12～19は外反気味に開く。胴部は下膨れ形（10・11・13・17）と球形胴（14）のものがあり、磨滅して（12・13・15）不明な点もあるが、無文（10・11・14）のものと櫛描文が施されるものがある。折り返し口縁壺のほとんどは菊川式もしくはその影響を受けたもので（21～26・29・30）、26や29は折り返し部が薄く、頸部の屈曲もあり形状は在地的であるが、口縁部外面にハケメを残したり、肩部の羽状文を模倣している。30は胴部が偏平で、肩部には櫛描波状文や横線文が施されているが、口縁部は厚く折り返され繩文が施され、折衷的な土器となっている。28・34は口縁部を外方に屈折させ、薄く折り返している。28は胴部が下膨れ形で、34は球形胴である。共に肩部に櫛描文が施されているが、34は口縁端部が水平になっている。31は短頸壺で胴部はソロバン玉状となっている。42のような小型広口壺も存在する。

40・41は口縁部が短く開く鉢で、外面はヘラミガキされている。

壺には平底壺（57・59）、深鉢状の大壺（63）と台付壺がある。台付壺には胴下部に稜を有するもの（60・62）が少数存在するが、他は球形胴に近い。全ての台付壺の口縁部は口唇部面取り後キザまれ、一部横ナデするもの（68～72）もある。台部は85がやや内弯しているが、他は比較的長く、直線的に開く。台部と胴部の接合部に補強用の粘土帯を巻くもの（70・71・73～78）も多数存在する。

高杯には、伊場式特有の脚部に台を付けたかのような特異なもの（86・87）、口縁部が屈曲し稜を成して開くもの（88～92）と、緩やかに立ち上がるものの（93）がある。通常は口縁部外面や脚部に櫛描文が施されるが、そうでないもの（86・93・100・111～113）も多く、菊川式の脚部以外は全て透かしを持つ。小型の高杯（96～98）、高脚（99～102）や低脚（105～115）など大きさも様々である。脚部は裾広がりになるものと、裾部が屈曲するものが共存している。

これらの上器群は胴部下半に明瞭な稜を有するものが少なく、壺は肩部が張る下膨れ形をなし、壺の口縁部は横ナデされているものも多い。上層からは内弯指向の上器が散見される点を考慮すると、伊場式新段階に相当するものと思われる。

外来系土器 4・5は菊川式の小壺壺で、頸部に櫛刺突文を巡らせ、外面はハケメを意識的に残している。5は搬入品の可能性がある。21～25は菊川式の折り返し口縁壺で、22は大型のため有段羽状とすべきか微妙である。23・25は口縁部内面に繩文が施され、胎土にはアズキ色の風化蹠が認められるところから太田川流域からの搬入品であろう。24は口縁部内面と肩部に扇形文が施文されている。26・

29・30は菊川式の影響を強く受けている。125・126は刺突によらない羽状文で、127は櫛刺突羽状文である。26・29は胎土に大粒の白色石英が多く異質である。20は飾られた壺で、口唇部が下方に垂下しており、三河の寄道式であろう。壺の胎土には大粒の白色石英が比較的立つが、角張った白色石英を多く含んでいるものがある(71・73)。これらは都田川流域所の可能性があり、北方との交流を見直すべきであろう。

高坏にも菊川式土器が認められ、94は坏部の深いもので灰色の風化疊?を含み、搬入品であろう。138は口縁部で、116・117・147が脚部である。117は酸化疊が多く搬入品である。

菊川式土器と伊場式土器の壺の識別は難しいため、人の移住を示すような直接的根拠に欠けるが、菊川式土器圏へは日帰りできる距離であり、從来言られてきたような閉鎖的関係ではなく、この時期は予想以上に人的、物的交流があったものと考えられる。なぜなら、上器の移動は、当時の情報量からすればそれほど大きなものではなく、むしろ、莫大な情報量の中の一つだからである。

SD202出土土器(第33~50図) 壺には単純口縁、受口状口縁、複合口縁、折り返し口縁の細頭の壺と短頸広口壺、所謂無頸壺、小型壺がある。1~6・10・11が単純口縁壺で、1~3・10・11は口縁が外反し、4・5は直線的に開き、口唇部に面を持つもの(1・3・5)もある。外反口縁のものは下膨れ形をなし、直線的に開くものは球形壺になると思われる。10・11は口縁部が直立し、短く外反するもので、特異な形態である。菊川式が姿容したものと考えている。6は小型の菊川式土器であろう。7・8・12~18が受口壺で、7・8は頸部が直立に一旦立ち上がり、口縁部が内窓気味に開く。12~15は口縁部が面取りされ、16~18は底減などにより不明である。頸部には凸筋が巡るもの(12・17)があり、胴部は下膨れ形をなす。19~21が複合口縁で、内窓して開き、羽状櫛刺突文が施文されている。折り返し口縁には、直線的に開くもの(29)、外反するもの(23・26・28)と内窓するもの(25)がある。23は口縁部が二段になった特殊壺で、内面には櫛搔波状文が施文され、4個一組の円形浮文が3ヶ所に貼付されているようだ。79~82が短頸の広口壺で、頸部は直立し、口唇部に面を持つもの(79・81)と内窓するもの(80)があり、胴部は球形(80・81)のものと下膨れ形をなすもの(82)がある。所謂無頸壺(72・73)の胴部も球形と下膨れ形の二者がある。37は欠山式に特徴的な小型壺である。この他、口縁部の形状が不明な壺の胴部破片も多数出土している。これらの肩部文様は櫛搔横線文と櫛刺突文もししくは波状文が一対となり、2段構成となるのが通例である。

59・74~77が鉢で、76・77は小壺である。口縁部を外側に引き出すもの(74・75・77)、底部から直線的に開くもの(76)と内窓して開く碗状(59)のものがある。

壺はほとんどが「く」字状口縁台付壺であるが、少數特殊な例がある。83・84は大型の鉢形を呈している。83は口縁部を折り返しており、東濃江や駿河の影響が考えられる。113・114・115は受口壺で、113は肩部に櫛刺突文が巡り、伊勢地方や三河地方に多い形態で、胎土は異質であるが模倣品である。114は口唇部にキザミを有するもので、色調が茶褐色を呈し、搬入品の可能性もあろうが、西濃江地域の欠山式期の遺跡からはわずかではあるが出土する形態である。平底壺も存在すると考えられるが、抽出することはできなかった。その他は「く」字状口縁台付壺であろう。85~103は球形壺で、86~99は口唇部面取り後キザミ、87は横ナデされ、100~102はキザミが無く、96~98・102は口縁部が比較的無い。台部は直線的に開くもの(85)と内窓気味に開くもの(86・87)がある。103~106は長胴形で、口縁部は直立気味に開くものが多く、台部は低く内窓(105)している。107・108は口径が胴部最大径より広いもので、107の口縁部は磨減しており不明な点が多いが、キザミは無いようである。108は口縁部外面横ナデされ、口唇部は丸くキザミがあり、台部は低く直線的に開いている。116は口縁部は外面横ナデされ、口唇部は丸く球形である。他の台付壺とは異質であり、平底の可能性もある。117は胎土に角張った白色石英が多く、搬入品の可能性がある。台部には低いもの(109~112)

と高いもの（118～124）があり、低い台部は直線的に開いている。

高坏には、坏部が浅く口縁部が外反するもの、坏部が碗状となるものと、坏部が深く口縁部が内弯するものがある。口縁部が外反する例は微量で、脚部は高く、胴部で内弯（129）している。127・131は坏部が碗状で、131は口唇部は丸くハケメが残る。127は高坏ではないかもしれないが、口唇部は面取りされている。132～142は内弯口縁で、大きさにはバラエティーがあり、磨滅により不明なものもあるが、概して内外面は丁寧にヘラミガキされている。140・141は口径に比して、坏部が深い。口縁端部も磨滅により不明なものが多いが、面をもつものは135～137・141・142であり、136は明瞭に内傾している。138は端部が丸いようである。脚部は内弯気味に開くもの（137・143～146）と直線的に開くもの（147～149）があり、143～145・148は三方透かしを有している。

SD202出土土器には、伊場式土器が混入しており、時間幅のある資料であるが、比較的復原のできた上器群には形態的まとまりがある（第70図）。それらの土器群には伊場式土器の影響は顯著ではなく、欠山式期の後半に属するであろう。しかし、壺は台部が高く直線的に開いたり、口縁部の横ナデが盛行していくなかつたり、高坏は坏部の深い例が多く、壺を含めて全体に口縁端部に面を有するものが多いなど古相を示している。よって、これらの上器群は欠山式の中段階と考えておきたい。

外来系土器 6・9・22・24・27・30・31・32・34・35・36・78・164・166・178～182は菊川式系上器である。一部、駿河地方の影響を考慮すべきであろうが、菊川式系として括する。9は肩部に段をつくり、櫛刺突羽状文が施文された壺で、口縁部と胴部外面は赤彩されている。32や180も有段羽状文の壺である。22・27・30・32・34・35・164・180は胎土にアズキ色もしくは灰色の風化礫を含み、太田川流域などから搬入されている可能性が高い。後期の文様の中で、新相を示すS字状結節繩文が施文された例（24・30・166・182）も目立つ。34・178は胴部外面が赤彩された小型壺である。菊川式土器はあまり赤彩されることはないのであるが、分布圏外では赤彩例があり、特別な用途を推測させる。78は広頸壺で、外面にはハケメが残る。破片のため不明な点も多いが、菊川式土器の中には煮沸用の大壺があり、これはその形態に類似している。21は角張った大粒の白色石英が多く、都田川流域から運ばれている可能性もある。

壺は前記したので略すが、口縁端部を折り返している例がある（83・198・199・203）。197は古式の二字壺である。202は櫛描文が施文された中部高地系である。

第2節 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、5区の水田層から脚部の影らんだ中期の高坏なども出土しているが、そのほとんどはSD201からの出土例に限られることから、ここではSD201出土土器について述べる（番号は第51～62図の実測図に対応する）。

出土状況と器種組成は第3章第2節で述べていることから、ここでは個々の土器の特徴を、比較的残りの良いものと特殊なものに限って上層と下層に分けて記述する。

上層出土土器 壺には、口縁端部が屈曲するもの、単純口縁、二重口縁の壺の他に直口壺や小型壺がある。1・2は口縁端部を短く上方へ垂直に屈曲させており、胴部は文様の残るヘラミガキによるものと、無文のヘラナデ調整の2種類がある。胴部は前者が下彫れ形、後者は球形に近い。7・12・28・29は口縁部が肩部から「く」字状に開く単純口縁で、7～11は端部がやや外反し、10は強く屈曲させている。12・28・29は口縁部が短く、28・29は小型である。胴部は下彫れ形（8）と球形胴（9・12・28・29）があり、ヘラナデ調整のものが多いが、ハケメを全体に残しているもの（29）もある。15～17は二重口縁壺で口縁部に櫛刺突文、肩部に櫛描文を施し、頭部外面にハケメを残す。胴部は下彫れ形

で磨滅が著しいが、外面にヘラミガキ痕が観察される。櫛刺突文の見られないものもあるが、柳ヶ坪型壺の系統と考えられる。25~27は直口壺で口縁部は長く内弯気味に開く。胴部は偏平な球形でヘラミガキされているものもある。30~40は小壺壺で、丁寧にヘラナデされている。

42~44は小型の鉢で、底部が小さく肩部が張り、口縁部は外方へと開く。頸部内面に稜があり、44は堆状を呈し、43はヘラミガキされている。47は山陰系の大型鉢で混入品である。

壺はほとんどが台付壺で、在来系の「く」字状口縁と外来系の「S」字状口縁の二者がある。117・118・119・120・122・123は「く」字壺で、口唇部のキザミは消失し、117を除き口縁部は横ナデされている。胴部は球形に近く、ハケメが残るものが多く、119は「S」字壺のハケメを模倣している。122は内外面ヘラケズリ整形のままで、120は磨滅が著しいがヘラナデ調整されている可能性もある。128~146が「S」字壺で、赤塚分類のC・D?類（赤塚1990）に相当する。口唇部を水平もしくはやや下方へとつまみ出すもの（131~133・137・138）があり、概してこれらには肩部の横ハケが省略されるものが多い。横ハケの残るもの（128~130）と省略されているもの（131~140）があり、省略されているものが目立つ。頸部外側の屈折部に沈線を残すもの多く、胴部の形状は球形（128）と肩部の張るもの（131~133）があり、135はやや長胴になるかもしれない。台部は端部を内側に折り返している（143~146）が、折り返しがすでに形骸化しているもの（143）もある。その他、124のような大型例があり、口径が広く鉢状を呈し、内外面にハケメを残している。SD201からの混入品と考えられるSD101出土例（第66図）と似ている。

高坏は坏部が比較的浅くなり、ヘラミガキ調整（183・184）とヘラナデ調整（188・189）のものがあり、脚部は裾広がりで一方透かしをもつもの（183・191）と柱状でおそらく裾部が屈曲するもの（186・187・190）がある。189と190は接合する可能性が高く、186と187は低脚になるかもしれない。

その他、器台と思われる破片（198）も存在する。

これらの土器群は、「S」字壺の肩部横ハケ省略や台部折り返しの形骸化、壺の球胴化、折り返し・複合口縁壺の減少、無文化、ヘラナデ調整の多用、高坏の脚部柱状化と裾部の屈曲、ヘラナデ調整の多用など西方の情報を採り入れ、類似した型式変化を遂げている。そのため、二重口縁壺や小型壺が共存してもおかしくない時期と考えるが、脚部の膨らむ高坏、小型丸底壺、ヘラナデ調整の半底壺が併出していない点は注目すべきであろう。ここで、「S」字壺が多く出土していることから尾張地方の編年には照らすと、およそ赤塚編年の松河戸I式前半期（赤塚1994）に、加納編年では西北出期（加納1991）に併行するものと思われる。両氏は共に「S」字壺と高坏の形式変化を時系列の基準とし、その変化の方向性は同様であるが、赤塚氏が「外反脚を有する有段高坏」が過間Ⅲ式4段階に極めて少なく、松河戸I式前半期に「屈折脚高坏」が多く認められるとし、大画期を想定するのに対し、加納氏は西北出期と松河戸期（赤塚編年の松河戸I式後半～II式併行）の間に大画期を設定し、「小型丸底鉢・小型器台が消失し、代わって小型丸底壺が盛行」し、「屈折脚高坏は脚柱状部が中膨み」になるとしている。祭祀に関連する器種の消失や置換は様式構造の変革を意味しており、現状では加納氏の見解が明瞭であろう。西北出期併行の土器群は、西遠江地域ではあまり例がないため、SD201上層出土土器群を加納氏にならい「山の神期」とここでは呼ぶことにしたい。

西遠江地域では、山の神期の次に来るような一括資料を欠いている。見性寺貝塚（平野1974）、川久保船渡遺跡SB01（栗原1993）、箕輪遺跡8層水田（長谷川 1993）といった從米和泉式併行期とされていて、比較的安定した中期的土器群の前段階の資料が不明である。おそらく、そこに大画期が存在するものと予想され、外来の器種・器形の波及・混在、在来形の変容といった現象が顕著な時期があるものと考えている。

山の神期の土器は環濠の埋没時に廻棄されたものであり、この時期以降の土器はあまり出土してい

ない。弥生時代から継続する撲点型集落の中には同様の傾向が窺える例がある。集住型集落の解体は、山の神期以前より始まっていたものと考えているが、その崩壊期が山の神期にあたるものと思われる。駿河との編年的位置関係は渡井編年の大邱IV式～中見代I式（渡井1996）に、遠方との直接的対比は難しいが、北陸地方では概念的ではあるが、漆塗9・10群（山崎1986）に相当するであろうか。

下層出土土器 壺は単純口縁、折り返し口縁の壺があり、瓢壺などもある。4は上層出土の受口壺であるが、下層と考えて良いと思われる。複合口縁壺（55～57）は破片で、混入の可能性もある。6・13・14が単純口縁壺で、6は頸部の屈曲が緩やかで、13・14は屈折している。13・14は胴部が下彫れ形をなし、ヘラミガキ調整されているが、14の肩部は櫛刷文が施文されている。21は折り返し口縁壺で、口縁部と肩部に櫛刺突文が施文され、浮文が付き、頸部に突帯が巡る。22～24は瓢壺で、口縁部の広いもの（22・23）と狭いもの（24）がある。共に口唇部に内傾面を有するが、24は二枚貝の腹縁による刺突文が認められる。

46は壺の蓋で、41は口縁部が短く内弯する広口壺で口唇部に内傾面を持つ。

甕は台付甕がほとんどで、面取りされた口唇部にキザミを有するものは、口縁部の屈曲が緩やかで、胴部中位に最大径がくる（112～116）。115は口縁部外縁を横ナデしている。121は口唇部が外方へとつまみ出され、キザミは無く、口縁部は「く」字状に開き、胴部上位に最大径がある。125～127は赤塚分類のA類S字甕である。126・127は上層出土であるが、下層相当と考える。口縁部は垂直に屈曲し、口唇部に面を持ち、外面はキザミで覆われている。外面にはハケメが残るが、126の肩部外縁には横位・羽状ハケメが認められず、器壁も厚い。細片ではあるが受口甕（170～172）も出土している。151・152・154～156が台部で、比較的低く直線的に開いている。151は内面の折り返しは無いが、S字甕の台部であろう。

高坏は低脚が多く出土しており、直線的に開くもの（176）、内弯気味に開くもの（177・179）と裾広がりのもの（192～195）があり、三方透かしのあるもの（179・192・194・195）もある。

下層出土土器には、内弯指向が残存し、台付甕は口唇部面取り後キザミのが多く、欠山式と元屋敷式の混在とも言えるが、あえて、新出の裾部が屈曲する高坏（192・193）や、古式のS字甕（125～127）の存在やその影響を受けた甕（121）を評価し、元屋敷式の古段階に位置付けておきたい。

外来系土器 壺は18が頸部の外面が赤彩されたバレススタイル壺である。62・63は口唇部が垂下する折り返し口縁で、内面に繩文を巡らせ、77～84は肩部に櫛刺突文が施文され、82～84は有段羽状文で、これらは菊川式系である。47の鉢は搬入品であろう。125～127は古式のS字甕で125や127は搬入されている可能性もあり、126はその模倣品であろう。174・175は外面に櫛刺突文やハケメを残す菊川式の高坏である。

第3節 奈良時代の遺物

奈良時代の遺物は、SD203・205などからもわずかではあるが出土している（第66図）が、そのほとんどはSD303出土の土器である（第63～65図）。SD303出土土器は、ほとんどの上器に使用痕跡のない祭祀に使用されたもので、手捏ね土器（13～27）やミニチュア（31・39～41）が存在する。須恵器壺蓋（1）は天井部の丸い偏平なつまみが付く。壺身（2・3）は底部ヘラ切り未調整の所謂「出尻」形の高台の付かないもので、4は体部が長く直線的に開く深い壺身である。これらは、伊場遺跡の「天平」本筒が出土した貝殻SB出土資料に類例が求められることから（太田1994）、8世紀の中葉としておきたい。9～12は上器の壺・皿で、9～11は内外面赤彩され、11・12は内面に暗文が施され、11は内底面に螺旋状の暗文が一部に認められる。上器の深甕（28～31）には大小があり、口縁部断面が「コ」字

状なるものと、緩やかに「く」字状に開く例がある。「コ」字例には、口縁端部内面を肥厚させるものの（28・33）と肥厚させない例（34・35）がある。31は粗製のため瓶とセットになるミニチュアと考えられ、38は台付壺である。混入の可能性もあり、類例の増加を待ちたいが、土師器壺が2点出土している。43にはヘラ記号があり、42は焼成後副部穿孔されている。39～41のミニチュアは、ハケやヘラによる整形も観察されるが、輪積み痕を明瞭に残している。45も磨滅痕のないものであるが、SD303出土の確実な証拠に欠けている。墨書き土器（44）も1点出土している。

第4節 平安時代以降の遺物

平安時代以降の遺物には陶磁器片が少量出土しているが、明確に遺構に伴う遺物はわずかである。SD203・204・206から山茶碗が出土しており、第66図（以下同図）6はやや高い高台が付き、腰部は丸く12世紀前半、3は高台がやや低く体部は直線的に開くもので13世紀前半。7は所謂潰れ高台、8は浅い小皿で、7・8は13世紀後半であろうか。

引用・参考文献

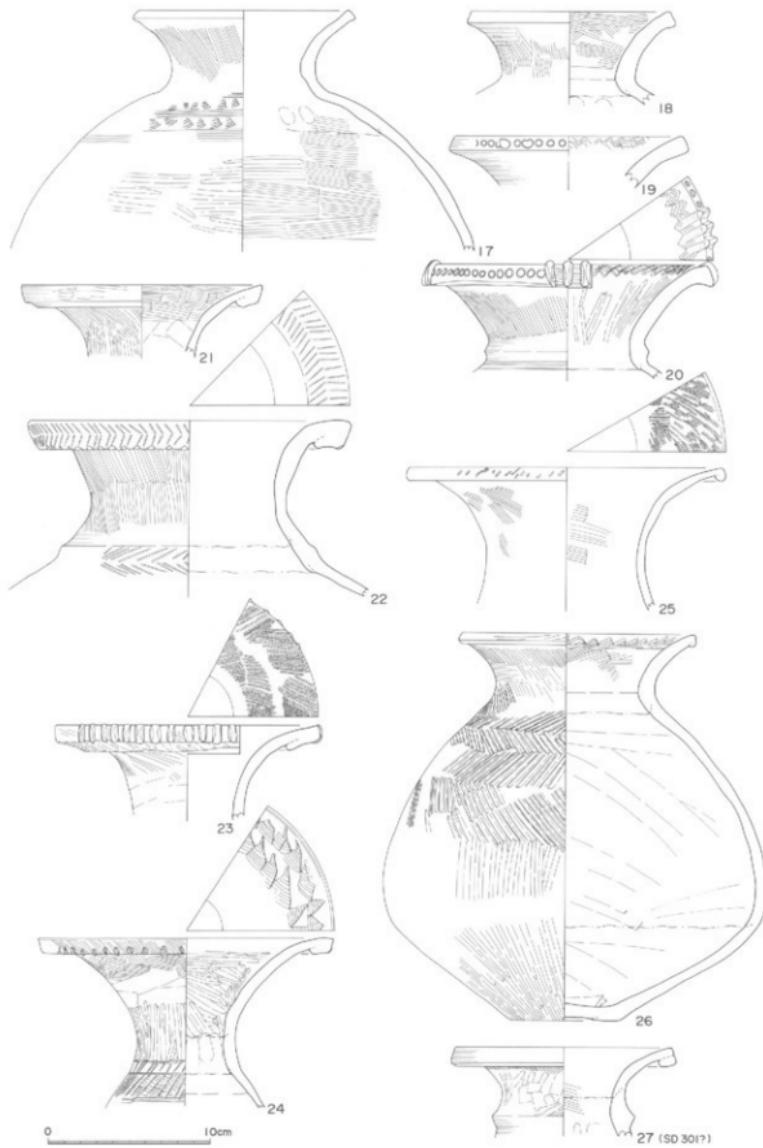
- 平野吾郎 1974『遠江見性寺貝塚の研究』磐田市教育委員会
田嶋明人 1986『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
加納俊介 1991『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
栗原雅也 1993『川久保船渡遺跡』細江町教育委員会
松井・明 1993『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
山内伸浩 1993『小名田小滝古窯跡群』多治見市教育委員会
長谷川義 1993『箕輪遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
赤塚次郎 1994『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター第48集
太田好治 1994『伊場遺跡遺物編』6 浜松市教育委員会
渡井英輔 1996『東駿河における布留式併行期の様相（前）-土器編年設定-』『静岡県考古学研究』No.28 静岡県考古学会



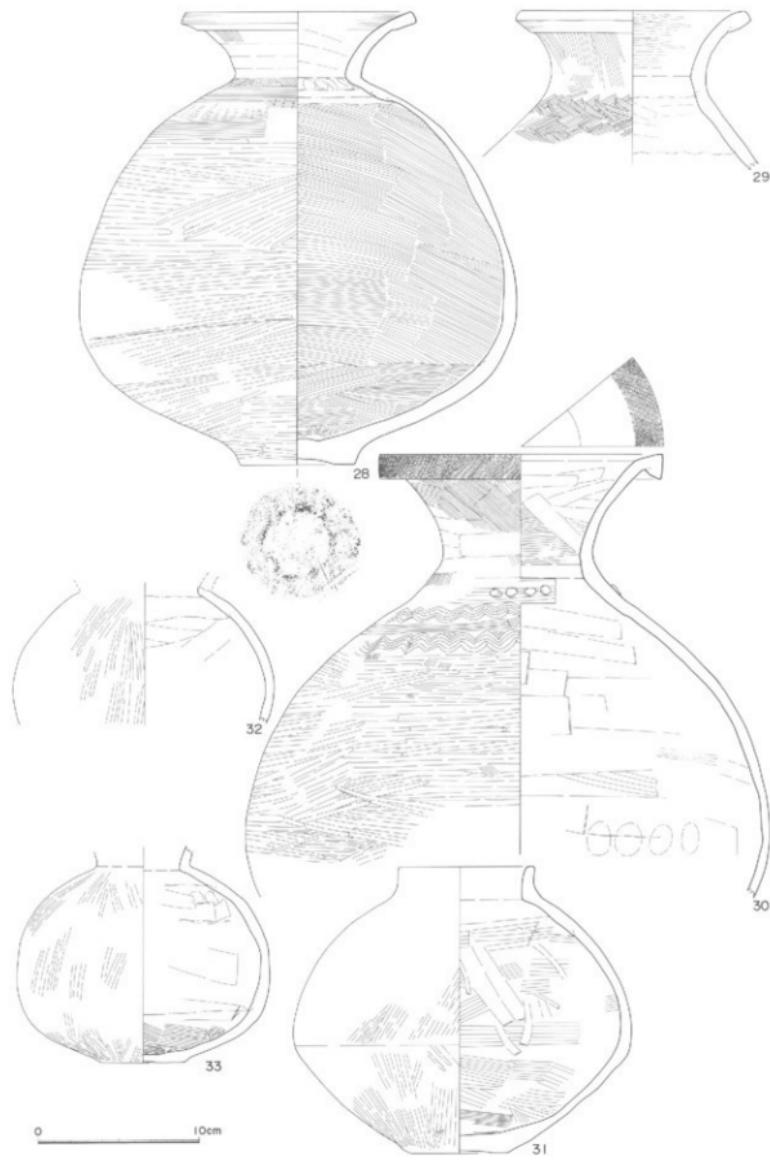
第21図 SD301出土土器実測図(1)



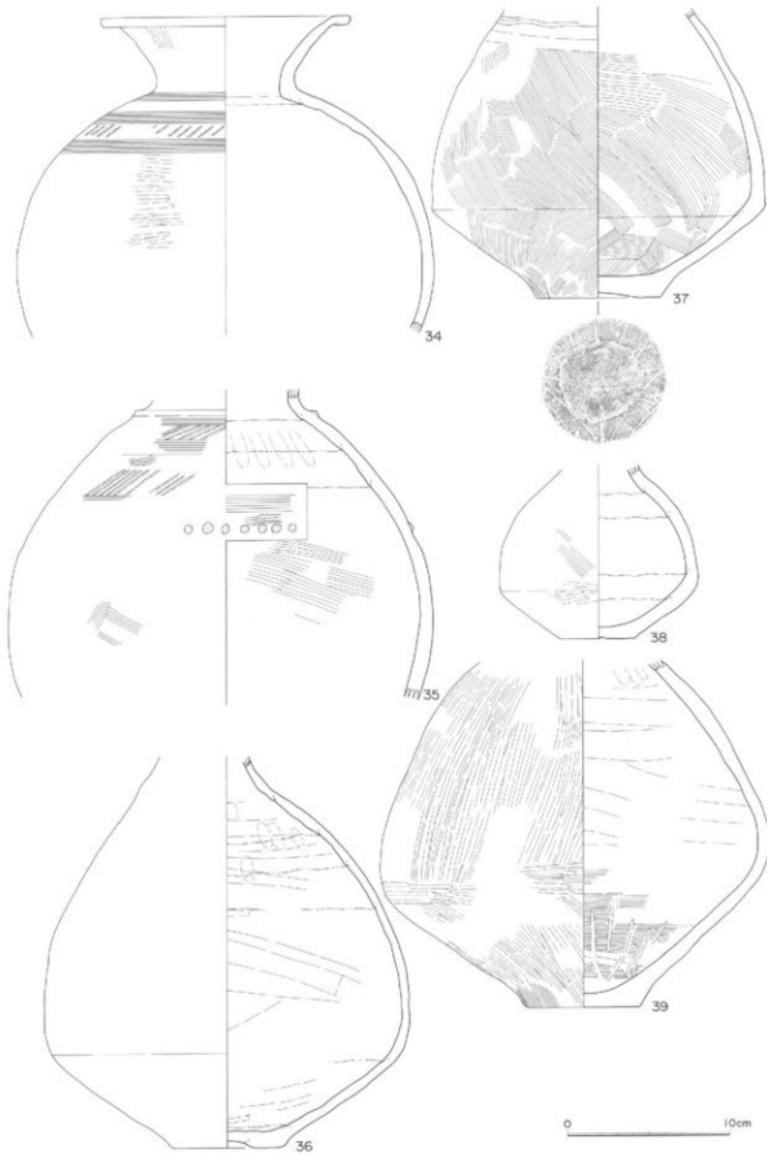
第22図 SD301出土土器実測図 (2)



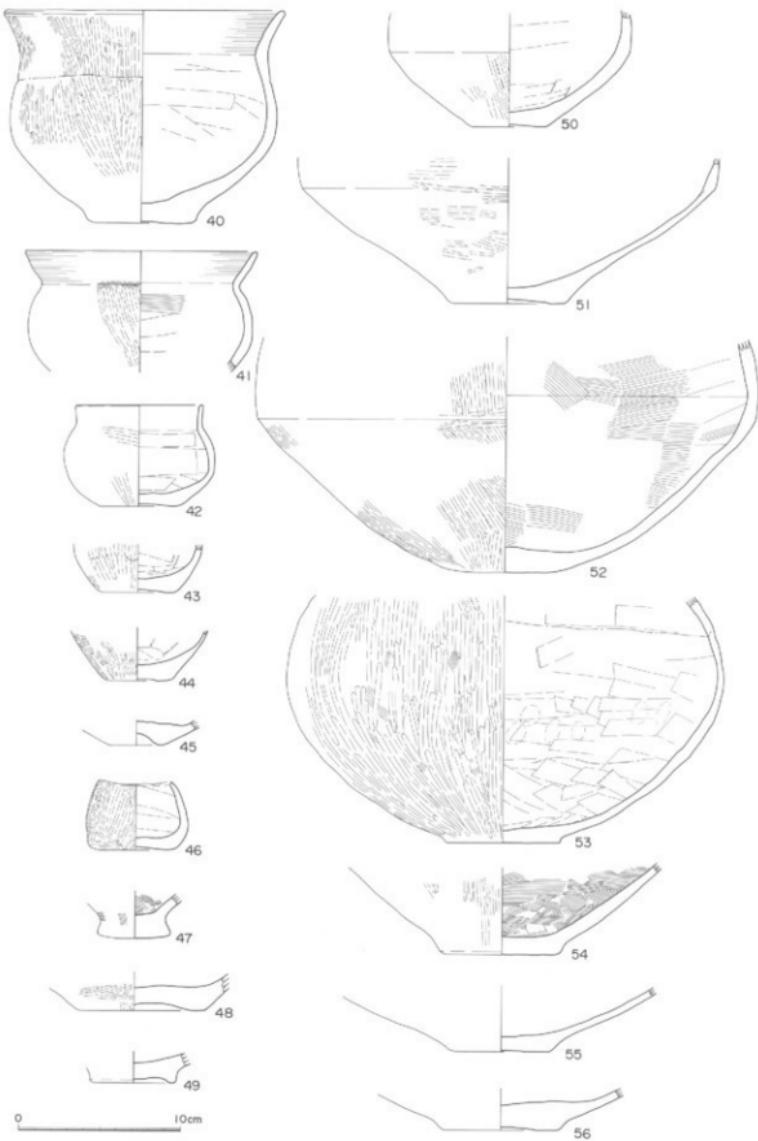
第23図 SD301出土土器実測図（3）



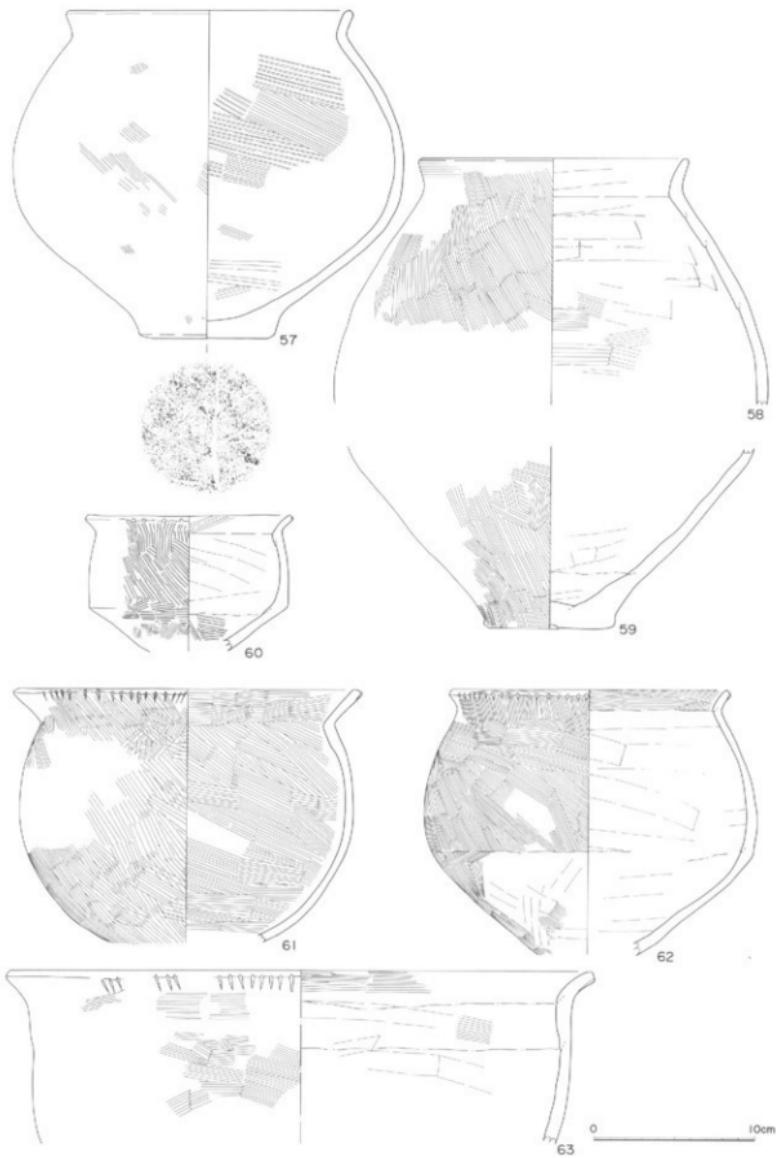
第24図 SD301出土土器実測図(4)



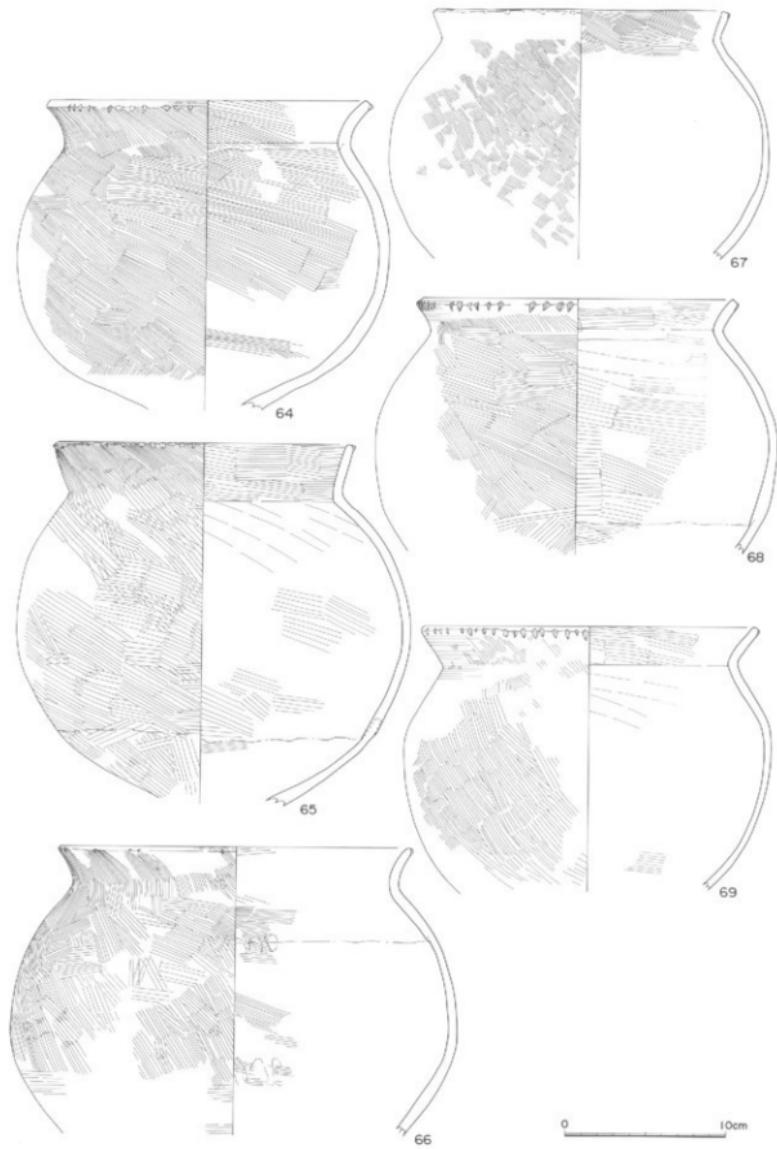
第25図 SD301出土土器実測図(5)



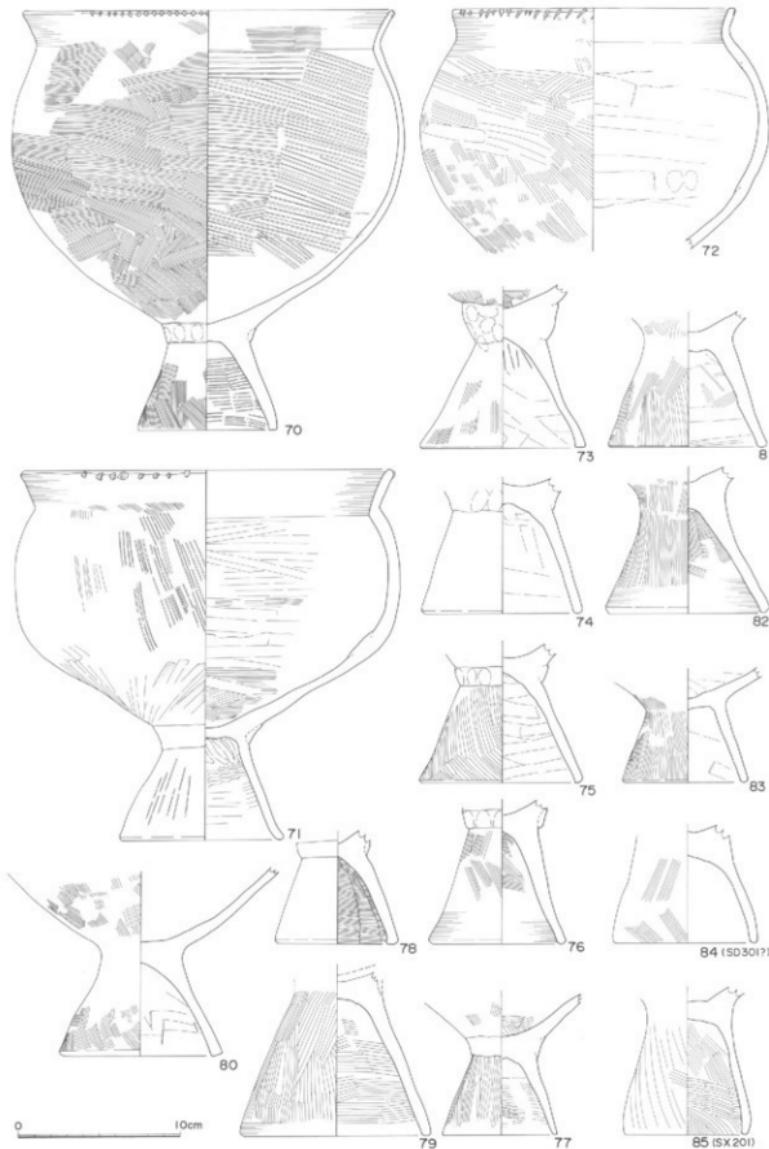
第26図 SD301出土土器実測図（6）



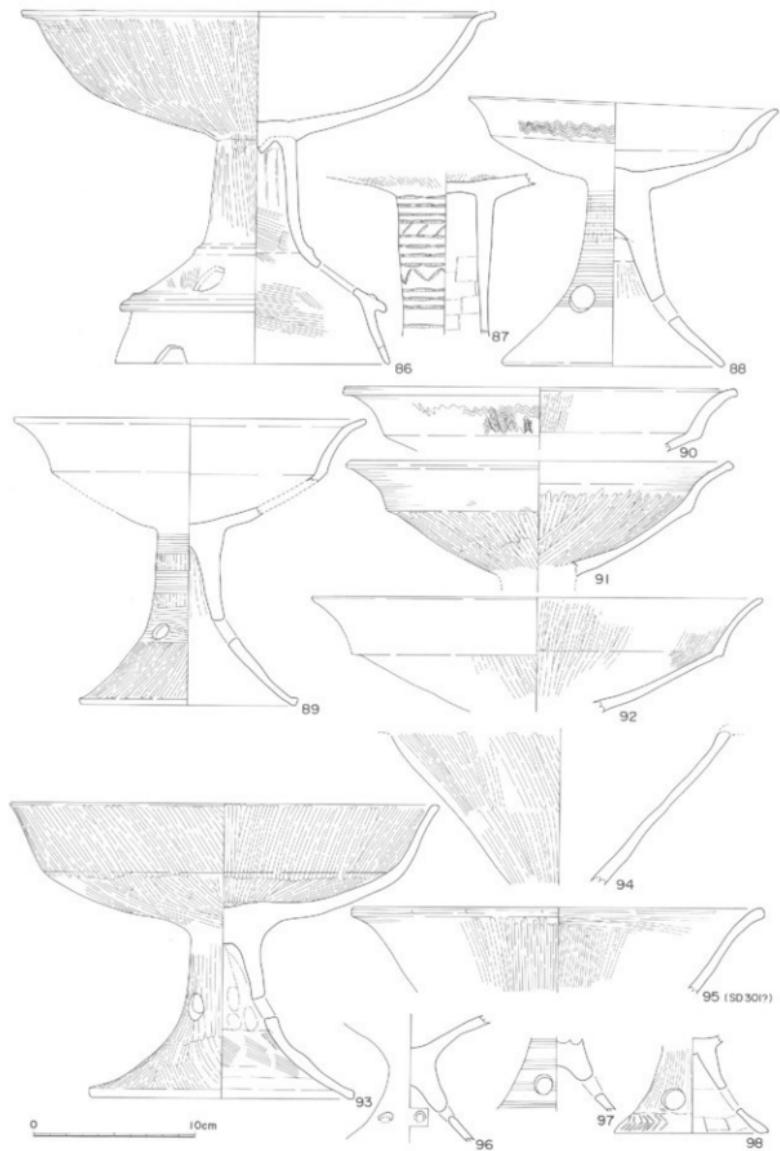
第27図 SD301出土土器実測図 (7)



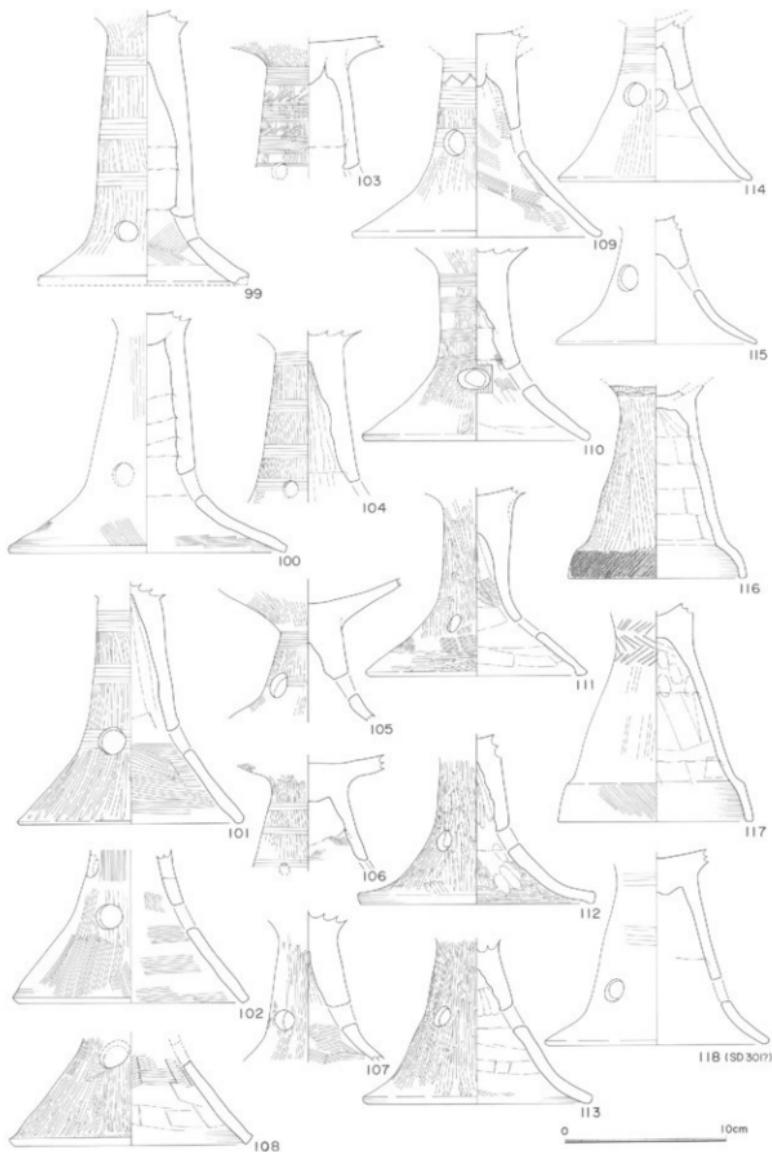
第28図 SD301出土土器実測図（8）



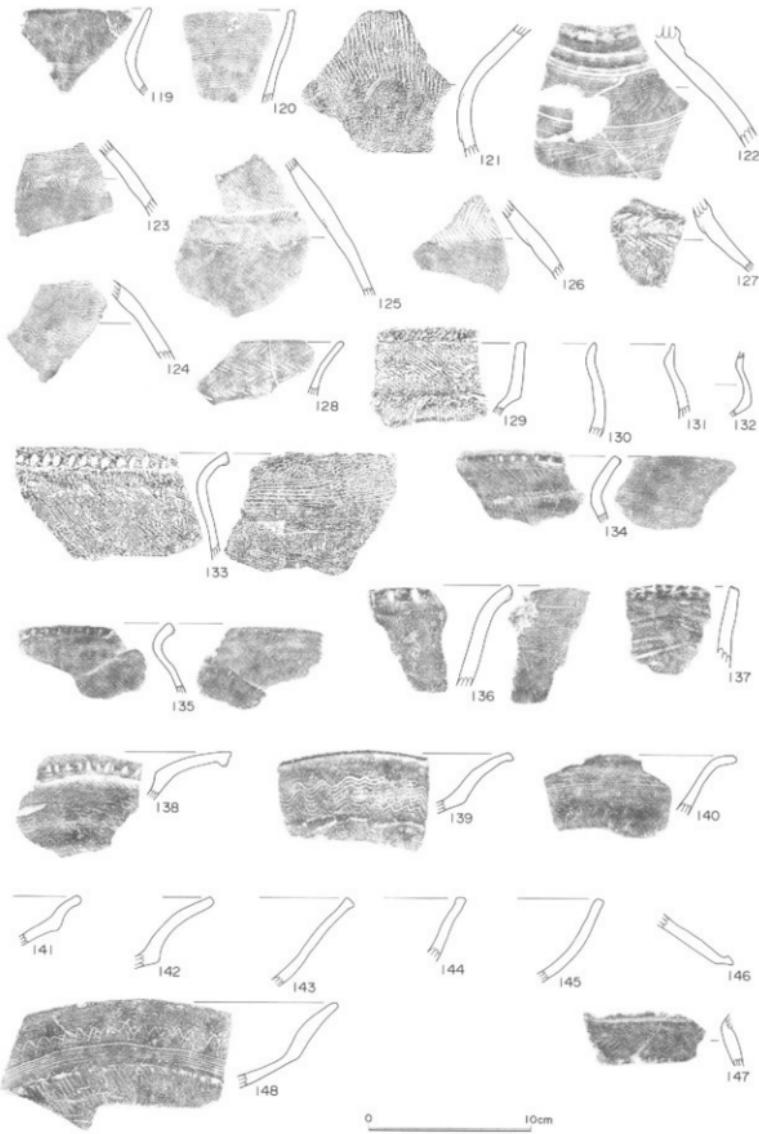
第29図 SD301出土土器実測図 (9)



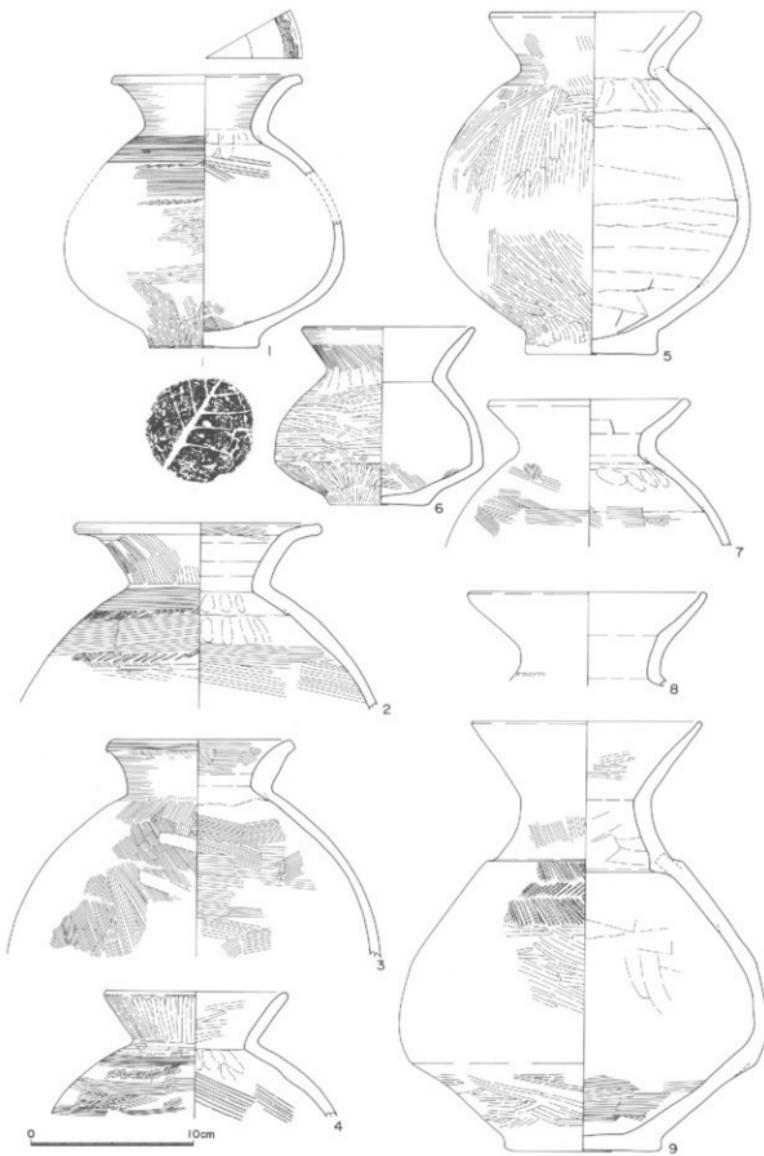
第30図 SD301出土土器実測図（10）



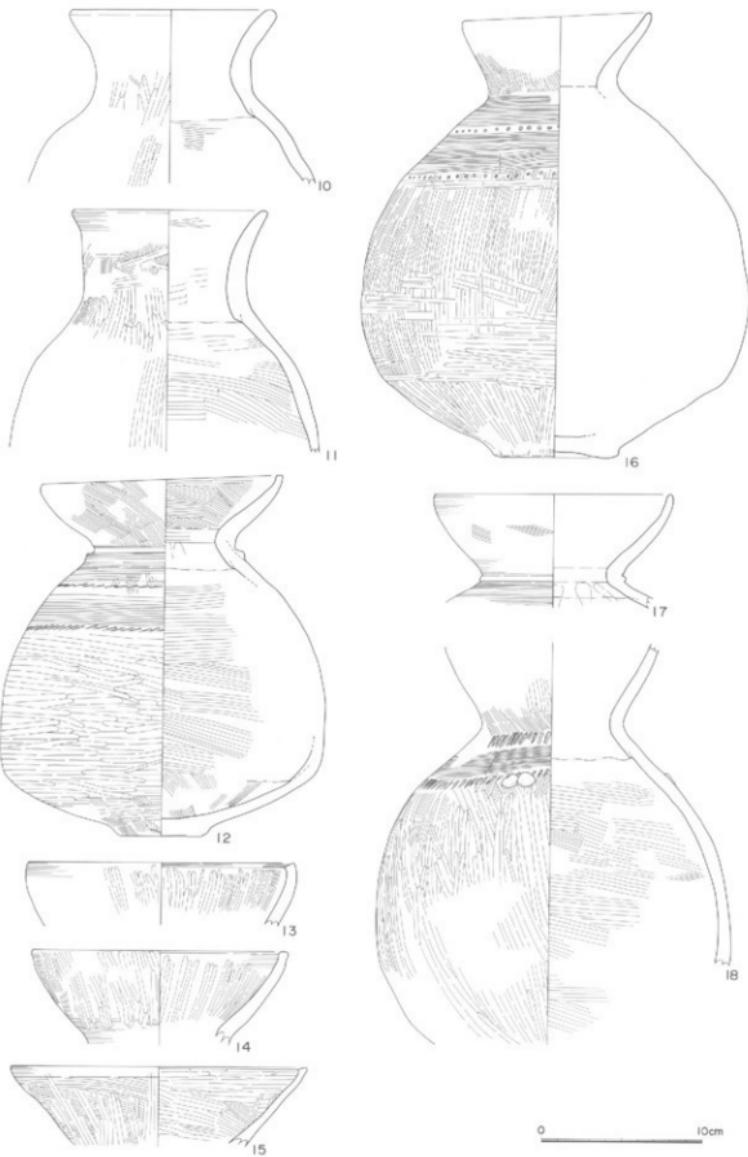
第31図 SD301出土土器実測図(11)



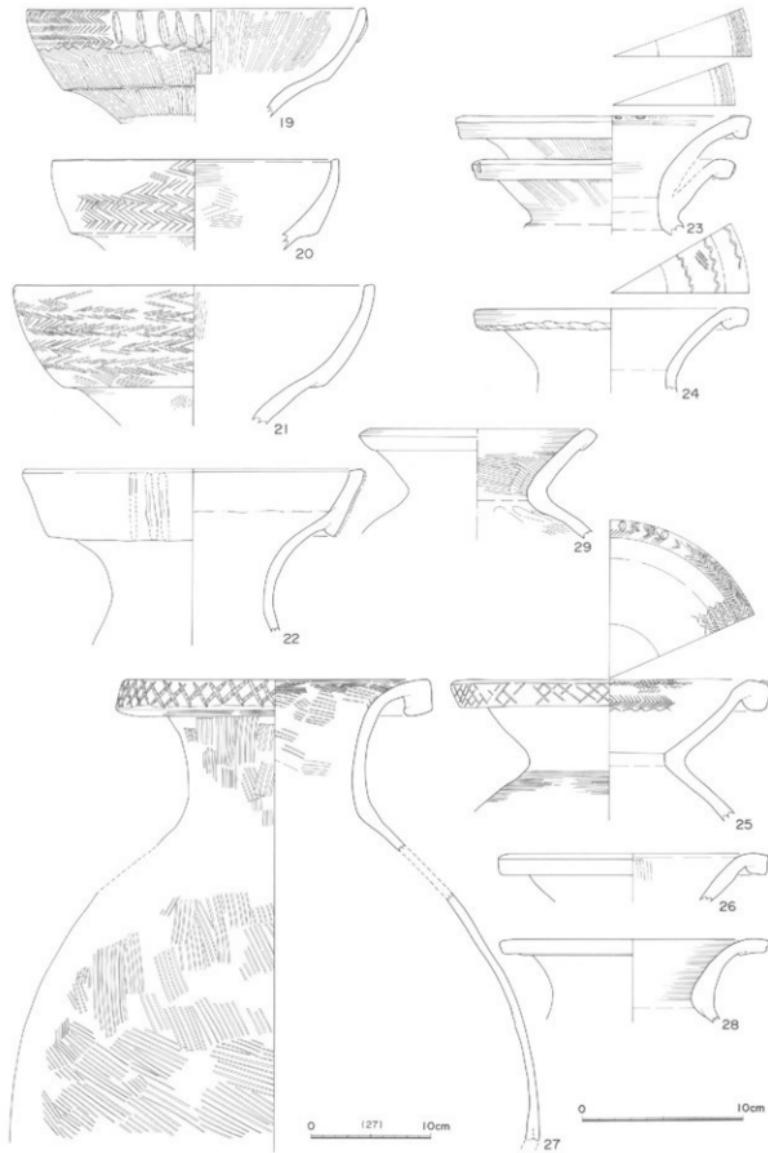
第32図 SD301出土土器実測図 (12)



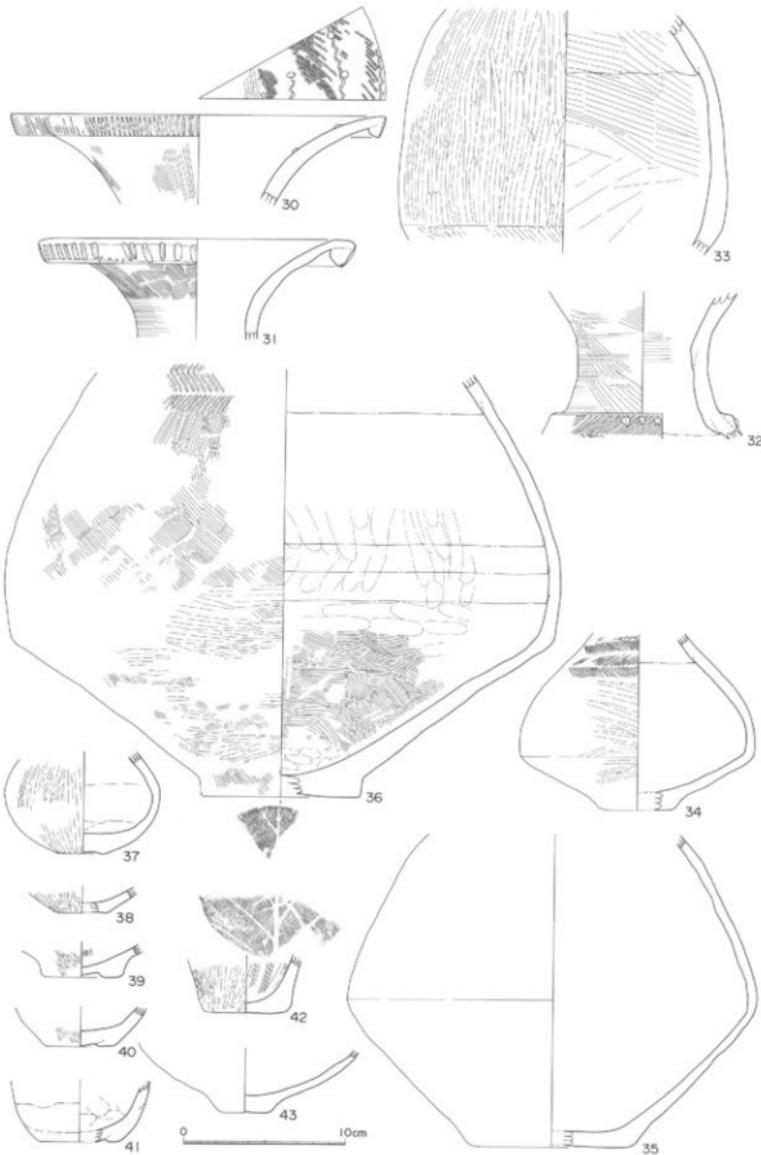
第33図 SD202出土土器実測図（1）



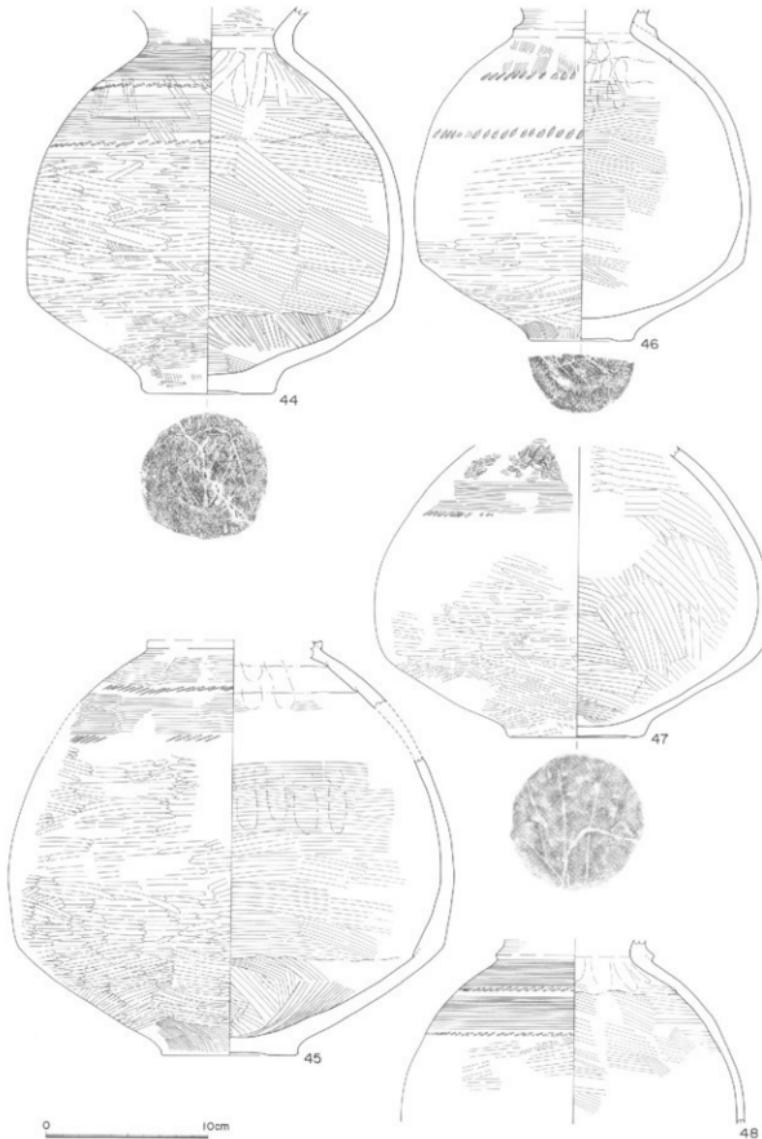
第34図 SD202出土土器実測図（2）



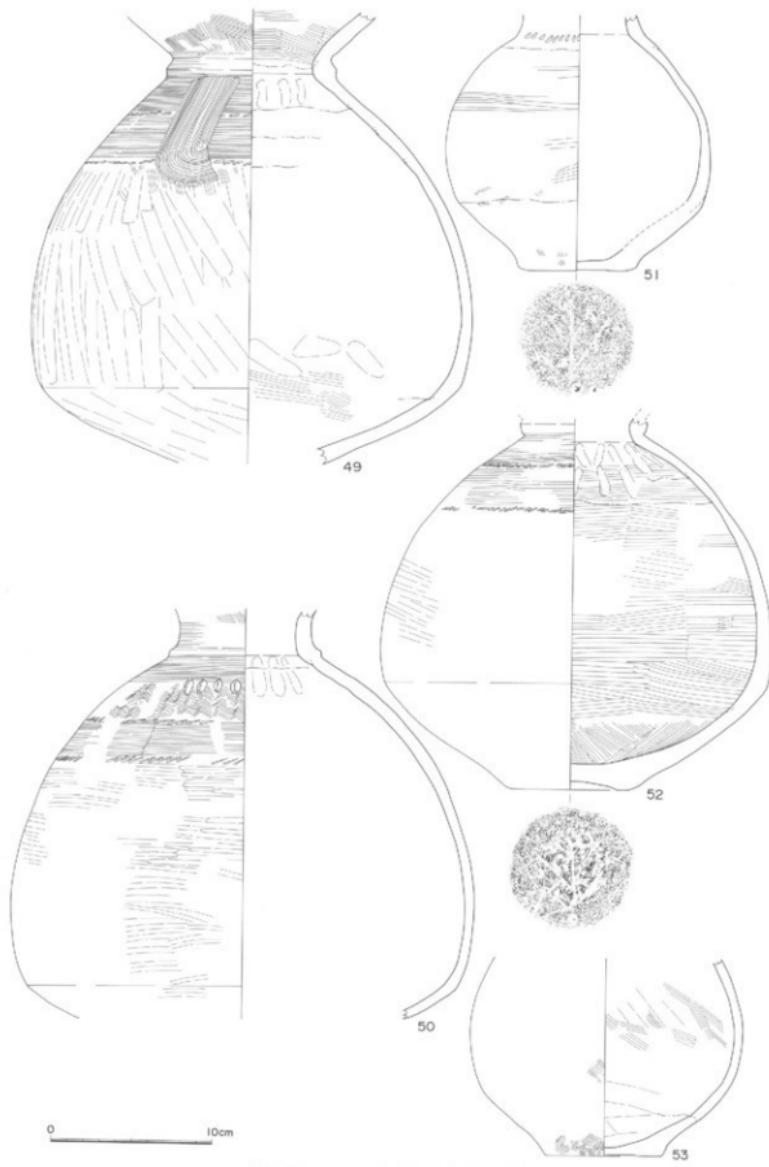
第35図 SD202出土土器実測図 (3)



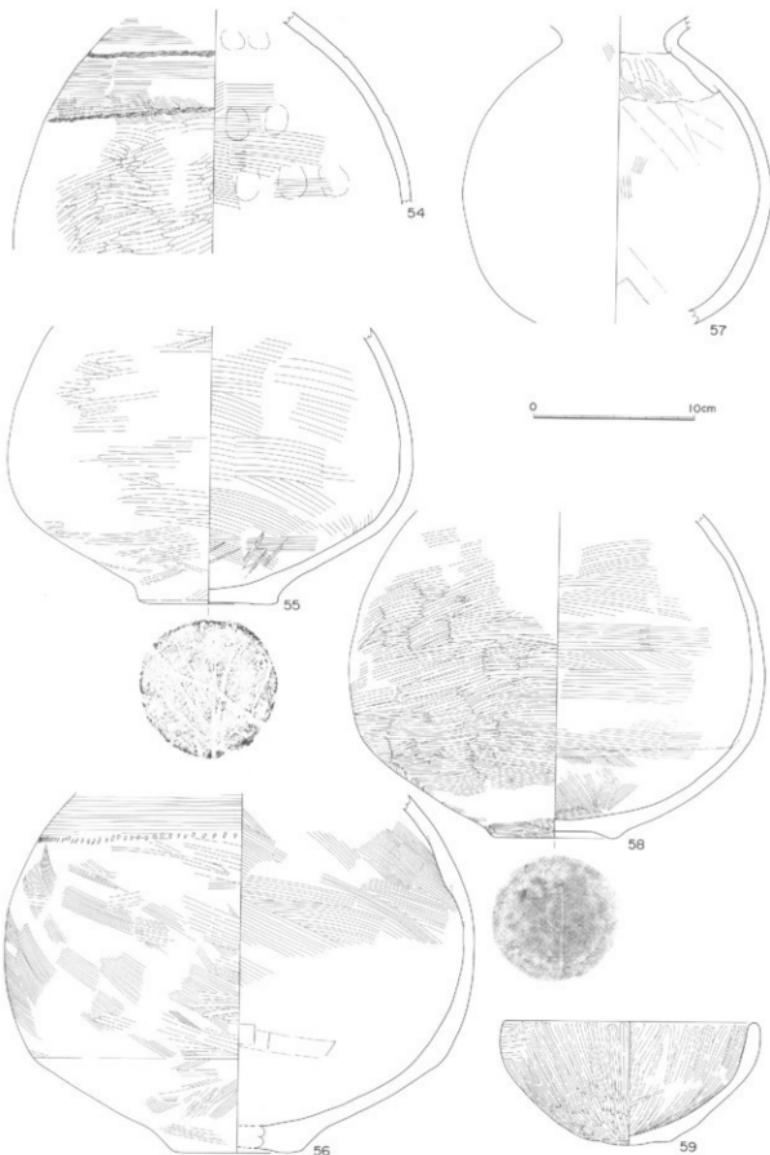
第36図 SD202出土土器実測図（4）



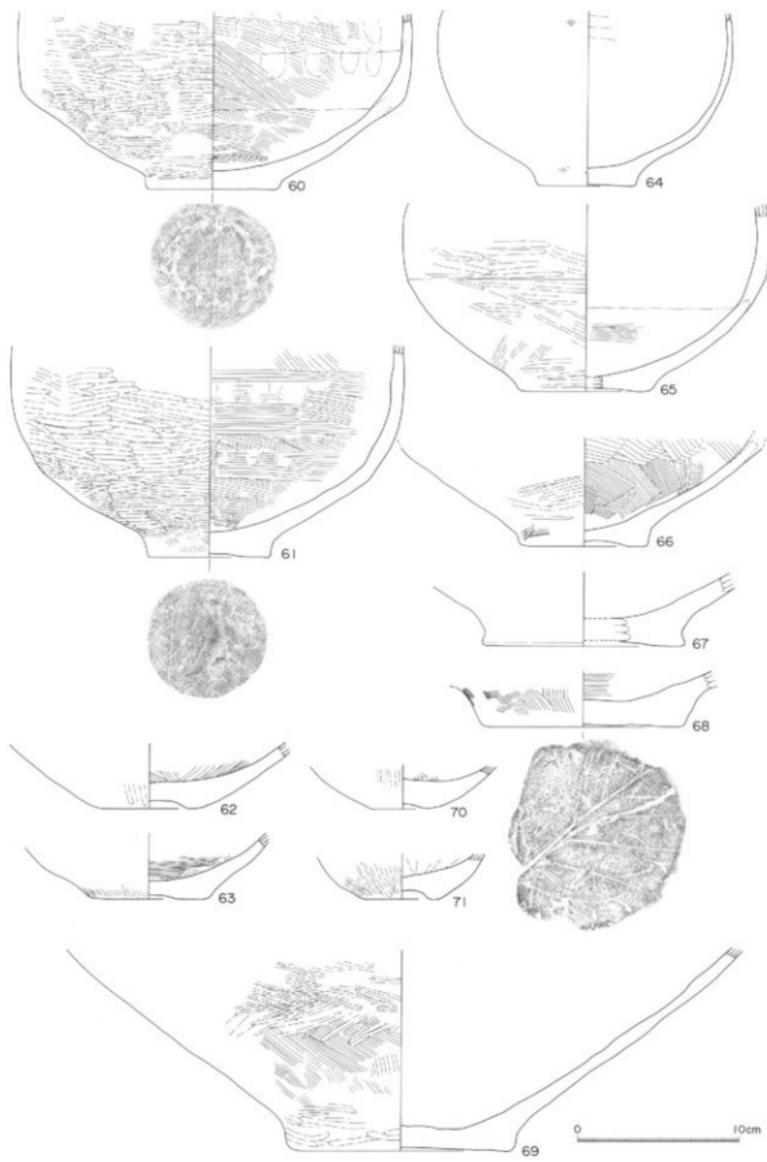
第37図 SD202出土土器実測図 (5)



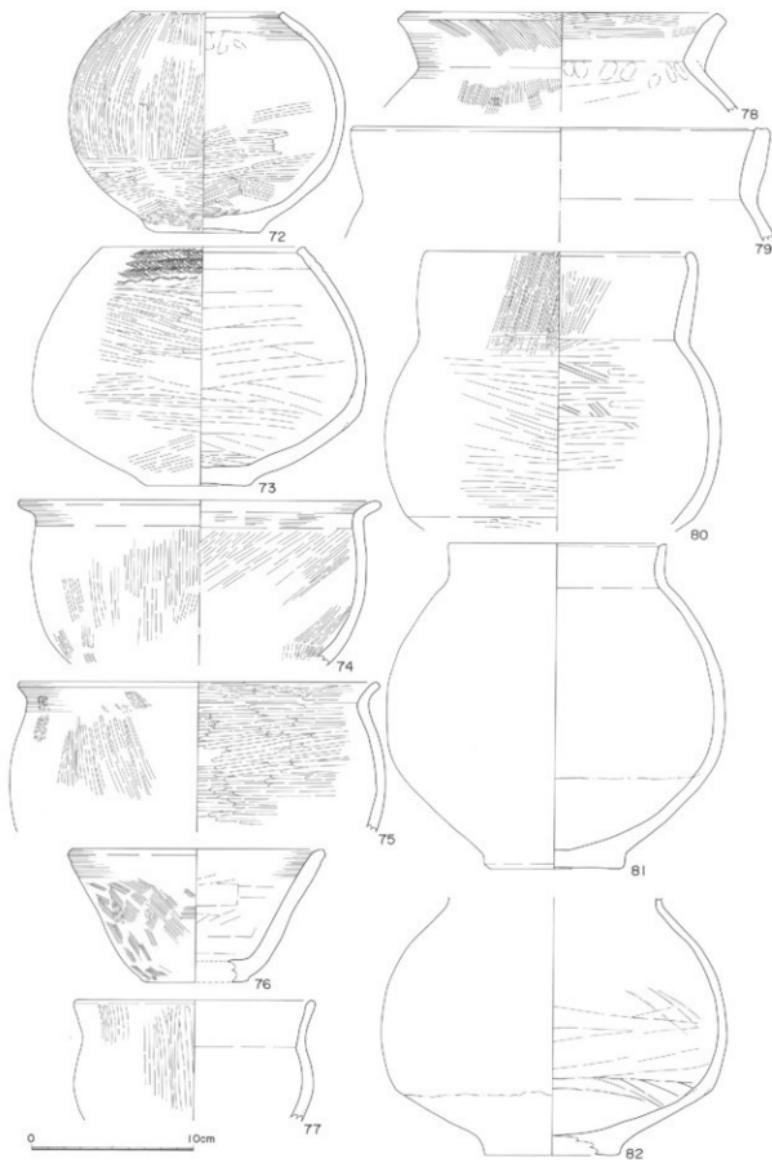
第38図 SD202出土土器実測図（6）



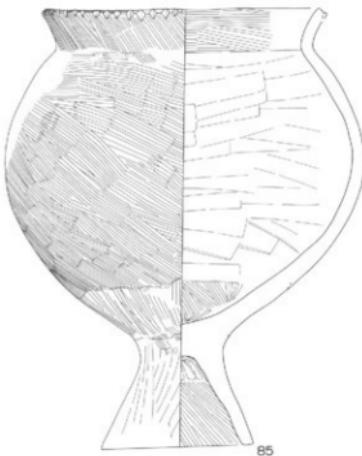
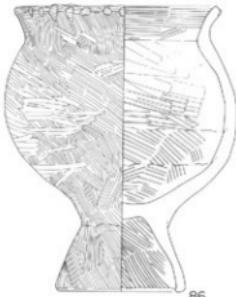
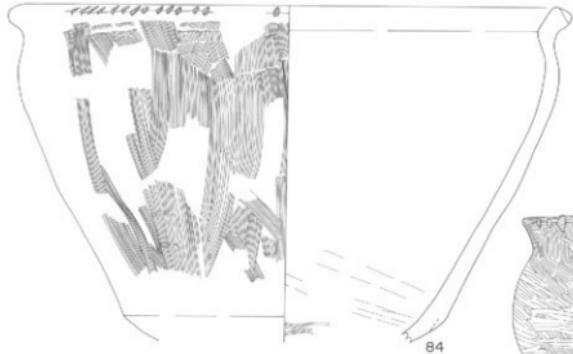
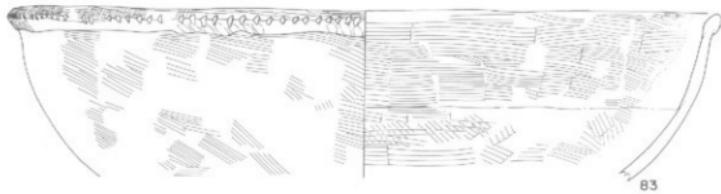
第39図 SD202出土土器実測図 (7)



第40図 SD202出土土器実測図 (8)

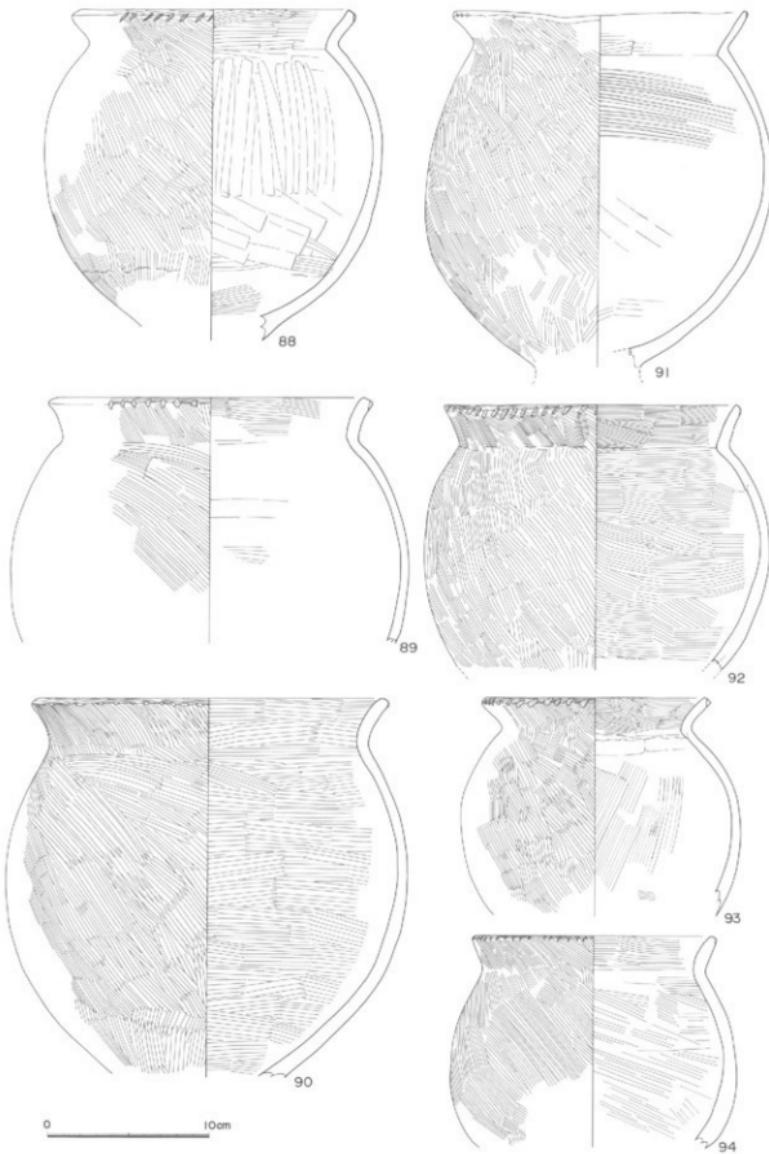


第41図 SD202出土土器実測図（9）

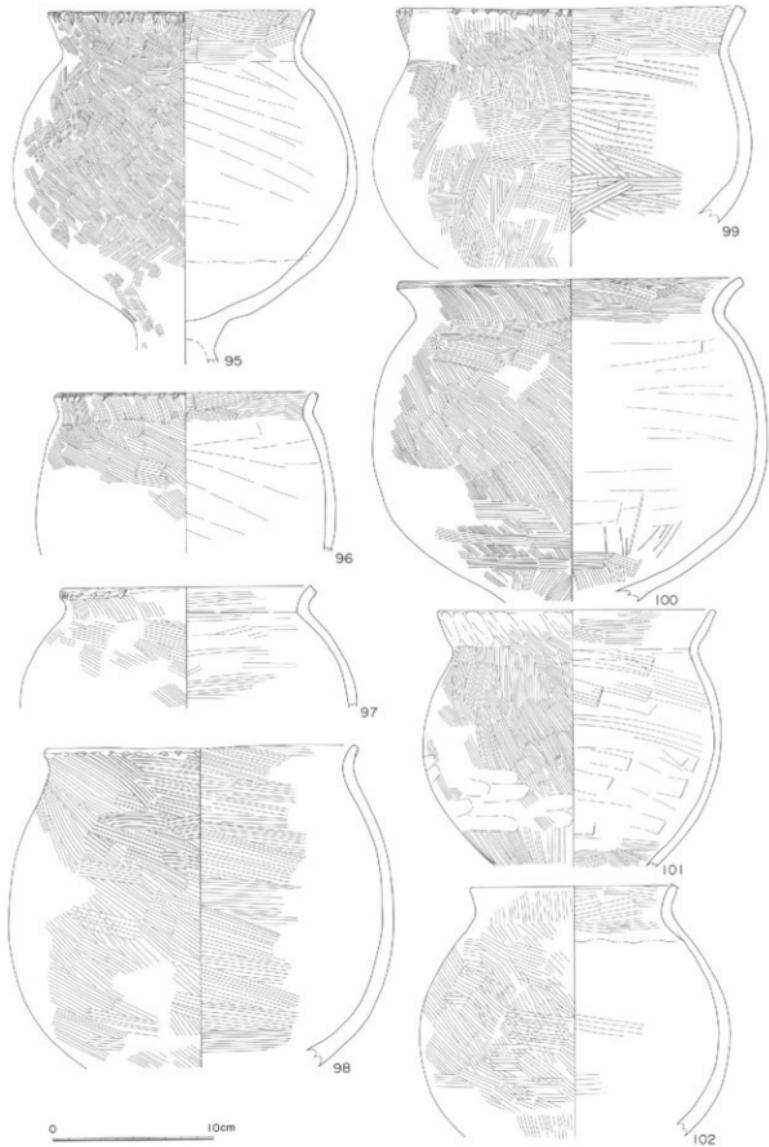


0 10cm

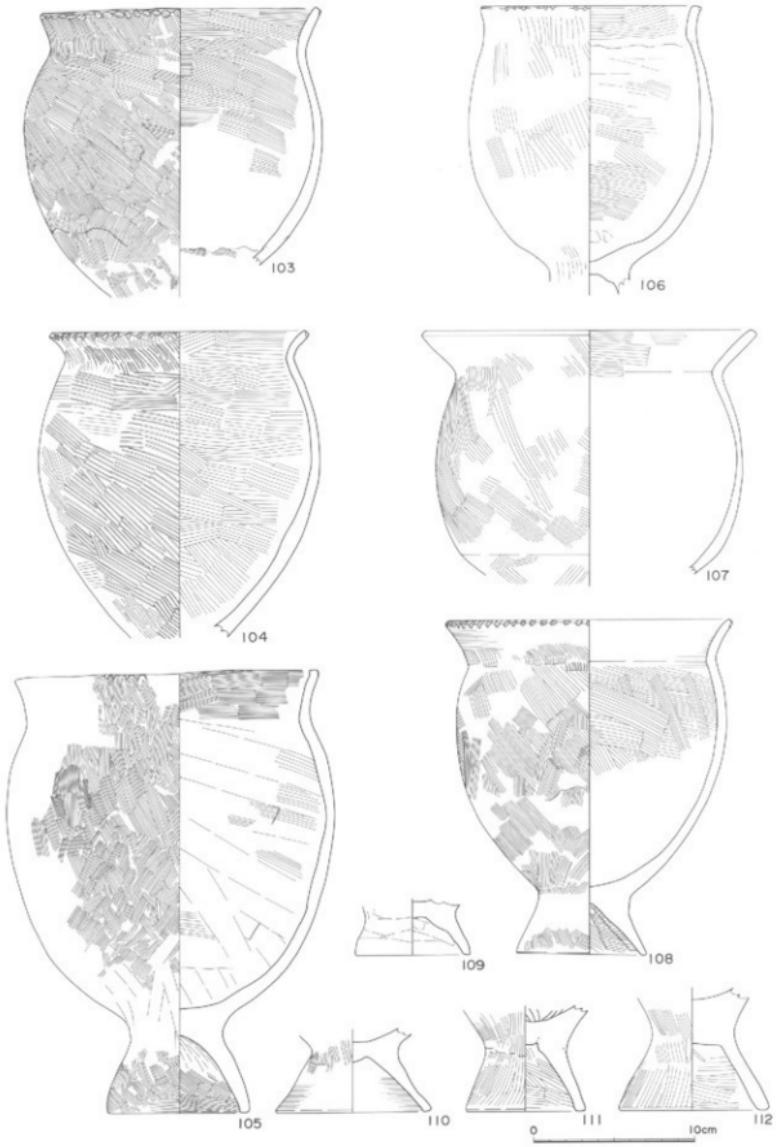
第42図 SD202出土土器実測図（10）



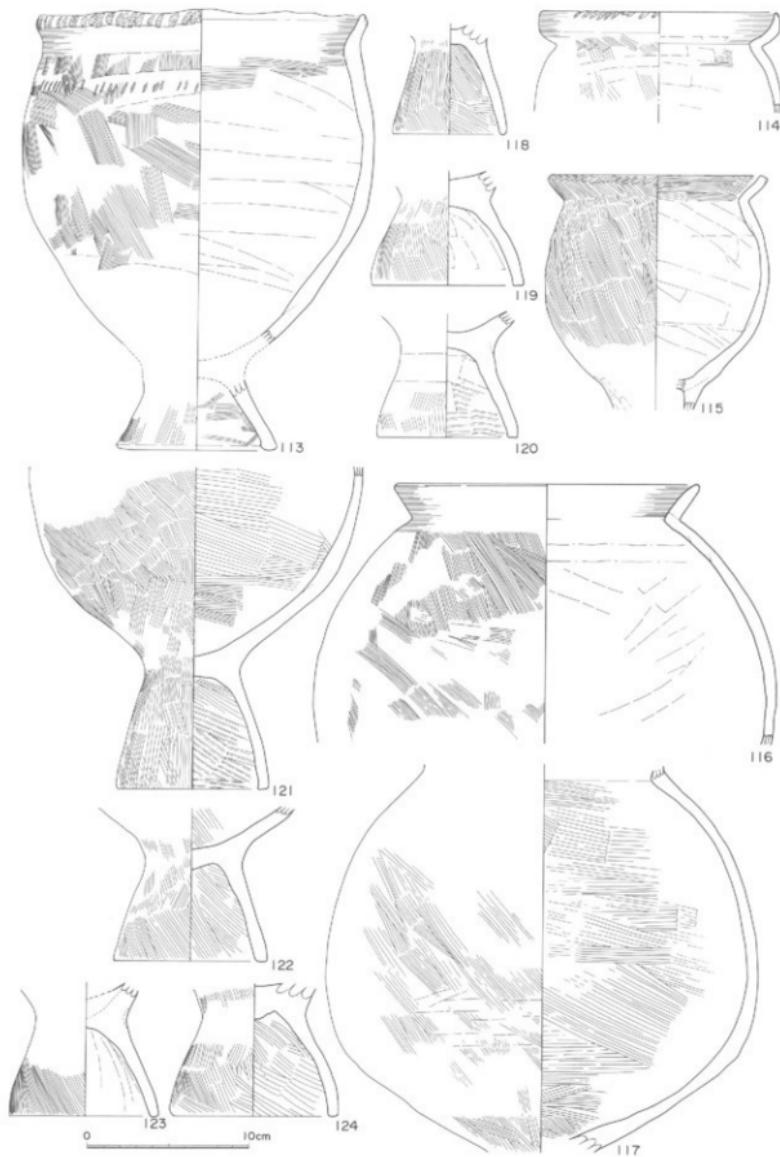
第43図 SD202出土土器実測図 (11)



第44図 SD202出土土器実測図 (12)



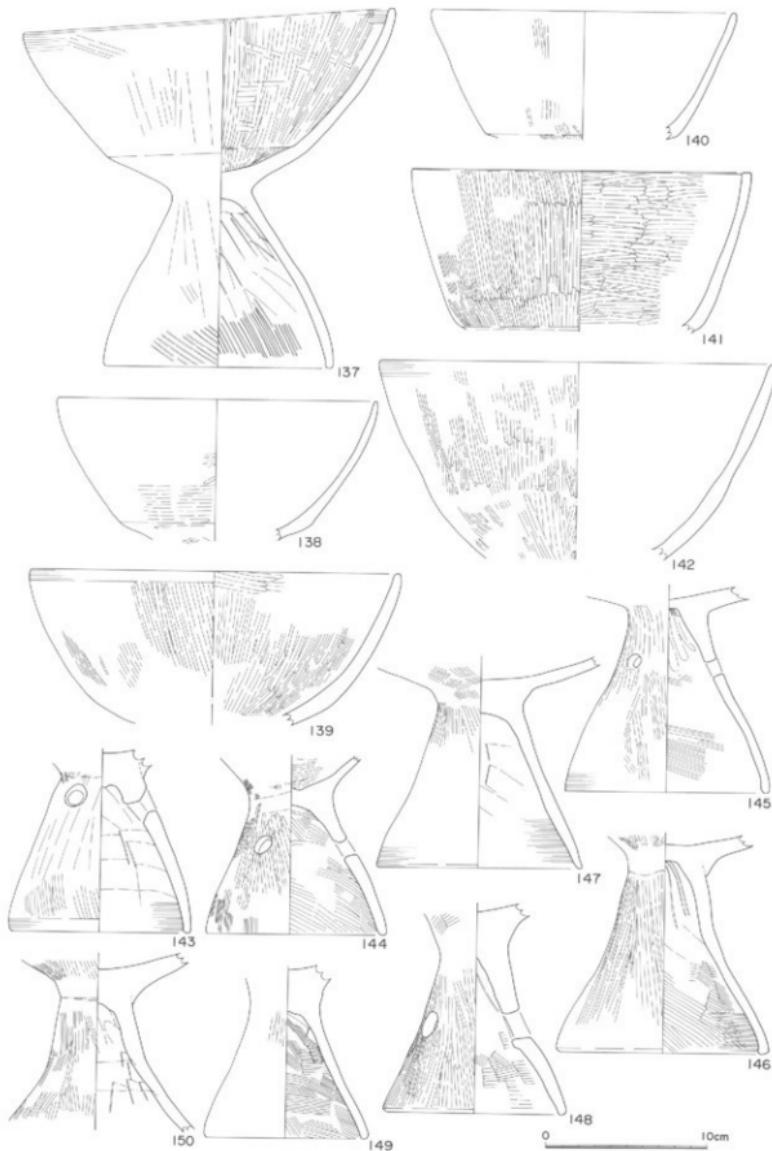
第45図 SD202出土土器実測図 (13)



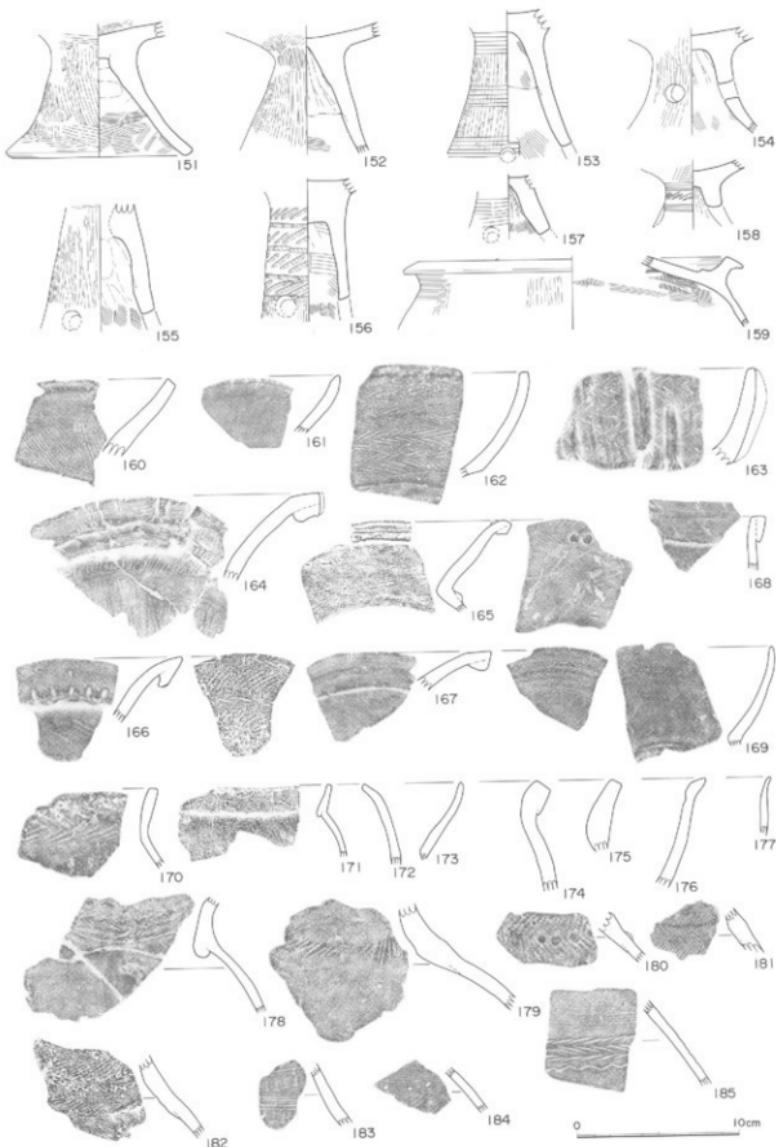
第46図 SD202出土土器実測図 (14)



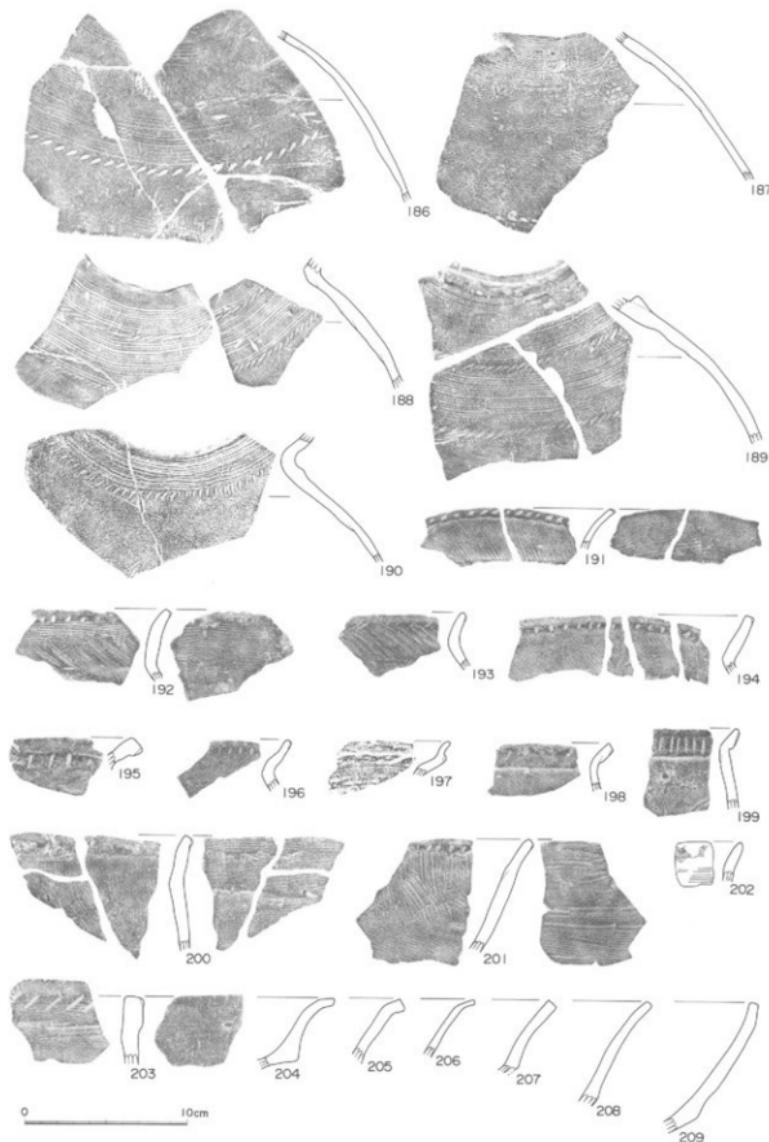
第47図 SD202出土土器実測図 (15)



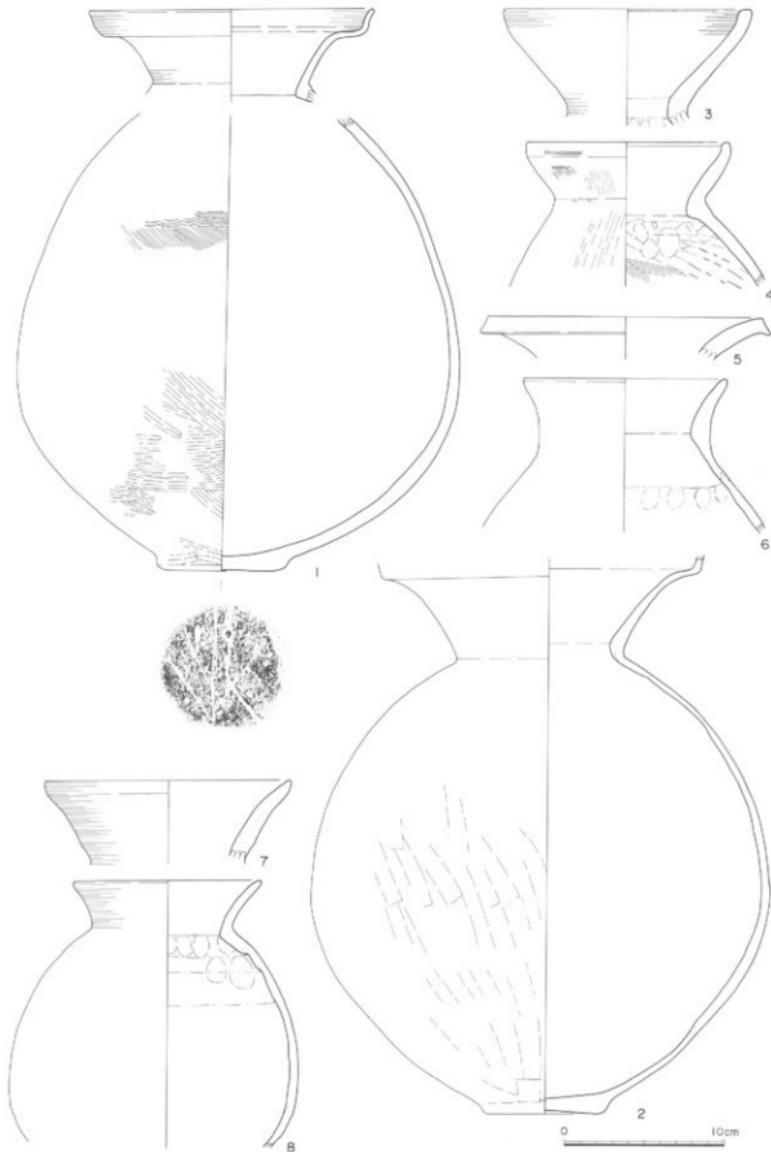
第48図 SD202出土土器実測図（16）



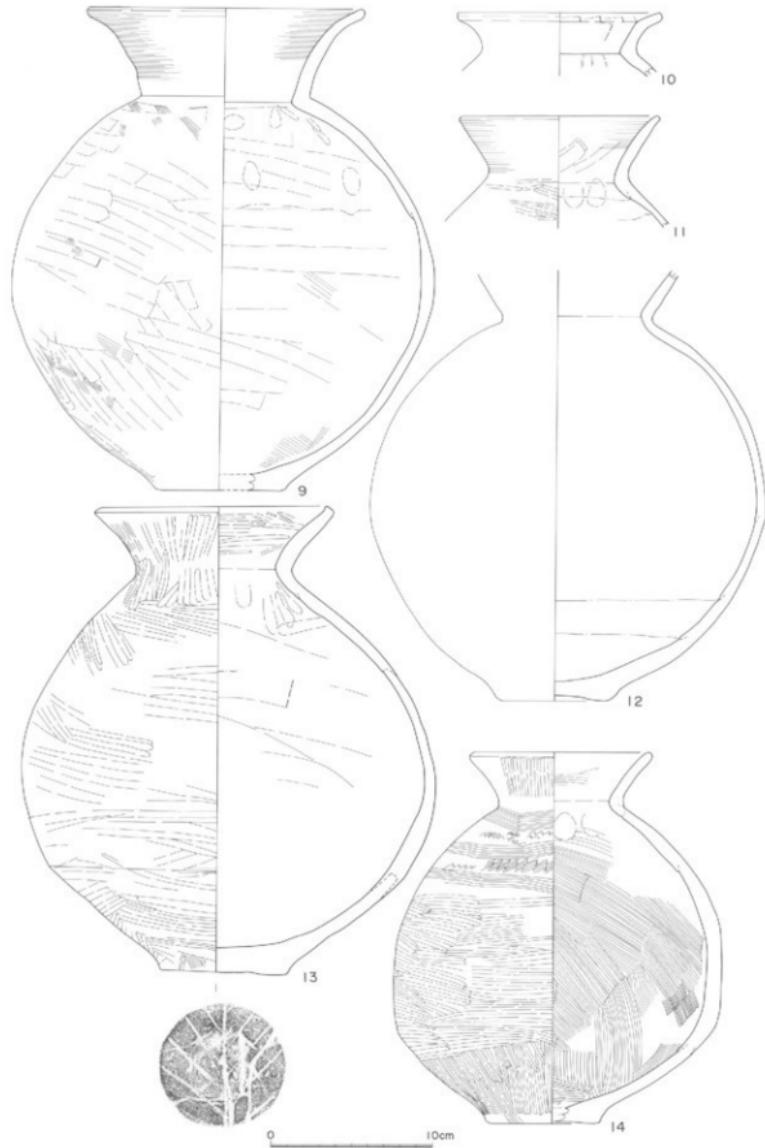
第49図 SD202出土土器実測図 (17)



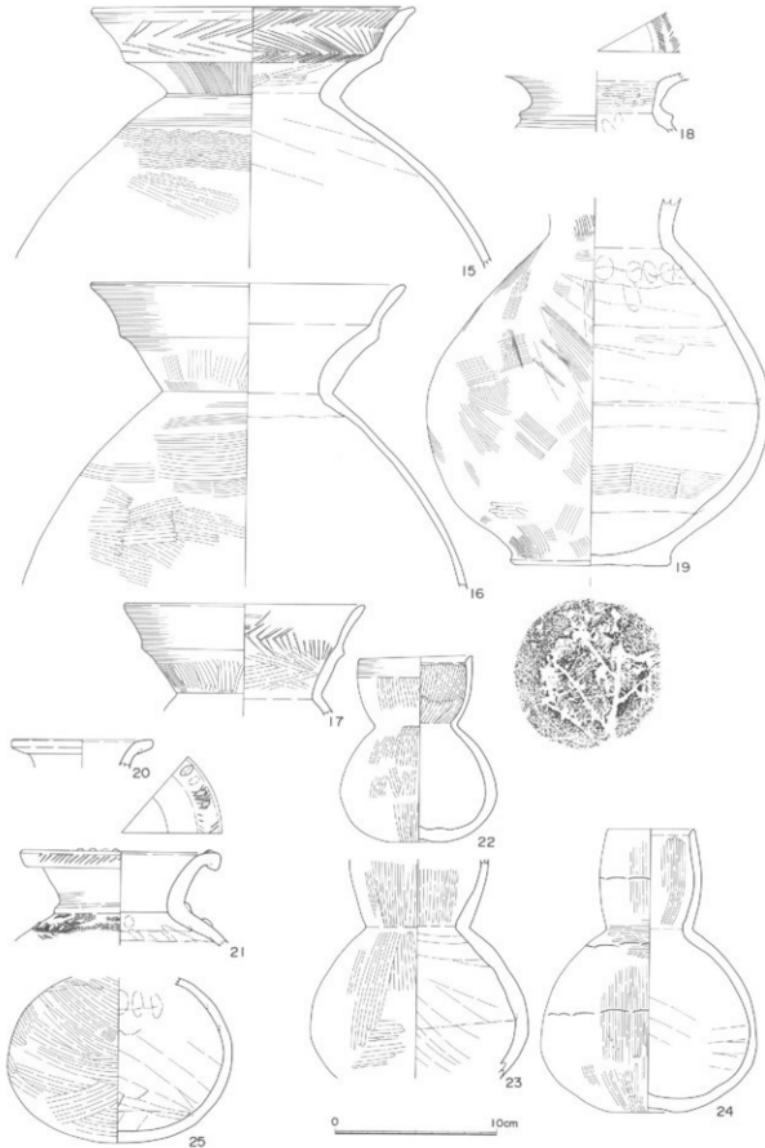
第50図 SD202出土土器実測図 (18)



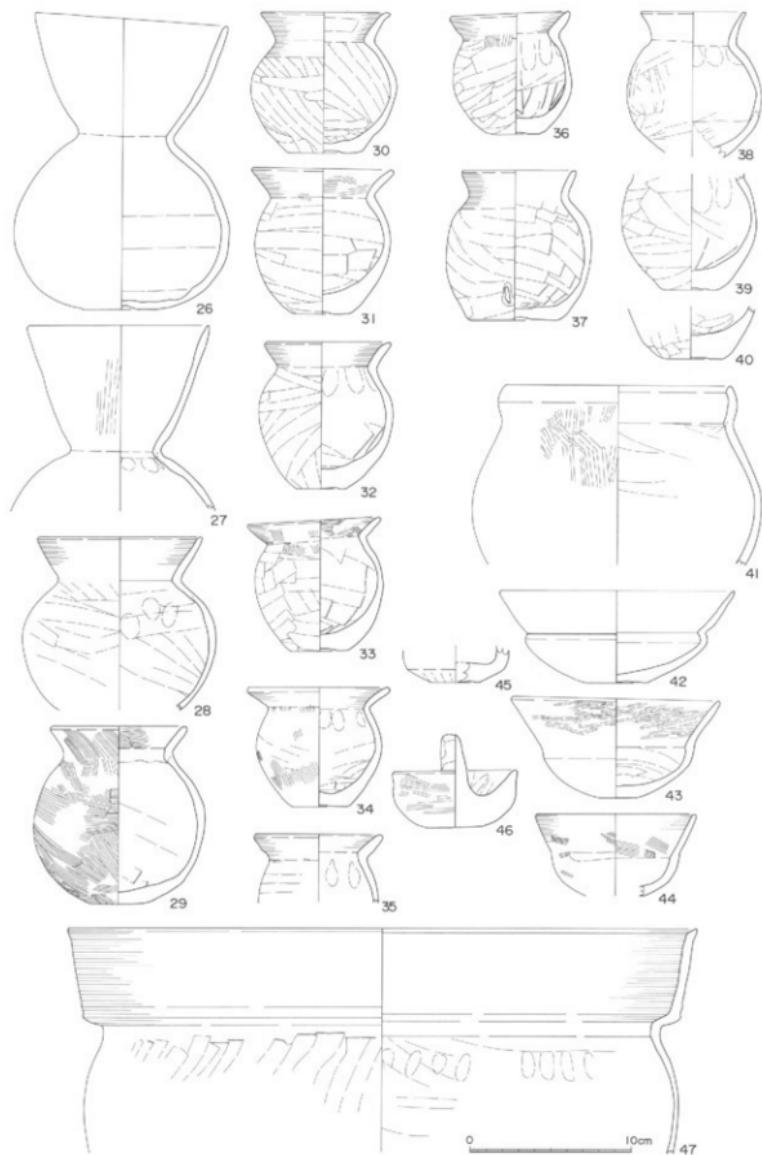
第51図 SD201出土土器実測図(1)



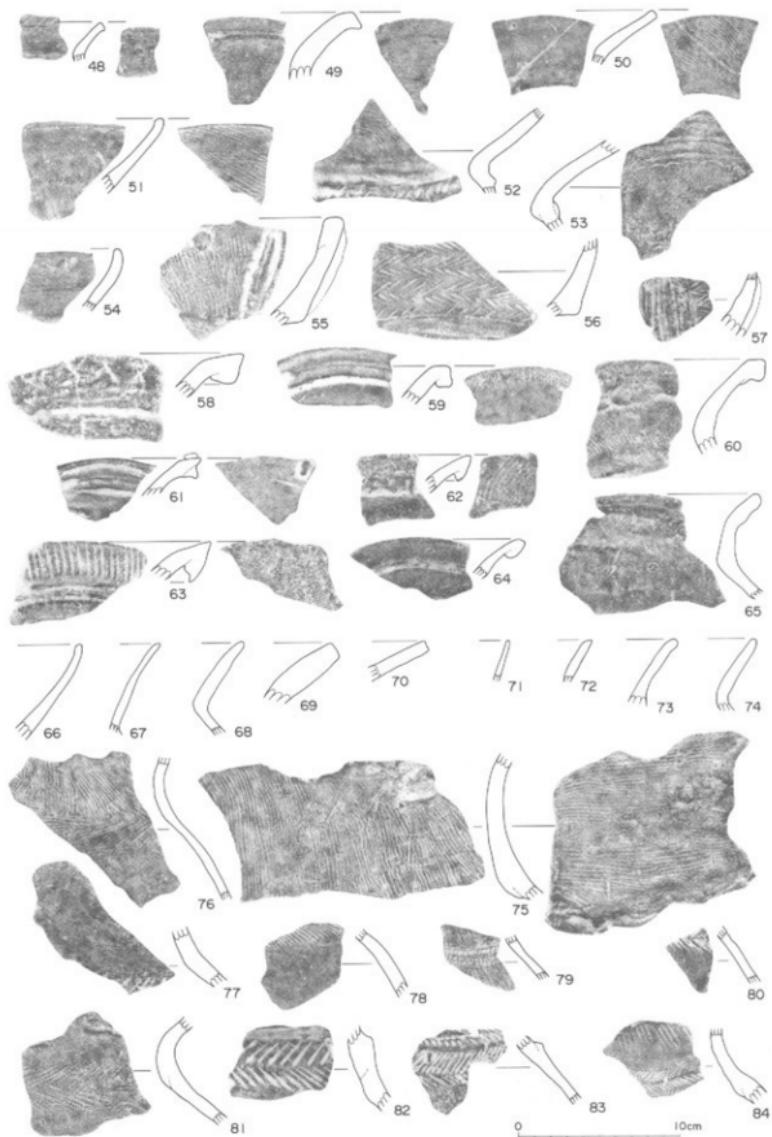
第52図 SD201出土土器実測図（2）



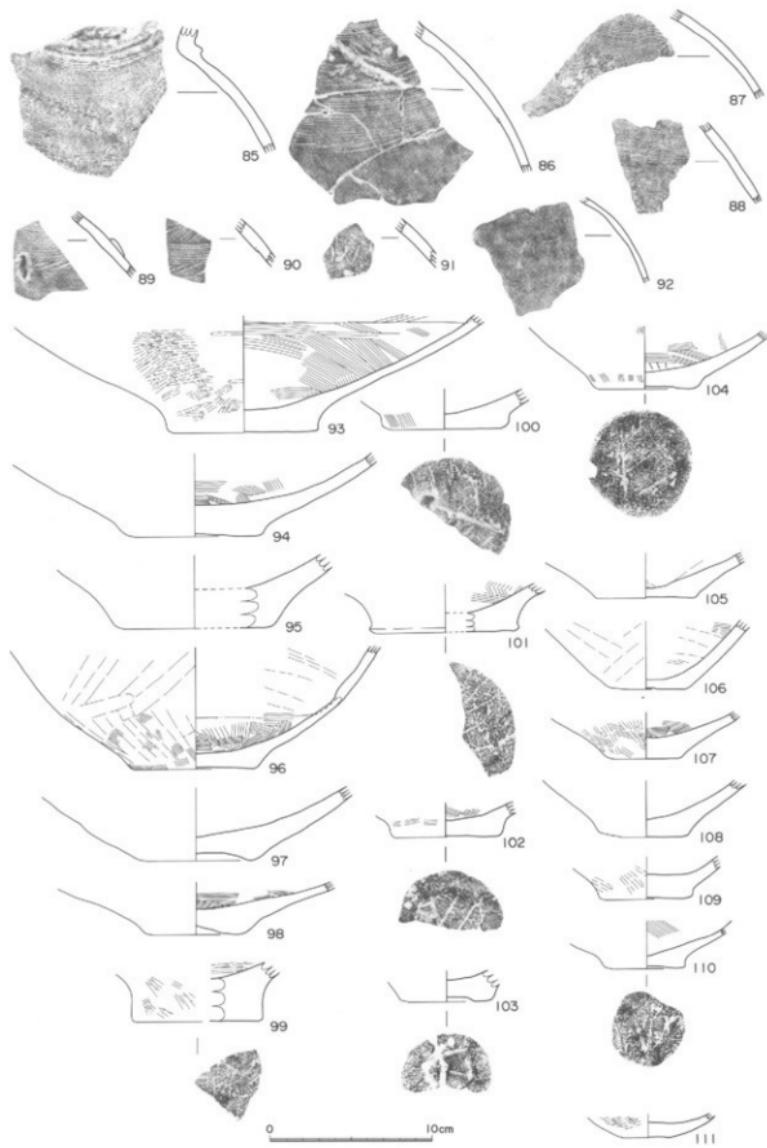
第53図 SD201出土土器実測図 (3)



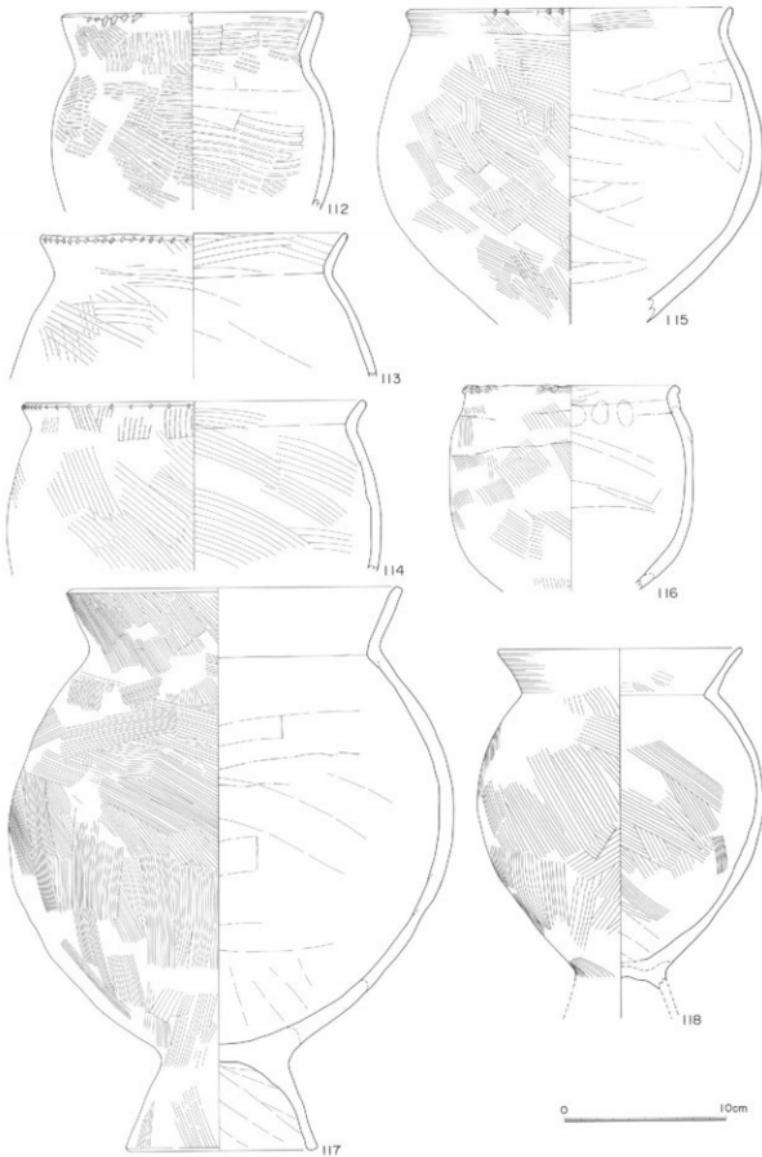
第54図 SD201出土土器実測図（4）



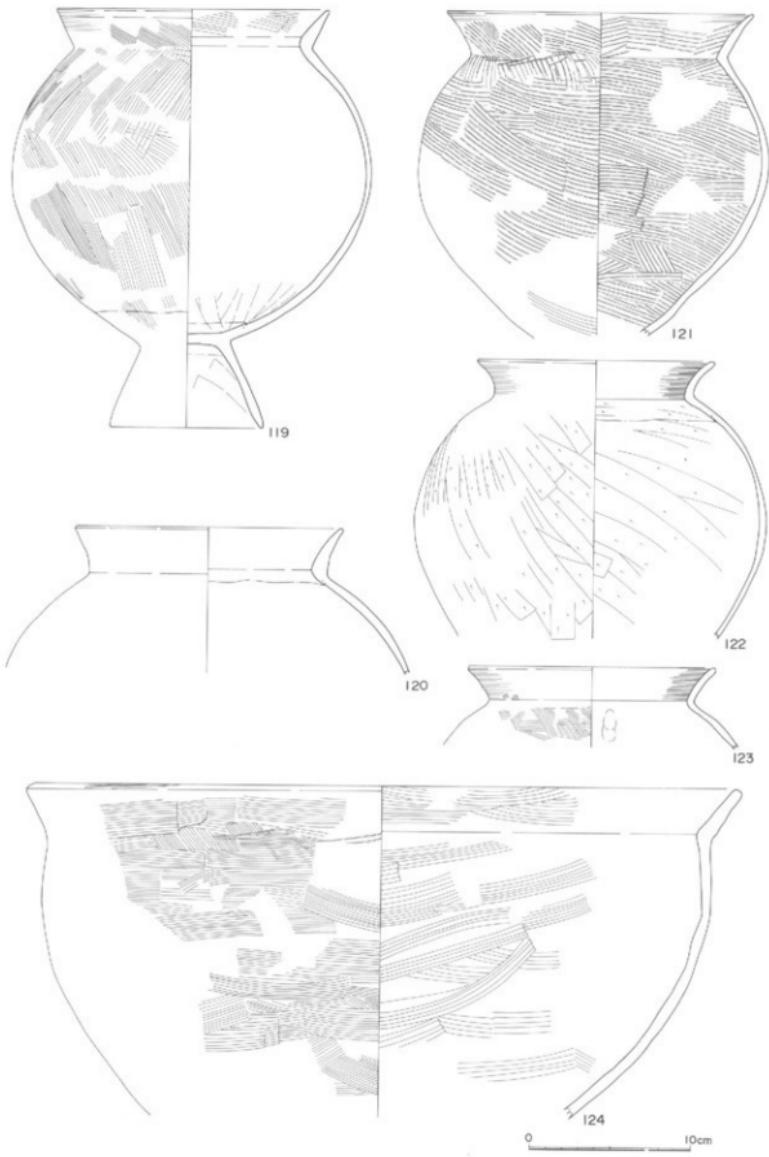
第55図 SD201出土土器実測図 (5)



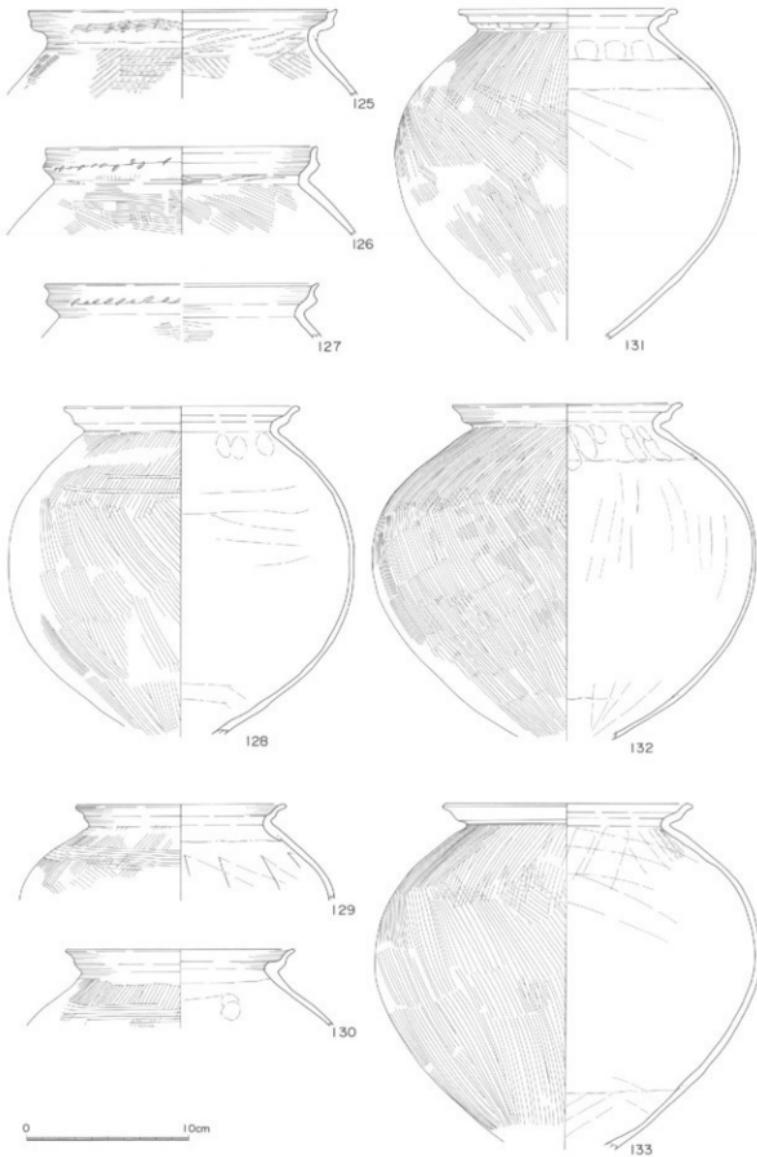
第56図 SD201出土土器実測図（6）



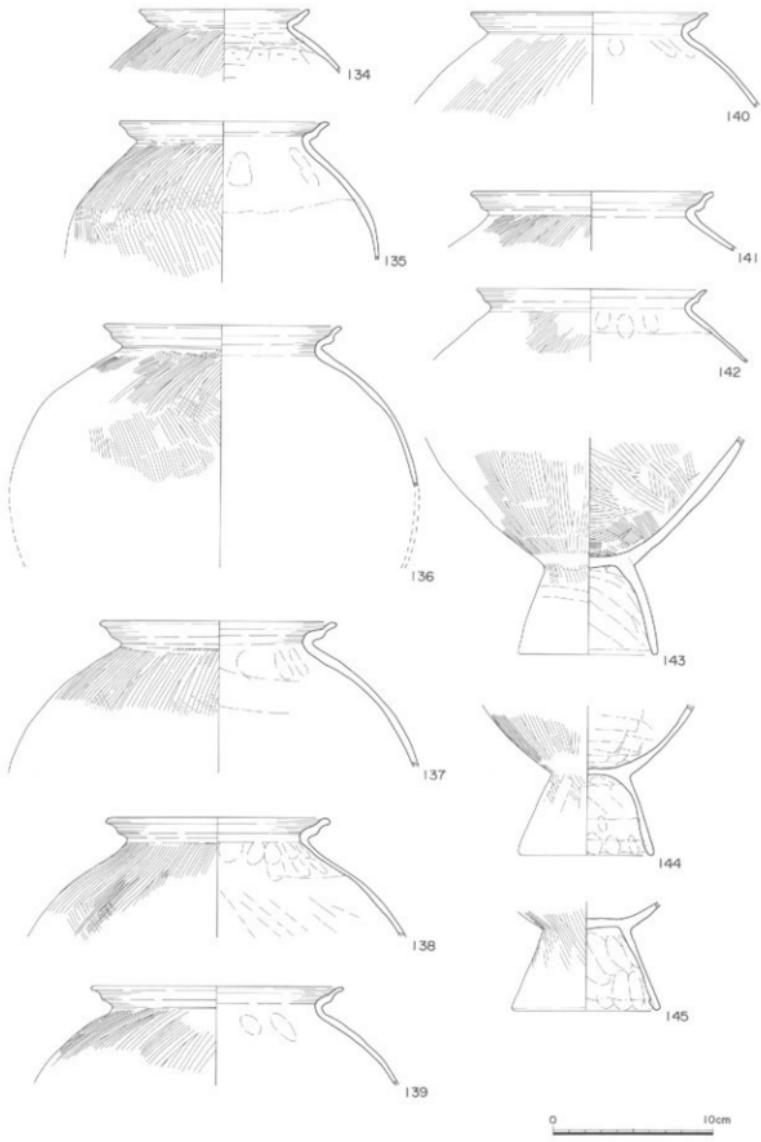
第57図 SD201出土土器実測図（7）



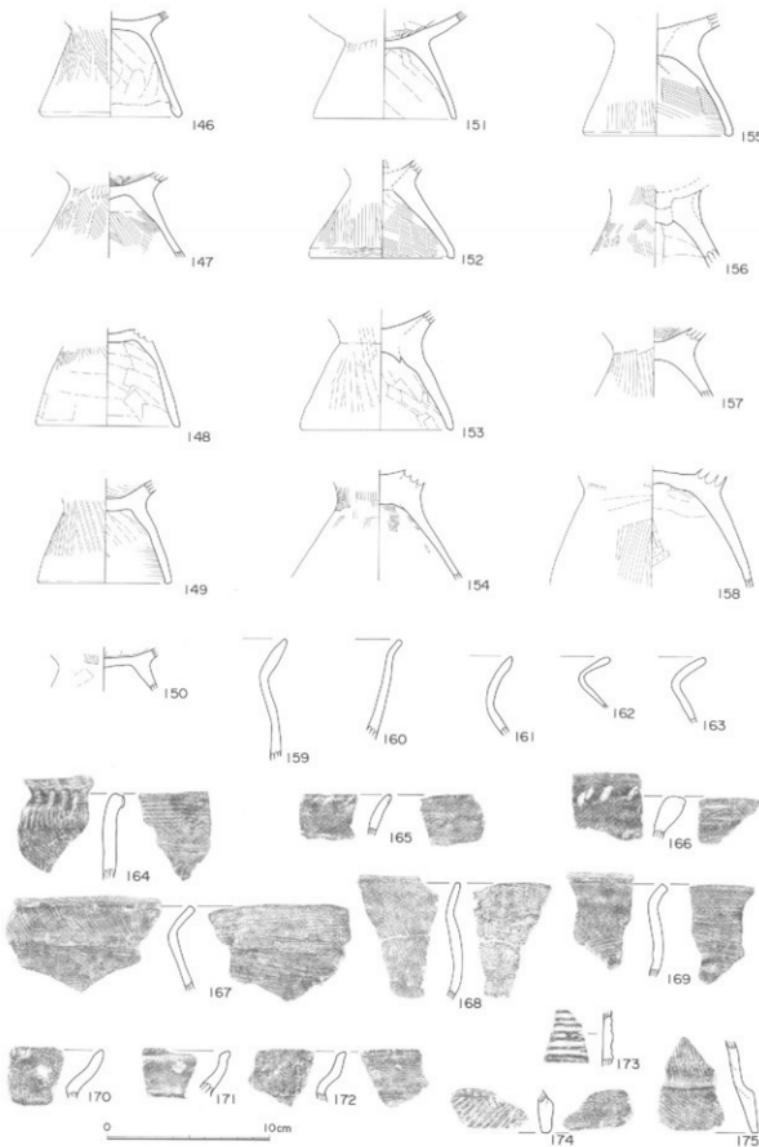
第58図 SD201出土土器実測図（8）



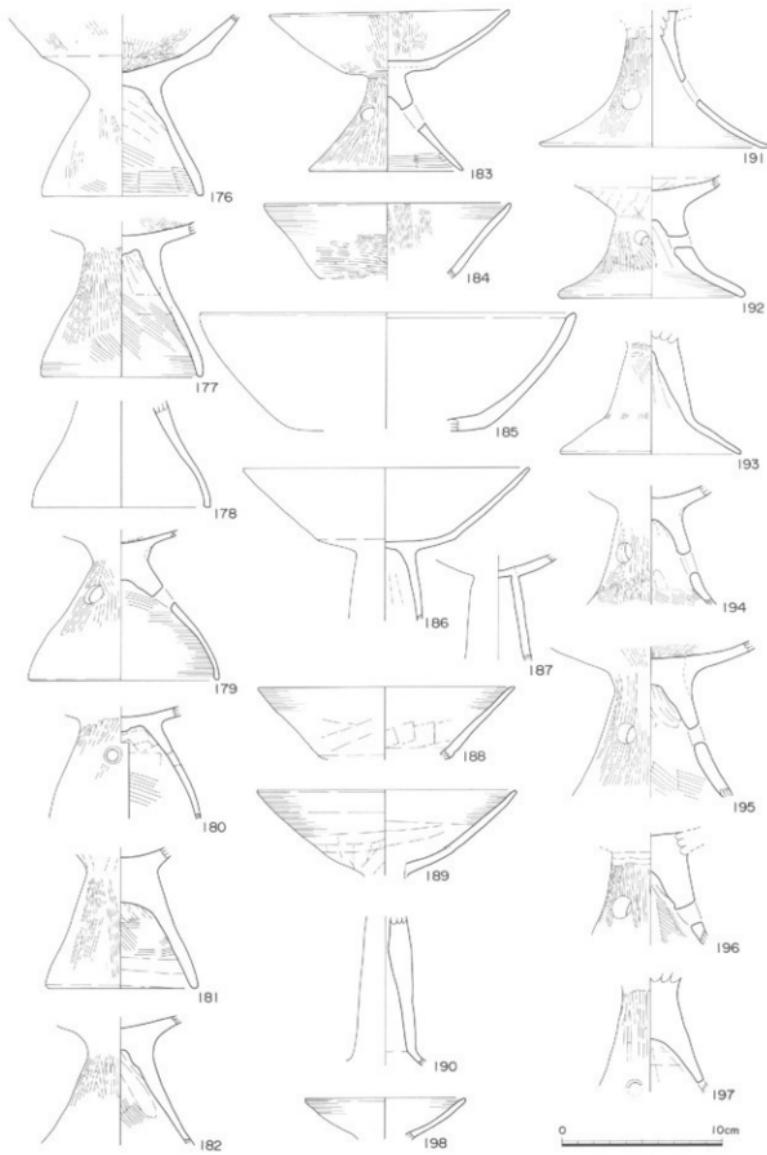
第59図 SD201出土土器実測図（9）



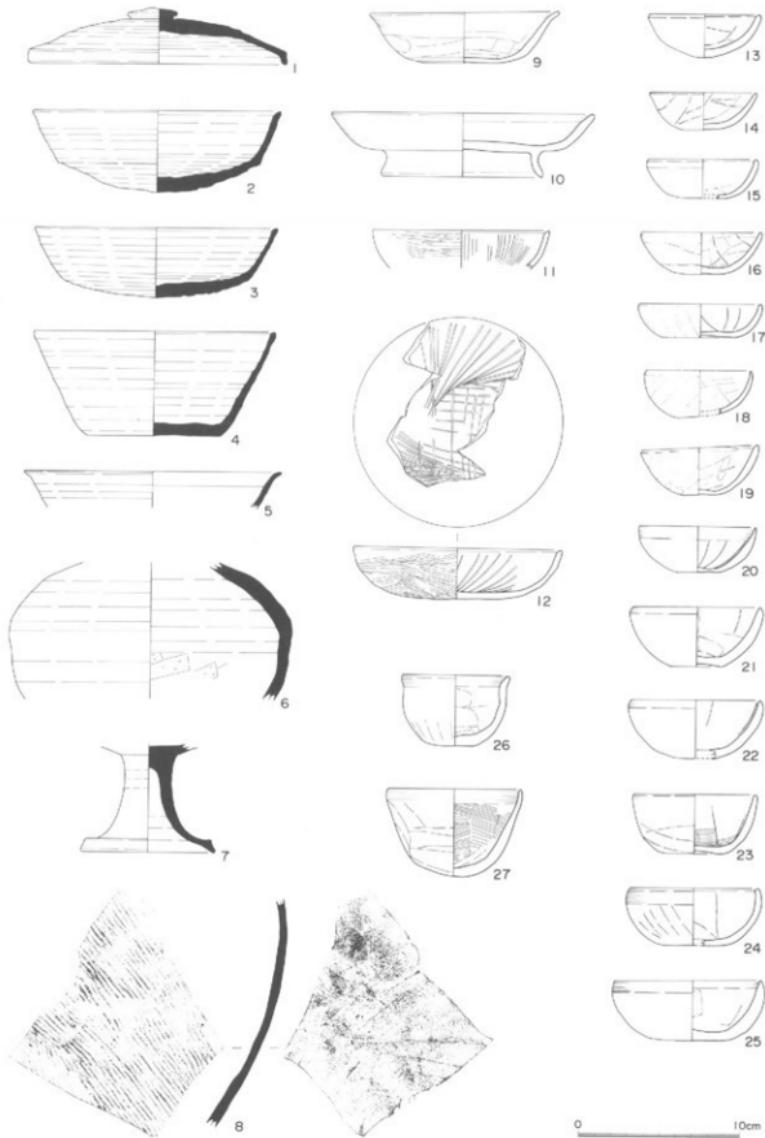
第60図 SD202出土土器実測図（10）



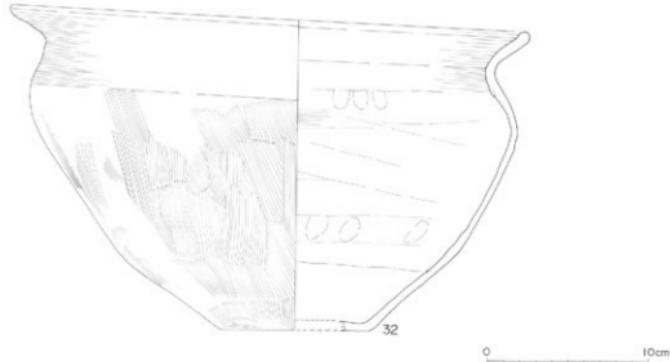
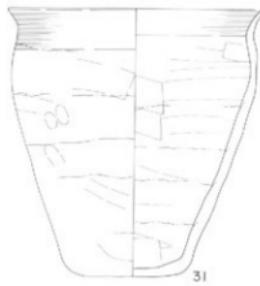
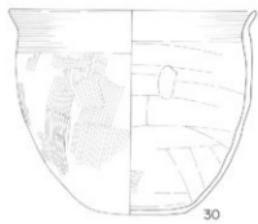
第61図 SD201出土土器実測図 (11)



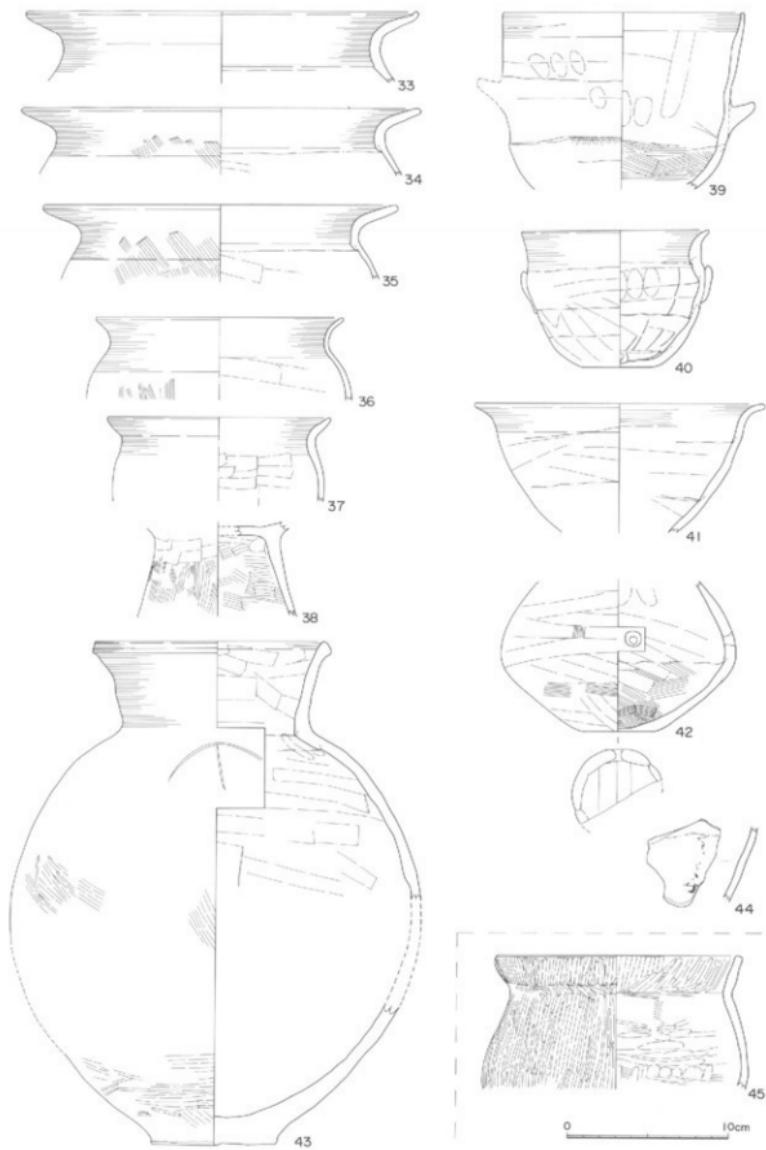
第62図 SD201出土土器実測図（12）



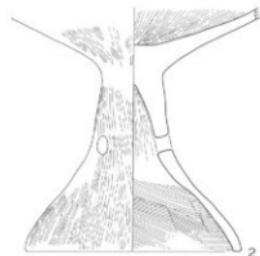
第63図 SD303出土土器実測図 (1)



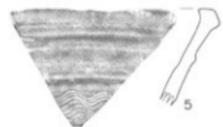
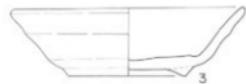
第64図 SD303出土土器実測図 (2)



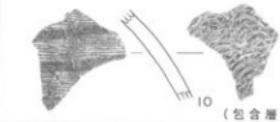
第65図 SD303出土土器実測図 (3)



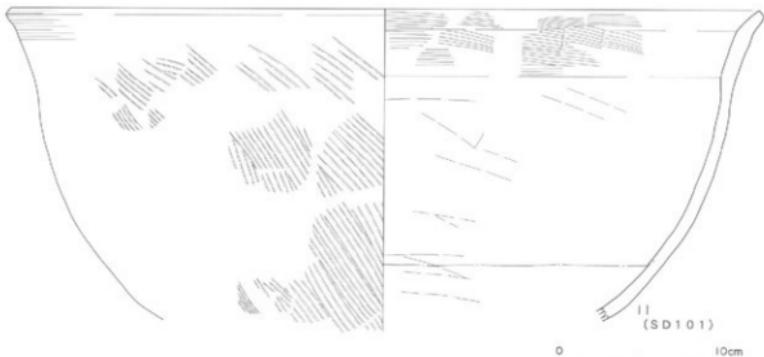
(SD 304)



(SD 203)

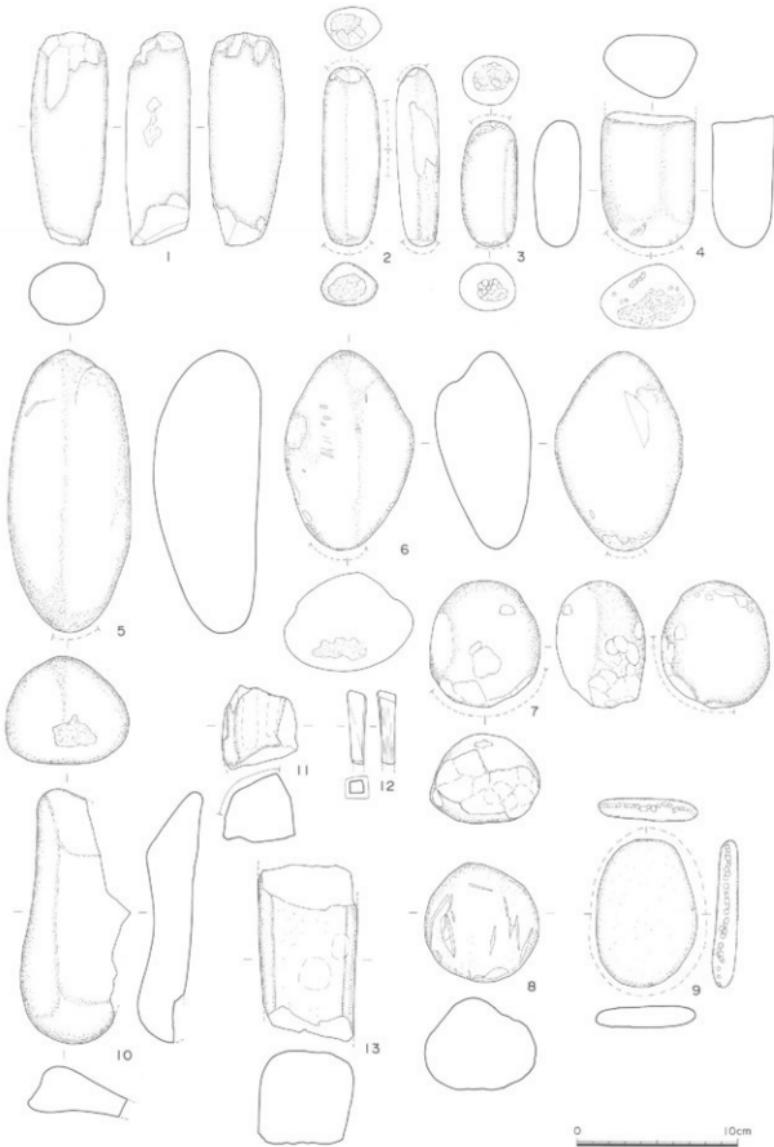


(包含層)

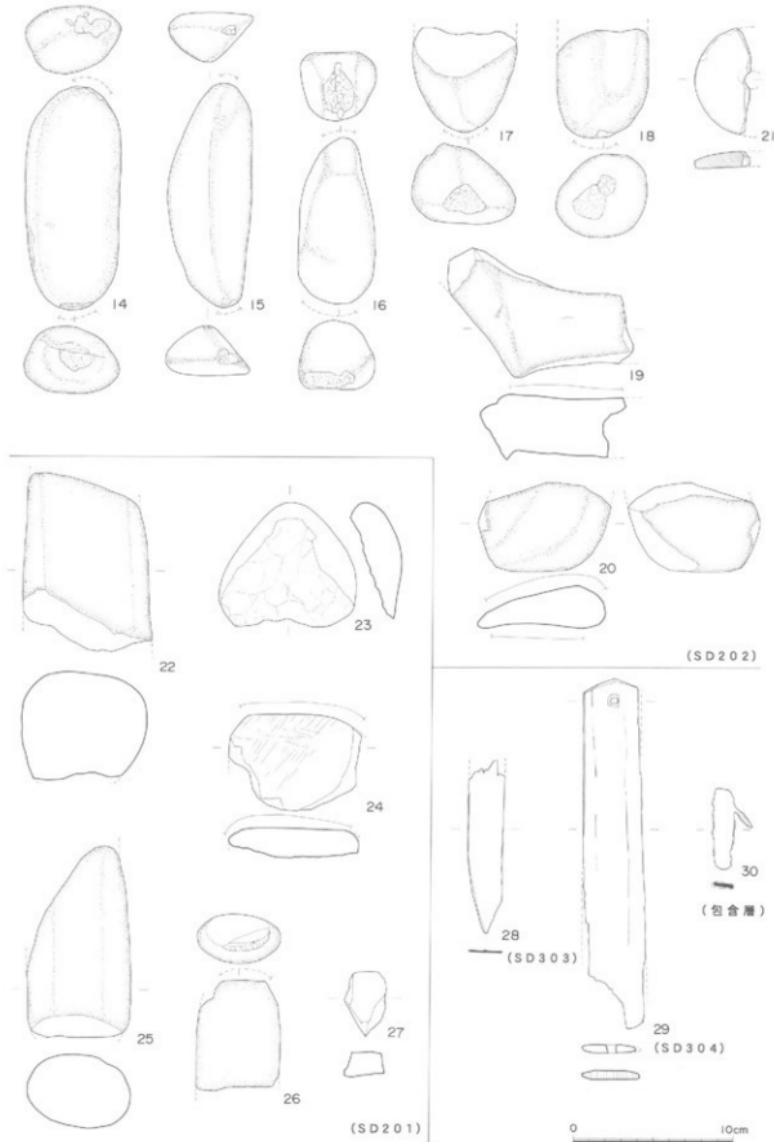


0 10cm

第66図 各遺構、包含層出土土器実測図



第67図 SD301出土石器実測図



第68図 SD201(左下)・202(上)出土石器類・土製品、
SD303・304出土木製品、包含層出土鐵製品実測図

表2 SD301出土土器統計表(1)

単位はcm。()は推定値

拂岡番号	器種	口径	油径	胴径	底径	高さ	色調	胎土	残存状況	備考
21-1	壺	(16.8)	(7.4)	23.8	—	—	5YR6/6 (O)	I	口1/2 肩2/3 底1/3	磨滅
21-2	壺	12.5	9.2	(26.0)	(6.4)	28.5	10YR7/3 (H)	I	口4/5 体1/2	外面擬似ミガキ
21-3	壺	10.8	8.9	(24.0)	—	—	10YR7/3 (H)	I F	胴下3/4と底欠損	外面と口内面黒斑
21-4	壺	6.6	5.3	13.6	7.4	(15.9)	2.5YR7/4 (H)	II	胴部1/5欠損	内外面黒斑
21-5	壺	(6.9)	4.5	12.0	6.3	16.5	5YR7/6 (O)	III B	口1/3 肩1/1 底1/1	外面黒斑
21-6	壺	9.4	—	—	—	—	5YR7/4 (O)	I	口1/1	
21-7	壺	10.0	7.0	—	—	—	5YR7/4 (O)	II F	口縁一部欠損	
21-8	壺	8.8	5.6	—	—	—	5YR7/3 (P)	II	口縁3/5	
21-9	壺	(9.0)	(6.0)	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I H	口1/2	
22-10	壺	12.5	9.1	(25.9)	—	—	5YR7/8 (O)	II	口1/1 肩上2/3	外面擬似ミガキ
22-11	壺	(11.8)	(9.0)	26.0	—	—	10YR2/8 (H)	II H	口1/2 肩2/3	外面黒斑
22-12	壺	(14.8)	(8.4)	—	—	—	5YR7/3 (P)	II	口1/4 肩1/2	磨滅
22-13	壺	12.9	8.6	24.0	6.8	(23.7)	10YR7/4 (O)	I J	胴中位欠損	磨滅
22-14	壺	13.1	7.8	24.4	7.8	27.4	10YR7/4 (H)	II D	口上1/3 肩下2/3欠損	外面と口内面黒斑
22-15	壺	13.2	9.8	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I E	口~肩3/4	磨滅
22-16	壺	(17.6)	—	—	—	—	7.5YR7/2 (O)	I H	口1/8	磨滅
23-17	壺	13.0	8.9	—	—	—	7.5YR8/4 (H)	II H	口3/4 肩上1/3	外面黒斑
23-18	壺	12.2	8.3	—	—	—	5YR6/6 (O)	II F	口1/1	
23-19	壺	(14.1)	—	—	—	—	7.5YR7/4 (O)	II	口1/5	口齊竹管文
23-20	壺	(17.2)	(9.7)	—	—	—	5YR7/6 (O)	I	口1/3	口齊竹管文
23-21	壺	(15.0)	—	—	—	—	2.5YR7/2 (H)	II	口1/2	
23-22	壺	(20.0)	12.1	—	—	—	5YR6/4 (B)	II	口2/3 頂2/3	口唇牛字彌
23-23	壺	16.4	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	III B G	口1/1	内面模文
23-24	壺	(18.2)	6.1	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	III B	口1/3 頂1/1	押引き籠刷文
23-25	壺	(19.4)	(9.8)	—	—	—	10YR6/3 (H)	III B K	口1/3 頂1/6	内面黒斑
23-26	壺	14.4	9.7	23.7	6.7	23.9	10YR7/2 (H)	III A F	胴部1/6欠損	外面ハケ羽状文
23-27	壺	(13.4)	(7.6)	—	—	—	10Y3/1 (H)	I	口1/4	外面黒斑
24-28	壺	(14.0)	(7.9)	(27.1)	(7.2)	28.1	7.5YR7/3 (H)	II H L	口~底約1/2	肩部扇形文
24-29	壺	13.9	9.6	—	—	—	7.5YR7/2 (H)	III A G	口一部欠損	外面ハケ羽状文
24-30	壺	17.6	9.3	(32.6)	—	—	7.5YR7/4 (B)	II	口3/4 肩上1/4	内外面黒斑
24-31	壺	(8.4)	(9.9)	21.0	5.8	17.7	10YR7/3 (H)	II H	口一部 肩7/8 底1/1	磨滅
24-32	壺	—	—	16.3	—	—	7.5YR7/4 (O)	I	肩上1/1	
24-33	壺	—	—	15.9	5.0	—	10YR8/3 (H)	I H	肩2/3 底1/1	外面黒斑
25-34	壺	(15.5)	(8.6)	25.8	—	—	7.5YR6/6 (H)	II H	口~肩上1/2	外面黒斑、磨滅
25-35	壺	—	—	26.2	—	—	2.5YR6/6 (O)	II G	肩上半3/4	磨滅
25-36	壺	—	—	22.7	7.0	—	10YR7/4 (H)	III A H	胴3/4 底1/1	磨滅
25-37	壺	—	—	(20.8)	7.6	—	10YR6/3 (H)	II H	肩上1/4 肩下~底1/1	外面黒斑
25-38	壺	—	—	12.3	4.6	—	10YR8/2 (N)	II	肩~底1/1	外面黒斑
25-39	壺	—	—	24.1	6.9	—	5YR6/4 (O)	II	肩3/4 底1/1	外面黒斑
26-40	鉢	(17.0)	(15.5)	(16.5)	6.8	13.2	5YR7/4 (H)	II	口1/7 肩1/4 底1/1	外面黒斑
26-41	鉢	(14.4)	(12.3)	(14.0)	—	—	7.5YR7/4 (O)	II D	口~肩1/5	
26-42	鉢	(7.8)	(7.8)	9.4	4.8	6.3	5YR7/6 (O)	II	口1/3 肩~底1/1	外面黒斑
26-43	底盤	—	—	(8.0)	(4.5)	—	10YR7/3 (H)	II H	肩下~底1/3	外面黒斑
26-44	底盤	—	—	—	3.6	—	10YR7/3 (H)	II H	肩下~底1/1	外面黒斑、301?
26-45	底盤	—	—	—	3.2	—	7.5YR6/3 (H)	II H	底1/1	
26-46	手拭	4.5	—	6.4	4.7	4.4	7.5YR5/3 (H)	II H	口一部欠損	
26-47	底盤	—	—	—	4.5	—	7.5YR5/4 (H)	II H	底1/1	外面黒斑
26-48	底盤	—	—	—	7.8	—	10YR7/1 (N)	II A	底3/4	外面黒斑
26-49	底盤	—	—	—	4.9	—	7.5YR6/4 (H)	II A H	底1/1	外面黒斑
26-50	底盤	—	—	(15.1)	4.6	—	7.5YR7/4 (O)	II	肩下1/8 底1/1	磨滅

表3 SD301出土土器觀察表(2)

単位はcm、()は推定値

拂因番号	器種	口径	頸径	胴径	底径	高さ	色調	胎土	残存状況	備考	
26-51	底部	—	—	26.4	6.9	—	10YR8/3 (H)	III B	脚下1/8 底1/1		
26-52	底部	—	—	31.4	5.4	—	10YR7/3 (H)	II	脚下半1/2 底1/1	外面黒斑	
26-53	底部	—	—	27.2	7.0	—	10YR7/2 (H)	I H	脚下~底1/1	内外面黒斑	
26-54	底部	—	—	—	7.6	—	5YR6/4 (O)	II	脚下1/3 底1/1		
26-55	底部	—	—	—	5.7	—	7.5YR7/4 (O)	I H	底1/1	磨滅	
26-56	底部	—	—	—	7.0	—	10YR7/2 (O)	I	底2/3	磨滅	
27-57	甕	(17.4)	(17.1)	(24.3)	7.1	20.4	5YR6/6 (O)	II A H	口若干 脚1/2 底1/1	外面黒斑、磨滅	
27-58	甕	(16.4)	(16.1)	(27.1)	—	—	7.5YR7/4 (H)	II F	口1/4 滑1/2	外面黒斑	
27-59	甕	—	—	—	8.1	—	7.5YR7/4 (H)	II F	脚下1/5 底1/1	5Bと同一個体	
27-60	甕	12.4	11.6	12.4	—	—	5YR7/6 (H)	II	口1/8 脚2/5	外面煤	
27-61	甕	(20.6)	(18.4)	(20.8)	—	—	10YR7/2 (H)	II H	口~肩1/4	内外面煤	
27-62	甕	(17.0)	(16.6)	20.7	—	—	10YR6/2 (N)	II H	口1/4 肩1/2 脚1/1	内外面煤	
27-63	甕	(36.0)	(34.8)	—	—	—	10YR7/2 (H)	II F H	口1/3	外面黒斑	
28-64	甕	(19.4)	(17.9)	23.2	—	—	10YR2/2 (H)	II H	口1/2 脚2/3	内外面煤	
28-65	甕	18.0	17.0	24.6	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口1/1 脚1/2	内外面煤	
28-66	甕	(21.7)	(20.3)	(27.8)	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口~脚1/2	外面煤	
28-67	甕	(17.6)	(17.5)	(23.6)	—	—	10YR6/4 (H)	II H	口1/3 脚1/4	内外面煤、外模ナデ?	
28-68	甕	(19.2)	(18.1)	(25.0)	—	—	7.5YR8/4 (H)	II	口1/4 肩1/5	内外面煤	
28-69	甕	20.5	18.4	(22.8)	—	—	5YR5/4 (H)	II H	口2/3 脚1/6	内外面煤	
29-70	甕	(22.8)	(21.4)	(24.4)	8.6	26.2	2.5YR5/6 (P)	II A	口1/2 肩1/2 台1/1	内外面煤	
29-71	甕	(22.4)	(21.4)	(23.8)	10.2	22.9	7.5YR6/4 (H)	III A F	口1/5 脚2/3 台2/3	内外面煤	
29-72	甕	17.4	17.1	21.5	—	—	10YR7/3 (H)	II	口1/2 脚1/1	内外面煤	
29-73	甕	—	—	—	10.1	—	10YR7/2 (H)	III A H	台2/3	外面煤	
29-74	甕	—	—	—	(9.4)	—	2.5YR7/2 (H)	II H	台1/2	凸部	
29-75	甕	—	—	—	9.5	—	2.5YR8/2 (H)	II H	台ほぼ1/1	凸部、内面煤	
29-76	甕	—	—	—	(7.9)	—	2.5Y7/2 (H)	II	台上1/1 脚1/8	凸部、外面黒化	
29-77	甕	—	—	—	7.1	—	5YR6/4 (O)	II	台3/4	凸部	
29-78	甕	—	—	—	7.3	—	2.5Y8/2 (H)	II A H	台2/4	磨滅	
29-79	甕	—	—	—	11.4	—	2.5YR7/4 (P)	II A H	台1/1		
29-80	甕	—	—	—	9.0	—	10YR7/2 (H)	II H	台1/1	内外面煤	
29-81	甕	—	—	—	9.4	—	7.5YR7/2 (H)	II H	台1/1	内面煤	
29-82	甕	—	—	—	9.7	—	2.5Y6/2 (H)	II H	脚1/3欠損	内外面煤	
29-83	甕	—	—	—	7.5	—	10YR6/3 (H)	II H	台1/1	外面煤	
29-84	甕	—	—	—	8.6	—	7.5YR7/3 (P)	II H	台1/2	S D301? 内面煤	
29-85	甕	—	—	—	7.4	—	5Y7/1 (H)	II H	裾一部欠損	S X201、内面煤	
30-86	高坏	(29.0)	—	—	(17.0)	21.9	10YR8/3 (H)	II H	坏2/5・脚1/5欠損	3方透かし、内外黒斑	
30-87	高坏	—	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	I H	脚上1/1	擦剥実文	
30-88	高坏	19.2	—	—	—	13.6	(16.3) 7.5YR6/6 (O)	I H	坏・脚1/3欠損	3方透かし、磨滅	
30-89	高坏	(21.8)	—	—	—	13.2	(17.8) 7.5YR8/2 (O)	II	坏上1/3 脚1/1	3方透かし	
30-90	高坏	24.2	—	—	—	—	2.5YR7/4 (P)	I E H	口3/4	磨滅	
30-91	高坏	(23.4)	—	—	—	—	7.5YR8/3 (H)	I	坏1/3	内面黒斑	
30-92	高坏	(28.0)	—	—	—	—	7.5YR5/6 (O)	II	坏1/3	内外面煤、磨滅	
30-93	高坏	(26.6)	—	—	16.3	18.3	10YR8/2 (N)	I F	口・脚上1/2欠損	3方透かし、内外黒斑	
30-94	高坏	—	—	—	—	—	2.5Y6/2 (H)	III C H	坏1/2	磨滅	
30-95	高坏	(25.0)	—	—	—	—	7.5YR5/4 (O)	I	口1/4	内外面黒斑	
30-96	高坏	—	—	—	—	—	2.5Y7/3 (H)	II H	坏下・脚上1/2	透かし4、米質通1	
30-97	高坏	—	—	—	—	—	10YR6/1 (H)	I E H	脚上1/1	3方透かし、外黒斑	
30-98	高坏	—	—	—	—	9.6	—	7.5YR7/3 (H)	I E	脚1/5欠損	3方透かし
31-99	高坏	—	—	—	(12.9)	—	7.5YR6/2 (O)	I E K	裾3/4欠損	3方透かし	
31-100	高坏	—	—	—	17.0	—	5YR7/4 (H)	II	脚1/1	3方透かし、磨滅	

表4 SD301出土土器觀察表(3)

単位はcm。()は推定値

検出番号	器種	口径	頭径	肩径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
31-101	高坏	—	—	—	—	13.6	— 5YR6/4 (P)	I	脚1/1	3方透かし
31-102	高坏	—	—	—	(13.8)	—	— 2.5YR6/6 (P)	I H	脚下1/4	透かし2段
31-103	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR7/3 (H)	II	脚上1/1	3方透かし
31-104	高坏	—	—	—	—	—	— 7.5YR6/8 (O)	II G K	脚上1/1	3方透かし、外面部黒斑
31-105	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR8/3 (H)	I	脚上1/1	3方透かし
31-106	高坏	—	—	—	—	—	— 2.5Y7/2 (N)	II	脚上1/1	3方透かし
31-107	高坏	—	—	—	—	—	— 7.5YR6/4 (O)	I	脚上1/1	3方透かし
31-108	高坏	—	—	—	—	14.2	— 5YR7/4 (O)	I H	脚下1/1	3方透かし、外面部黒斑
31-109	高坏	—	—	—	(15.3)	—	— 2.5YR6/8 (O)	I	脚上1/2欠損	3方透かし
31-110	高坏	—	—	—	(13.8)	—	— 7.5YR7/4 (O)	I H	脚1/2欠損	3方透かし、外面部黒斑
31-111	高坏	—	—	—	—	13.4	— 7.5YR7/4 (H)	I	脚一部欠損	脚丹3方透かし
31-112	高坏	—	—	—	(14.4)	—	— 7.5YR7/3 (H)	I H	脚3/4欠損	3方透かし、外面部黒斑
31-113	高坏	—	—	—	—	13.4	— 5YR8/2 (H)	I H	脚1/4欠損	3方透かし
31-114	高坏	—	—	—	—	12.0	— 2.5YR6/4 (O)	II	脚一部欠損	3方透かし
31-115	高坏	—	—	—	—	12.4	— 5YR6/6 (O)	II	脚1/2欠損	3方透かし、磨滅
31-116	高坏	—	—	—	—	11.0	— 7.5YR8/3 (H)	II	脚1/1	外面部黒斑、縦縞文
31-117	高坏	—	—	—	(11.9)	—	— 10YR8/4 (H)	III B H	脚1/2欠損	外面部黒斑、縦ハケメ
31-118	高坏	—	—	—	(13.5)	—	— 7.5YR7/4 (O)	I	脚2/3欠損	3方透かし、外面部黒斑
32-119	—	—	—	—	—	—	— 7.5YR7/6 (O)	II E K	口破片	外面部ハケメ
32-120	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/2 (H)	II H K	口破片	櫛縞横縞文・波状文
32-121	壺	—	—	—	—	—	— 7.5YR7/4 (H)	III B J	崩破片	外面部ハケメ
32-122	壺	—	—	—	—	—	— 10YR5/3 (H)	II K	崩破片	櫛縞横縞文・刺突文
32-123	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/4 (H)	II G K	崩破片	櫛縞波状文・扇形文
32-124	壺	—	—	—	—	—	— 5YR6/6 (O)	II G	崩破片	櫛縞横縞文・波状文
32-125	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/3 (H)	II A H	崩破片	ハケによる羽状文
32-126	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/4 (H)	II A H	崩破片	ハケによる羽状文
32-127	壺	—	—	—	—	—	— 7.5YR7/4 (H)	II	崩破片	柳刺突羽状文
32-128	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/3 (H)	I H J	口破片	櫛刺突羽状文
32-129	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/4 (O)	III B J	口破片	口唇縞文・外面部ハケメ
32-130	壺	—	—	—	—	—	— 10YR7/4 (O)	II H	口破片	崩下間に棘
32-131	壺	—	—	—	—	—	— 5YR6/4 (P)	II	口破片	外面部ミガキ・内面部ハケメ
32-132	壺	—	—	—	—	—	— 5YR6/6 (O)	I H	破片	ミニチュア
32-133	甕	—	—	—	—	—	— 10YR3/1 (K)	II K	口破片	口唇折り返し・外面部煤
32-134	甕	—	—	—	—	—	— 2.5Y7/2 (H)	II H	口破片	内面部ハケメ・キザミ・外面部煤
32-135	甕	—	—	—	—	—	— 7.5YR8/4 (O)	II H	口破片	横ナデ・キザミ・外面部煤
32-136	深鉢	—	—	—	—	—	— 5YR5/6 (O)	II H K	口破片	外面部ハケメ・キザミ
32-137	深鉢	—	—	—	—	—	— 7.5YR3/3 (B)	II H K	口破片	条痕文
32-138	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR7/2 (H)	III B K	口破片	外面部ミガキ・キザミ
32-139	高坏	—	—	—	—	—	— 7.5YR6/4 (H)	II E K	口破片	櫛縞波状文
32-140	高坏	—	—	—	—	—	— 5YR6/6 (O)	II	口破片	櫛縞横縞文・波状文
32-141	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR6/3 (H)	II	口破片	外面部横ナデ
32-142	高坏	—	—	—	—	—	— 7.5YR6/6 (O)	II	口破片	外面部ミガキ
32-143	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR7/2 (H)	I K	口破片	外面部ミガキ
32-144	高坏	—	—	—	—	—	— 2.5Y7/2 (N)	I H	口破片	口唇部内面部肥厚
32-145	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR7/3 (H)	I H	口破片	外面部煤・外面部ミガキ
32-146	高坏	—	—	—	—	—	— 7.5YR6/3 (H)	I H	崩破片	内面部煤
32-147	高坏	—	—	—	—	—	— 10YR7/2 (H)	II A H	崩破片	櫛刺突横縞文・羽状文
32-148	高坏	—	—	—	—	—	— 5YR6/4 (O)	I	口破片	櫛縞横縞文・波状文

表5 SD 202出土器観察表(1)

単位はcm。()は推定値

器種番号	密接	口径	縁径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
33-1	壺	11.5	7.7	(17.4)	6.6	(17.0)	7.5YR6/6 (O)	II	口・底1/1 脚1/6	内外面黒斑、木葉痕
33-2	壺	(14.9)	8.8	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	II	口端部一部欠損	内外面黒斑
33-3	壺	11.0	9.1	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I K	口1/1 脚上1/10	内外面黒斑
33-4	壺	(11.0)	(7.8)	—	—	—	5YR6/6 (O)	I	口2/5 脚1/4	外面黒斑
33-5	壺	(12.3)	9.2	(19.8)	8.0	(21.2)	7.5YR7/4 (O)	I	口~脚1/2 底1/1	外面黒斑、木葉痕
33-6	壺	10.5	7.4	13.0	6.2	11.1	5YR6/6 (O)	II G	口1/4欠損	外底面ケズリ
33-7	壺	(12.1)	8.6	—	—	—	2.5Y6/2 (H)	I H	口~脚上3/4	縮減
33-8	壺	14.5	8.7	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I H	口4/5	外面黒斑、縮減
33-9	壺	(14.1)	(8.2)	(22.8)	(9.7)	(26.7)	10YR6/4 (H)	II	口・脚1/8 底1/2	口・脣外面赤彩
34-10	壺	(12.7)	(9.7)	—	—	—	10YR7/2 (N)	I D E	口~肩1/2	口端部縮減
34-11	壺	11.7	(10.1)	—	—	—	2.5Y7/3 (N)	I D E	口1/1 脚1/4	口端部縮減
34-12	壺	14.6	8.7	20.2	(5.6)	22.1	5YR7/8 (O)	I	底1/2欠損	外面黒斑、木葉痕
34-13	壺	(16.4)	—	—	—	—	5YR5/6 (O)	I E H	口1/4	
34-14	壺	(15.8)	—	—	—	—	5YR7/4 (P)	I	口1/3	
34-15	壺	18.4	—	—	—	—	7.5YR7/4 (N)	I H	口3/4	
34-16	壺	(11.5)	8.0	24.2	7.8	27.5	7.5YR6/3 (H)	II A	口一部欠損	外面黒斑
34-17	壺	(14.6)	(8.8)	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	I C	口1/4	肩部横模様文
34-18	壺	—	8.7	22.0	—	—	5YR7/8 (O)	II	口と肩下1/2欠損	外面黒斑
35-19	壺	20.9	—	—	—	—	5YR6/4 (P)	II H	口1/1	外面黒斑
35-20	壺	(17.4)	—	—	—	—	7.5YR7/4 (O)	II	口1/3	
35-21	壺	(22.2)	—	—	—	—	10YR7/3 (N)	III A	口1/2	外面黒斑、縮減
35-22	壺	20.9	10.1	—	—	—	5YR6/6 (O)	III B	口1/1	縮減
35-23	壺	(16.8)	(9.2)	—	—	—	5YR7/6 (O)	I H	口1/3 脚1/1	二段口縁
35-24	壺	17.0	—	—	—	—	5YR8/4 (N)	II G	口2/3	縮減
35-25	壺	19.8	9.7	—	—	—	5YR6/8 (O)	II	口1/1 脚1/4	想描横模様、縮減
35-26	壺	(16.8)	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II	口3/5	縮減
35-27	壺	25.1	(14.6)	(43.9)	—	—	7.5YR8/6 (H)	III B C	口1/1 脚上1/3	想いハケメ
35-28	壺	14.8	—	—	—	—	10YR6/2 (H)	II	口3/4	縮減
35-29	壺	(13.6)	(8.5)	—	—	—	5YR7/6 (O)	I K	口1/2	外面縮減
36-30	壺	(23.3)	—	—	—	—	7.5YR6/4 (H)	III B H	口1/4	口唇ヘラミガキ
36-31	壺	17.2	—	—	—	—	10YR6/2 (H)	II	口3/4	口唇下部ヰサミ
36-32	壺	—	(8.1)	—	—	—	2.5Y7/2 (H)	III B	脚1/2	有模様刺突羽状文
36-33	壺	—	—	(20.4)	—	—	10YR8/3 (H)	I H	脚1/2	外面煤
36-34	壺	—	—	(14.5)	(5.0)	—	7.5YR6/3 (H)	III B H	体2/5 底1/8	脚外面赤彩
36-35	壺	—	—	(25.6)	(10.5)	—	5YB1/1 (G)	III B J	肩~底1/4	縮減
36-36	壺	—	—	(34.5)	(9.8)	—	2.5YR5/8 (O)	II	体1/3 底1/3	外面黒斑、木葉痕
36-37	壺	—	—	9.7	2.9	—	7.5YR6/6 (O)	I	口欠損	肩外面黒斑
36-38	底部	—	—	—	(3.2)	—	5YR6/6 (O)	I H	底1/2	外面赤彩
36-39	底部	—	—	—	5.0	—	5YR6/6 (O)	I H	底3/4	
36-40	底部	—	—	—	4.5	—	10YR7/2 (H)	I E H	底1/1	
36-41	底部	—	—	—	(4.8)	—	7.5YR4/1 (B)	II	底1/2	外面黒斑
36-42	底部	—	—	—	5.2	—	10YR7/2 (H)	II H	底1/1	外面黒斑
36-43	底部	—	—	—	3.5	—	7.5YR6/6 (O)	I	脚下1/4 底1/1	
37-44	壺	—	9.0	23.2	8.5	—	5YR6/6 (O)	I F	脚1/3欠損	外面黒斑、木葉痕
37-45	壺	—	—	(27.6)	(8.5)	—	5YR6/8 (O)	II	脚下2/3欠損	外面黒斑、木葉痕
37-46	壺	—	—	(7.7)	(20.9)	(6.6)	10YR8/2 (N)	I H	脚~底1/2	外面黒斑、木葉痕
37-47	壺	—	—	(24.6)	8.5	—	10YR7/3 (H)	II G	脚上1/8 脚下1/1	外面黒斑、木葉痕
37-48	壺	—	—	(21.3)	—	—	10YR8/2 (H)	II E F	脚上1/3	
38-49	壺	—	—	10.7	27.4	—	7.5YR7/8 (O)	II A	口1/4 脚1/2	内外面黒斑
38-50	壺	—	—	(8.2)	(28.9)	—	7.5YR7/8 (O)	II	脚1/4 脚1/3	外面煤

表6 SD202出土土器觀察表(2)

単位はcm. () は推定値

拂因番号	器種	口径	頸径	肩径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
38-51	盃	—	7.9	16.4	7.2	—	5YR7/3 (P)	II A B	口欠損	駆逐、木葉痕
38-52	盃	—	(7.5)	24.3	7.1	—	10YR8/4 (H)	I	頭1/3 脣7/8 底1/1	外黒斑、内黒化
38-53	盃	—	—	(16.9)	7.2	—	5YR7/4 (H)	II	頭1/3 底1/1	磨減
39-54	盃	—	—	(24.4)	—	—	7.5YR7/6 (H)	I	頭上1/2	並み大きい
39-55	盃	—	—	(25.1)	8.6	—	2.5YR6/8 (O)	I	頭1/4 底1/1	木葉痕
39-56	盃	—	—	(26.4)	(8.0)	—	2.5YR7/2 (N)	II H	頭～底1/2	外面黒斑と煤
39-57	盃	—	(7.2)	(19.1)	—	—	5YR7/8 (O)	I	頭上1/1 脣下1/8	底減
39-58	盃	—	—	(25.8)	8.1	—	5YR7/6 (O)	I	頭1/3 底1/1	外面黒斑、木葉痕
39-59	鉢	15.6	—	—	5.4	7.7	5YR6/8 (O)	II	口1/4欠損	内外面黒斑
40-60	底部	—	—	(24.7)	8.4	—	5YR6/4 (O)	I	頭下1/4 底1/1	木葉痕
40-61	底部	—	—	24.5	7.4	—	2.5YR6/6 (O)	I	頭下1/3 底1/1	木葉痕
40-62	底部	—	—	—	6.6	—	10YR8/3 (H)	II E	底1/1	周辺木葉痕
40-63	底部	—	—	—	7.6	—	10YR6/3 (H)	II H	底1/1	外面黒斑
40-64	底部	—	—	18.3	6.0	—	7.5YR8/4 (H)	I	頭下～底1/1	駆逐
40-65	底部	—	—	(22.8)	(8.3)	—	5YR6/4 (O)	II	頭下～底1/2	木葉痕
40-66	底部	—	—	—	8.0	—	7.5YR6/4 (O)	I	底一部欠損	木葉痕
40-67	底部	—	—	—	(12.6)	—	5YR6/4 (O)	III C H	底1/3	磨減
40-68	底部	—	—	—	(12.7)	—	5YR6/6 (O)	II G	底4/5	木葉痕、外面煤
40-69	底部	—	—	—	13.8	—	10YR7/2 (H)	III B H	頭下1/2 底1/1	外面黒斑
40-70	底部	—	—	—	3.7	—	7.5YR6/4 (O)	II D G	底1/1	外面黒斑
40-71	底部	—	—	—	5.1	—	10YR7/3 (N)	I	底1/1	外面黒斑
41-72	盃	(9.4)	—	(17.1)	6.5	13.6	7.5YR7/6 (H)	I H	口1/3 頭3/5 底1/1	木葉痕
41-73	盃	12.6	—	20.7	6.5	14.8	10YR7/3 (H)	I	口2/3 頭1/2 底1/1	口外面黒斑
41-74	鉢	(22.2)	(20.4)	(20.9)	—	—	5YR7/4 (P)	II	口～側1/5器	外面煤
41-75	鉢	(22.1)	(21.2)	(23.3)	—	—	5YR7/6 (O)	I	口～頭上1/3	
41-76	鉢	(15.4)	—	—	(6.6)	8.3	5YR7/4 (P)	II H	口～底1/4	内外面煤
41-77	鉢	(14.6)	(13.8)	(14.8)	—	—	7.5YR7/4 (H)	II	口～頭上1/3	磨減
41-78	盃	(19.4)	(17.8)	—	—	—	5YR5/6 (O)	II G	口～頭3/8	
41-79	盃	(25.6)	(24.6)	—	—	—	10YR7/3 (O)	II E	口1/6	口径大幅推定
41-80	盃	16.2	16.8	20.9	—	—	7.5YR8/6 (H)	II H	頭下と底欠損	
41-81	歩	(13.3)	(13.6)	(20.9)	8.1	20.2	7.5YR7/6 (O)	II B	口一部 頭1/3 底1/1	木葉痕、磨減
41-82	盃	—	(13.4)	(21.5)	(8.4)	—	7.5YR7/4 (H)	II A H	頭2/3 底1/5	外面黒斑
42-83	甌	(58.6)	—	—	—	—	2.5Y7/3 (H)	II	口～頭1/4	口外面黒斑
42-84	甌	(33.0)	—	(33.6)	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口～頭1/4	内外面煤
42-85	甌	(16.9)	(14.6)	22.2	(9.4)	27.2	7.5YH3/1 (H)	II H	口1/3 頭7/8 台1/2	内外面煤
42-86	甌	(12.3)	11.4	14.4	8.0	17.7	10YR7/2 (H)	II	口～頭上1/2 欠損	外面煤
42-87	甌	(13.7)	(13.1)	(16.8)	(7.4)	21.8	10YR6/3 (H)	II	口1/4 满1/2 台2/3	外面煤
43-88	甌	(16.5)	(15.4)	(20.9)	—	—	10YR7/4 (H)	II H	口1/6 頭1/3	内外面煤
43-89	甌	(18.8)	(18.4)	(24.7)	—	—	10YR7/2 (H)	II H	口～頭1/6	内外面煤
43-90	甌	(21.2)	(19.6)	(24.7)	—	—	10YR7/3 (H)	II E	口2/3 頭1/2	内外面煤
43-91	甌	(17.8)	15.7	21.4	—	—	5YR6/6 (O)	II G	口1/4 頭1/1	内外面煤
43-92	甌	(18.3)	(16.4)	(21.3)	—	—	7.5YR7/3 (H)	II H K	口1/2 頭1/1	内外面煤
43-93	甌	(13.7)	11.8	(17.5)	—	—	10YR7/4 (H)	II H	口一部欠損 頭1/2	内外面煤
43-94	甌	(14.5)	(13.8)	(17.8)	—	—	10YR7/4 (H)	II H	口1/8 頭上1/4	内外面煤
44-95	甌	(16.0)	(14.9)	(21.4)	—	—	5YR4/3 (H)	II G	口1/3 頭2/3	内外面煤
44-96	甌	(15.7)	(15.6)	(18.6)	—	—	5Y7/1 (H)	II H	口1/2 頭上1/2	外面黒斑
44-97	甌	(15.4)	(15.2)	(21.0)	—	—	10YR8/4 (H)	II H	口1/2 頭一部	
44-98	甌	(18.8)	(18.6)	(23.8)	—	—	10YR3/7 (H)	II H	口1/6 頭1/3	
44-99	甌	20.7	19.7	23.4	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口2/3 頭2/3	内外面煤
44-100	甌	(21.0)	(19.1)	(24.3)	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口1/8 頭1/4	内外面煤

表7 SD 202出土器物表(3)

単位cm ()は推定値

器名番号	器種	口径	頸径	肩径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
44-101	甕	(16.9)	(15.1)	18.4	—	—	5YR4/6 (H)	II	口1/2 肩4/5	内外煤、キサミ無
44-102	甕	(12.5)	(12.1)	(19.2)	—	—	7.5YR5/4 (H)	II H L	口1/3 肩1/2	内外煤、口齊磨滅
45-103	甕	16.8	15.8	18.6	—	—	10YR8/6 (H)	II H	口～肩1/1	内外面煤
45-104	甕	(15.5)	(14.1)	(17.4)	—	—	10YR7/4 (H)	II F H	口～肩1/4	内外面煤
45-105	甕	(18.8)	17.5	(20.3)	8.8	(27.2)	7.5YR7/4 (H)	II A	口～肩1/4 台1/1	内外面煤
45-106	甕	(13.8)	(13.2)	(15.2)	—	—	7.5YR6/4 (H)	II H	口1/3 肩1/3	内外面煤
45-107	甕	(20.1)	(16.5)	(19.2)	—	—	7.5YR6/4 (H)	II H	口1/3 肩1/3	内外面煤
45-108	甕	17.5	15.4	16.8	8.1	20.9	7.5YR7/4 (H)	I H	肩下2/3・台一部欠損	内外面煤
45-109	甕	—	—	—	7.0	—	10YR6/2 (H)	II	台1/1	
45-110	甕	—	—	—	9.6	—	7.5YR7/4 (O)	II E H	台傾倒1/1	内面煤
45-111	甕	—	—	—	7.4	—	7.5YR7/3 (H)	II E	台1/1	内面煤
45-112	甕	—	—	—	9.3	—	7.5YR7/4 (O)	II H	台1/1	内外面煤
46-113	甕	20.0	19.6	(22.0)	10.0	(27.3)	7.5YR6/4 (H)	I H	口～台一部欠損	外面煤、内面黒化
46-114	甕	(14.6)	(12.8)	—	—	—	2.5Y5/2 (B)	II	口～肩上1/5	口径大標推定
46-115	甕	13.1	11.5	13.9	—	—	10YR7/2 (H)	II H	口～肩1/1	内外面煤
46-116	甕	18.5	16.5	(28.6)	—	—	10YR7/3 (H)	II	口1/4 肩上1/8	内外面煤
46-117	甕	—	(14.9)	(26.9)	—	—	10YR7/3 (H)	III A H	肩1/3	
46-118	甕	—	—	—	7.0	—	7.5YR6/2 (H)	II F	台1/1	
46-119	甕	—	—	—	9.4	—	7.5YR7/3 (H)	II F H	台1/1	内面煤
46-120	甕	—	—	—	8.8	—	7.5YR5/1 (H)	II H	台1/2	外面煤
46-121	甕	—	—	(20.7)	9.4	—	10YR7/2 (H)	II H	肩下1/3 台3/4	内外面煤
46-122	甕	—	—	—	9.5	—	10YR7/2 (H)	II H	台1/1	内外面煤
46-123	甕	—	—	—	9.2	—	10YR7/3 (H)	II	台1/1	内外面煤
46-124	甕	—	—	—	10.5	—	5YR6/4 (O)	II	台1/1	外面煤
47-125	高坏	(22.9)	—	—	—	—	5YR7/6 (O)	II E H	坏1/8	磨滅
47-126	高坏	(27.6)	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II H	坏1/8	口径推定、内面黒化
47-127	高坏	(18.7)	—	—	—	—	2.5Y7/3 (H)	II E H	坏1/4	高坏?
47-128	高坏	(19.2)	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II H	口1/4	
47-129	高坏	22.8	—	—	13.8	22.0	5YR6/8 (O)	II	坏3/4 捻4/5	外面横ナデ
47-130	高坏	—	—	—	—	—	7.5YR6/8 (O)	I	坏3/4	
47-131	高坏	(28.0)	—	—	—	—	2.5Y7/1 (H)	II E H	坏1/3	外面黒斑
47-132	高坏	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II D	坏下2/3 肩上1/1	3方透かし、内外煤
47-133	高坏	(17.5)	—	—	—	—	5YR7/6 (O)	II	坏1/2	外面黒斑
47-134	高坏	(21.6)	—	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	I	坏1/6	口径推定、外面煤
47-135	高坏	(22.9)	—	—	—	—	5YR5/4 (P)	I H	坏1/3	内外面煤
47-136	高坏	(21.5)	—	—	—	—	10YR6/4 (O)	II	坏1/6	口径大標推定
48-137	高坏	22.8	—	—	14.0	21.6	10YR8/3 (H)	III A	坏・脚一部欠損	外面黒斑
48-138	高坏	(19.8)	—	—	—	—	2.5Y7/3 (O)	II E H	坏1/4	磨滅
48-139	高坏	(22.7)	—	—	—	—	10YR7/3 (N)	II E H	坏1/4	口径推定、口部黒斑
48-140	高坏	(18.7)	—	—	—	—	5YR7/3 (N)	I	坏1/5	磨滅
48-141	高坏	(20.9)	—	—	—	—	10YR8/2 (N)	I H K	口1/4	内面黒斑
48-142	高坏	(24.3)	—	—	—	—	10YR7/3 (N)	I E	坏1/8	口径推定、外面黒化
48-143	高坏	—	—	—	11.0	—	5YR7/3 (P)	II	脚1/1	3方透かし、外黒斑
48-144	高坏	—	—	—	(11.0)	—	10YR7/2 (H)	II D E	脚4/5	3方透かし
48-145	高坏	—	—	—	(12.4)	—	5YR7/6 (H)	I	脚3/4	3方透かし
48-146	高坏	—	—	—	(13.3)	—	5YR6/4 (P)	II	脚上1/1 脚下1/6	内外面黒化
48-147	高坏	—	—	—	12.5	—	10YR7/3 (H)	II H	脚1/1	外面黒斑、磨滅
48-148	高坏	—	—	—	11.4	—	2.5YR5/6 (P)	II H	脚1/1	3方透かし、擦黒斑
48-149	高坏	—	—	—	9.9	—	7.5YR6/8 (O)	II	脚1/1	外面磨滅
48-150	高坏	—	—	—	—	—	5YR6/4 (P)	II	脚欠損	坏内面煤

表8 SD202出土土器觀察表(4)

単位はcm。()は推定値

括弧番号	器種	口径	頭径	肩径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
49-151	高杯	—	—	—	(10.6)	—	10YR7/3 (N)	I E	脚4/5	外面輝
49-152	高杯	—	—	—	—	—	7.5YR7/2 (H)	II A H	脚上1/1	内外面輝
49-153	高杯	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (H)	II G	脚上3/4	透かし數不明
49-154	高杯	—	—	—	—	—	7.5YR8/4 (H)	I	脚上1/1	3方透かし
49-155	高杯	—	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	II E	脚上1/1	3方透かし、外面輝
49-156	高杯	—	—	—	—	—	7.5YR5/3 (P)	II	脚上1/1	3方透かし、内外面輝
49-157	高杯	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I H	接合部	3方透かし、外面輝
49-158	高杯	—	—	—	—	—	10YR6/2 (N)	I	接合部	2方透かし
49-159	高杯	—	—	—	—	—	7YR7/4 (P)	II	破1/3	内外面輝
49-160	壺	—	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	II	口破片	外面ハケメ
49-161	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I J	口破片	口唇内肥厚、外面ハケメ
49-162	壺	—	—	—	—	—	10YR8/3 (N)	I J	口破片	施刻突羽状文
49-163	壺	—	—	—	—	—	7.5YR5/3 (P)	II H	口破片	施刻突羽状文、棒状浮文
49-164	壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	III B	口破片	口唇部棒状浮文
49-165	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	I H J	口破片	内面に施刻突文と浮文
49-166	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	I H	口破片	内外面S字状結節構文
49-167	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (H)	II H	口破片	内面ヘア刺突文
49-168	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/3 (H)	H	口破片	外表面
49-169	壺	—	—	—	—	—	10YR8/2 (N)	I H J	口破片	外面ヘア刺突文、煤
49-170	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/8 (O)	II A K	口破片	外面施刻突羽状文
49-171	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II A E	口破片	外面施刻突羽状文
49-172	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	I H J	口破片	内外面ハケメ
49-173	壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	I	口破片	外表面
49-174	壺	—	—	—	—	—	10YR8/3 (H)	II	口破片	外表面
49-175	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II H	口破片	内面
49-176	鉢	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I H	口破片	磨減
49-177	鉢	—	—	—	—	—	5YR5/8 (O)	I H	口破片	—
49-178	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (H)	II K	口破片	施刻突羽状文、内外赤彩
49-179	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II A K	脚破片	施刻突文
49-180	壺	—	—	—	—	—	2.5YR8/2 (G)	III C	脚破片	施刻突羽状文、円形浮文
49-181	壺	—	—	—	—	—	2.5Y7/3 (N)	I	脚破片	—
49-182	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I	脚破片	S字状筋縫構文
49-183	壺	—	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	II	脚破片	脚模捺文、扇形文
49-184	壺	—	—	—	—	—	10YR8/3 (H)	II H J	脚破片	脚模捺文、扇形文
49-185	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	II	脚破片	脚模捺文、刺突文
50-186	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I K	脚破片	脚模捺文、刺突文
50-187	壺	—	—	—	—	—	10YR6/2 (G)	II H	脚破片	脚模捺文、波状文
50-188	壺	—	—	—	—	—	2.5Y8/1 (N)	I J	脚破片	脚模捺文、刺突文
50-189	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II	脚破片	脚模捺文、刺突文
50-190	壺	—	—	—	—	—	2.5YR8/2 (N)	I H J	脚破片	脚模捺文、刺突文
50-191	壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II H	口破片	外面模ナデ、内外面輝
50-192	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/4 (P)	II H	口破片	内外面輝
50-193	壺	—	—	—	—	—	10YR8/9 (H)	II D H	口破片	外表面ハケメ
50-194	壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II H	口破片	口唇部内外面模ナデ
50-195	壺	—	—	—	—	—	10YR4/3 (B)	II A H	口破片	口唇肥厚、キザミ
50-196	壺	—	—	—	—	—	7.5YR5/3 (H)	II H	口破片	内外面輝、キザミ
50-197	壺	—	—	—	—	—	7.5YR5/6 (P)	II H	口破片	内外面輝、キザミ
50-198	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II H	口破片	外面輝、キザミ
50-199	壺	—	—	—	—	—	10YR5/3 (B)	II H K	口破片	内外面輝、キザミ
50-200	壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II	口破片	口唇部キザミ

表9 SD202出土土器観察表(5)

単位はcm. ()は推定値

検査番号	器種	口径	頸径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
50-201	鉢	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II E K	口破片	口唇面キザミ
50-202	甕	—	—	—	—	—	7.5YR4/2 (B)	II H	口破片	縦横模線文・波状文
50-203	甕	—	—	—	—	—	10YR5/3 (H)	II H	口破片	外面黒斑、キザミ
50-204	高壺	—	—	—	—	—	7.5YH7/8 (H)	I HK	口破片	内面煤
50-205	高壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	II H	口破片	ミガキ
50-206	高壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (O)	I H	口破片	
50-207	高壺	—	—	—	—	—	2.5Y7/2 (N)	III AH	口破片	ミガキ
50-208	高壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	I E J	口破片	壓痕
50-209	高壺	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	I	口破片	内外面煤、ミガキ

※出土土器観察表の計測値と略号について

- (1) 口径は上端径、頸径は頸部の最小値、胴径は胸部最大径、底径は下端(接地部)径を示す。高壺や台付甕の底径は、裾部および台部の径である。
- (2) 色調のカッコ内のアルファベットは、下記の色相を示す。出土土器の色調は、ある一定の傾向が感覚的に認められたため、一人の観察者による識別を表現するために付したものである。煤などが付着しているものは、断面の色相を観察している。

B : 茶褐色

G : 灰色

H : 黄褐色(肌色)

K : 黒褐色

N : 乳白色

O : 橙色(オレンジ)

P : 赤褐色(ピンク)

- (3) 肉眼観察による胎土の略号を下記に示す。

- I : 微細な黒雲母、白色・透明石英、橙色粒子を多く含む在地産土器の胎土に類似するもので、粗砂や小礫が比較的少ないきめの細かい胎土
- II : 含有物はIと同様であるが、粗砂や小礫を多く含むきめの粗い胎土
- III : 在地産の土器の胎土とは異なり、搬入されている可能性の高いもの
- A : 径2mm以上の比較的角張った白色石英が多いもの
- B : 赤褐色の風化礫や堆積岩が非常に多いもの
- C : 灰色の風化礫や堆積岩が非常に多いもの
- D : 比較的粒径の大きい黒雲母が多いもの
- E : 透明石英や黒雲母との肉眼での識別は難しいが、白雲母と思われる結晶をわずかに含むもの
- F : 赤色チャートをわずかに含むもの
- G : 大粒の橙色粒子を多量に含むもの
- H : 橙色粒子が非常に少ないか、もしくは含まないもの
- I : 角閃石をわずかに含むもの
- J : 白色・透明石英が顕著ではないもの
- K : 黒雲母が非常に少ないか、もしくは含まないもの
- L : 輝石をわずかに含むもの
- M : 須恵器の中で黑色粒子を少量含むもの

表10 SD201出土器觀察表(1)

単位はcm。()は推定値

拂回番号	器種	口径	頸径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
51-1	壺	17.5	(9.8)	(27.4)	8.1	—	5YR6/6 (O)	I FG	口4/5 濁2/3 底1/1	外面煤、木莖痕
51-2	壺	—	(10.4)	(28.6)	7.1	—	7.5YR7/4 (H)	I H	口1/6 胴1/2 底1/1	内面黒化
51-3	壺	(15.4)	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II	口1/4	磨滅
51-4	壺	12.5	9.5	—	—	—	5YR6/6 (O)	II A	口2/3 扇1/2	口内面磨滅
51-5	壺	(17.1)	—	—	—	—	10YR8/4 (N)	II	口1/5	口径大縮推定
51-6	壺	(12.6)	(10.7)	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	II F	口1/2弱 扇1/4	
51-7	壺	(15.2)	—	—	—	—	10YR7/3 (N)	II	口1/2弱	内面磨滅
51-8	壺	(11.5)	(8.9)	(17.9)	—	—	7.5YR7/6 (H)	II	口2/3 胴1/2弱	外面黑斑、内面黒化
52-9	壺	16.8	(10.5)	(26.1)	(8.1)	29.7	2.5YR6/4 (H)	I	口~胴1/2 底破片	
52-10	壺	(12.6)	(9.7)	—	—	—	7.5YR8/4 (O)	II H	口1/2	外面黒斑
52-11	壺	12.1	8.7	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I G	口1/1	
52-12	壺	—	9.3	24.5	7.2	—	10YR8/6 (O)	II G	口7/8欠損	外面黒斑、磨滅
52-13	壺	13.7	9.7	25.6	7.8	28.7	7.5YR7/3 (H)	II	胴中央部1/2欠損	外面黒斑、木莖痕
52-14	壺	(10.7)	(7.7)	20.1	(7.0)	23.0	7.5YR7/8 (O)	I J	口2/3 胴2/3 底1/2	外面黒斑
53-15	壺	19.5	10.8	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II A	口1/1 扇1/2	
53-16	壺	19.1	10.5	—	—	—	5YR7/8 (O)	II A D	口3/4 胴1/2	胴外面煤
53-17	壺	(14.6)	(9.0)	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I D F	口1/3	内外面黒化
53-18	壺	—	(8.1)	—	—	—	5YR5/4 (H)	I D H	強1/2	内外面赤彩
53-19	壺	—	(7.7)	21.3	10.0	—	7.5YR7/4 (H)	II	肩2/3 底1/1	外面黒斑、煤
53-20	壺	(8.4)	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I H	口1/3	磨滅
53-21	壺	12.0	7.8	—	—	—	7.5YR7/6 (H)	II F	口~肩2/3	肩外面黒斑
53-22	壺	6.8	5.1	9.7	3.2	(11.5)	2.5YR5/8 (O)	I	完形	
53-23	壺	—	6.4	13.4	—	—	5YR6/6 (O)	I G	口1/2 濁2/3	胴下外面黒斑
53-24	壺	(5.3)	(5.4)	13.4	{ 4.4 }	17.6	7.5YR7/4 (H)	I	口~底1/2	外面黒斑
53-25	壺	—	—	13.7	—	—	7.5YR7/4 (H)	I H	口欠損	
54-26	壺	11.9	5.9	13.5	4.6	18.0	5YR6/6 (O)	I	完形	磨滅
54-27	壺	11.0	5.6	—	—	—	2.5YR6/8 (O)	I H	口1/1 扇1/3	磨滅
54-28	壺	(9.9)	(7.6)	(12.0)	—	—	7.5YR7/4 (H)	II E G	口1/2 濁1/3	
54-29	壺	(8.2)	(6.8)	10.6	3.0	11.0	7.5YR7/4 (H)	I G J	口1/3 胴2/3 底1/1	
54-30	壺	7.7	6.2	9.1	4.2	8.7	10YR7/2 (H)	II	完形	内外面黒斑
54-31	壺	8.8	6.6	8.4	3.4	9.0	2.5YR6/8 (O)	I	完形	胴外面黒斑
54-32	壺	(7.6)	(6.2)	8.4	3.2	9.1	5YR6/6 (O)	I H	口2/3欠損	胴外面黒斑
54-33	壺	8.1	6.3	8.0	3.5	8.0	2.5YR6/8 (O)	I H	完形	胴下外面黒斑
54-34	壺	(8.6)	(6.3)	7.8	3.6	7.4	5YR5/8 (O)	I	口1/8 胴1/2 底1/1	内面黒化
54-35	壺	(7.7)	(6.1)	—	—	—	5YR5/8 (O)	I	口~肩1/2	
54-36	壺	7.3	5.9	7.3	3.3	7.5	5YR6/8 (O)	I H	完形	底内面黒斑
54-37	壺	(6.9)	6.1	9.0	5.7	9.3	7.5YR7/4 (H)	I	口一部欠損	焼成後穿孔
54-38	壺	6.4	5.3	(8.4)	—	—	7.5YR7/4 (O)	II G J	口1/1 濁1/2	外面黒斑
54-39	壺	—	—	(8.4)	3.7	—	2.5YR6/8 (O)	I F	肩1/2 底1/1	
54-40	底部	—	—	—	3.7	—	5YR6/6 (O)	I	底1/1	
54-41	壺	(13.9)	(14.4)	(18.0)	—	—	2.5YR5/6 (O)	II G K	口1/4 胴1/3	内外面磨滅
54-42	鉢	(14.4)	11.1	11.3	4.0	5.7	5YR5/8 (O)	I J	口1/3欠損	内外面磨滅
54-43	鉢	12.8	9.4	9.2	2.4	6.2	10YR7/4 (H)	I B G	完形	
54-44	鉢	(9.9)	8.0	8.0	—	—	10YR7/3 (H)	I	口~胴1/4	外面黒斑
54-45	底部	—	—	—	(3.0)	—	10YR6/2 (H)	II	底1/2	外面黒斑、内面黒化
54-46	壺	7.4	—	7.7	3.2	5.7	7.5YR7/4 (O)	II F	完形	
54-47	鉢	(38.7)	(34.7)	(37.0)	—	—	10YR7/4 (N)	I J	口~肩1/7	胴外面煤
55-48	縹	—	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II H	口破片	外面縹ナシ・煤
55-49	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	II K	口破片	内面縹推度状文
55-50	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	II H K	口破片	内面縹文

表11 SD201出土土器観察表(2)

単位はcm。()は推定値

採取番号	岩種	口径	縦径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
55-51	壺	—	—	—	—	—	5YR7/6 (H)	I K	口破片	口唇内傾面、内外面ハケメ
55-52	壺	—	—	—	—	—	7.5YR8/4 (N)	I E K	頸破片	凸帯、下部櫛刺突、外面ハケメ
55-53	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I H	頸破片	凸帯、内面櫛刺突文
55-54	壺	—	—	—	—	—	5YR6/6 (O)	I	口破片	外面櫛刺突文
55-55	壺	—	—	—	—	—	10YR6/2 (G)	III B C	口破片	外面棒状・円形浮文、ハケメ
55-56	壺	—	—	—	—	—	2.5YR6/6 (P)	II H	口破片	外面櫛刺突羽状文
55-57	壺	—	—	—	—	—	5YR7/4 (N)	I	口破片	外面櫛刺突羽状文、棒状浮文
55-58	壺	—	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	III B	口破片	口唇部櫛刺突文
55-59	壺	—	—	—	—	—	5YR6/6 (O)	II D	口破片	内面棒状浮文
55-60	壺	—	—	—	—	—	5YR7/8 (O)	II	口破片	外面ハケメ
55-61	壺	—	—	—	—	—	5YR7/6 (P)	I	口破片	内面豆粒状浮文
55-62	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II	口破片	内面棘突文、外面キザミ
55-63	壺	—	—	—	—	—	10YR6/1 (G)	III C	口破片	外面キザミ、内面筋節羽旋文
55-64	壺	—	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	I H	口破片	磨滅
55-65	亞	—	—	—	—	—	7.5YR8/4 (N)	II G K	口破片	磨滅
55-66	壺	—	—	—	—	—	5YR7/6 (O)	I	口破片	口唇部内傾面
55-67	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	I K	口破片	
55-68	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	I J	口破片	外面一部黒斑
55-69	壺	—	—	—	—	—	10YR8/3 (H)	III A H	口破片	
55-70	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/8 (O)	I J	口破片	
55-71	壺	—	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	I	口破片	外面一部黒斑
55-72	壺	—	—	—	—	—	10YR8/4 (H)	I E H	口破片	口唇部内傾面
55-73	壺	—	—	—	—	—	5YR6/6 (O)	I H	口破片	
55-74	壺	—	—	—	—	—	10YR8/4 (N)	I H J	口破片	
55-75	歩	—	—	—	—	—	10YR6/2 (H)	III C H	頸破片	内外面ハケメ、外面一部黒斑
55-76	歩	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II H	頸・胴破片	外面ハケメと一部黒斑
55-77	亞	—	—	—	—	—	7.5YR5/3 (B)	III B C	頸破片	外面櫛刺突文
55-78	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	III B J	胴破片	外面櫛刺突文、赤彩
55-79	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/4 (H)	II	胴破片	外面櫛刺突横線文とハケメ
55-80	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/5 (O)	II	胴破片	外面櫛刺突羽状文と黒斑
55-81	壺	—	—	—	—	—	7.5YR8/6 (H)	II F G	頸・胴破片	外面櫛刺突羽状文
55-82	壺	—	—	—	—	—	7.5YR8/4 (H)	II G K	肩破片	有段羽状文、一部黒斑
55-83	亞	—	—	—	—	—	5YR6/6 (O)	II G K	胴破片	櫛刺突羽状文、豆粒状浮文
55-84	歩	—	—	—	—	—	7.5YR8/6 (H)	I	頸破片	外面櫛刺突羽状文
55-85	壺	—	—	—	—	—	10YR8/3 (H)	II G	頸・胴破片	凸帯、櫛横横線文・波状文
55-86	壺	—	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I H	胴破片	櫛横横線文・櫛刺突文
55-87	壺	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II	胴破片	櫛横横線文・波状文
55-88	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	II G	胴破片	櫛横横線文・波状文
55-89	亞	—	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I H	胴破片	櫛横横線文・櫛刺突文、浮文
55-90	壺	—	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	I J K	胴破片	櫛横横線文・櫛刺突文
55-91	壺	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I K	胴破片	櫛横横線文
55-92	亞	—	—	—	—	—	5YR5/6 (O)	II E H	胴破片	外面二枚貝の刺突
55-93	底部	—	—	—	—	9.4	5YR5/8 (O)	I H	底1/1	
55-94	底部	—	—	—	—	8.3	7.5YR8/6 (O)	II A	底1/1	木葉痕
55-95	底部	—	—	—	(10.0)	—	2.5YR5/4 (P)	II H	底1/4弱	
55-96	底部	—	—	—	—	8.1	7.5YR8/3 (H)	II	底1/1	
55-97	底部	—	—	—	—	7.8	5YR8/3 (N)	II	底1/1	磨滅
55-98	底部	—	—	—	—	6.7	10YR7/3 (H)	II H	底一部欠損	外面赤彩、内面黒化
55-99	底部	—	—	—	—	—	7.5YR7/4 (N)	I H	底1/4	木葉痕
55-100	底部	—	—	—	(7.7)	—	5YR5/4 (B)	II	底1/2	木葉痕

表12 SD 201出土土器観察表(3)

単位はcm。()は推定値

番号	断面	口径	頸径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
56-101	底部	—	—	—	(9.3)	—	10YR8/3 (N)	II	底1/3	木茎痕
56-102	底部	—	—	—	(7.0)	—	10YR8/4 (H)	II	底1/2	木茎痕
56-103	底部	—	—	—	5.9	—	5YR7/4 (P)	II A H	底2/3	木茎痕
56-104	底部	—	—	—	6.6	—	2.5YR8/4 (P)	I H	底1/1	木茎痕
56-105	底部	—	—	—	(6.0)	—	10YR7/2 (H)	I	底1/2	底減
56-106	底部	—	—	—	(4.6)	—	7.5YR7/4 (H)	II G	底1/3	
56-107	底部	—	—	—	5.0	—	10YR7/4 (H)	I H	底1/1	
56-108	底部	—	—	—	5.7	—	7.5YR8/4 (H)	II G	底1/1	底減
56-109	底部	—	—	—	(5.6)	—	10YR8/4 (H)	II H	底1/2	底減
56-110	底部	—	—	—	5.0	—	5YR5/8 (O)	I	底1/1	木茎痕
56-111	底部	—	—	—	3.5	—	10YR7/4 (H)	II H	底1/1	底減
57-112	甕	(15.2)	(14.6)	(17.4)	—	—	10YR7/2 (H)	II E H	口～肩上1/4	外面煤
57-113	甕	(18.5)	(17.3)	—	—	—	2.5YR5/6 (P)	II H	口～肩1/2	底減
57-114	甕	(20.8)	(20.2)	(23.2)	—	—	2.5YR8/6 (P)	II A H	口～肩上3/8	内面黒化
57-115	甕	(19.7)	(19.9)	(23.9)	—	—	5YR8/6 (O)	II A	口～肩1/8	外面煤
57-116	甕	(12.8)	—	(15.1)	—	—	5YR7/6 (P)	II A	口～肩1/2	輪積み痕
57-117	甕	(20.1)	(18.0)	27.5	11.1	34.8	7.5YR7/3 (H)	II H	口～肩1/2次損	内外面煤
57-118	甕	(15.0)	(12.2)	(17.8)	—	—	7.5YR6/6 (H)	I B	口～部 刷1/2	外面煤
58-119	甕	(16.7)	(14.9)	(22.4)	(9.4)	25.8	7.5YR7/6 (H)	II G	口1/2 肩1/3 台1/1	内外面煤
58-120	甕	(16.3)	(14.8)	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II A	口～肩1/6	底減、外面ハケメ
58-121	甕	18.8	16.1	21.6	—	—	2.5YR7/2 (H)	II A H	口7/8 肩3/4	内外面煤
58-122	甕	14.4	11.9	21.8	—	—	5YR6/6 (H)	II G	口1/1 肩1/2	内外面煤
58-123	甕	(15.2)	(12.8)	—	—	—	5YR7/3 (P)	II G	口1/4	
58-124	甕	(43.2)	(41.1)	(41.3)	—	—	10YR7/3 (H)	II D	口～肩1/2	内外面煤
59-125	甕	(18.9)	(16.8)	—	—	—	7.5YR6/6 (H)	III D E	口1/3	外面煤
59-126	甕	(16.7)	(15.9)	—	—	—	5YR6/6 (O)	II D	口1/6	内外面煤
59-127	甕	(16.8)	(15.3)	—	—	—	5YR5/4 (B)	II E	口1/7	口様大幅推定
59-128	甕	(14.2)	(12.2)	(21.4)	—	—	5YR8/3 (P)	II	口3/4 肩1/2	内外面煤
59-129	甕	12.7	11.4	—	—	—	7.5YR5/3 (H)	II D	口～肩1/1	内外面煤
59-130	甕	(14.0)	(12.2)	—	—	—	7.5YR6/4 (H)	II D	口～肩1/2	内外面煤
59-131	甕	(13.2)	(11.2)	(21.3)	—	—	10YR7/3 (H)	II	肩1/2・台欠損	内外面煤
59-132	甕	14.1	11.6	23.6	—	—	10YR8/4 (H)	II D	口～肩1/1 桶下1/2	内外面煤
59-133	甕	14.6	12.5	23.7	—	—	10YR8/3 (H)	II	口一部・台欠損	内外面煤
60-134	甕	10.4	8.6	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II D	口～肩1/1	横線文無し
60-135	甕	12.9	10.8	19.6	—	—	5YR8/3 (P)	II D	口～肩上1/2	内外面煤
60-136	甕	14.6	12.4	—	—	—	7.5YR6/2 (H)	II D H	口1/2 桶上1/2	内外面煤
60-137	甕	14.0	11.3	—	—	—	7.5YR6/3 (P)	II D	口1/1 扇1部	横線文無し
60-138	甕	(13.0)	(11.3)	—	—	—	10YR3/2 (H)	II D H	口3/4 桶上1/4	外面煤
60-139	甕	(15.3)	(13.0)	—	—	—	7.5YR8/4 (H)	II D	口1/2 扇1/2	外面煤
60-140	甕	(14.2)	(12.5)	—	—	—	10YR6/3 (H)	II H	口1/2 桶上1/5	底減
60-141	甕	(14.8)	(12.8)	—	—	—	10YR7/3 (H)	II	口1/2 扇1/3	外面煤
60-142	甕	(14.2)	(12.4)	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	II	口9/10 扇1/3	底減
60-143	甕	—	—	—	8.5	—	5YR7/4 (P)	II	肩下1/3 台1/1	内外面煤
60-144	甕	—	—	—	8.0	—	2.5YR7/4 (P)	II D H	肩下1/2 台1/1	内外面煤
60-145	甕	—	—	—	8.8	—	5YR7/6 (H)	II D H	台1/1	内面煤
61-146	甕	—	—	—	8.3	—	10YR8/3 (H)	II D	台1/1	
61-147	甕	—	—	—	—	—	7.5YR8/3 (H)	II D H	台上1/1	
61-148	甕	—	—	—	8.8	—	2.5YR6/4 (P)	II	台4/5	折り返し無し
61-149	甕	—	—	—	8.0	—	10YR8/4 (H)	II D H	台1/1	内面煤
61-150	甕	—	—	—	—	—	7.5YR7/3 (H)	II	接合部	内外面煤

表13 SD 2.0 I出土土器観察表(4)

単位はcm、()は推定値

拂因番号	器種	口径	縁径	胴径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	備考
61-151	甕	—	—	—	8.7	—	5YR7/6 (H)	II G	合3/4	内面煤
61-152	甕	—	—	(9.0)	—	10YR7/3 (H)	II G	台1/6		
61-153	甕	—	—	(9.2)	—	2.5YR7/6 (P)	II B F	台1/4	内面煤	
61-154	甕	—	—	—	—	10YR7/2 (H)	II	台1/4		
61-155	甕	—	—	(8.8)	—	7.5YR7/4 (H)	II	台2/3		
61-156	甕	—	—	—	—	10YR6/4 (H)	II	接合部1/1		
61-157	甕	—	—	—	—	2.5YR7/4 (H)	II H	接合部1/1	内面煤	
61-158	甕	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II F	台1/6		
61-159	甕	—	—	—	—	5YR7/8 (O)	I K	口・肩破片		
61-160	鉢	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	II	口・肩破片		
61-161	甕	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	II	口破片	外面煤	
61-162	甕	—	—	—	—	5YR7/8 (O)	II G	口破片		
61-163	甕	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	I H	口破片		
61-164	鉢	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II	口破片	内外面煤	
61-165	甕	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	II	口破片		
61-166	甕	—	—	—	—	10YR5/3 (H)	II	口破片	内外面煤	
61-167	甕	—	—	—	—	7.5YR5/3 (H)	II H	口破片	内外面煤、キザミ無し	
61-168	甕	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	II D	口破片	内外面ハケメ	
61-169	甕	—	—	—	—	7.5YR5/8 (O)	I J	口破片	内外面煤	
61-170	甕	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II	口破片	内面煤	
61-171	甕	—	—	—	—	10YR6/2 (H)	II	口破片	内外面煤	
61-172	甕	—	—	—	—	10YR5/2 (H)	II H	口破片	内面煤、内外ハケメ	
61-173	深鉢	—	—	—	—	2.5Y4/2 (G)	I H	破片	条痕	
61-174	高坏	—	—	—	—	10YR6/3 (H)	II A F	脚破片	外面脚刺突	
61-175	高坏	—	—	—	—	5YR6/6 (O)	II	脚破片	外面ハケメ	
62-176	高坏	—	—	—	10.0	—	10YR7/6 (O)	I	坏下1/1 脚1/1	磨滅
62-177	高坏	—	—	—	9.9	—	5YR7/4 (P)	II H	脚ほほ1/1	内外面煤
62-178	高坏	—	—	—	(11.2)	—	7.5YR7/6 (O)	II	脚1/4	磨滅
62-179	高坏	—	—	(11.8)	—	10YR7/4 (H)	I J L	脚1/2欠損	内外面煤	
62-180	高坏	—	—	—	—	5YR6/8 (O)	I	脚上2/3	3方透かし	
62-181	高坏	—	—	—	9.1	—	7.5YR6/6 (O)	I	脚3/4	磨滅
62-182	高坏	—	—	—	—	7.5YR7/0 (O)	I	脚2/3		
62-183	高坏	(14.8)	—	(9.5)	(9.9)	10YR7/3 (H)	I	坏2/3 脚1/2	3方透かし、源内黒化	
62-184	高坏	(15.2)	—	—	—	10YR7/3 (H)	I	坏1/4		
62-185	高坏	(23.0)	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I	坏1/5	磨滅	
62-186	高坏	(17.8)	—	—	—	5YR6/6 (O)	II	坏1/2 脚上1/1	磨滅	
62-187	高坏	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I	脚上1/1	磨滅	
62-188	高坏	(15.9)	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I G	坏1/2	口径大嘴推定	
62-189	高坏	15.8	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I	坏7/8		
62-190	高坏	—	—	—	—	7.5YR7/6 (O)	I	脚欠損		
62-191	高坏	—	—	—	(14.2)	—	7.5YR6/4 (O)	I	脚7/8	3方透かし、外面黒斑
62-192	高坏	—	—	—	11.3	—	10YR6/2 (H)	I	脚5/6	3方透かし、内外黒化
62-193	高坏	—	—	—	(11.1)	—	7.5YR7/6 (O)	I F	脚1/2欠損	内外黒斑、磨滅
62-194	高坏	—	—	—	—	5YR7/6 (O)	II	脚欠損	3方透かし、外面黒斑	
62-195	高坏	—	—	—	—	7.5YR7/4 (H)	I	脚欠損	3方透かし、坏内面煤	
62-196	高坏	—	—	—	—	7.5YR6/3 (H)	I	脚欠損	3方透かし	
62-197	高坏	—	—	—	—	7.5YR7/6 (H)	I	脚欠損		
62-198	器台	(9.8)	—	—	—	—	10YR7/4 (H)	I H J	口1/2	

表14 SD303出土土器觀察表

単位はcm. () は推定値

括弧番号	器種	口径	瓶径	肩径	底径	高さ	色調	胎土	残存状況	備考
63-1	壺蓋	15.9	—	—	—	3.5	N3/0	—	全体の2/3強	外面黒化
63-2	壺身 (15.3)	—	—	—	—	5.1	N8/0	—	全体の1/2強	縦條 (12.5)
63-3	壺身 (15.0)	—	—	—	—	4.4	N7/0	M	□5/8欠損	縦條11.4
63-4	壺身 (14.9)	—	—	—	8.3	6.5	N7/0	—	口～体1/8 底1/1	底へラ切り
63-5	壺身 (15.8)	—	—	—	—	—	5Y6/1	M	□1/6	
63-6	壺	—	—	(17.5)	—	—	5Y6/1	M	胴1/6	外面釉
63-7	高壺	—	—	—	8.2	—	7.5Y7/1	M	胴1/1	内外面黒化
63-8	壺	—	—	—	—	—	N7/0	—	崩破片	内面磨り消し
63-9	壺	11.6	—	—	4.5	3.1	10YR6/2 (H)	II D H	全体の2/3	内外赤彩、外煤
63-10	壺 (16.2)	—	—	(9.9)	—	4.0	10YR6/3 (H)	II D	全体の1/2	内外面赤彩
63-11	壺 (11.0)	—	—	—	—	—	2.5YR5/2 (G)	II D H	口1/4	内外面赤彩
63-12	壺 (12.9)	—	—	4.5	3.2	7.5YR4/1 (B)	II D H	口1/6 体1/4	底外面黒斑	
63-13	手握 (6.9)	—	—	1.0	2.7	10YR7/3 (H)	I	全体の1/4強		
63-14	手握 6.6	—	—	2.1	2.3	2.5Y7/1 (H)	I J	全体の1/2強		
63-15	手握 (6.7)	—	—	(3.0)	2.4	2.5Y6/2 (H)	I H J	全体の1/4	外面黒斑	
63-16	手握 (7.5)	—	—	(2.2)	2.8	2.5Y6/2 (H)	I H J	全体の1/4強	外面輪積み痕	
63-17	手握 (7.6)	—	—	4.4	2.1	5Y6/2 (H)	I D J	全体の1/2		
63-18	手握 (6.5)	—	—	(3.5)	2.9	2.5Y6/2 (H)	I J	全体の1/2	外面黒斑	
63-19	手握 7.2	—	—	2.1	2.9	5Y6/2 (H)	I H J	完形	外面黒斑	
63-20	手握 7.3	—	—	2.4	2.9	7.5Y8/1 (G)	I	完形		
63-21	手握 (7.9)	—	—	3.2	3.7	7.5YR6/4 (H)	I J	全体の1/4		
63-22	手握 (8.0)	—	—	(2.6)	3.6	10YR6/4 (H)	I J	全体の1/4		
63-23	手握 (7.6)	—	—	3.6	3.7	7.5YR6/1 (H)	I G J	全体の1/2	外面輪積み痕	
63-24	手握 (7.9)	—	—	(4.0)	3.6	7.5YR6/4 (H)	I H J	全体の1/4弱		
63-25	手握 9.1	—	—	4.8	3.8	5Y7/2 (H)	I J	全体の1/2		
63-26	手握 (8.6)	—	—	2.7	4.4	5Y6/2 (H)	I H J	口1/8 体1/4 底1/1		
63-27	手握 (8.2)	—	—	(4.0)	5.5	7.5Y6/1 (H)	II D H	口1/8 体1/2 底2/3	外面輪積み痕	
64-28	壺 23.4	18.9	22.0	7.5	26.4	2.5Y6/4 (H)	I L	口2/3 胴1/1 底2/3	口底内面黒斑	
64-29	壺 (18.2)	15.7	17.4	(5.8)	20.0	10YR7/2 (H)	I H	口2/3 胴1/2 底1/4		
64-30	壺 15.3	14.4	14.7	5.8	12.7	7.5YR7/2 (H)	I D L	全体の4/5	外面黒斑	
64-31	壺 (15.7) (14.6)	(15.3)	6.0	16.6	10YR4/3 (H)	I D J	口1/5 胴1/3 底2/3		内外面輪積み痕	
64-32	壺 32.0	28.0	30.5	(9.0)	19.1	10YR5/3 (B)	I D L	口3/4 胴1/2 底一部	胴下外面黒斑	
65-33	壺 (24.1) (19.6)	—	—	—	—	10YR5/3 (B)	I D	口1/8	口徑大幅推定	
65-34	壺 (24.5) (20.4)	—	—	—	—	7.5YR6/4 (O)	I D H	口1/2		
65-35	壺 (21.8) (17.2)	—	—	—	—	7.5YR6/6 (O)	I D H	口1/2		
65-36	壺 (15.3) (13.5)	—	—	—	—	2.5Y6/1 (G)	II D H	口～肩1/4	内面黒化	
65-37	壺 (13.7) (12.0)	—	—	—	—	7.5YR5/3 (B)	II H	口～肩1/4	口径大幅推定	
65-38	壺 —	—	—	—	—	7.5YR4/1 (G)	II D H	台1/3	内外面黒化	
65-39	壺 15.0	—	—	—	—	5Y7/2 (G)	I H	口2/3 潟2/3	内外面輪積み痕	
65-40	壺 11.5 10.8	11.0	4.1	8.5	7.5YR6/1 (H)	I H J	ほぼ完形	口肩外面黒斑		
65-41	鉢 (18.0)	—	—	--	—	10YR7/2 (H)	I J	口1/3 胴1/4	内面赤彩	
65-42	壺 —	—	(14.6)	(4.4)	—	7.5YR4/2 (H)	II H	胴1/2 底1/2	焼成後穿孔、煤	
65-43	壺 14.1 11.6	(25.4)	7.7	(31.4)	7.5YR7/4 (H)	II	口1/2 胴1/3 底1/1	内外面煤		
65-44	—	—	—	—	—	10YR7/3 (H)	II	破片	墨書	
65-45	壺 14.8 13.8	16.6	—	—	—	10YR8/3 (H)	I D	口3/4 胴上3/4		

表15 各遺構出土遺物観察表

単位はcm、()は推定値

検査番号	遺構名	種別	長さ	幅	厚さ	材質	備考
67—1	S D301	敲石	13.1	4.7	3.8	変輝綠岩	両端欠損
67—2	S D301	敲石	11.1	3.5	2.7	硬質砂岩	両端および側面に敲打痕
67—3	S D301	敲石	7.8	3.5	3.0	細粒花崗岩	両端に敲打痕
67—4	S D301	敲石	—	5.8	3.9	硬質砂岩	端部に敲打痕、片端欠損
67—5	S D301	敲石	17.5	7.6	6.7	硬質粗粒砂岩	片端に敲打痕
67—6	S D301	敲石	12.3	8.0	6.0	細粒砂岩	片端に敲打痕、敲打痕不明瞭
67—7	S D301	敲石	7.9	6.8	5.5	中粒花崗岩	敲打部分の剥離顯著
67—8	S D301	敲石	7.3	6.9	5.5	赤色チャート	周縁部に敲打痕?
67—9	S D301	敲石	9.2	6.2	1.3	硬質砂岩	周縁部に敲打痕、天竜川系砂岩
67—10	S D301	砥石?	15.6	—	—	流紋岩質凝灰岩	片側欠損、研磨痕不明瞭
67—11	S D301	砥石	—	—	—	細粒硬質砂岩	裏面と周辺欠損、表面に凹み
67—12	S D301	砥石	—	1.1	1.1	凝灰質シルト岩	側面に研磨痕、片端欠損
67—13	S D301	—	—	5.9	5.7	凝灰岩質砂岩	角部に壓滅痕、両端欠損
68—14	S D202	敲石	13.8	5.9	4.2	中粒硬質砂岩	両端敲打痕、両側面一部敲打痕
68—15	S D202	敲石	13.9	5.3	3.1	砂質中粒砂岩	両端に敲打痕
68—16	S D202	敲石	10.3	4.8	4.2	硬質ヒン岩	両端に敲打痕、天竜川系ヒン岩
68—17	S D202	敲石	—	6.5	4.9	粗粒砂岩	片端に敲打痕、片端欠損
68—18	S D202	敲石	—	5.7	5.2	細粒片麻岩	片端に敲打痕、片端欠損
68—19	S D201	砥石	—	—	3.5	中粒砂岩	表面のみ研磨痕、一部残存
68—20	S D202	砥石	—	8.0	2.7	花崗岩質細粒砂岩	表面に研磨痕、片側欠損
68—21	S D202	筋鍛車	外径 (6.9)	内径 (1.0)	1.0	土製	内径は平坦面側が広い、約1/2欠損
68—22	S D201	—	—	7.8	—	ホルンフェルス	両端と裏面欠損、磨滅
68—23	S D201	刷片	7.2	8.5	2.2	流紋岩質凝灰岩	下端の凹みは使用痕?
68—24	S D201	—	—	6.0	1.8	流紋岩質凝灰岩	表・側面研磨痕、両側と裏面欠損
68—25	S D201	—	—	6.4	4.5	珪質粗粒砂岩	両端欠損
68—26	S D201	敲石	—	5.2	3.1	粗粒砂岩	片端と側面の一部に敲打痕、両端欠損
68—27	S D201	刷片	4.0	2.5	1.5	メノウ	表面は自然面
68—28	S D303	板状	—	2.2	0.1	木製	端部は両側面を削り尖る、片端欠損
68—29	S D304	板状	(21.7)	3.7	0.6	木製	端部は山形で穿孔、片端欠損
68—30	包含層	板状	5.0	1.4	0.3	鉄製	板状の突起、錆進行

第V章　まとめ

第1節　山の神遺跡の環濠とその編年的位置付け

当遺跡からまとまって大量の土器が出土した遺構にSD201・202・301がある。これらは本文中で環濠と記述してきたが、狭い調査範囲のため、その性格は不明な点が多い。出土した土器からは、SD301・202・201の順に溝が埋没したことは理解でき、あたかも順番にその機能を維持させるために掘削されたかのような状況であったため、環濠とした。しかし、南に位置する浜松アリーナ建設時の調査では、弥生時代の環濠が1条確認されているにすぎない（佐藤1989）。第4図のSD04・05・169がつながり、1条の環濠になるとされ、出土土器は欠山式の後半段階のものである。今回の調査ではSD202に連続するものと考えられ、伊場遺跡の環濠（向坂他1977）のように竈斧形になる。その環濠内の南北の距離は、推定で約200mである。

SD202の外側に位置するSD301は、南側でSD202と合流することも予想されるが、ここでは第4図のSD07につながるものと考えている。その先はSD169に合流するのであろうか。

SD201は規模が大きく、存在するならばどこかで確認されるはずであり、浜松アリーナの北側で屈曲している可能性が高い。そうすると、かなり環濠内の面積が縮小することになる。古墳時代になると居館域や祭祀域などの限定された空間を調む例も多く、そうした團郭施設になる可能性もある。推測ばかりで、断定的なことは何一つ言えないのが現状であるが、その分、今後実施されるであろう発掘調査の結果が楽しみでもある。

環濠の掘削や廃絶は、当時の社会状況を如実に示すものであり、他遺跡との比較検討を行ううえでも、出土土器の編年的位置付けが問題となる。遠江地方の弥生時代後期～古墳時代前期の上器編年は、先学諸氏の優れた研究があるが、紙数の関係上研究史と方法論は稿を改める。ここでは、遠江地方の編年研究を精力的に進めている中嶋氏と鈴木敏則氏の編年（中嶋1988、鈴木敏1991）を参考にして、時期の呼称とその基準資料を呈示しておく。西遠江地域の時期区分を基準とし、併行すると考えられる東遠江の基準資料をカッコ付きで示す。文献は文末の引用・参考文献を参照していただきたい。

弥生時代後期は伊場式と欠山式に2大別し、古墳時代前期は元屋敷式とする。そして、各期を古・中・新の3段階に分ける。以下に基準資料をまとめるが、+は存在するが良好な一括資料に欠けることを意味する。

伊場式古段階	+	(+)
タ 中 タ	伊場遺跡YT1	(二之宮貝塚)
タ 新 タ	梶子遺跡SK6・7	(堺越ジョウヤマ遺跡溝1)
欠山式古段階	+	(梶子塚G地点6住)
タ 中 タ	山の神遺跡SD202	(土橋遺跡SK77)
タ 新 タ	中村遺跡Q23区上器	(+)
元屋敷古段階	大平遺跡SB04	(川田・藤藏渕遺跡SF401)
タ 中 タ	川久保船渡遺跡SX16	(三沢西原遺跡SX21)
タ 新 タ	山の神遺跡SD201上層	(土橋遺跡SK76)

環濠の掘削時期は不明となる場合が多いが、廃絶の時期はある程度押さえることは可能である。ここで山の神遺跡の環濠の廃絶時期をまとめる。SD301は伊場式中段階、SD202は欠山式中段階、SD201下層は元屋敷式古段階、上層は新段階には埋没し、完全にその機能を失ったものと考えられる。

第2節 遠江地方における弥生時代後期から 古墳時代前期の環濠の廃絶について

遠江地方の弥生時代後期から古墳時代前期の環濠集落は角江遺跡（佐野・中嶋1996）、伊場・梶子遺跡（鈴木敏1991）、梶子北遺跡（鈴木敏1995）、山の神遺跡（佐藤1989）、松東遺跡（佐藤1990）、祝田遺跡（鈴木光1993）、椿野遺跡（川江1982、柴田1993）、加茂東原遺跡（清水1995）、堀越ジョウヤマ遺跡（白澤1991）、土橋遺跡（水井1985）、鶴松遺跡（水井1987）、一色前田遺跡（松井1988）、原新田遺跡（松本1987）などである。

これらの集落跡で、環濠の廃絶時期が確定できる例は少ない。出土土器はほとんどの場合時期差があり、ある程度のまとまった量が伴わなければ時期を限定するには無理がある。しかし、今回は無理を承知で編年的位置付けを考えてみたい。

古い順にその廃絶時期を挙げると、伊場式中段階は伊場遺跡と鶴松遺跡がある。鶴松遺跡例は、I・III次調査で発見されたものであるが、II次のSD7からも大量の土器が出土しており、新段階にも存在する可能性を指摘しておきたい。

伊場式新段階では梶子遺跡、山の神遺跡、椿野遺跡、堀越ジョウヤマ遺跡がある。

欠山式古段階は角江遺跡と祝田遺跡が考えられる。角江遺跡の3SD55は様々な時期の上器が混在しており、比較的まとまりのある7SD55出土土器から判断しているが、量的に少なく確定し難い。祝田遺跡では、SD54を環濠と報告しているが、L1大であり、旧河道と判断した。むしろ、SD50のほうが可能性は高い。

欠山式中段階になると、松東遺跡、山の神遺跡、椿野遺跡、加茂東原遺跡など比較的例は多い。

元屋敷式古段階では特殊な例も含めるが、大平遺跡、山の神遺跡、土橋遺跡、一色前田遺跡、原新田遺跡がある。その他に、梶子北遺跡からは古式土師器が環濠内から多量に出土していると報告されているが、詳細は本報告を待ちたい。大平遺跡と土橋遺跡例は、大型掘立柱建物跡や高床式建物跡など特殊施設を囲んだもので、豪族居館との関連性が指摘されている。一色前田遺跡の環濠出土上器は、掲載された実測図ではそれほど新しい様相は見出せないが、聚穴住居跡からは元屋敷式古段階の上器が出土しており、とりあえずこの段階に比定しておきたい。

元屋敷式新段階では山の神遺跡例のみである。土橋遺跡のような比較的小規模な区画を形成しているかもしれないが、類例の増加を待ちたい。

弥生時代中期の拠点型集落が後期段階に継続する場合、伊場遺跡や鶴松遺跡のように伊場式中段階にも環濠が存在するようである。中期から継続する角江遺跡でも、区画溝がいくつか発見されているが不明な点が多い。これらは、人口増や新たな生産域の確保のため、旧来の行き詰った環境から新たな展開をするため、集落の再編成が行われた結果と考えている。伊場遺跡は三重に巡る環濠に強固に守られた集落跡であり、あたかも戦乱状態にあるかのようなイメージを抱かせるが、後期社会への転換期を示す一つの象徴と捉えておきたい。

伊場式新段階の環濠集落数は比較的多く、拠点型集落は規模を拡大させ、新たに形成された集落は成長し、母村としての地位を確立し環濠を備えるまでに至ったものと理解している。この時期から、集落数も激増し、生産域が拡大し、隣接集落との軋轢が生じてきたことも環濠化への一つの要因と考えたい。

角江遺跡や祝田遺跡例は欠山式古段階に位置付けられるが、不明な点もあり保留しておきたい。山の神遺跡では継続的に環濠がつくられたと考えるより、断続的であったと思われるため、環濠の存在期間は、一部の拠点型集落を除き限定されるものと考えられる。この段階にも存続すると、伊場式中

段階から欠山式中段階まで連続してしまうことになるからである。

欠山式中段階にも少数ながら存在する。山の神道跡や椿野遺跡は伊場式新段階より集落規模を拡大させ、周辺部の開拓と周辺諸集落の統合により、拠点型集落へと発展し環濠がつくられたものと考えたい。この段階では地域内部というより、より遠方との対外的関係により環濠が備えられたのではないかと予測している。東遠江地域では加茂東原遺跡のみであり、今後の調査によって類例は増加するであろう。

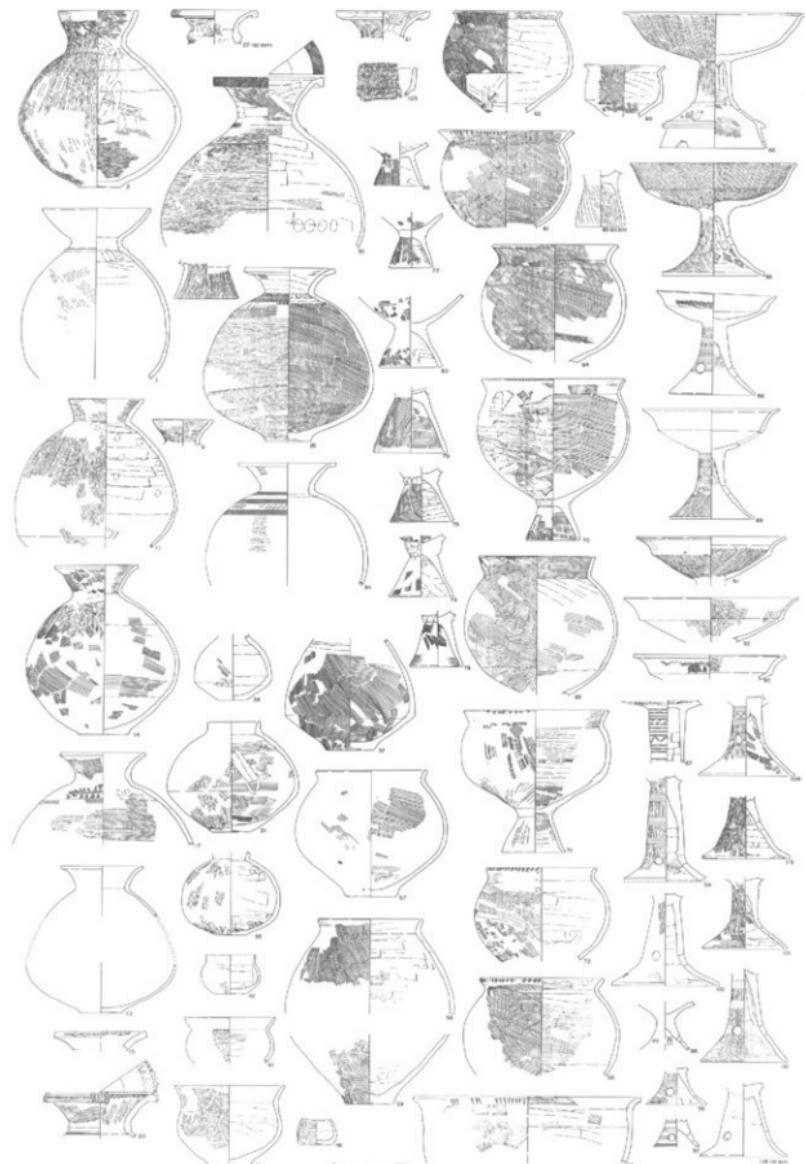
元屋敷式古段階にも比較的例は多い。ただし、この段階は外来系土器の影響が大きく、縄年の位置付けが流動的な面もある。また、この時期は内的な問題というより、外来系土器の流入に端的に表れているように、対外的な問題が深刻化する時である。大平遺跡や上橋遺跡のような豪族居館関連施設は、集落内部と集落間の階層性の顕在化を意味している。古墳時代の社会への幕開けとともに、政治的な緊張状態の表れが、一色前田遺跡や原新田遺跡といった台地上の集落に認められるのであろう。

元屋敷式古段階の山の神遺跡例は、前期の集住型集落の崩壊を暗示しているようにも思われる。

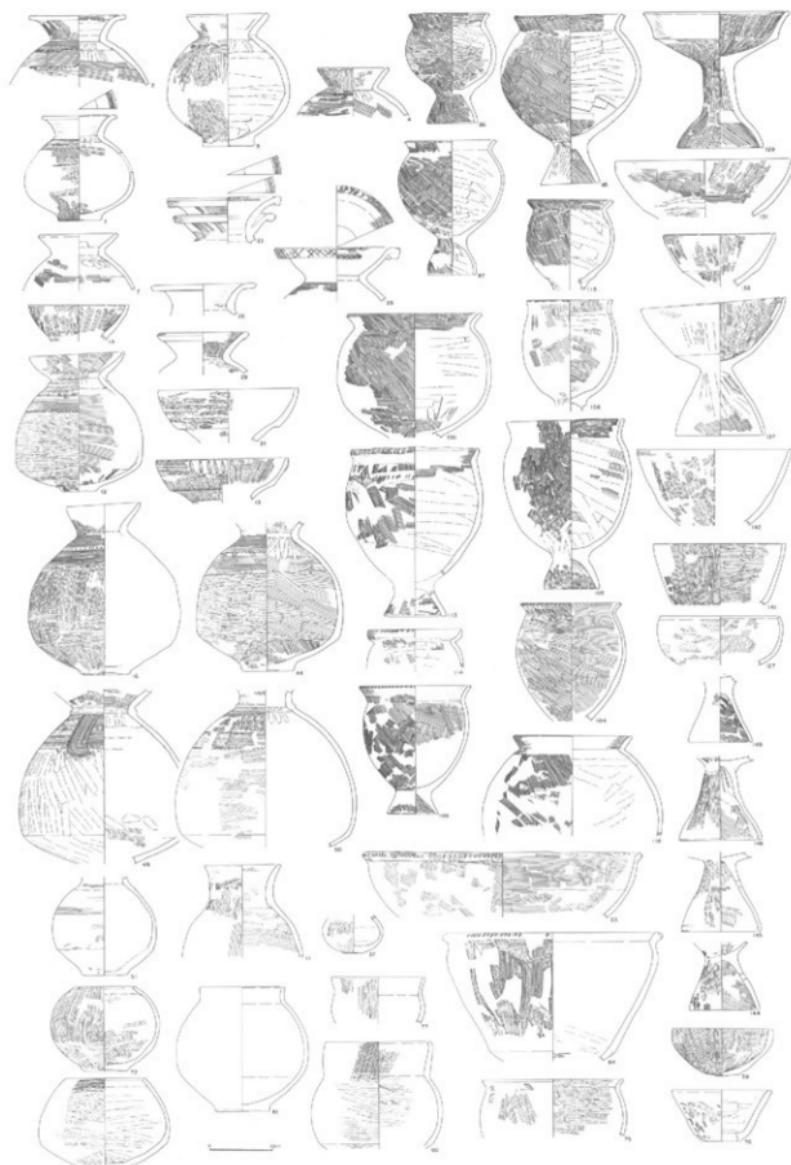
今回は小地域における内的発展の段階を中心に考察したが、本来ならばヤマト政権の動向を踏まえた上で論すべき問題であろうが、今後の検討課題としたい。本論では、環濠の廃絶時期からその存続期間を推測しており、出現期は流動的である。再掘削されている報告例も多々あり、今後は集落の動態をも含めた考察が必要となるであろう。

引用・参考文献

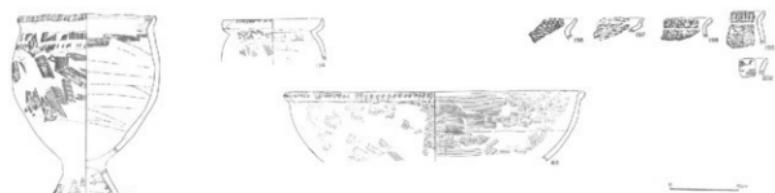
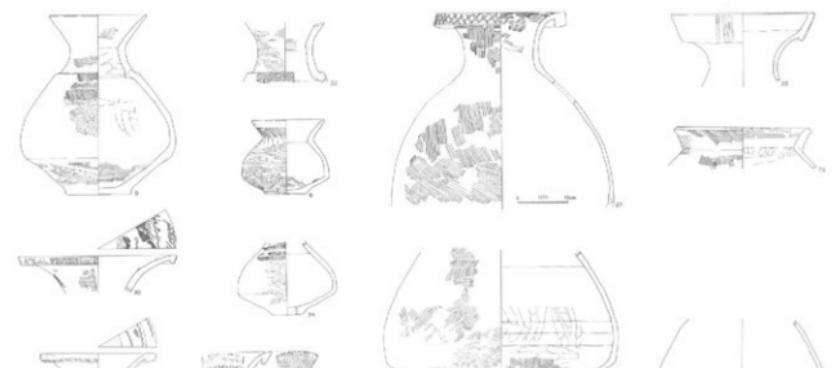
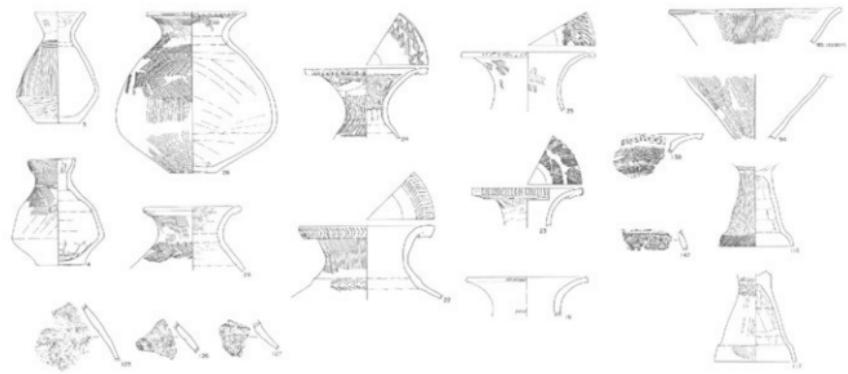
- 向坂鋼二他1977『伊場遺跡』遺構編 浜松市教育委員会
柴田 稔 1981『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告』1 懸田市教育委員会
川江秀孝 1982『椿野遺跡』 浜松市遺跡調査会
辰巳 均 1982『伊場遺跡遺物編』3 浜松市教育委員会
水島和宏 1984『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会
永井義博 1985『土橋遺跡』 袋井市教育委員会
永井義博 1987『鶴松遺跡』 II 袋井市教育委員会
松本一男 1987『八景山古墳・原新田遺跡』『昭和61年度県内発掘調査の概要』 静岡県考古学会
松井一明 1988『弥生時代の環濠集落を巡る諸問題』 愛知考古学談話会
中嶋郁夫 1988『いわゆる菊川式と飯山式の再検討』『軒機』2号
佐藤由紀男1989『山の神遺跡』 浜松市教育委員会
後藤健一 1990『吉美中村遺跡』 湖西市教育委員会
佐藤由紀男1990『松東遺跡』 II (財)浜松市文化協会
白澤 崇 1991『城越ジヨウヤマ遺跡』 袋井市教育委員会
鈴木敏則 1991『梶子遺跡』 III (財)浜松市文化協会
柴田 晓 1992『古新田』 II 浅羽町教育委員会
鈴木敏則 1992『佐鳴湖西岸遺跡群』 (財)浜松市文化協会
栗原雅也 1993『川久保船渡遺跡』 細江町教育委員会
鈴木光一 1993『祝田遺跡』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
柴田 晓 1993『椿野遺跡』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則 1995『古代駿智都衙発見』『静岡の原像をさぐる』 静岡県教育委員会
清水 尚 1995『加茂東原I遺跡』3 豊田町教育委員会
飯塚晴夫 1996『川田・藤森湖遺跡』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐野五十三・中嶋郁夫 1996『角江遺跡』 II (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所



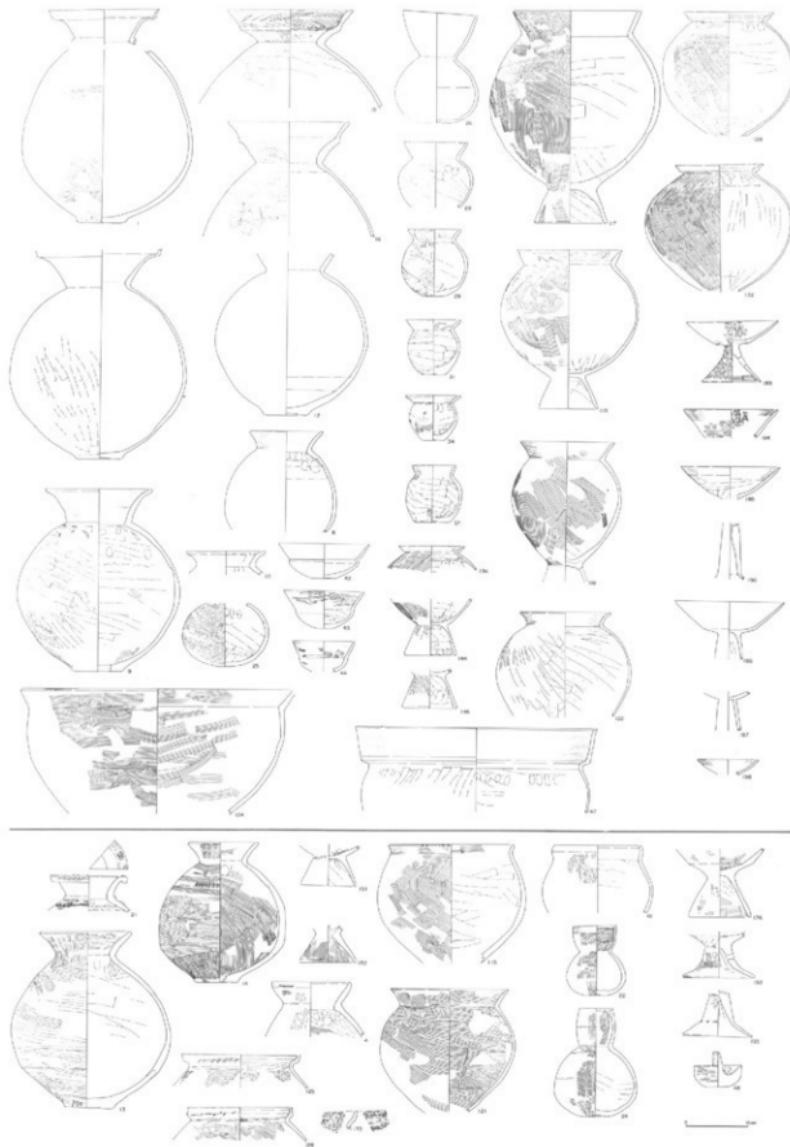
第69図 SD301出土土器実測図



第70図 SD202出土土器集成図



第71図 SD301（上段）・202（下段）出土外来系土器集成図



第72図 SD201出土土器（上段上層、下段下層相当）集成図

特論 1 山の神遺跡の土層観察所見

加藤芳則（静岡大学名誉教授）

1. まえがき

天竜川平地の上半（浜松市市場一下石田一豊山町気賀をむすぶ線より北）は典型的扇状地、下半はこれと自然堤防部との漸移部と位置づけられる。門村（1971）は前者を新期扇状地、後者をそれ以前の低湿地と新期扇状地の旧流路の延長部からなるとしている。両地域とも、遺跡発掘例が少く、地学的環境変化の知見もごく限られる。この地帯での筆者の観察は、箕輪遺跡が初めてで（加藤、印刷中）、本遺跡は2例目となる。現在は観察資料を蓄積しつつある段階である。なお、下記の関連遺跡の発掘報告書や概報からの引用は、最初の番号（年代順）で示すこととする。上層、遺構、遺物の名称、時代その他は発掘スタッフの知見に従うこととした。

- 1)『静岡県文化財地図Ⅱ』、『同地名表Ⅱ』、1989、静岡県教委
- 2)『山の神遺跡…本文・写真図版』、1989、浜松市教委
- 3)『宮竹野際遺跡2』、1994.8、浜松市文化協会
- 4)『山の神遺跡発掘調査概報、No.5』、1995.10、静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 5)『箕輪遺跡』、印刷中、静岡県埋蔵文化財調査研究所

2. 遺跡周辺の環境

(1) 微地形的見地

遺跡付近は古天竜川の網状流路（低所）とその間の中州的自然堤防（高所）（以下流路網）が北東から南西に向かう部分に当たる。本遺跡の北方の宮武野際遺跡より北は、上とちがって広い後背低地が展開する（天王低地、加藤、印刷中）。この低地の北西、北、北東側を流路網が取り巻くように発達する。門村（1971）によると、これらは新期扇状地の旧流路の延長部に相当する。北のものがもっとも古く、ついで北西側、北東側と新しくなるという。これは流路網相互の接触関係（一方が他方によって切られるか、他方を切るか）に基づいて判断されたものである。北西側は古馬込川ぞいに上流に伸びるが、小林地区に、奈良期（天平宝字年間）の築造とされる天宝堤がある（門村、1971）。もし、その時期が正確なら、その頃、古天竜川の一支脈がそのあたりを流れることになる。一方、これより古いとされる北側の流路網上の箕輪遺跡の発掘知見によると、天王低地に面して、弥生後期の水田が営まれたことから、流路網の中州上に生活拠点があつたらしい。すでに、この時期に流路網は存在したことになる。

(2) 地下地質的見地

a. 沖積層の地質区分 箕輪遺跡の調査のまとめに際して、筆者はボーリング資料（小林、1964）を用いて、天竜川右岸の地下地質の状況を推定した（加藤、印刷中）。これによると、同地区的沖積層は、下から、下部礫層（LG）、中部泥層（MM）、上部礫層（UG）、上部泥層（UM）に大別される。LGの下底がウルムⅡ水期極盛期の海面低下時（現在より約90mも低い）における谷底（ウルムⅡの谷）に当たり、MMがその後の海進極盛期（約6300年前、後水期海進、または、繩文海進）の入江の底にたまたま半海成層、UGは海進極盛期後海面が安定し、入江の奥から河川の砂礫の進出で堆め立てられた地層と解釈した。UGの時期は繩文～後期ごろであろう（加藤、印刷中）。UMは後述c。

b. 沖積層の水平変化 本遺跡のやや西側の南北地質断面図（加藤、印刷中の図2）では、天王低地のMMが地表に達する。UGがなくMMとUMとが合体するからである。一方、北、南側にはUGがある。また、同低地の北端の箕輪遺跡を通る東西の地質断面図（加藤、印刷中の図2）でも東西両側にUGが

である。これから、天王低地は縄文海進時の入江に侵入したUGが、ここまで及ばないで、最後まで水域として残ったことがうかがえる。図1は本流域付近を通る東西方向の地質断面図である（位置は図3を参照）。ここは天王低地から外れるので、UGは連続して現れるが、図のNo.2（上西）でUGの厚さがもっとも小さいのは、ここが同低地のすぐ南に当たるためである。なお、図1の洪積層（D）と沖積層との境界は小林（1964、P.81、28図）を参照した。

c. 上部泥層（UM） 場所によって、UGの上にUMがあつたりなかつたりする。UMが確認される地点を図上にプロットしたところ、天王低地はもちろんが、他は芳川ぞい、南北の幅せまい範囲に集中することが判明した（加藤、印刷中、図3に概略の輪郭を内線）。ここが、UGの堆積後しばらくのあいだ、水域だったわけである。これを古芳川湖とよぶこととした。その時期は縄文後期から弥生後期以前と推定された（加藤、印刷中）。

d. ポーリング資料には現れない最表層の土層

地表下数mの範囲は、数10mの深さを対象とするポーリング資料がくわしく記述しにくい部分である。これを補うのが、遺跡発掘や土壤調査である。箕輪遺跡では、UMと思われる上層（上部に縄文晩期初頭の大沢スコリアとその下のカワゴ平軽石のベアが含まれる）を覆って、弥生後期の水田が営まれた砂層がのる。上記(1)、(2)での旧流路網地形の構成層がこれに当たりそうである。そう考えると、天王低地の北、北東側の旧流路網の上には弥生中期以降の遺跡がのるので、古芳川湖はおそらくその時代までに、古大龜川の砂や砾によつて埋め立てられたものと思われる（後述、4.(2)）。

3. 遺跡内の土層

(1) 全体的状況

上層は上位から盛上、洪水砂（下述）、上位土層、基盤砂層および弥生後期以降の溝状遺構や旧河道（記号SD）の充填土からなる。西壁、南壁断面（図2a）を見ると、最下位の基盤砂層の頂面が南壁東端でもっとも高く海拔5m近くである。西に行くにつれて、SD 201, 202, 302, 301（弥生後期から古墳前期）によって掘りこまれながら低くなり、水平距離20mほどで海拔4mとなる。以西はSD 204（中世？）のため不明であるが、西壁の南部で海拔4mを維持する。ここから北では、低下が著しく、海拔3m以下に没する。この部分がSD 304（奈良期より古いとしかいえない）である。

(2) 南壁東中部の上位土層

大半（東端から25mぐらいまで）の土層の下半はSD 201, 202, 302, 301に切られたり、それらを覆つたりするので、弥生後期から古墳前期にかけて堆積したものであろう。その上緑を水田遺構（弥生後期から古墳前期）が両する。SDの充填土をふくめて、いずれも、褐色のシルトないし粘土質土層で、南壁の東端に近いほど固くしまる傾向がある。これらの上位の土層は灰～灰黄色のシルト質土層である。西端近

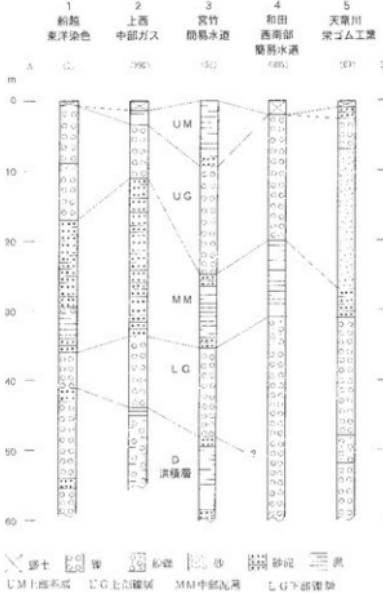
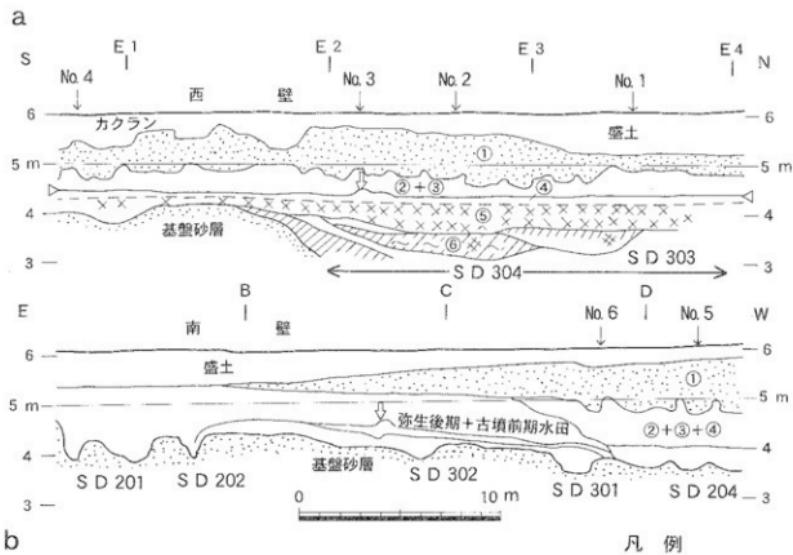


図1 本流域付近を通る東西方向の地質断面図

位置は図3参照（小林1964の地質ポーリング台帳による
カッコ内数字は台帳番号）



凡 例

砂	砂
シルト	シルト
粘土	粘土
黒色	黒化鉄 結核
軟	褐色 班紋
班紋	黒化マン ガニ斑紋
炭酸鉄	灰色 柔軟
中世 水田	管状 班鐵
粒群	黒～暗色
溝状 遺構	青灰色 (還元)

(N 3 地点を基準)

- ①灰色中粒砂 (洪水砂)
- ②灰色シルト質粘土 (粘土探査)
- ③やや暗い灰色シルト
- ④明瞭灰色粘土 (中世水田作土)
- ⑤褐色・黑色班紋粘土
- ⑥暗灰色粘土

図2 a 西壁、南壁土層断面模式図 (発掘資料より作成)

b 同上調査地点の土層断面図

くで中世？のSD204にきられるのでこれより古いといえるが、詳しい時代は不明である。

(3) 南壁西部と西壁南部の上位土層

SD204の充填土を除くと、上位土層のもっとも薄い部分（1m未満）に当たる。次述の②、③、④、⑤土層を受け離ぐ土層が識別されるが、その特徴は崩まって（変質して）いる（図2b, No.3, 4, 5）。なお、ここから西壁全体にかけて、次述②の採掘跡とそれを覆う砂層（①、洪水砂、次述）が出現する。

(4) 西壁中部の上位土層

図2b, No.3地点は西壁中部にあり、SD 304の中にすこし入ったところに位置する。前述(3)、次述(5)への係わしたとなる部分である。ここでは、上位から、①灰色中粒砂、②灰色シルト質粘土、③やや暗い灰色シルト、④明瞭灰色粘土、⑤褐色・黒色斑紋粘土、⑥暗灰色粘土となる。イ、①と②の境は、幅広い凹部と急角度で立ち上がる狭い凸部となる。発掘スタッフの見解によれば、この凹凸は、灰色シルト質粘土（②）を採掘した跡である。それを覆う砂（①）は、西壁から南壁西部にかけて検討したところ、ラミナを有することおよび粒径が北から南にむかって細くなることから河川の洪水で自然堆積したものと判断された。ロ、④の上面は中世？の山面と想定され、畔の高まりが観察される（発掘資料）。⑤は褐色の酸化鉄の斑紋や黒色の酸化マンガンの斑紋を含むほか、灰色のまだら状の筋模様（灰色条理）が見られる（後述、5.b）。ハ、⑥は次述SD 304に特有なもので、その中心部で急速に発達する。

(5) 西壁北半（SD 304）

SD304のほぼ中央では（図2b, No.2地点）、上記の②、③、④があまり変わらないのに⑤、⑥が倍以上のがさに肥大する。⑥は大流木2本（北 80° 東の方向に横たわる）のほか多数の木片を含む。黄灰色の炭酸第一鉄（以下炭酸鉄）の大きな塊が存在するなど特異である。これから、この層が還元（酸素不足）状態であることが分かる。これに対して、②～⑤は灰色で鉄・マンガンの斑紋を含むなど酸化状態にある（後述、5.b）。SD 304の充填土層は⑥を主体とするが、その下底部や縁辺部に砂質層が挟まるところから、旧河道（旧流路）と推定される（発掘スタッフによる）。

(6) 西壁北端（SD 303）

SD 304の北半は奈良期のSD 303（発掘スタッフは旧河道と推定）によって掘りこまれている。この充填土層は緑灰色の砂質粘土とその上の暗緑灰色の粘土からなり、後者でとくに植物遺体や炭化物に富むほか、斑状の炭酸鉄やリン酸鉄（ともに還元状態の指標）を含む（発掘資料）。図2bのNo.1断面図はSD 303の北端部分に位置する。最下部の2つの暗色土層が充填土層である。その上の土層はNo.3地点の②～④と大して変わらない。

(7) 西壁上層のまとめ

上の(3)～(6)をまとめると、No.3地点の②～④があまり変わらない状態でずっと連続し、その下をSD 304やSD 303の充填土層が、上を①の洪水砂層が占めることになる。なお、SD 304やSD 303の充填土層と南部の基盤砂層が還元状態だが、ほかの上層は酸化状態である。ただし、現在は還元化されつつあるらしい（後述、5.f）。

4. 遺跡発掘区内の微地形と周辺遺跡との関連

(1) 発掘区内の微地形

3. (1)で述べたように、基盤砂層の頂面が発掘区の南東部で高く（微高地）、北西部で低い（低地）。これに対応して、微高地では弥生後期から古墳前期の自然土層やSDの充填土層があり、基盤砂層を含めていずれも褐色を呈して酸化的であり、一方、低地では上位土層は酸化的だがその下の基盤砂層やSDの充填土層は還元的である。つぎに著しい特徴はSD（溝状遺構や旧河道）の伸長方向がすべて北北

東→南南西のことである。⁴⁾

(2) 周辺遺跡との関連

上の微高地、低地の対立は、図2aで明らかのように、南東側での基盤砂層の高まりと北西側のSD 304によって決定されている（他のSDはいずれも幅と深さが小規模）。この高所は発掘⁵⁾の南に隣接する山の神遺跡アリーナ地区⁶⁾がのる水田東微高地の北縁と見なされる。また、低地はこれと西側の宮竹微高地との間を北北東→南南西に走る「旧流路」の東縁に相当しそうである。この微高地・低地パターンは、すでに2.(1)、(2)でのべた古天竜川の北東側流路網の一部にほかならない。アリーナ地区では弥生後期の遺構・遺物が、宮竹微高地の宮竹野際遺跡では弥生前期にまでさかのぼる遺構（水田）・遺物が検出され、この流路（河道）網がすでに弥生前期には成立したことを暗示する。2.(2).d

で、古芳川湖（縄文後期に生成）を埋め立てた古天竜川の流路網のうち、天王低地の北側、北東側の年代を弥生中期とした。後者の延長部に当たる本遺跡付近ではそれが弥生前期にまでさかのぼることになる。SD 304は下限が確かめられていないこと、その時代が奈良期より古いとしかいえないので、弥生前期ころの旧流路（Ⅲ河道）に該当するかどうかは分からぬ。あるいはそれを継承した、より後世の旧流路の可能性もある。

(3) 天竜右岸平野の遺跡分布

a. 遺跡分布と古天竜川の流路網
天竜右岸平野全体を見渡すと、遺跡が局在するのが分かる。安間川一芳川一東名高速一掛塚街道に囲まれた区域（弥生中期～中世）と笠井付近（古墳～中世）の2ヶ所である。中でも、前者に弥生前～後期の遺跡（より後世との複合遺跡を含む）が集中する（図3）。これらは上述した天王低地北側および北東側の古天竜川流路網にある。また、同低地北西側の古天竜川流路網上には古代以降の遺跡が、笠井付近のそれには古墳期以降の遺跡が、それぞれ、検出される。このような産出状況から、つぎのような考え方、右岸平野はいくつかの時代の違う古天竜川の流路網に分かれるとではないか、が生まれる。つまり、北側、北東側流路網は弥生前期（一部は同中期）まで

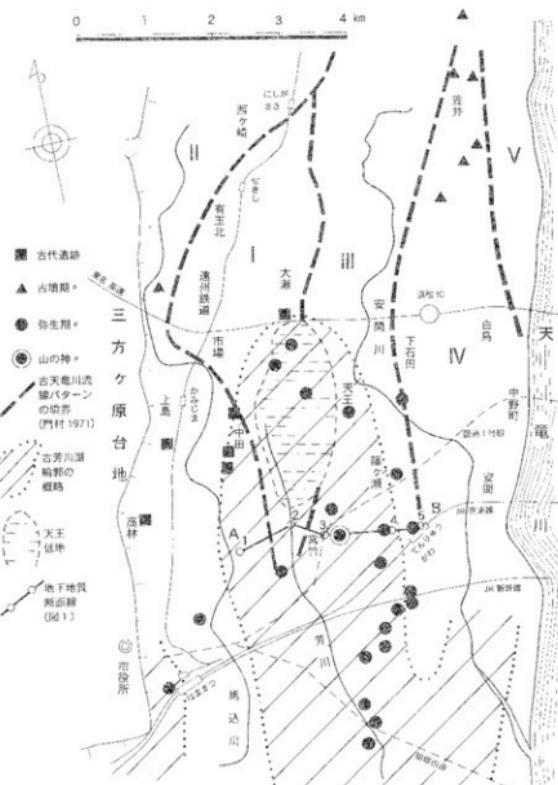


図3 遺跡の分布と古天竜川の流路パターン（流路網）・古芳川湖との関係

に、北西側のそれは古代までに、笠井付近のそれは古墳期までに、それぞれ、できあがって、後世の流路網による本格的な擾乱を受けないで現在に至った。もちろん、その後の氾濫で砂、シルト、粘土を1~2mぐらい被る程度のこととはあった。本発掘区の上位土層がその例である。これらの時代別流路網は、門村(1971の図6)が扇状地の微地形から推定し、区分した流線パターン(Ⅰ~Ⅳ、図3に転記)と大体一致する。北側と北東側がⅠ、Ⅲ、北西側がⅡ、笠井付近がⅣに、それぞれ、対応しそうであるが、全面的に対応するかどうかは今後の課題である。これ以外の流路網(門村のV~Ⅶに対応)は右岸平野の北半と左岸平野の大半を占めるが、遺跡がほとんど発見されていない。おそらく中世以降の生成であろう。

b. 古芳川湖との対応 古芳川湖の東半と北東側流路網(Ⅲ)とが、また、西半と北西側流路網(Ⅱ)とが重なる(図3)。したがって、それぞれ、弥生前期、古代までに湖の埋め立てが終了したと見られる。ここで注目したいのは、天王低地は、縄文海進以降連続して、また、古芳川湖は縄文後期から弥生前期の期間、それぞれ、古天竜川流路網の侵入をまぬがれて存続した水域だということである。後者は弥生前期または古代までに1回、流路網の侵入を受けたが、それ以後は侵入をまぬがれている。いわば、流路網が侵入しにくい地域である。その理由は不明であるが、これが、この地域に弥生期などの古い流路網が保存されたとの関連がありそうである。

なお、浜松市街内で、UMが局部的に存在するところがある(図3、古芳川湖に対応)。このあたりは、利用できたボーリング資料が少ない。まだ北へ伸びる可能性もある。ここにも弥生期遺跡が2地点あるので、上述のような事情が成り立つのであろうか。今後の課題である。

5. 中世水田層の土壤学的検討

西壁のNo.3地点断面で④層の頂面に畔畔遺構が認められた。これを挟んだ数地点での②層から⑤層にかけての水田土壤学的特徴の概要は下表のとおりである。これによると、

a. 縦根跡 イネまたは雑草の根の跡で、径0.5mm前後の垂直にのびる円孔として観察される。その量は、各地点とも、②層から③層にかけて漸減するが、④層で増加する。現水田で縦根跡は下方へ漸減する一方である。したがって、途中で増えれば、そこに埋没された水田層を想定することができる。ここでは④層がこれに該当する。

b. 斑紋 上層の中のまだら模様のことである。各地点とも、⑤層で黒褐色の点状酸化マンガンの斑紋と褐色の酸化鉄斑紋とが顕著である(斑紋集積層、下注)。また、これを切るようにして灰色、不規則形で縦に伸びる筋状のまだら模様(灰色条斑、下注)が重なる。これらは、現在の乾田型粘土質水田における下層土の典型的な特徴である。④、⑤層とも粘土質土層であることもこれと符号する。

表 西壁断面での中世水田層(4、5層)の縦根跡量と斑紋

層	No.1(北端) 縦根跡量 斑紋	No.2(中央の北) 縦根跡量 斑紋	No.3(中央) 縦根跡量 斑紋	No.4(南端) 縦根跡量 斑紋
②	++→+	++	++→+	++
③	土	+→土	土	+→土
④	+ →土 Fe結核	+ →土 Fe結核	+ Fe結核	+ →土
⑤	- Fe,Mn斑紋 灰色条斑	- Fe,Mn斑紋 灰色条斑	- Mn斑紋 灰色条斑	- + Fe斑紋

②、③、④、⑤層 図2、3、(4)参照 ++富む、+含む、+あり、
-なし →下方へ変化、Fe 酸化鉄、Mn 酸化マンガン

(注) 集積層：夏期に水を張り（表面水）、高温ドイネの根株や緑肥などの有機物が分解されるため酸素が急速に消費され、作土は強い還元状態（酸素不足）となり、酸化鉄、酸化マンガン（水に溶けにくい）が還元されて水に溶けやすくなり、下層土に移動する。地下水位の低い乾田では下層土が酸化状態を保っているので、そこで、再び酸化されて水に溶けなくなり、上層の隙間に沈殿し斑紋となる。この部分が集積層である。

灰色条斑：上の作用がすむと、作土の鉄、マンガンが少なくなる。この段階で、還元力の強い水は、下層にしみこんでも鉄、マンガンを溶かす余力が出るので、下層にすでに沈殿している酸化鉄（褐色）、酸化マンガン（黒褐色）の斑紋をふたたび溶かして運び去る。水の通り道ぞいにこれらの色が薄れて灰色味を帯び灰色条斑となる。

c. 作上層 ④層は明緑灰色粘土と名付けられているが、これは上下の上層の色と比較しそうに見えるためで、正確には明灰色とした方がよい。加えて、④層の上半分の1から3分の2は指で押すと浅く凹む（国2bで軟と表現）。これらは現在の乾田型水田作土の特徴と一致する。

d. 水田土壤のタイプ 以上を総合すると、④層の中世水田は、④層を作土とし、⑤層を酸化鉄、酸化マンガンの集積層とする表面水型水田土壤（乾田型水田）とみなすことができる。灰色条斑があることから灰色化低地水田土（農耕地上壤分類委員会、1995）に属する。

e. 発掘区における水田の立地 上のタイプは本来水の掛からない微高地に灌漑水（表面水）を引いて開田したところに生ずるといわれる。発掘区での畦畔の分布から見て、中世水田は北西部の低地部を占める。SD 304が埋め立てられて、南東部の微高地に準ずる高さに達してから開田されたと推定される（4. (1) 参照）。畦畔の北北東—南南西（とそれに直交する）向きはSD 203,204など同時代の溝遺構のそれと一致する。これは弥生中期またはそれ以前に成立した古天竜川の流路網と同方向であり、中世においても、この流路網と関連して、水田の畔（および、おそらく導水）システムが構築されたものと思われる。

f. 埋没後の変化 各地点の①層には酸化鉄の結核（芯の固い沈殿物）が普通に含まれるが、これは、現水田の作土では見られないものである。埋没後まもなくできたものと思われる。これと逆の現象がNo.3地点で観察された。それは②、③、④、⑤層が、滴下した $\alpha - \alpha'$ ジビリジール試薬にたいして即時亦変したことである。この試薬は還元状態の鉄にだけ反応することから、これらの上層が、還元状態にあることを知らせる。実際の上色（灰色）や斑紋の存在（酸化状態）と相反する。おそらく、最も上層砂層（①層）の堆積後、還元化が始まったが、まだ、酸化状態の特色が消え去らないでいると理解しなくてはならない。上記試薬による検討はNo.3地点でしかやっていない。南端のNo.4地点では③層の下半以下が還元色（青灰色）となり、④層の酸化鉄結核は見られず、⑤層の斑紋が不鮮明になるなど、酸化的特色がより薄れている。この傾向は南端西部のNo.5地点でも引き継がれて⑤層の斑紋がさらに減少する。

文献

- 門村 浩（1971）扇状地の微地形とその形成。「扇状地－地域的特性」、p.55-96、古今書院
加藤芳朗（印刷中）箕輪遺跡の地学的環境・埋没水田の土壤学的検出・火山灰の同定。「箕輪遺跡」、静岡県埋蔵文化財調査研究所
小林国夫（1964）浜松市の地質。「地質調査報告書」、p.3-165、浜松市
農耕地上壤分類委員会（1995）「農耕地上壤分類、第3次改訂版」、p.79、農業環境技術研究所

特論2 山の神遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 山の神遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.C	SD201, 中層	有機土壌	酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン合成	β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 上段:交点/下段: 1σ	測定No. (Beta-)
No.C	$2,540 \pm 60$	-22.7	$2,570 \pm 60$	BC 790 BC 805 TO 765 BC 615 TO 600	91604

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

II. 山の神遺跡の花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、自然科学においては湖沼や湿地の堆積域や集水域の大きな水成堆積物を対象として、地域的な植生や環境の復原に用いられてきた。考古学においては堆積域の小さな堆積物や乾陸で生成された堆積物を対象とすることによって、比較的狭い範囲の植生や環境を復元することも可能である。

ここでは、山の神遺跡において採取された試料について花粉分析を行い、植生、環境および農耕の復元を試みた。

2. 試料

試料は、No.1 (SD301, 弥生時代後期前半の環濠)、No.2 (SD202, 弥生時代後期後半の環濠)、No.3 (SD201最下層, 古墳時代前期初頭の環濠?)、No.4 (SD201上層, 古墳時代前期末)、No.5 (SD101)、No.6 (SD303, 奈良時代) の計6点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 内び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイファン（—）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

出現した分類群は、樹木花粉19、樹木花粉と草木花粉を含むもの1、草本花粉20、シダ植物胞子3形態の計43である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群の写真を章末に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複数管束属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシテ属—アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属、ムクノキ、サンショウ属、モクセイ科、ニワトコ属—ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属

サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ソラマメ属、セリ科、オオバコ属、ゴキブル、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、ミズワラビ、二条溝胞子

No.1では樹木花粉に比べ草本花粉の占める割合が極めて高く、特にヨモギ属が優占する。草本花粉では他にイネ科、ナデシコ科、アブラナ科、タンボボ亜科が出現する。No.2~4は花粉がほとんど検出されない。No.5では樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、特にイネ属型とイネ科が優占する。他に草本花粉ではアブラナ科、ソラマメ属、タンボボ亜科、ソバ属が出現する。樹木花粉ではマツ属複雑管東亜属、スギの出現率が高い。No.6では樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉ではイネ属型とイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属などが出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、クリーシイ属、スギなどが出る。

5. 花粉分析から推定される植生、環境、農耕

No.1 (SD301、弥生時代後期後半) の時期は、周辺にヨモギ属をはじめナデシコ科、アブラナ科、タンボボ亜科が分布し、これらの草本の好む乾燥した環境が周囲に分布していたと推定される。樹木花粉がほとんど出現しないため、周囲は樹木が分布しない開けた景観を呈していたと推定される。また、ヨモギ属などの草本は人為改変を受けた所を好んで分布するため、周囲に改変された人為的環境が広がっていたことが示唆される。

No.2~4 (SD202、SD201、弥生時代後期後半~古墳時代前期末) は花粉がほとんど検出されないため、詳細な植生、環境、農耕は復元できない。花粉が少いのは水成堆積による淘汰で堆積しなかったか、乾燥や乾湿を繰り返すような環境によって分解されたかと考えられる。後者の場合、弥生時代後期後半~古墳時代前期末の時期がかなり乾燥した気候であった可能性がある。

No.5 (SD101) は、イネ属型、イネ科、アブラナ科、ソラマメ属、タンボボ亜科、ソバ属の栽培植物を含む分類群および水田ないし畑作雜草の花粉が多く出現し、周囲に農耕地が広がっていたことが示唆される。ソバ属、アブラナ科、ソラマメ属などの畑作も盛行が推定される。樹木ではニヨウマツ類（マツ属複雑管東亜属、アカマツかクロマツ）が多く、二次林としてのマツ林が分布していたと推定される。なお、畑作の盛行とマツ二次林の拡大は西南日本では平安時代以降にみられる。

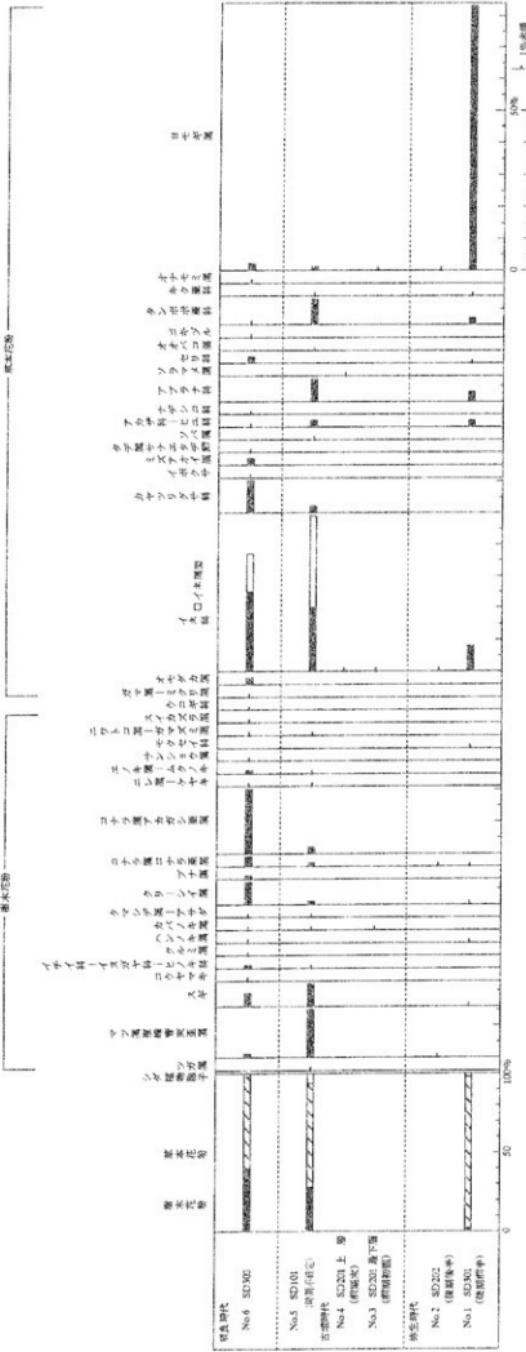
No.6 (SD303、奈良時代) ではイネ属型とイネ科が多くカヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属の水田雜草でもある水湿地植物が出現するため、周囲で水田が営まれていたと推定される。周辺地域にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、シイ類（クリーシイ属）を中心としたスギをまじえる照葉樹林が分布していたと推定される。

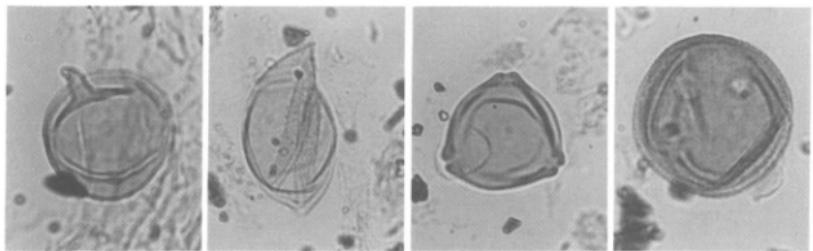
参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82~110.
金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248~262.
鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
中村純 (1980) 日本産花粉の標微、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究、13、p.187~193.
中村純 (1977) 畑作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21~30.
笠原安夫(1985) 日本雜草圖說、養賢堂、494p.
笠原安夫(1988) 作物および田畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131~139

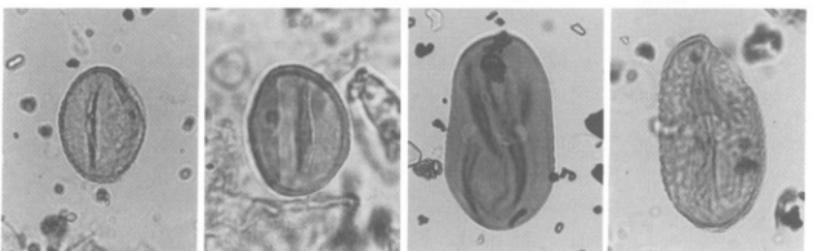
表1 山の神遺跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	No.1 No.2 No.3 No.4 No.5 No.6					
		SD301	SD202	SD201	SD201	SD101	SD303
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Tsuga</i>	ツガ属					1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属		1		46	5	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3			21	15	
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ					2	
Taxaceae-Cephalotaxaceae	イチイ科-イヌガヤ科				1	6	
-Cupressaceae	-ヒノキ科						
<i>Juglans</i>	クルミ属					1	
<i>Ailanthus</i>	ハンノキ属	1				1	
<i>Betula</i>	カバノキ属		1		3	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				1	3	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	1			4	28	
<i>Fagus</i>	ブナ属					5	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	1		4	12	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				7	82	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ				1	2	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ				1	5	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属					1	
Oleaceae	モクセイ科	1					
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				1	1	
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属					1	
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Araliaceae	ウコギ科					1	
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属					3	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属					10	
Gramineae	イネ科	25	2	17	2	63	105
<i>Oryza type</i>	イネ属型					93	48
Cyperaceae	カヤツリグサ科				6	40	
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ					3	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属					7	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節					3	
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属					1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	6				5	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科						2
Cruciferae	アブラナ科	9				23	
<i>Vicia</i>	ソラマメ属				1		
Umbelliferae	セリ科	1					9
<i>Plantago</i>	オオバコ属					1	
<i>Actinostemum lobatum</i>	ゴキヅル						1
Lactucomidae	タンポポ亜科	5				26	1
Asteroidae	キク亜科	1				3	
Xanthium	オナモミ属						1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	272	7	7	4	8	
Fern spore	シダ植物胞子						
Monocolate type spore	單条溝胞子	4	1		5	9	7
Ceisopteris	ミズワラビ						1
Trilobe type spore	三条溝胞子	5	3		13	3	
Arboreal pollen	樹木花粉	7	2	1	0	91	171
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	319	9	24	3	225	243
Total pollen	花粉總數	326	11	25	3	316	415
Unknown pollen	未同定花粉	2	1	0	0	0	3
Fern spore	シダ植物胞子	9	4	0	5	22	11

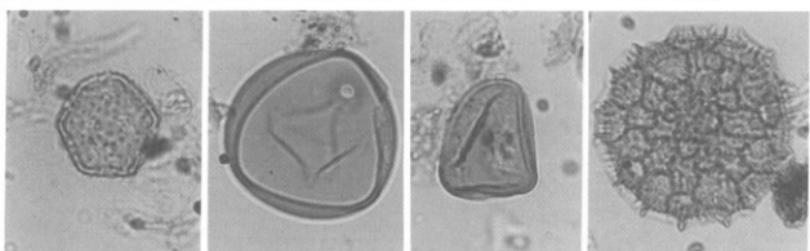




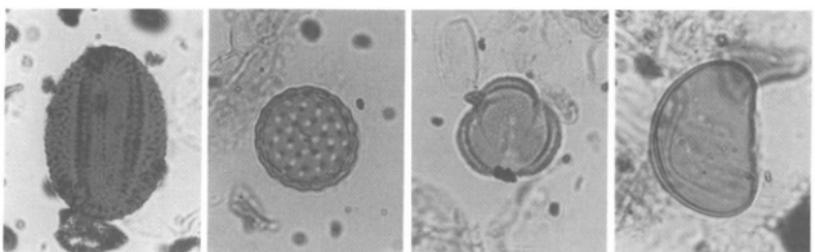
1 スギ 2 イチイ科一イスガヤ科一ヒノキ科 3 カバノキ属 4 ブナ属



5 コナラ属コナラ亜属 6 コナラ属アカギシ亜属 7 ソラマメ属 8 ソラマメ属



9 オモダカ属 10 イネ属型 11 カヤツリグサ科 12 タデ属サンエタデ節



13 ソバ属 14 アカザ科一ヒユ科 15 ヨモギ属 16 シダ植物单条溝胞子

$45 \mu\text{m}$

山の神遺跡の花粉・胞子遺体

III. 山の神遺跡の珪藻分析

1.はじめに

珪藻は、珪酸質の殻を有する单細胞藻類で、その殻には種ごとに異なる幾何学的な模様を持つ。珪藻類全体の分布は淡水域から海水域のほぼ全ての水域環境にわたるが、個々の種は塩濃度、pH、付着器物など環境要因に適応をみせ、それぞれ特定の水域を繁殖地とする。また、珪藻の化石は顯微鏡サイズながら水成堆積物中から保存よく多産し、化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標として一般的に利用されてきた。

ここでは、静岡県、山の神遺跡から得られた5試料について珪藻分析を行い、古環境の推定を行った。試料は、SD201、SD202、SD301およびSD303の4地点の路頭より採取された。これらの試料は河川小谷あるいは環境を埋める堆積物と考えられ、この堆積物が水成堆積物であるか否かという問題が判明することにより、この地点における堆積環境の連続性、すなわち環境が安定的であったかどうかという問題が解決すると見込まれる。

2.分析方法

土壤から珪藻分析用に採取した試料を風乾後、秤量する。この試料に約15%の過酸化水素水を加え加熱し、有機物の分解、漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適当な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5mL程度をカバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上にブリュウラックス等の封入剤を滴下し、スライドグラスに張り付け永久プレパラートを作成する。

検定は、油浸1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。ただし本報告書においては、珪藻化石殻の保存状態が幅広に悪かったため、計数は対象物が珪藻である場合はすべて計上し、同定ができるものについてはできる限りのレベルで同定を行った。

珪藻の同定については、Hustedt (1961~1966)、K. Krammer&Lange-Bertalot (1985~1991) を、環境の指標として小杉 (1989)、安藤 (1990) を参考にした。

3.結果

分析の結果、すべての試料採取地点から珪藻化石殻の産出は認められたが、化石殻の保存が非常に悪く、属レベルあるいは珪藻の化石殻であるというレベルまでの同定が限界であった。そのため、淡水生種、汽水生種さらに海生種といった大まかな環境ごとの種分類も不明瞭なものとなっている。

属レベルまで同定できたものとして、海生種としてはActinopychus属、Coscinodiscus属、Pleurosigma属、Stephanopyxis属が、淡水生種としてはCymbella属、Epithemia属、Eunotia属、Fragilaria属、Pinnularia属があげられる。また種まで同定できないため生息環境が特定できなかったものとしては Cyclotella属、Diploneis属、Navicula属、Nitzschia属があげられる。さらに珪藻化石の一部分であることは認識できたものの、それ以上については判別不可能であったものについてはUnknown speciesとして括した(表1)。また完形を保つ個体化石は認められなかった。

すべての試料においてUnknown speciesが卓越しているため、個々の堆積環境がどのような環境であったかという推定はできない。しかしこれらの試料からどの堆積物も安定した水城環境に堆積した水成堆積物ではないことがわかる。すなわち当時この地点に水路が存在するならば、その溝を埋没させた本分析試料に相当する土壤は、埋没前に供給されていた堆積土壤とは全く異なる供給地あるいは供給形態により堆積し

たものと推定される。一般的にこのような堆積物は、海域あるいは河口部においては津波や高波、淡水域においては土石流や洪水が考えられるが、通常このような化石の産出状況にはならない。むしろ埋土や砂丘堆積物、風成層堆積物などにみられる状況である。しかし現状ではどの様な堆積過程によって形成された堆積物であるかは限定できない。

4.おわりに

本分析により、珪藻化石殻の産出しない試料に対する評価の重要性が示唆された。また劣悪な化石の保存度が示唆する環境、もしくは堆積構造に対する今後の研究の重要性が示唆された。

他の微化石分析とあわせて検討することにより、環境を検討する必要性がある。

参考文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42-2, p.73-109.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, (1), p.1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Suesswasserflora von Mitteleuropa, 2 (1), p.1-876.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Suesswasserflora von Mitteleuropa, 2 (2), p.1-596.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae, Suesswasserflora von Mitteleuropa, 2 (3), p.1-576.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae, Suesswasserflora von Mitteleuropa, 2 (4), p.1-473.

種名	生息環境分類	No.1	No.2	No.3	No.4	No.6	
<i>Acinoptychus</i> spp.	海生種	内湾～外洋域	12	3	11	1	0
<i>Coscinodiscus</i> spp.	海生種	内湾～外洋域	14	2	26	1	0
<i>Pleurosigma</i> spp.	海生種	沿岸域	2	0	0	0	0
<i>Stephanopyxis</i> spp.	海生種	沿岸域	3	0	2	1	0
<i>Cymbella</i> spp.	淡水生種		12	8	3	3	0
<i>Epithemia</i> spp.	淡水生種		4	9	6	2	0
<i>Eunotia</i> spp.	淡水生種		0	6	7	3	0
<i>Fragilaria</i> spp.	淡水生種		2	12	6	3	0
<i>Pinnularia</i> spp.	淡水生種		2	8	2	9	1
<i>Cyclotella</i> spp.	不明		6	11	6	3	0
<i>Diploneis</i> spp.	不明		6	8	4	2	2
<i>Navicula</i> spp.	不明		11	3	6	7	1
<i>Nitzschia</i> spp.	不明		13	3	6	4	0
Unknown species	不明		131	139	132	188	198

表1. 静岡県、山の神遺跡における珪藻化石の産出

IV. 山の神遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、山の神遺跡において採取された試料についてプラント・オパール分析を行い検討を行った。

2. 試料

分析試料は、調査区南壁のSD302上位の5b層（試料No.B）と5c層（試料No.A）の2点である。なお、試料No.Aは弥生時代後期中葉、試料No.Bは弥生時代後期～古墳時代中期の堆積層とされている。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料上の絶乾（105℃・24時間）
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーズ添加（直径約40 μm , 約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μm 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の乾比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-3}g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4. 所見

分析結果を表1に示す。

表1 山の神遺跡のプラント・オパール分析結果
(単位:個/g)

試料	ウシクサ族	タケ亜科
B	700	0
A	0	1,800

試料No. Bからはウシクサ族のみが検出された。プラント・オパール密度は700個/gと微量である。サンプルAからはタケ亜科のみが検出されたが、プラント・オパール密度はこれも1,800個/gと低い値である。以上のように両試料ともプラント・オパールの含有密度が極めて低いことから、両層は短期間に堆積したものがあるいはイネ科植物の生育には適さない土壤条件であったと推定される。

文献

- 杉山真二・藤原宏志 (1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山-古環境編一、川口市遺跡調査会報告、10, p.281-298.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9, p.15-29.

写 真 図 版



1. SD301遺物出土状況（南より）



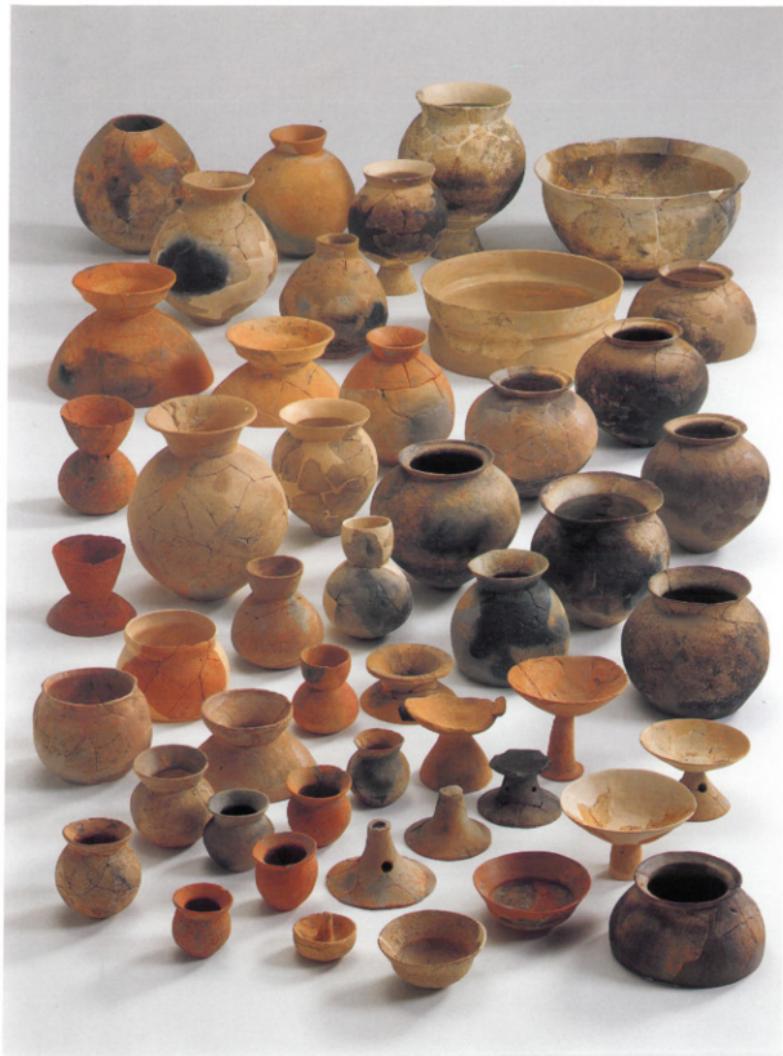
2. SD201・202遺物出土状況（北より）



1. SD301出土土器



2. SD202出土土器



1. SD201出土土器



1. 第1調査面全景（北西より）



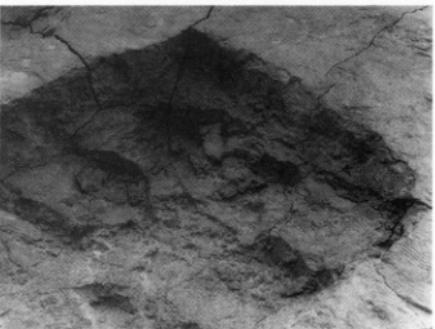
2. 第1調査面小畦畔（北東より）



3. 第1調査面北側（東より）



4. 第1調査面9区掘削痕（南東より）



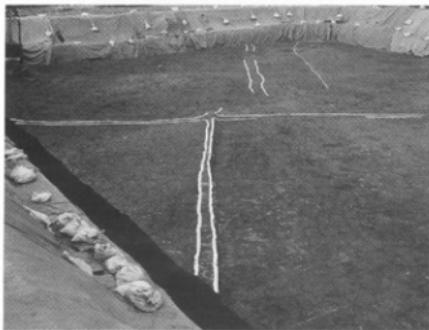
5. 第1調査面11区掘削痕（東より）



1. SD101完掘状況（北より）



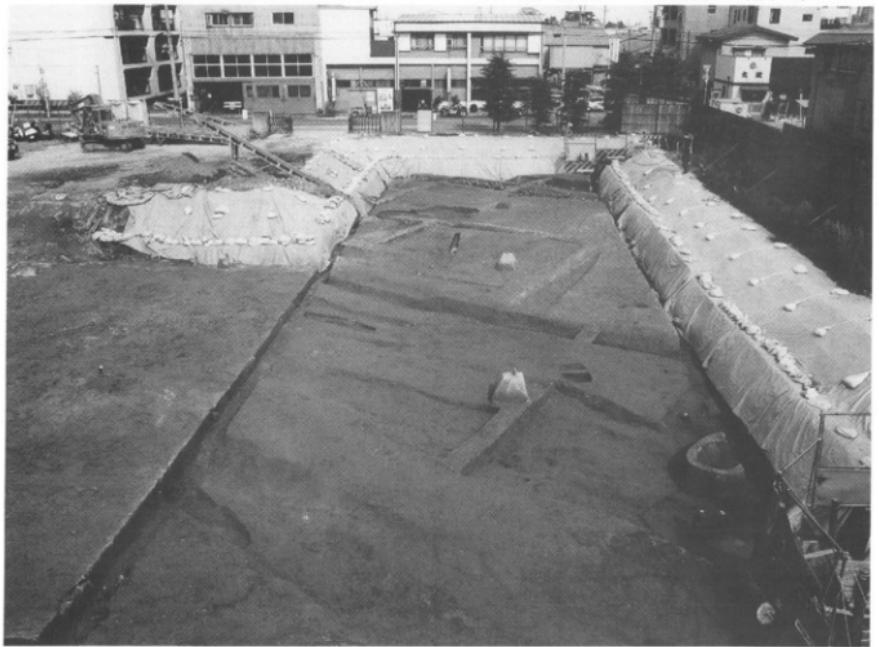
2. SD101土器出土状況（西より）



3. 第2調査面北区畦畔（南西より）



4. 第2調査面11・12区噴砂？（北より）



5. 第3調査面南区全景（西より）



1. 第2調査面南区東側（北より）



2. 第2調査面南区中央部（北より）



3. 第3・4調査面南区全景（西より）



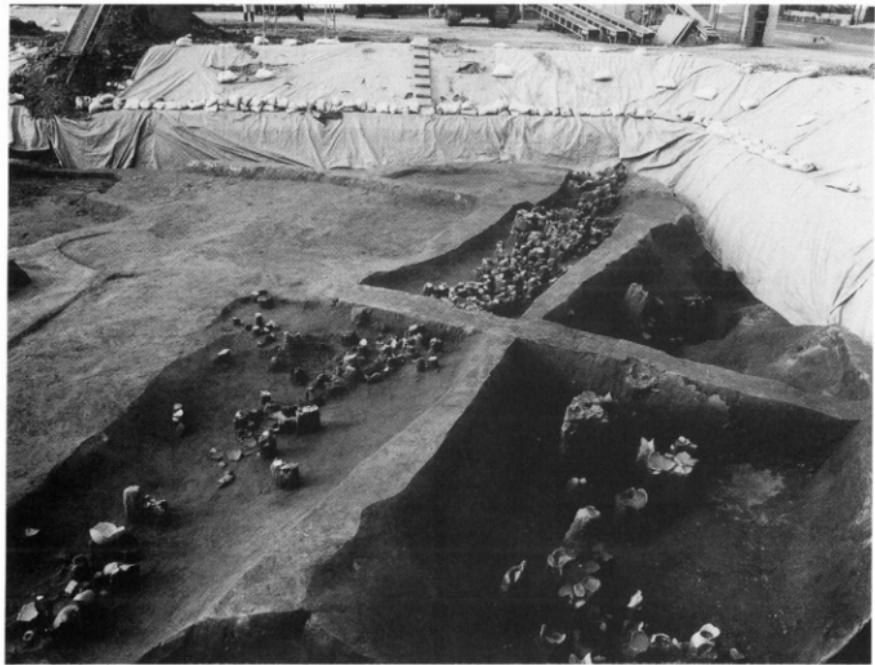
4. 第4調査面南区東側（西より）



5. 第4調査面南区中央部（北より）



1. SD201・202遺物出土状況（北より）



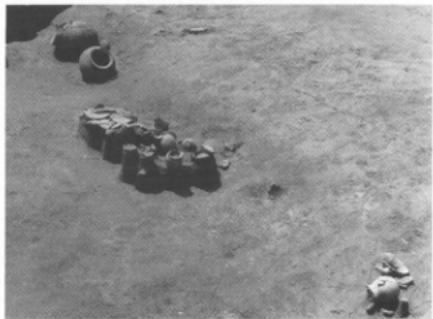
2. SD201・202遺物出土状況（南より）



1. SD201最上層遺物出土状況（北より）



2. SD201南側最上層遺物出土状況（西より）



3. SD201南側最上層遺物出土状況（北東より）



4. SD201北側最上層遺物出土状況（東より）



5. SD201南側上層遺物出土状況（北西より）



6. SD201北側上層遺物出土状況（北西より）



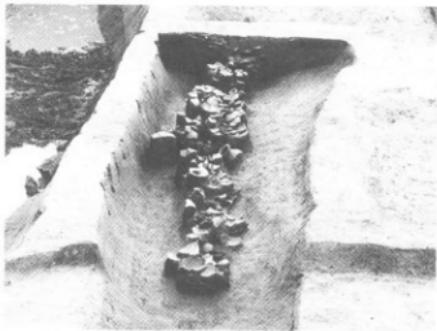
7. SD201土層（北より）



1. SD201・202完掘状況（北より）



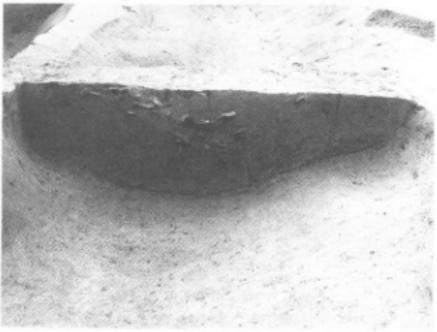
2. SD202南壁遺物出土状況（北より）



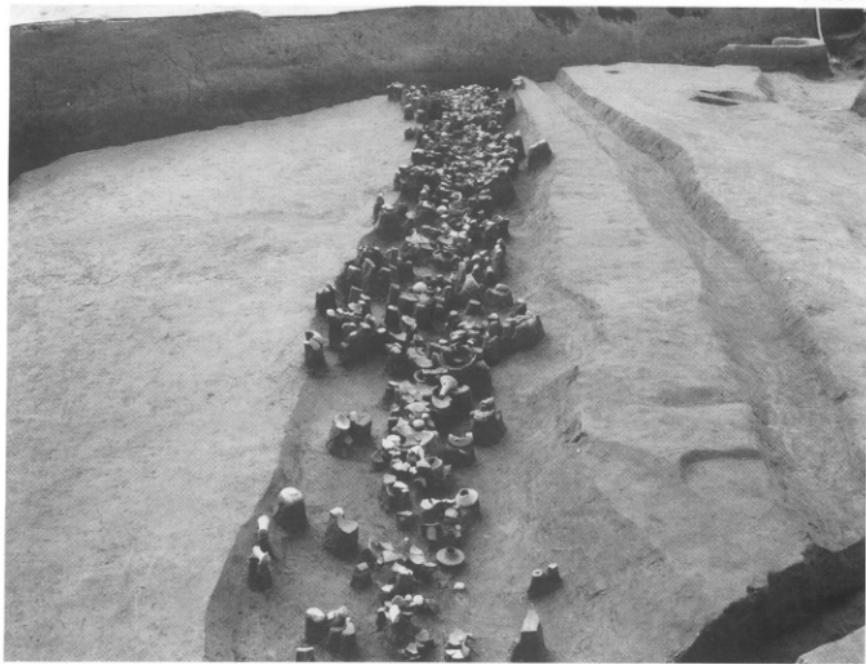
3. SD202北半部下層遺物出土状況（北より）



4. SD202北半部下層遺物出土状況（東より）



5. SD202土層（北より）



1. SD301遺物出土状況（北より）

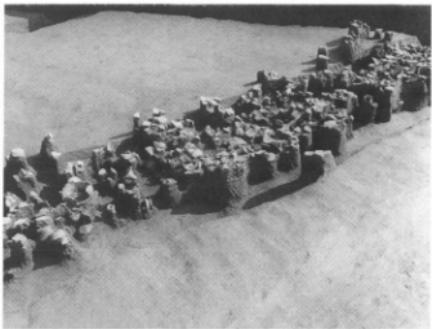


2. SD301下面完掘状況（北より）

図版8



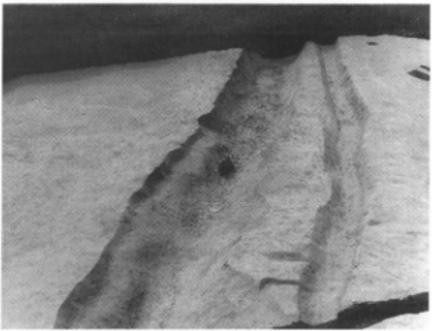
1. SX201 (SD301最上層) 遺物出土状況（北より）



2. SD301南側遺物出土状況（北西より）



3. SD301遺物出土状況（北より）



4. SD301上面完掘状況（北より）



5. 第3調査面北区全景（南東より）



1. SD303南側遺物出土状況（東より）



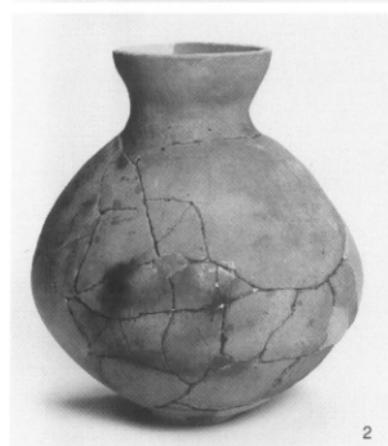
2. SD303遺物出土状況（南西より）



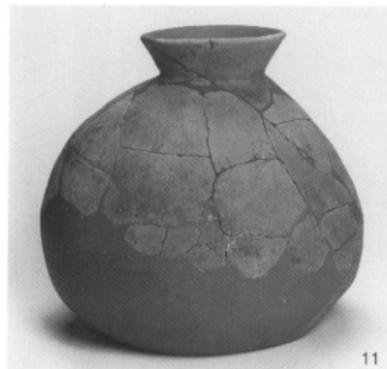
3. 第3調査面北区全景（南西より）



4. 北区西壁土層（東より）



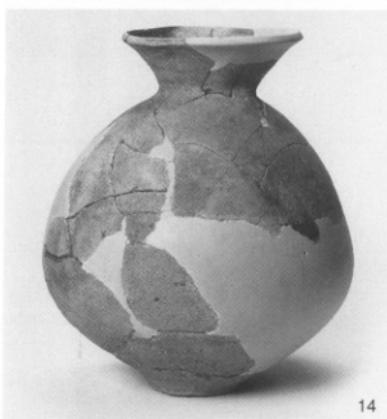
SD301出土土器 (1)



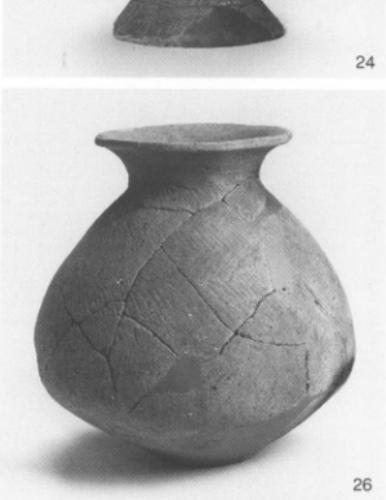
11



23



14



26



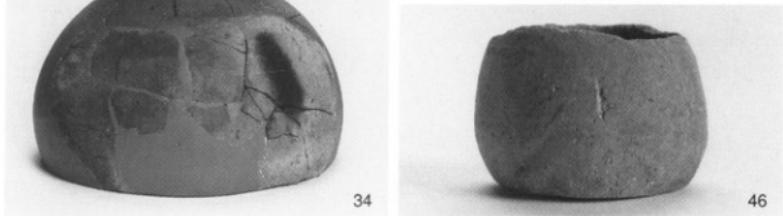
17

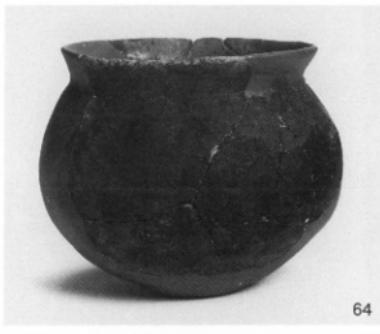


20



28





SD301出土土器 (4)



70



86



71



88



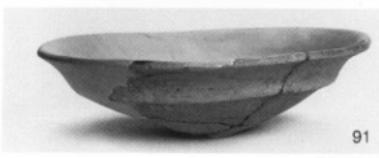
72



93



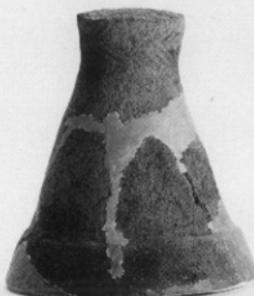
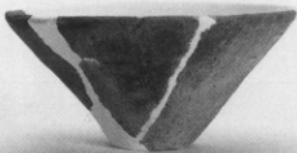
90



91



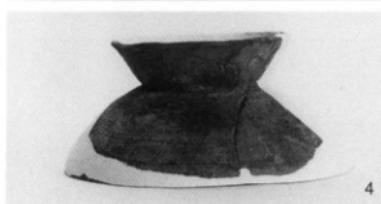
96



SD301出土土器 (6)



2



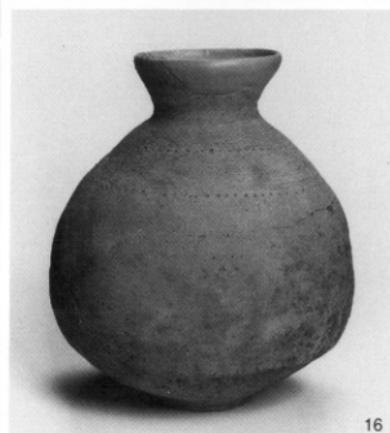
4



5



12



16



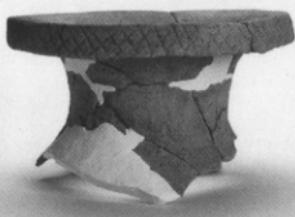
6



19

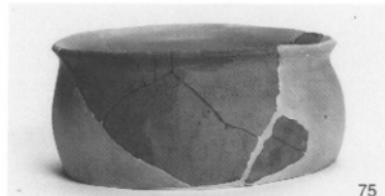


18





72



75



73



82



80



85



81



86



87



95



90



99



92



101



93



102



103



105



106



108



107



113



129



143



145



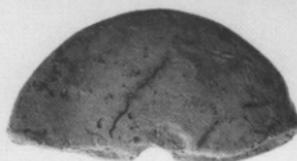
132



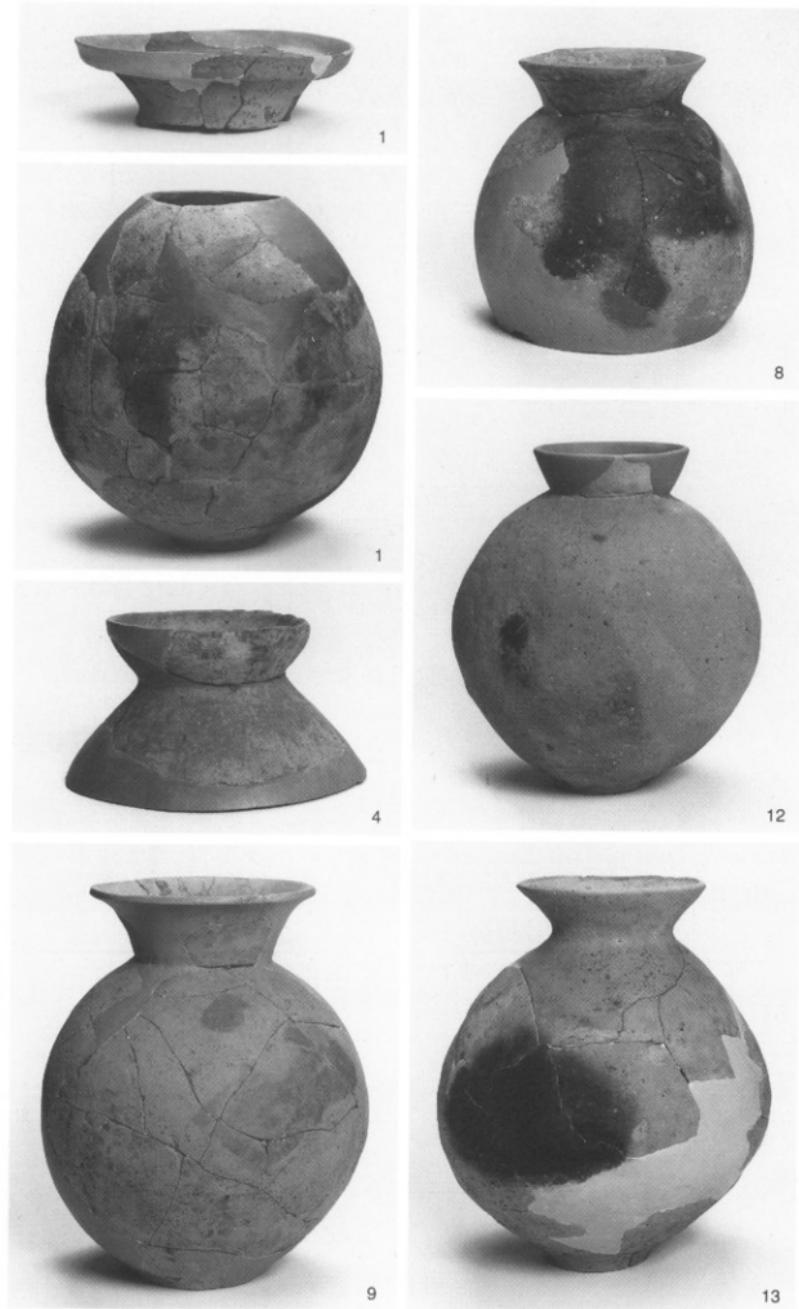
148



137



21



SD201出土土器 (1)



14



19



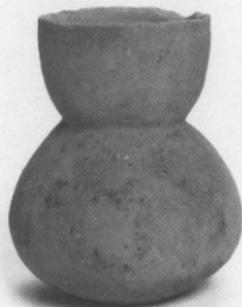
15



21



16



22



17



23



24



28



26



29



27



30



42



43



33



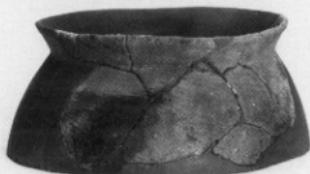
46



37



47



113



38



114



41



116



117



121



118



122



124



119



128



129



134



131



135



136



132



138



140



133



176



177



189 + 190



179



191



192



183



193



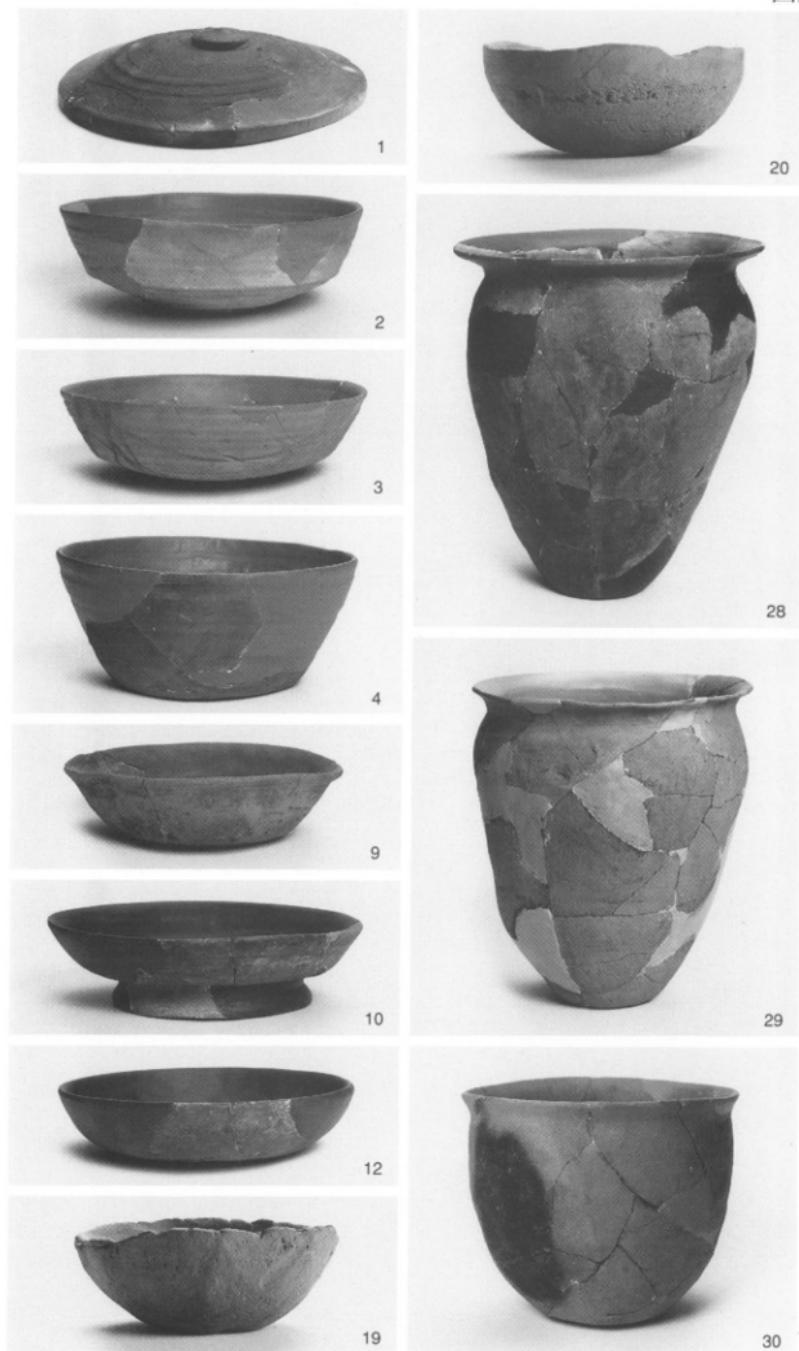
186



SD301
137



173



SD303 出土土器 (1)



31



32



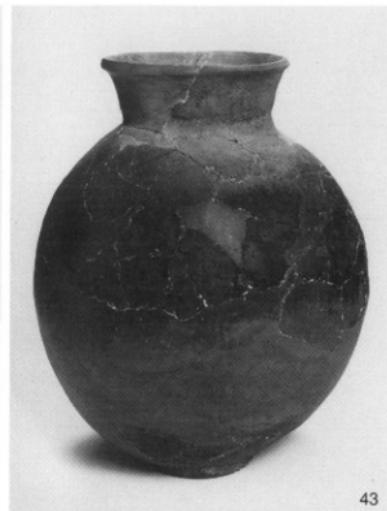
39



40



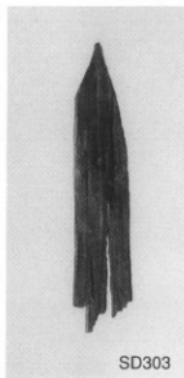
41



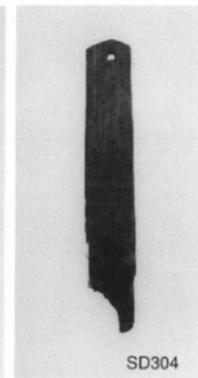
43



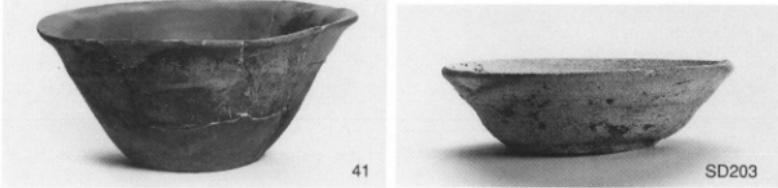
45



SD303



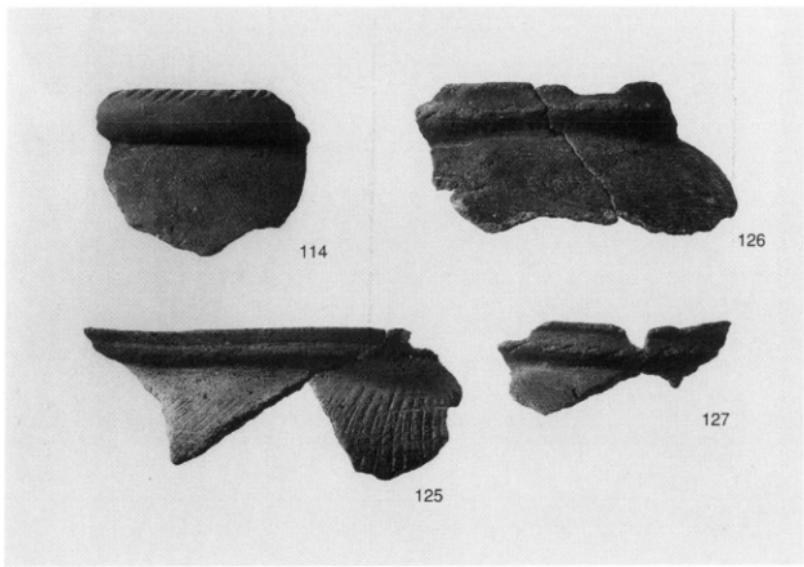
SD304



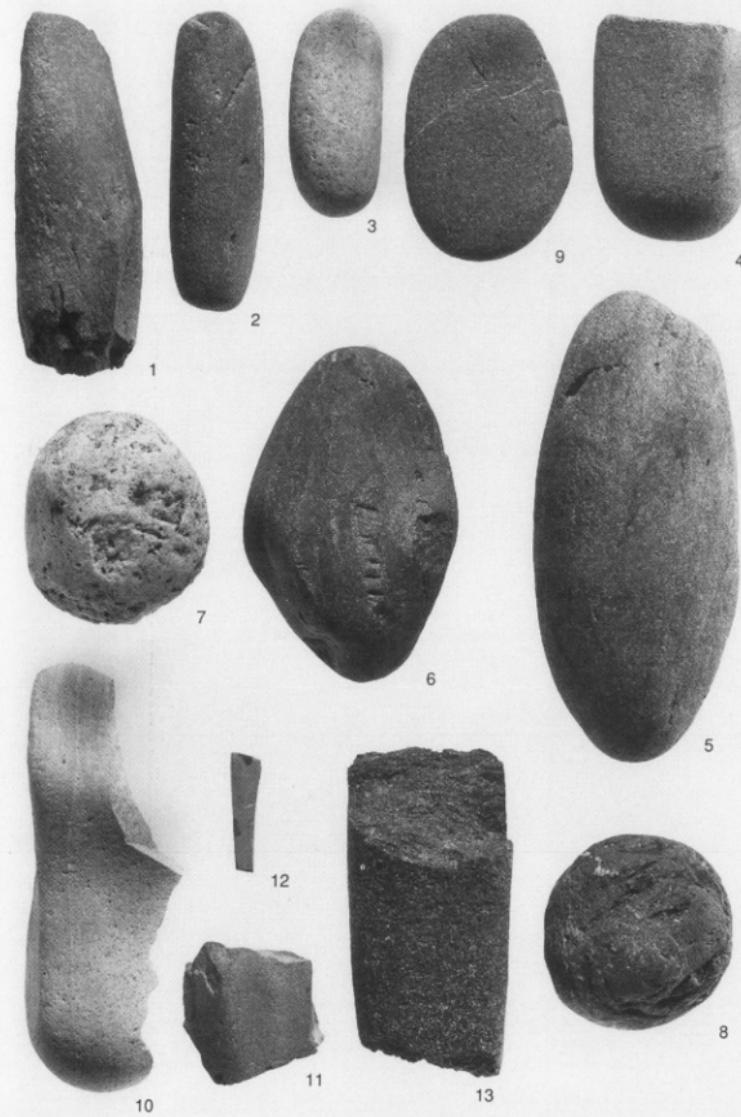
SD203



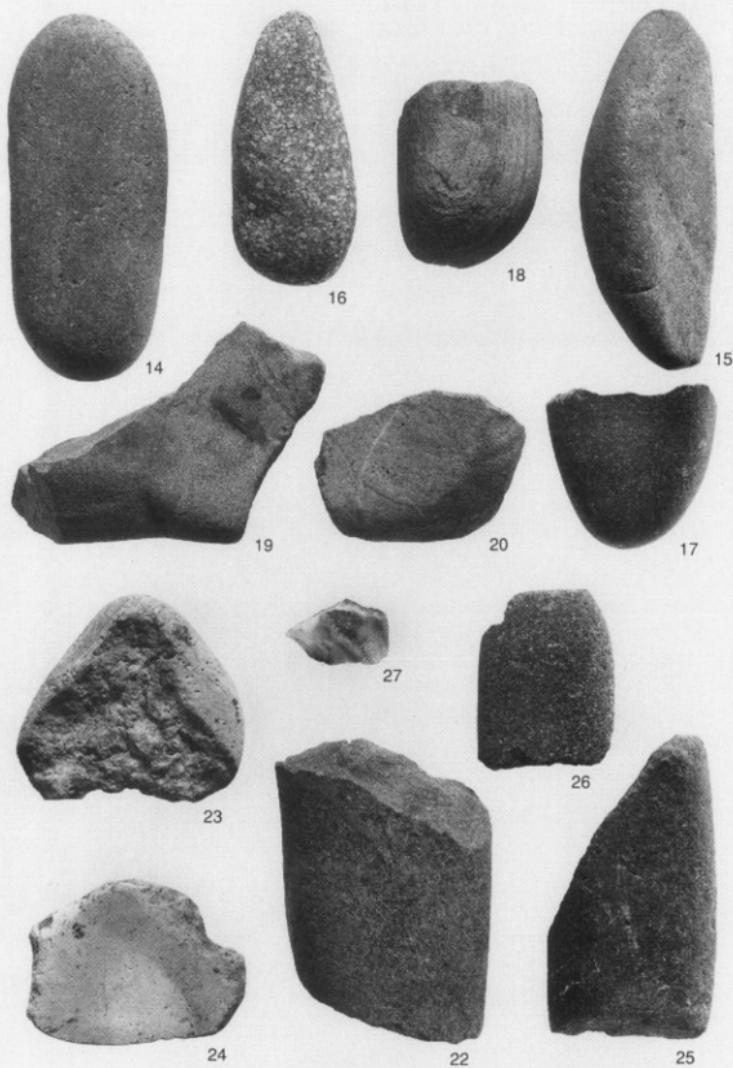
SD303出土土器



SD201 (125~127) · SD202 (114) 出土土器



SD301出土石器



SD202 (14~20) · SD201 (22~27) 出土石器類

報告書抄録

ふりがな	やまのかみいせき						
書名	山の神遺跡						
副書名	平成7年度県警浜松官舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第94集						
編著者名	柴田睦						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422 8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261㈹						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
山の神遺跡	静岡県浜松市 和田町822-1	22202	18-02 43分 00秒	34度 46分 08秒	137度 1995.6.1~ 1995.11.30	2.550 (延面積)	県警浜松官 舎建設工事 に伴う埋蔵 文化財発掘 調査業務
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山の神遺跡	生産遺跡・旧河道・集落跡(環濠)	弥生時代後期~古墳時代中期	水田遺構・溝状遺構 ・環濠・旧河道	弥生土器・土師器・石器			
		奈良時代	溝状遺構	須恵器・土師器	祭祀関連		
		中世	水田遺構・溝状遺構	山茶碗			
		近世以降	水田遺構・溝状遺構群	陶磁器			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第94集

山 の 神 遺 跡

平成7年度県営浜松宮舎建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月31日

編集 発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡市谷田23番20号
TEL (054) 262-4261㈹
FAX (054) 262-4296

印刷 黒船印刷株式会社
〒422-8033 静岡市葵区3丁目4番25号
TEL (054) 286-0236㈹